ゼロの使い魔【魔を滅する転生者】

月乃杜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔【魔を滅する転生者】

【Ｎコード】
Ｎ０４８７Ｖ

【作者名】
月乃杜

【あらすじ】
星神ガイナスティアが見守る世界に、緒方優斗という青年が居た。優斗は交通事故に遭いそうになっていた少女を救けようとして、死んでしまう。そんな優斗の前に居たのは某白い魔王。『何故？』という疑問はあったが、テンプレ通りに力を貰って転生をする事に。自サイトで連載中のテンプレの転生モノ。主人公のユートは普通の生活を手にする為に、普通をぶっちぎった世界に飛び込みます。

第０話：ゼロへの転生（前書き）

・

横の繋がりが作品ごとに在りますが、気にする必要はありません。
そういうモノだと呑み込んだ上で読んで下さい。

第0話：ゼロへの転生

.

1人の青年が交通事故によって死んだ。

自殺をしようとした少女を止める為、車輛が奔る中を掻い潜って走った。

その結果、2人共がトラックに撥ねられたのだ。

青年は薄れ逝く意識の中、生命なんてこんなものかと思った。

徒然なる侭に生きて来て、適当な三流大学に通う詰まらない人生。

趣味だけは沢山有った。

物理や医療、農業など生産的な雑学を知識として身に付けていたくらいだが。

後はライトノベルやアニメが好きな、何処にでも居そうな没個性な青年。

大学卒業後は、適当に会社に入って家と会社の往復というルーチンワークをするのだろう。

将来の展望は無く、夢も無い絶望的な未来。

それが途中で終わっただけの事。

せめて最後くらいは格好良く決めたかったが、本当に侭ならないものだ。

来世があるなら、もう少し益しな人生が欲しいな……

切にそう思う。

走馬灯も順当に観て、後は消え去るのみ。

青年は真っ暗闇の中でふと呟いた。

「あ～、終わったんだな。父さんも母さんもゴメン。先に死ぬなんて親不孝だとは思うよ。白亜もゴメン、お兄ちゃん入学祝いを上げられなくなったよ」

この期に及んで出たのは、遺された家族への謝罪。

青年……緒方優斗は家族思いの優しい男だった。

緒方優斗の家族構成は、両親と高校生に上がったばかりの妹の４人。

緒方優也（４７）

緒方（旧姓曽我）蓉子（４５）

緒方白亜（１５）

そして、緒方優斗（２０）

五年下の妹の白亜は所謂、お兄ちゃんっ子で兄の優斗にとても懐い

ていた。

「父さん、母さん、白亜、俺が死んだって判ったら悲しむのかな？」

家族仲は決して冷えていなかった為、やはり泣かれるだろうなと思うと少し涙が零れてしまう。

だけどもう、優斗に出来る事は何も無い。

優斗にとって、それだけが生の世界への心残りだ。

『君は本当に家族思いなんだね』

「え？」

突然、暗闇の向こうから声が響いてきた。

真っ白な光が辺りを包み、優斗は自らの霊体の輪郭を得る。

純白の煌めきの中に、桜色の輝きを放つ女性が優斗の傍に立っていた……というか、浮いていた。

「……は？」

女性を見た優斗は、あまりにも有り得ない存在に間抜けた声を出す。

栗色の長い髪の毛を左側へサイドポニーに結い、瞳は紫色をしている。

白を基調とした服にロングスカート、袖が蒼い金属で出来ていた。

胸元の黒から、アンダースーツは黒なのだろう。
純白の服は、蒼いラインのアクセントが映えていた。
優斗はゴシゴシと指で目を擦り、再び女性を凝視してみたがやはり変わらない。
『？　どうしたのかな？』
声は明らかにゆかりん。
しかも左手に、レイジングハートらしき杖槍を持っている。
何処からどう見ても、その女性は魔王様だった。
『今、何か不穏当な事を考えなかった？』
ブンブンブン！
優斗は首を、これでもかと言わんばかりに横に振る。
好き好んで魔王様のお怒りに触れて、頭を冷やされたくないし……
「え……と、貴女は本物の高町なのはさんなんでしょうか？」
『何を以て“本物”とするのか、判断に困るんだけど……少なくとも、生まれて両親から付けて貰った名前はなのはだよ？』
どうやら本物らしい。

「俺は死んだ筈なのに、どうしてアニメのキャラと対面を？　もしかして、今際の際に視ている幻影か？　なら、せめてヴィヴィオだったら良かったのに」

『ヴィヴィオじゃなくて悪かったね？　優斗君、少し頭、冷やそうか？』

そう言って、指先に桜色の魔力を集中するなのは。

「あ、頭は十分に冷えました！　生意気言ってゴメンなさい！」

優斗はソッコーで謝った。

「まったく、次は無いよ」

「た、助かったぁ……」

なのはの言葉に、優斗はヘタリ込みながら安堵の溜息を漏らす。

「それで、魔おｕ……ゲフン、ゲフン！　なのはさんがどうして俺の夢だか、今際の際の幻影だかに？」

「魔お……ナニかな？」

「何でも無いです！」

なのはは溜息を吐くと、漸く本題に入る。

『私が優斗君の所に来たのには、勿論理由があるの。その理由とは、

君の因果に関わっているんだよ』

「因果？」

『そう、因果。君はとある理由から重たい因果を持っているの。それは優斗君自身ではなく、別の世界に於ける同位体……【緒方優斗】が関係してるんだ』

【異時空同位体】と呼ばれるモノがある。

それは所謂、平行世界に存在する別の自分。

この場合、平行世界の優斗の因果がこの世界の優斗に集約し、因果情報が重たくなったと云う事だ。

『蒼き騎士の世界のとある地球に住む【緒方優斗】君が、優斗君と同じ行動を採って死んだんだよ。そしてあの世界の星神【アーシァ】様が彼を違う世界に転生させた。その因果が優斗君と重なって、それで重たくなったの』

例えば、この世界の優斗が事故に遭った少女を救おうとしなければ、優斗は寿命まで生きただろうし、今回の様な事も起きなかった。

同位体とはいえ、緒方優斗はやっぱり緒方優斗なのだろう。

「もしかして、この展開って二次創作によくある転生モノと同じ？」

『正解っ！　アーシァ様の世界の優斗君もヴィオーレという世界に転生したの。だから、優斗君も別の世界に転生して欲しいんだ』

「断ったら？」

試しに聞いてみる。

『昔のＲＰＧってね、選択肢で【いいえ】を選んだら延々と、エンドレスに同じ選択肢が出て来るんだよ』

「そ、そうですか……」

優斗は若干、引いて口元をヒクつかせた。

実質、断る事は不可能。

そういえば、優斗としてはもう一つだけ聞きたい事がある。

「それで、何で神様じゃなくってなのはさんが顕れるんですか？」

同位体の緒方優斗の時には星神が顕れたというのに、何故に高町なのは？

そこら辺、意味が判らない優斗。

『神様も忙しいんだよね。だから下級とはいえ仮にも神の私が来たの』

「へ？　なのはさんが神って？」

『私はこれでも人間から神の域に神化した神域者で、純白の天魔王と呼ばれているの』

「ハァァァァァァァァァァァ～ッ！？」

よもやそんな事になっついるとは露とも知らず、優斗は大きな絶叫を自分達以外は何も存在しない空間に、これでもかと言わんばかりに響かせた。

【神域者】……それは人間が神々の域へと神化した者の総称。

神にも種類が在り、神域者もその一種だ。

その種類とは……

【天威】【神域】【顕象】の3種。

天威とは天の威を顕す存在の事であり、生れ付き神々の一柱として誕生した者を云う。

星神（ワールドオーダー）や真魔王がそれに当たる。

神域とは神の域に到達した者の総称で、人間が何らかの理由で【根源】に触れ、神化した存在だ。

場合によっては人間に限らないのだが。

これは、五源将や七柱神や純白の天魔王を旗頭とする【朱の姫騎士団】のメンバーなどがソレだ。

顕象とは意思を顕す現象が顕現した存在。

世界には、意思を持つ者が多大に存在しており、その意思が神々と

なる。

尤も、荒ぶる神、祟り神が多い為、神話などで神域や天威に狩られる事もよく聞くが。

これは、九十九神や貧乏神や精霊王や龍神等、自然現象や人々の思念が実体化した存在の事だ。

座敷童もその一種だと云われているし、妖怪等の類も始まりは顕象の一種。

神域者にも頒ければ二種類存在しており、一つは生きた侭で神化した者。

もう一つは、死んだ後に祭られて神として括られた者で、顕象に窮めて近い。

死後に祟り、祭る事により鎮めるか或いは、祟る事は無いが偉大な功績を遺して死んだ者を祭るかの違いはあったが……

第六天魔王、豊国大明神、日本将軍平親王、東照大権現がそれに当たる。

神の定義を聞かされ、優斗は少し頭の中を整理したくなったが、別に知らなければならない事もある。

「俺が救けようとした子はどうなりましたか？」

「因果は連鎖する。彼方の優斗君は救けられなかったの。だから優斗君も救ける事は出来なかったの」

「そう……ですか」

落ち込む優斗。

それはそうだろう、これでは無駄死にでしかない。

「その子には事情を説明して、先に輪廻の輪に載せたから」

「もう転生した訳ですか」

「そうだよ。さて、優斗君にも転生して貰うけどね」

「それじゃあ、俺が別の地に転生するとして、何処に転生を？　別の俺みたいにヴィオーレの様な聞いた事の無い世界ですか？　それとも、所謂アニメや小説の世界ですか？」

「ん、原典名は【ゼロの使い魔】って言って、ハルケギニアに転生してね？」

「ゼロ魔か……」

嫌いではないし、寧ろ好きな作品だった。

ただ、もしも選べるのならスィーフィード世界に行きたかったのだが。

スレイヤーズが好きだし。

まあ、贅沢は言うまい。

「それは記憶を保持した侭ですか？」

「勿論。それに私だと大した能力は上げられないけどね、それでも出来る範囲で何か上げるよ？」

「能力……ね」

「優斗君を転生させる背景には、倒す……若しくは、排除するべき敵の存在にあるんだよ」

「敵？」

「そう、優斗君の敵になるであろう存在は、無貌なるが故に千の化身を持つ者」

「そ、それって……這い寄る混沌？」

は「そう、私の旦那様の三種の敵の一つ。即ち、ナイアルラトホテップ！」

外なる神々（アウターゴッズ）と呼ばれる存在。

アザトゥースを頂点とし、旧神（エルダーゴッド）を相手に侵略を繰り返す邪神。

時間神たるヨグ＝ソトホースを父とする混沌。

様々な異名を持ち、正体は全く知れない。

最も新しき旧神と戦い続けているが、それすら化身の一欠片に過ぎ

ないのだ。

「もしかしたら原典の主要人物として存在するかも知れないし、それだけは注意しておいて」

「判りました。ところで、旦那様って？」

「え？　私の好い人……だよ♪」

魔王様がベタ惚れとか。

どうやら可成り凄い人物の様だが、その人物も神なのだろうか？

しかし、普通に生きられればそれで良かったのだが、どっち道これでは原作に介入しなければならなくなるだろう。

だったら“普通に生きる”為には、先ずそれを邪魔する存在を排除する。

這い寄る混沌を。

それには神の加護と同義の特殊能力は必須。

そう、彼方の世界に大切な者を獲ても、それを悪意によって壊されれば普通になんて生きられない。

どうやら下級神の彼女の力では、貰える能力に限界が在りそうだ。

それなら少しでも便利で、尚且つ現実的な能力を。

そう考えた優斗は、試しに欲しい能力を言ってみた。

「なら、術式や世界の構成を看破する能力と、魔法に関する才能を貰えますか」

「へ？」

「？　何かおかしな事でも言いましたか？」

「ううん。何でも無いよ」

なのはは少し驚く。

この時点で、訳が解らない程に欲張った事を普通は言ってくるものだから、

無限の剣製が欲しいとか、直死の魔眼が欲しいとか、王の財宝が欲しいとか、無限の魔力だとか、不老不死だとか……

もっと上の神ならともかくとしても、自分では一つ叶えるのも難しい。

所詮は下級神なのだ。

「判ったよ。後、特別に何でも仕舞える亜空間ポケットと、優斗君の部屋に有ったライトノベルに、それとリンカーコアを上げる」

「俺のライトノベル？」

「そう、亜空間ポケットに入れておくから」

優斗はダラダラと汗を掻き始めた。

「後ね、優斗君が持っていた専門書とか、エッチな本……とか」

「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ～ッ！？」

「あのね？　義妹モノとか教師モノとか、ちっちゃい（飽く迄も身体的に）娘みたいな背徳なシチュエーションが好み？」

モジモジと頬を朱に染め、なのはが聞いてくる。

優斗はガックリと崩れ落ちてしまった。

「うう～、背徳的でも合法なんだ！　義妹も教師も」

それに、ロリータ好きではなく年齢的には合法なちっちゃい娘……

小萌先生とか。

リッテ先生とか。

結先生とか。

見た目は子供で実質大人の所謂、合法ロリ。

「（あれ？　この３人って教師っていう共通点が）」

更に激しく崩れた優斗。

未だ嘗て無い暴露話となってしまう。

「ま、まあ犯罪に奔らなければ良いんだよ」

オマケに苦笑いで慰められてしまい、優斗のライフがガリゴリと削られる。

「そうそう、優斗君の立場だけどね？　両親がトリステイン貴族で、先の戦功で王家直轄領のオルニエールを与えられてるから」

過去に介入して、なのはが調整をしたのだ。

「詰まり、俺はド・オルニエール家に生まれ変わるって事？」

「うん、ド・オルニエール子爵家だね」

どれだけの活躍をすれば、そんな出世に繋がるのやらと思ったが、ド・オルニエールだと云うなら内政なんかは結構やれそうだ。

「それじゃあ、名残惜しいけど。そろそろ逝ってらっしゃ～い♪」

ガタンと空間に穴が空き、優斗は闇へと墜ちる。

「何でこんなトコだけテンプレなんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

それを見送ったなのはは、そっと呟く。

『またね、金色の巫女姫の加護を受けた新しい星騎士さん』

そして、笑顔で背を向けるとスキップしながら帰っていった。

「ふふふ。さ～って、お仕事も終わった事だし、旦那様に褒めて貰おっと♪」

こうして、緒方優斗はトリステイン貴族、ド・オルニエール子爵家に転生をするのだった。

.

第０話：ゼロへの転生（後書き）

こうして主人公は、ファーストコンタクトから始まるヒストリーを始めます。

第1話：意識の覚醒と金色の女王（前書き）

・

軽くスレイヤーズもクロスしています。

第1話：意識の覚醒と金色の女王

・

「オギャァァァァァァァァァァァァァッ！」

室内に赤ん坊の大きな泣き声が響いた。

今、女性の胎内から赤ん坊が誕生し、元気な産声を上げたのだ。

煩いなどと言うなかれ。

赤ん坊は泣くのが仕事な訳だし、泣く以外に自己主張をする術が無いのだから。

寧ろ、産声を上げなかったらその方が問題だろう。

何故なら、赤ん坊の産声というのは元気に生まれた証だから。

この地、ド・オルニエール子爵領で今日という日は、最もめでたい日となる。

サリュート・シュヴァリエ・ド・オガタ・ド・オルニエール子爵と、ユリアナ・オガタ・ラ・アウローラ・ド・オルニエール子爵夫人との間に子供が生まれた。

生まれ出でて、最初の産声の元気さは両親を安心させたものだ。

「よくやった、ユリアナ。元気な男の子だ！」

「ええ、アナタ。本当に無事に生まれてくれて良かったわ」

生まれて間もない赤ん坊は肌の色も赤く、永らく羊水に浸かっていたから全身が皺くちゃだが、サリュートにとっては可愛い子供である事には違いない。

「本当によく頑張ってくれたなユリアナ。そして……生まれて来てくれてありがとう、我が息子よ！」

この日、ド・オルニエール家最初の子供の誕生を、オルニエール領内挙げて喜んだのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

赤ん坊の誕生から一週間が経ち、赤ん坊は未だに坐らない首に四苦八苦しながら様子を眺めている。

誕生して直ぐ、サリュートはまるで神の啓示（ブリミル）でも受けたかの様に、キラリと名前を閃いた。

【ユート】

この子には、この名前以外は有り得ないとまで考え、妻に相談した結果優しげに微笑んで賛成してくれる。

赤ん坊の名前は、ユート・オガタ・ド・オルニエールと名付けられたのだ。

ユートはベビーベッドの様な物に寝かされている。

「（困った……）」

そう困った。

本当に困ってしまう。

「（真逆、生まれて一週間程度で意識が覚醒するなんて、ぶっちゃけ有り得ないだろう？）」

赤ん坊は既に、優斗としての意識を覚醒して、記憶も徐々に回復しつつあった。

一気に回復すると、赤ん坊のキャパシティを越えてしまうから、安全措置なのだろう。

それで何が困ったのかというと、先ず第一に退屈だと云う事。

身体を碌に動かせないなんて、拷問以外の何ものでもない。

人間とは、退屈を友には出来ない生き物なのだ。

日がな一日、ただ寝て暮らす日々を少なくとも二年は過ごさなければならない。

第二に、食事だ。

取り敢えず、泣けば食事は摂れる。

しかし、生後一週間の赤ん坊の食事とは何か？

言わずもがな、母乳だ。

意識が覚醒してしまったからには、母親のオッパイにむしゃぶり付き、チューチューと吸う行為は羞恥プレイでしかない。

この際、乳母だろうが実母だろうが同じ事だ。

母親であるユリアナの容姿は窮めて銀に近い白髪で、瞳の色は翠、身長は中学生の女子程度の女性。

別にまんまでは無いにしても、見た目が【．ｈａｃｋ】に登場するアウラと似ている気がする。

「（そう言えば、母上の名前はユリアナ・オガタ・アウローラ・ド・オルニエールだったっけ？）」

アウローラとアウラは同じ意味だ。

母乳は出るが、脹らみが申し訳程度。

優斗の好きだった合法ロリな容姿な訳だが、母親では嬉しくも何とも無い。

それに、母乳を飲めと言われても人肌に温まっている乳は少し気持ち悪かった。

同じ飲むなら、ホットミルクかアイスミルクのどちらかにして欲しいものだ。

「（飲まなきゃ飢えるから仕方がないけど……）」

そんな訳で、泣く泣く母乳を飲んでいる。

恥ずかしいやら気持ち悪いやら、踏んだり蹴ったりでしかない。

そして第三が、トイレだ。

碌に身体が動かないから、漏らしたくなければ何とか事前にトイレに行かなければならない。

問題はどうやってトイレに行くか……だ。

身体が動かせない以上は、自力で行く事は諦めるしかない。

ならば、メイドに連れて行って貰うのが一番建設的な方法だろう。

母親のユリアナは出産して間もない。

軽い運動くらいはするが、そうそうと動き回ったりは出来ない筈。

一ヶ月も経てば、ある程度レベルに体力も戻るだろうが、少なくとも今は無理をさせられない。

食事は母親の母乳を飲み、それも終わると後は眠るくらいしかやれそうな事が無いユートは、トイレに行こうと思った。

食事が飲み物である以上、当然ながら眠っている内に尿意が促進される。

勿論、大の方も出るだろうが今は小だ。

「ああ～、いえ……」

ユートは拙ない言葉で先ずメイドの気を引く。

「坊っちゃま、どうかなさいましたか？」

ユートの身の回りの世話を仰せ遣ったメイドは、何やら訴えてくる様子のユートに話し掛ける。

「（っしゃあ！　有能な人で助かった！）」

出来るならガッツポーズを取りたいくらい、内心で喜んだ。

まだ碌に動かない腕を何とか上げて、扉の方へと指を差すとメイドさんは釣られて振り向いた。

「もしかして、お部屋の外へ行きたいのですか？」

ユートは坐らない首を押して、軽く縦に振る。

「奥様、坊っちゃまがお手洗いに行きたそうにしていますが、お連れしても宜しいでしょうか？」

「ええ、お願いねアニー」

メイドさん……アニーは一礼すると、ユートを抱っこして近場のトイレへと連れて行った。

平民の住む場所はともかくとしても、貴族の屋敷にはトイレくらい備え付けられている様だ。

下半身を剥き出しにされ、ユートは安心してトイレを済ませた。

「（良かった。これでオネショなんて屈辱を、味わう確率が少なくなった）」

とはいえ、所詮は赤ん坊の肉体である以上、オネショはしてしまうだろうが……

それでも、起きてぐっしょりと濡れた蒲団に寝かされる事は減りそうだ。

ユートは安堵の溜息を吐きながら、母親の胸に抱かれて眠る。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あれ？　俺……」

「お兄ちゃん、どうしたの？　それ、読まないんなら貸してよ」

後ろから声を掛けられて、驚きを隠せない“優斗”。

「は、白亜？」

「？　妹の顔を見忘れた訳？」

黒でおかっぱに近い髪型、くりっとした黒瞳。

胸は中学三年生という枠組みから視ると、残念としか言えない大きさ。

成る程、間違いなく少女は妹の【緒方白亜】だ。

「（俺、死んで転生したんじゃなかったっけ？）」

そんな事を考えながらも、手にしていたライトノベル【スレイヤーズ１５　デモンスレイヤーズ！】を白亜に渡してやる。

「ありがとう、お兄ちゃん♪」

ニコニコして本を受け取ると、白亜は笑顔の侭に読み始める。

「（そうか、これは寝ている俺が視ている刹那の幻……夢か）」

直ぐには気が付けなかったのは、恐らく認めたくなかったからか。

これが過ぎ去りし泡沫の夢だという事を。

働き者でありながら、家族サービスを忘れない父。

専業主婦のクセに、息子の姉呼ばわりで喜ぶ不自然なくらい若々しい母。

シスコンと呼ばわ呼べ。

目に入れても痛くない妹の白亜。
きっと幸福だったあの頃。
未来に展望も何も見えない暗闇だったとしても、ソレは確かな生きた世界。
『寂しいか？』
白亜から“白亜ではない”声が響く。
本を閉じ、振り向いた白亜の瞳は黒ではなく金色。
髪の毛もいつの間にか金色に輝いている。
「な！？　誰だ？　白亜じゃ無いな！」
『寂しいか？　我が加護を受けし者よ……』
恐怖を感じる。
あまりに圧倒的な重圧。
なのは（神）からもこれ程の重圧は受けなかった。
『ふふ。そう警戒するな我が神和祇よ』
【神和祇】……白亜に似た白亜でない存在は、優斗を確かにそう呼んだ。

「か、かんなぎ……？　って、確か巫女の男版？」

普通は顕（かんなぎ）と書くのだが、神和祇は当て字に近い。

『その通りだ』

「お前は一体、何者だ？」

恐怖が在った。

畏怖が在った。

同時に畏敬の念が在った。

重圧が圧し掛かるが、それと同じくらい安堵も在る。

ユートにとって、それはあまりにも不可思議な気分だった。

『私は我が子によれば……創星神の一柱だそうだ』

「他人事みたいに言うんだな？」

『私には元より名など無いし、お前達が私を認知した際に呼び名が無ければ困るからと、お前達自身が付けているに過ぎぬ』

原初の神に名前など無意味だったのだろう、本来は名前は存在していない。

今の人型も、所詮はユートに併せてその姿を採っているだけだ。

謂わば、姿も性別も名すらも存在していない漠然とした概念。
概念体だった。
その概念に名を与え、括る事で力と成す。
それが魔法と呼ばれる力。
しかし、人間の器ではその一部に名を与えて括っても制御出来ず、
発動すらしないか或いは暴走させて世界を滅ぼすか。
故に、彼の概念をとある地では【魔王】と呼んだ。
滅びを齎らす魔王だと。
彼の概念が自発的に世界を滅ぼした事など、それこそ皆無だと云うのに。
『我は母、我は光、我は闇……全てを俯瞰し、全てに干渉する存在』
「俺がそんな貴女の神和祇だと？」
『因果とは斯くも面白いものだ。時々居るのだよ……何の修業も無しに汝らが神と呼ぶ存在と、親和性の高い人間が』
「それが……俺？」
信じられないと思ったが、あれ程の重圧を持った存在だ、わざわざユートを騙す理由も無い。

『汝にこれをやろう』

受け取ったのは剣。

漆黒にして金色たる虚無の剣だった。

「これ……は……っ！？　ラグ……っ」

あまりの重圧に、意識を吹き飛ばされてしまう。

まるで掻き消えるかの如く消えてしまった。

『嘗て、私と高い親和性を持った娘や、我が愛し子の様な活躍……
魅せて貰うぞユートよ』

口元を吊り上げ、笑う少女はまるで死神の持つ鎌を手に、その空間から消える。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「っ！？」

朝の日射しに目を焼かれ、ソッと開けてみると自分の姿はやっぱり赤ん坊。

ふと見れば、隣には今生の母親ユリアナが居る。

未だにまともに動かせない身体では、自由に動く事も侭ならない。

思考はクリアだから、考える事だけは出来る。

「（あの夢、途中までは間違いなく前世の夢。だけど途中から、誰かの干渉を受けたんだ）」

“誰かの”なんて言うまでも無い。

【創星神】

概念体を生み出し、世界に干渉出来る法則を創り出した法則そのもの。

そんな存在が何故？

自分に？

「（この問いには意味が無いか。何故を考えるより、どうするかだよな）」

尤も、首すら坐らない現在ではどうしようも無いのが実情。

「（今はただ、この温もりに包まれていれば良いって事かな？）」

それがユートの出した結論であり、何も出来ない自分の妥協点だろう。

刻は瞬く間に流れ、赤ん坊だったユートも五歳児と成っていた。

そろそろ魔法を習う頃だと思われる。

実際、ハルケギニアの魔法を習う事になるのは確実だとユートは思い、三歳になった頃に父親に頼んで書庫を解放して貰っていた。

この世界の魔法を、ライトノベルとは違う側面から識っておきたかったのだ。

まあ書庫と言ってみても、オルニエール家は興されたばかりの新興の家、父親のサリュートが買い集めた本か、城に放って置かれていた物を整理した本くらいしか無かったが。

数はとにかく、質が良ければと頑張って見てみたら、案外と良質の内容だったらしく、判り易くて実の在る時間を過ごせたものだ。

その中には、原作では言及されていない様な事も多々載っていたのは驚いた。

.

第1話：意識の覚醒と金色の女王（後書き）

独自設定に関しては、基本的に説明を入れています。

第2話：魔法の考察と石の聖霊（前書き）

・

一気に歳月が過ぎました。

第2話：魔法の考察と石の聖霊

・

基本的に魔法とはイメージと集中力が肝要。

次に制御。

内なる魔力を集中し、それをイメージにより形作る。

魔法として“構成”された“術式”を、制御する事によって動かす。

イメージと集中で、魔力で術式を練って魔法という形に構成し、制御して世界に影響を及ぼすのがハルケギニア式の魔法。

ユートは本を読んだ際に、そんな感じで理解した。

「同じ様なタイプの魔法なら、スレイヤーズの魔法も構築出来そうだな」

例えば、簡単な処で火炎球（ファイアボール）なんか、同じ名前の魔法がハルケギニアにも在った筈だ。

ドットの火属性魔法として裂火陣（フレア・ビット）を構築出来るかも知れない。

「問題は僕の属性かな？」

この頃、三歳のユートでは属性など計りようが無く、属性の事を幾ら考えたとしても、正に獲らぬ狸の皮算用でしかない。

因みに、前世の優斗は一人称が【俺】だったが、自分を差して【俺】と言うと、母のユリアナが悲しそうにする為、今は一人称を【僕】に変えている。

トリステイン魔法学院に通う頃には、一人称が【私】に変化しそうだ。

それはともかく、系統魔法に関しては後で考えるとして、コモン・マジックについての考察を始めた。

コモン・マジックとは謂わば、魔力でＰＫ（プレイヤーキラーに非ず）を行うモノだと、ユートは想定している。

アニメでキュルケが使っていたのは、明らかに全てが念力の変形だったからだ。

「ライト、念力、ロック、アンロック、サモン・サーヴァント、コントラクト・サーヴァント、ディテクト・マジック、リードランゲージ……か」

幾つかのコモン・マジックを口に出し、その効果を思い浮かべてみる。

ライト（灯り）……光を灯す魔法。

フォース（念力）……物体を動かす魔法。

ロック（施錠）……鍵を掛ける魔法。

アンロック（解錠）……鍵を開ける魔法。

サモン・サーヴァント（召喚）……使い魔の召喚を行う魔法。

コントラクト・サーヴァント（契約）……サモン・サーヴァントで呼び出した使い魔（ラインの繋がった生物）と、契約す（パスを繋げ）る魔法。

ディテクト・マジック（探知）……あらゆるモノを調べる魔法。

リードランゲージ（翻訳）……書物の意味を理解出来る魔法。

便利ではあるし、幾つかはスレイヤーズ系にも似た魔法が存在していた。

「後は魔法に関する理論の補強か」

この世界の魔法に対して、正しい知識と理論を構築しなければ、修得に時間が掛かってしまう。

そう考えた。

次は虚無に関して……

さて、我らが始祖（笑）たるブリミル・ヴァルトリ殿は始祖の〇〇〇にこう記していた筈……

四系統魔法とは、小さな粒に干渉する魔法。

虚無魔法とは、四系統魔法より更に小さな粒に干渉する魔法。

原作知識では確かにそう描かれていた。

原作者が何を意図していたかは、本人にでも聞かなければ不明だが、小さな粒を精霊の力とするなら恐らくは原子だろう。

一応は分子の可能性もある訳だが、より細かな原子の方が精霊力として相応しいし、何より分子より小さい粒を原子とすれば、虚無の魔法に矛盾が出る。

虚無魔法は空間を支配し、記憶にすら干渉出来た。

転移（テレポート）

世界扉（ワールドドア）

爆発（エクスプロージョン）

忘却（オブリヴィオン）

解除（ディスペル）

記憶（リコード）

幻影（イリュージョン）

加速（アクセル）

パッと思い出せた虚無魔法の一覧だが、どれもこれもが確かに強力だ。

そして、エクスプロージョン、ワールドドア、テレポード、ディスペル、リコードは空間に作用する魔法。

忘却（オブリヴィオン）と、イリュージョンは記憶に作用する魔法だ。

アクセルは瞬動みたいなモノだとすれば、空間に作用するのか、記憶以外の身体にも作用する魔法が存在するのかのどちらかだ。

いずれにしても、原子では干渉出来ない。

空間や記憶に作用するのなら、最低でもダークマタークラスの素粒子か、或いは量子レベルだろう。

実際、核兵器を使って空間に異常が起きたなんて話、某濃くなどの核実験された国の中で、何処にも無い。

詰まり、原子では空間に直線的な作用は起きないと云う事だ。

一方のダークマター、即ち素粒子はスパロボを見れば判るが、空間や時空に作用している。

時間遡行を可能にした時流子、アキシオン、重力子、タキオンといった素粒子。

これらに魔力で干渉して、空間転移をしたり、世界と世界を繋げたりしているのだろう。

また、記憶に干渉するなら量子が相応しい。

量子コンピュータは、人に最も近い働きが可能だ。

マブラヴでも、量子コンピュータによるブレインキャプチャシステムを構築し、人間を越えたの量子伝導脳を造っている。

それに人間の思念を量子だとすれば、それはそれで面白いと思う。

コモン・マジックの中に、サモンサーヴァントと云う空間と空間を繋げ、一方通行とはいえ幻獣や動物等を使い魔（候補）として呼び込む魔法が存在している。

更に、相手の脳にルーンによる楔を打ち込んで、親愛の情を持たせる一種の洗脳が行えるコントラクト・サーヴァント。

詰まり、コモン・マジックは超劣化虚無と言ってみても過言ではない。

だからこそ、ルイズも虚無を自覚するとコモン・マジックを使えた。

系統魔法は相変わらず使えないのに、コモン・マジックだけは使える様になったのも、コモン・マジックが虚無と特性が似ていたからだと考えられる。

「（だとすれば、虚無そのものとは云わないまでも、コモン・マジックで虚無に近い魔法を構築出来るんじゃないか？）」

あまりにも不穏で、誰かに聞かれたらヤバい内容なだけに思考だけで声には出さなかった。

ロマリアの神官辺りに聞かれたら、大喜び？　で異端審問とかしてきそうだ。

魔法はイメージ。

ならば、量子や素粒子を操るイメージで魔法を使ったらどうか？

擬似虚無の出来上がりだ。

問題点として挙げられるのが、虚無のあの莫迦長い詠唱は術式構築の為のモノで制御なんかも入っている可能性。

途中で止めても一応発動するが、中途半端な詠唱では完全に術式を構築仕切れていないからか、大した効力も無かった筈。

テレポートの何たるかを、理解していなかったルイズは完全に詠唱をしても、精々が視認出来る距離くらいしか跳べなかった。

その事から、ハルケギニアの魔法は口語やルーンにより魔力を練って、頭に思い描くイメージにより術式を略、自動で構築しているのだろう。

本と格闘しながら、ユートは魔法の真理というモノを学んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そして現在……

父であるサリュートと、母であるユリアナが幾つかの杖らしき物を持って庭まで来ていた。

「ユート、お前ももう五歳になる。誕生日の前に杖と契約し、立派なメイジとなれるようになりなさい」

「貴方の杖をこの中から選びなさい」

サリュートとユリアナが、箱に入った物を差し出して選ぶように促す。

尤も、選ぶも何も杖の形状は既に決めてある。

問題はソレが有るか否か。

ガサガサと箱を探って目的の物を捜す。

「あっ！」

見付けた。

小さいから奥の方に落ちていたらしい。

ユートが“ソレ”を拾い上げる。

“ソレ”は派手ではないながらも、小さなアダマスの付いた指輪。

「父上、母上、僕はこの指輪を杖に選びます」

軽く驚く両親に、ニコニコと笑顔で摘まれた指輪を見せる。

「何故、指輪なのかね？」

「はい。普通の杖では普段から手には持っておけませんし、いざと言う時にワンテンポ遅れます。しかし、指輪は常に指に嵌めておけますから、魔法を使いたい時に使えます」

「効率重視……か」

サリュートは、ユートから説明を受けて納得したように目を閉じる。

「そこまで考えているなら最早何も言うまい。今日より指輪を填めて生活して、杖契約をするがよい」

「はい、ありがとうございます。父上、母上！」

ユートは指輪を右の中指に填めると、自分の部屋へと戻る。

填める指に併せて大きさを変える魔法が掛かっていたらしく、どの指にも填められる事が判った。

右の中指なのは、ユートが右利きで填めて一番座りの良い箇所だったからだ。

「さて、二次小説なんかでも大抵は四六時中杖を手に持って、パスを通じてからラインを繋ぐ事で契約していたよな～」

ならば古き善き先例に倣うのが良いだろう。

幸いにも指輪は、それこそ四六時中填めていられる。

「名前を付けるか」

ユートはふと思い付く。

名付けには霊的、魔術的に意味が在る。

言霊を籠めて名付けてやるなら、それは一種の契約となるのだ。

契約は誕生、名付けは呪的拘束。

名前とはある意味で呪い。

それに固体名を“呼ぶ”という行為には、制御という面も在る。

名も無き最古の神の“力”に名を与え、制御する事によって魔法と成す。

詰まりは、そういう事だ。

例えば、エルフと共同作業をしたとする。

エルフが『おい蛮人、力を貸せ！』と言ってきたとして、素直に力を貸したいと思うだろうか？

命令口調はこの際、置いておくとして、せめて名前で呼べと言いたい。

これは何もエルフに限りはしない事。

貴族という枠組みからすれば、平民を平民と呼んでいるのに等しい。

結局のところ、ハルケギニアに在る者は誰かを蔑まなければ気が済まない生き物なのだろう。

原作をユートが読む限り、ルイズもゼロのルイズと蔑まれて悔しい思いをしていながら、才人を所詮は平民の使い魔と見下していた。

ユートをこのハルケギニアに転生させた、高町なのはも言っていただろう。

名前で呼んで……と。

そんな訳で、ユートは自分の指に填まった指輪に名前を付ける。

「付いている宝石が宝石な訳だし……決めた！　今日からお前は【アダマス】だからな？」

《アダマス、どういう意味なの？》

「高潔、侵されざる存在。そういう意味さ！」

《良い名前……》

「だろう？　……って、誰だ！？」

今更ながら、謎の声に気が付いてキョロキョロする。

《こっち、こっちだよ？》

「っ！」

ハッと、声の方を見る。

自分の右中指に填まっている指輪を。

「真……逆、アダマス？」

《うん、お早うマスター》

「マスター？　って……」

突然のマスター呼ばわりに吃驚してしまう。

《わたしはこの石の聖霊。わたしを目醒めさせてくれたのは貴方、だから貴方がわたしのマスター》

永い年月を経た存在は聖霊と化すか、或いは聖霊を宿す。

九十九神がそれだ。

周囲の有象無象のエネルギーを、永い歳月を掛けて僅かずつ蓄積していき、そのエネルギーに人格が宿り、器物を生存媒体として完成するのが九十九神だ。

【アダマス】もその一種なのだろう。

今までは眠っていたのか、誰も気が付かなかったらしいが、ユートの名付けと共にパスが繋がり、魔力を受け取って目醒めた様だ。

意図も簡単にパスが繋がったのは、元々エネルギーを高圧で持っていたからだとユートは推察した。

新品の杖には碌なエネルギーが無く、それ故に四六時中手にして魔力を流し込み続けなければならない。

だから数日の時間が掛かるという事だ。

後は本人の魔力値と、魔力を杖に籠める才能。

幸い、ユートはそういう才能を貰っている。

はっきりと言えば、ユートにとっては僥幸だった。

「これで先に進める！」

《先に？》

「ああ、アダマス。これから宜しくな？」

《はい》

ユートとアダマスは今後について話し合う。

アダマスとの協議の結果、普段から話すのは対外的にも良くないし、アダマスはもっと力を蓄積して人型を採れる様に成りたいから、普段は眠る事にして言霊と魔力を籠めて呼んだ場合、それに応える。

《それじゃマスター、お休みなさい》

「お休み、アダマス」

起きたばかりで、もう眠ってしまったアダマスを見ながら、ユートは苦笑した。

・

第2話：魔法の考察と石の聖霊（後書き）

・

魔法の云々などは、独自の設定です。

似たような設定は何処かに在るかも知れませんが。

第3話：コモン・マジック（前書き）

ある程度の独自設定アリ。

だいたい数日で一話の更新が出来ると良いけど……

第3話：コモン・マジック

・

食事時になり、メイドであるアニーが呼びに来る。

「失礼致します若様、お食事の時間です」

「ああ、ありがとう」

アニーはユートが未だ赤ん坊の頃から、ずっと面倒を見てくれていた。

年齢は5年前が15歳。

有能で、簡単な言葉すらも碌に話せなかった当時に、色々と本当に世話を焼いてくれた女性だ。

茶髪をボブカットにしているちょっと垂れ目気味の、瞳の色が赤い少女。

来年には寿退職を予定しているというアニー。

10歳の時にオルニエール家で奉公を始めて、足掛け10年、既にベテランの域に達している。

しかし、ユートのこれには慣れない。

いちいち『ありがとう』とお礼を言われるのは。

奉公のし甲斐はある。

他の貴族なら基本的に奉公人が働くのは当たり前で、礼など言う訳も無い。

アニーはだからこそ思う。

自分は幸運だったと。

否、オルニエール家に奉公しているメイドやバトラーの全て、全員がきっと幸運に恵まれていた。

他の貴族達なら、下手をすれば結婚どころか寧ろ貴族にお手付きにされ、最悪だと孕まされて棄てられる。

正直、サリュートも優しい旦那様で、奥様のユリアナも戦いに加わっていたとは思えない程に穏やかな人物で、みんなが笑顔の職場。

オルニエール家で奉公出来た事を誇りにして、アニーは働いている。

そんなアニーを、ユートは眩しそうに見ていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

食堂へとやって来たユートは、父親のサリュートへと報告をする。

「父上、件の指輪との杖契約に成功致しました」

「な、何？　もうか？」

サリュートは驚愕に目を見開く。

聞いていたユリアナも吃驚している様だ。

「はい、御覧下さい」

ユートは右中指に填めついる指輪を見せた。

信じ難い為、ディテクトマジックを掛けてみる。

「こ、これは……！　確かにユートの魔力が指輪との間で循環しているな」

契約を完了出来たかどうかは多分に感覚的なモノで、ディテクトマジックを使わないと他人には判らない。

「うむ、宜しい。本来であれば杖契約は早くても数日は掛かるものだが、これなら明日から魔法の訓練に入っても良いだろう」

「はい、父上」

漸く魔法の訓練に入れる。

それが嬉しかった。

「これなら随分、才能が在るのかも知れませんね」

ユリアナも嬉しそうに微笑んでいる。

周囲のメイド達も『流石は若様だ』と讃えた。

普通の貴族の邸なら、職場の無駄口は赦されない。

勿論、それはオルニエール家に於いても同様だ。

しかし、こういう時はみんなで喜びを分かち合うのがこの家の家訓。

食事の後、使用人達は杖契約成功のお祝いに、高価な菓子を振る舞われた。

普通の平民が食べようと思ったら、一ヶ月は飲まず食わずを覚悟しなければならない値段だ。

たった数時間で杖契約完了というのは、メイジにとってそれだけ凄い事だという事だった。

翌日、サリュートは朝早くにユートを庭に連れ出し、魔法の訓練を始める。

先ずはコモン・マジックの中でも比較的簡単な魔法、念力を教えた。

「良いか、ユート。先ずは念力を教える」

「はい、父上！」

念力は謂わば、全ての基本となる魔法。

何故なら、念力はただ物体を動かすだけの魔法だが、これで自分を

浮かせばレビテーションに、鍵の開け閉めが出来ればロックとアンロックに成るからだ。

勿論、ロックはそれだけではなく、術式を持続させて普通の方法では開けられない様にする魔法だし、アンロックは術式を読み取って外す魔法だから、ただ動かせば良い訳でも無いが。

サリュートは手本として、自らが実演して見せる。

簡単な短い口語の後、魔力を杖の先に集中。

思念で置いてある石が浮かび上がるイメージを描き、それを実現するべく魔力を石に向けた。

石はフワリと浮かび上がると、杖の動きに併せて右に行ったり左に行ったりしている。

「これが念力だ。ユート、魔法とは想像力と集中力が肝要だ。さあ、お前もやってみなさい」

「はい！」

ユートは指輪へと魔力を集中し、頭の中に石が浮かび上がる処を想像する。

「浮かべ！」

人差し指を杖に見立てて、念力を使うと石は遠くへと飛んでいく。

「浮かんだというよりは、飛んでいったな」

「は、はい……」

飛んでいった先を呆然と眺めて、サリュートとユートは呟いた。

「魔力の籠め過ぎと、後の制御がまるで成っていないのが原因だろう」

失敗の検証をして、原因を教える

これが、ユートの初魔法の顛末だった。

父、サリュートのアドバイスに従い、再び念力を使ってみる。

「動け！」

魔力を一定以上は籠めず、ただ意味も無く浮かせるのではなく、イメージは石を浮かせて的に当てる感覚。

念力という魔法を使うという意識は捨てて、手で持って投石する心算で……

想像力（イマジネーション）と集中力（コンセトレーション）と制御力（コントロール）が魔法成功の鍵。

「（手に持つ、ソレを投げ付ける……っ！）」

そのイメージで浮かせて、予め用意してあった的へと発射した。

正鵠（中心）とはいかなかったが、上手く的に当たる。

それを見たサリュートは、僅か数回の練習でこれだけのコントロールを見せられて、少しだけ驚く。

「ほう、もうコツを掴んだと云うのか？」

一日とはいかないまでも、半日は念力の修得に費やすかと考えていたが、思った以上に優秀な我が子に満足そうな目を向ける。

「これは、系統魔法を教えるのが益々楽しみになってきたな」

破顔しながら念力を使っているユートを見つめ、数日後に思いを馳せた。

この分なら、数日でコモン・マジックに関しては覚えてしまうだろう。

ユートはどんな系統か？

自分とユリアナでは、系統がまるで違う。

それ故に、どっちの系統を受け継いでいるのか、割と期待していた。

自分と同じ資質であれば、手ずから教えるという楽しみがある。

そこら辺は、サリュートもやはりメイジだ。

ライト（灯り）の魔法。

単純に灯りを点すだけ。

「ライト！」

ユートは、光が指先に点るイメージで魔力を集約し、後は簡単に消えない様に制御した。

現代人の転生体である為、灯りが点くという現象を科学的に考えて、それをイメージに投影して魔法に変換する。

思惑の通り、ライトの魔法を発現させて維持に成功。

この辺はなのは（神）から力を貰ったお陰だと、ユートはそう考えている。

魔法に対する構成の解析力と、精霊力との親和性がすこぶる高い。

更に現代人の科学知識。

これはユートとしても嬉しい誤算だった。

ライトはスレイヤーズに併せて、ライティング（明り）として昇華しようと思う。

要は、杖の先を光らせるのではなく、明かりを光球にして辺りを照らす感じだろうか？

持続時間をゼロにした目潰しにも使えるコモン（汎用）の名に恥じない、それだけの魔法になれる筈だ。

「取り敢えず、灯りを指先に持続させる練習だな」

魔法は放つ際に精神力を消耗するが、ソレを維持するなら少しずつ精神力を消耗していく。

数値的に言えば、ライトの発現にＭＰを3消費するとして、維持するなら数秒毎にＭＰを1ずつ常に消費している様だ。

恐らく、ゴーレムはまた違うのだろうが……

ロック（施錠）、アンロック（解錠）も覚える事が出来、その日の訓練は終わった。

明日はディテクトマジック（探知）と、リードランゲージ（翻訳）を覚える予定だ。

それが済めばいよいよ系統魔法の練習に移れる。

【夕餉の時間】

「ユートよ、我が子ながら素晴らしい才能だ。真逆、今日の内にコモン・マジックを四つも修得するとは」

「しかも、貴方のライトはオリジナルスペルね？」

サリュートとユリアナが、手放しで誉めちぎる。

聞いた話しでは、どうやらコモン・マジックと言えども初日での修得は困難で、大抵は一つか良くて二つを修得するのがやっとなのだと言う。

当然と言えば当然か。

初日は言ってみれば、初めて魔法を行使するのだ。

まだ魔力制御が未熟な上、精神力だって普通は五歳かそこらでは大した量ではないのだから。

イメージだって貧弱で貧困な幼児に一体、何を期待出来ると云うのか。

別にユートが天才という訳ではない。

と言うより、インチキ込みでまともに魔法が使えないならそれこそ問題だ。

なのは（神）から貰った力が有るし、必要な魔力や精神力はリンカーコアを通じて獲られる。

努力無しでは何も出来ない“力”ではあるが、努力さえすれば正当な評価を受ける事が可能な能力。

それがユートが欲した能力で出来る事だった。

「今夜はしっかりと眠り、明日に備えて精神力を回復させなさい」

「はい、判りました父上」

サリュートの訓示に、笑顔で返事をするユート。

食後は風呂に入って、少しだけ明日の魔法の予習をしてからベッドに入った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

【翌朝】

ディテクトマジック（探知）とは、そもそも何ぞや？

ソレを科学的に考えるならどうする？

サリュートからディテクトマジックの講義を受けながら、ユートはずっと考え続けていた。

残念ながら、サリュートの講義は本に書いていた事と何ら変わり無い。

詰まり、昨夜の予習で十分な知識は獲ている。

だから今、必要なのは知識のお復習いではなく、ソレを自分の持った雑学の知識にどう擦り合わせるかだ。

探知、詰まりは調べる……

病院のＭＲＩやレントゲンなど、それに針金や振り子を使ったダウジングもそうだろう。

それらを複合する心算で。

「ユート、ちゃんと聞いているのか？」

「はい、聞いてます！」

サリュートに注意を受け、ユートは慌てて返事する。

「（危ない、ついつい没頭してしまった。複数思考、所謂処の【マルチタスク】は必須だからな～）」

なのは（神）と出逢い、彼女の存在がマルチタスクを思い付かせてくれたのだ。

ユートは普段から、マルチタスクの練習に勤しんで、魔法を習う時に活用しようと考えていた。

何故なら、メイジは余程の熟達者でもなければ、魔法の同時展開が出来ない。

空を翔けながら、攻撃魔法を放つなんて器用な事が、ハルケギニアのメイジには略、不可能。

略……と言うのは、絶対に出来ない訳ではないから。

“熟達者”であれば、可能なのだ。

何処ぞの某烈風なら、平然とやって見せるだろう。

彼女も最初はへっぽこだったし、烈風の強さはバグキャラな意味合いでは無く、魔法を扱う技術力の高さに在るのだろう。

事実上、風のスクウェアの魔法である偏在（ユビキタス）は、思考の分割を地で行っているし。

偏在の一つ一つに意志が有って、それぞれ魔法も使えるって云うのは詰まりは、そういう事だろう。

サリュートからの説明も終わって、いよいよディテクトマジックを試す。

「（魔力を練って、イメージを……）」

ユートは現代日本で当たり前に存在し、ハルケギニアには事実上存在していないＭＲＩやレントゲンやダウジングなど、何かを調べる事に特化したモノを思い浮かべてみる。

知識の上では、一応の理論も理解している為、それも同時にイメージした。

放出された魔力、それに伴い減っていく精神力。

対象へと魔力が絡み付き、探知の魔法がユートに情報を教えてくれた。

それも、恐らくは通常より多い情報量で。

普通のメイジが得られている情報に関しては、先程の説明や本で読んだ限りの事は把握している。

そして、ユートの得られた情報はその“普通”を明らかに凌駕して

いた。

その情報を伝えると、吃驚した表情になるサリュートだったが、これも息子の持つ才能だと考える。

ユートとしても、その方が都合が良い。

次の魔法は、リードランゲージ（翻訳）だ。

どうやら、この世界に地球から転移した場合、魔法の効果なのか言葉は普通に話せるっぽい。

しかし、原作を見る限りでは文字は違う。

一応、才人はタバサから教わった際に、これもルーンの能力だったのか次々と読める様になっていた。

「（確か、ルイズが才人の日記を読むのに使っていた魔法だっけ？）」

そんな事を考えながら魔法のイメージを練る。

言語面でのアナライズ（解析）と検証、ランゲージリソースの選定と配置。

ランゲージ工程の管理と、翻訳者へのフィードバックを敢行。

リードランゲージは知りたい文字の意訳を、術者へとフィードバックする魔法。

飽く迄も意味を知るだけの魔法だから、書ける様になる訳では無い。

生憎と、既にユートは普通のハルケギニア言語は完璧に読めるし、日本語も覚えている。

だから、リードランゲージに使用したのは、旧い言語で書かれていた古文書。

ユートでは決して読めない言語で書かれていながら、確実に意味が解った。

古文書の文字の意訳が、頭の中にフィードバックされる事により、まるで日本語でも読む感覚で古文書の中身が理解出来る。

「どうやら成功したな」

「はい！」

「よくやったぞ、ユート。これなら明日から系統魔法の訓練に移っても良いだろうな」

サリュートは腕組みをし、コクリと首肯しながら嬉しそうに言ったものだった。

・

第3話：コモン・マジック（後書き）

コモン・マジックを修得。

次回は系統魔法の適正を調べて、訓練をします。

第４話：系統魔法のススメ（前書き）

・

独自解釈をしまくった……

導入部分もそろそろ終わりになります。

さて、その内出て来るだろう原作キャラは、誰が最初に出るかな？

第４話：系統魔法のススメ

・

【系統魔法】

【火】【土】【水】【風】

普通のハルケギニアの魔法使い（メイジ）が、系統魔法と言った場合はこの四属性を意味している。

この四つを基本とし、風の上位に【雷】が存在して、風と水を掛け合わせ【氷】の属性に出来た。

また、この魔法にはレベルが存在しおり、レベル次第で出来る事も変わる。

だが、ユートはレベルが低くても強力な魔法が使える筈だと、そう考えた。

サモン・サーヴァントに於ける口語詠唱に、五つの力を司るペンタゴンと在る。

ペンタゴンとは五芒星。

五角形の面に三角形をそれぞれに配置した、一般的な星形の事だ。

この形に例えられるのは、系統魔法がとある形状によりレベルを表すから。

レベル1を点（ドット）
レベル2を線（ライン）
レベル3を三角形（トライアングル）
レベル4を四角形（スクウェア）

しかし、魔法には喪われたペンタゴンの一角として、虚無の系統が存在する。

即ち【ゼロ】

ゼロの使い魔に於いては、キーパーソンとなる系統。

虚無は除き、四属性は掛け合わせられる数が＝レベルとなっている。

虚無が除かれるのは、嫌味でも何でもなく、ゼロには何を掛けてもゼロ。

詰まり、虚無の担い手が系統魔法を使えないのは、掛け合わせられる魔法でないからだ。

尤も、彼らメイジは足すと言っているが……

ユート的には掛け算だと思っている。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

コモン・マジックを、サモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントを除いて会得したユート。

翌日、サリュートから約束通りに系統魔法を教えて貰える運びとなった。

スレイヤーズの魔法を使いたいユートは、自分がどの系統か楽しみにしている。

自身の系統次第で、再現出来る魔法が決まるのだ。

「（風と水なら氷窟蔦（ヴァンレイル）とか、火と土で暴爆呪（ブラスト・ボム）とかが使えるかな？）」

本当に使えたら、ハルケギニアではユートのオリジナルスペルと云う事になる。

今日という日の為、ずっと魔法の知識を頭に詰め込んできたのだ。

杖が無くて、魔法を使えなかった雌伏の時は終わり、いよいよこの知識を活かせる時が来た。

だからだろうか？　ユートは少し興奮している。

早く使いたい。

昨夜はそればかり考えていた所為で、お復習いに力を入れすぎてしまい、少しだけ寝不足気味だ。

「それでは、取り敢えず簡単な系統魔法を使い、お前の系統を計り

たいと思う」

サリュートがユートへ、厳かに宣言した。

本人がどの系統に属するのかは、一番簡単な系統魔法を使って判断する。

簡単なのに全く反応しなかったら、それはその系統に適正が無かったと云う事。

失敗すれば、精神力の消費は有っても何も起こらないから判り易い。

「では、私が手本を見せるからよく見ておきなさい」

サリュートが杖を構えて、ルーンを唱え始める。

因みに、ユートはスレイヤーズの黒魔法の詠唱がカオス・ワーズで行われる為、ハルケギニアの魔法詠唱をルーン・ワーズ（魔法言語）と呼んでいた。

「ウル・カーノ、発火！」

杖の先に火が灯る。

最も初歩の火系統魔法で、発火と言う。

読んで字の如く、火を発する為の魔法だ。

ユートは実は可成り血筋的に恵まれていた。

サリュートは土のスクウェア、火のトライアングル、風と水がドットのメイジ。

ユリアナは、水のスクウェア、風のトライアングル、土のライン、火のドット。

一応どの系統も使用出来る上に略、正反対の資質を最高位で持っている。

その血がコンフリクトしなければ、全ての系統を余す事無く扱える器……資質を既に獲ていた。

この場合、通常ならどうなるか？

血筋が衝突（コンフリクト）して、どの資質も弱体化してしまう。

どちらかの資質が優性遺伝として受け継がれ、特化型となる。

大体がこうなるだろう。

両親の資質を如何無く受け継ぐ心算なら、弛まぬ努力と自覚的な訓練が必須。

人間、才能やら資質だけで何とか成る程、世界というのは甘くも優しくも無いと云う事だ。

そういう意味では、ユートは恵まれている。

ハルケギニアには存在しない筈の【理論】を、現代人としての知識として既に持っているのだから。

だからこそ……

「ウル・カーノ、発火！」

火が点くという【理論】を識るユートは、一発で発火を成功させてしまった。

ユートは発火の魔法を使う際に、ジッポーライターをイメージしてみた。

フリントロックを密着させたフリントホイールを勢い良く擦る行為を、ルーンの詠唱に見立てて火花を芯に向けて飛ばす事で着火。

魔力をナフサやパラフィンから精製された、揮発性の高いオイルだと考える。

芯から揮発してガス状になったオイルが、空気と混合されて燃え続けている所をイメージしたのだ。

これにより、ユートは発火を成功させる事が出来た。

これでユートは確信する。

現代科学は魔法のイメージに役立つと。

そう、火が燃える理論を識っているのと識らないのとでは、魔法の成功率や練度が雲泥の差だ。

「驚いたぞ、ユート。行き成り成功させるとは」

「ありがとうございます、父上」

資質は有っても、上手く燃えるイメージを想像出来なければ失敗もする。

そういう意味では、ユートの様に成功させるのは結構難しい。

「では、次に土系統魔法の錬金だ」

取り敢えず、ユートの魔法適正を調べる為に、今日は初歩中の初歩となる魔法を順次使っていく予定だ。

「イル・アース・デル！」

手本として、サリュートが錬金を使って石ころを青銅へと変える。

青銅は銅（Ｃｕ）を主成分として、錫（Ｓｎ）を含む合金な訳だがサリュート（父上）は何故【純銅】ではなく、【青銅】を錬金したのか？

ユートは考えた。

その疑問の一つの解答として思い浮かんだのは、銅を錬金するより青銅を錬金する方が簡単だったのでは？　というものだ。

青銅とは、要するに錫という不純物を含有する合金。

ひょっとしたら不純物を含有しない……謂わば、より単一の元素から成る純物質は、錬金し難いのかも知れない。

銅９５％、錫１～２％、亜鉛４～３％の金属が一般的に１０円玉硬化に用いられている銅合金だ。

恐らく、この銅合金の方が純金属の銅より錬金し易いのだろうと、ユートは結論付けた。

実際、純金の錬金が可能なのは土のスクウェアメイジだと、ゼロの使い魔第１巻でシュヴルーズが言っていた筈だし、トライアングルの彼女が錬金したのは真鍮……詰まり、合金だった。

「どうした？　難しく考えなくとも良いから、錬金を試してみなさい」

「っ！　は、はい」

考え事に没頭していた為、ついマルチタスクを怠っていたユートは、慌てて返事をすると指輪を着けた右手を伸ばす。

銅の元素記号【Ｃｕ】と、銅そのものを頭に描いて、石ころに魔力を籠めて詠唱をする。

「イル・アース・デル……錬金っ！」

ピカッと光を放って、輝きが収まると其処には銅が転がっていた。

思った以上に上手くいったらしい。

「？　青銅ではないな」

訝しんだサリュートがディテクトマジックを掛ける。

「これは、銅……か？」

驚いている処をみると、やはり純金属の錬金は容易くはないらしい。

「驚いたな。真逆、不純物を含まない純銅を錬金するとはな」

不純物を殆んど含まない銅は、銀や金と同じく硬化として鋳造される。

この世界では、金属の価値が＝硬化の価値。

銅貨（ドニエ）に銀貨（スウ）に金貨（エキュー）として使用されるのもその為だ。

最近では不純物を含有した金貨を、新金貨として若干だがエキュー金貨より価値が低い金貨（四分の三の価値）も出回っているが、これは世界経済の事情というやつだろう。

因みに、新金貨で１０００枚＝エキュー金貨７５０枚の価値となる。

「それにしても、火と土でずいぶんと才能を発揮したな。これは私と同じ系統と考えて良いな」

そんなサリュートの言葉を聞き、ユリアナがガックリと肩を落とす。

息子に魔法を教えるのを楽しみにしていたのは、何もサリュートだけではない。

ユリアナも自分の系統を教えたかったのだ。

しかし、先に教えられた火と土が予想以上の出来。

サリュートの言う通りで、土と火得意とするメイジだとすれば、自分の出番など殆んど有るまい。

寧ろ専門ではない系統は、家庭教師を付けてしまえば良いのだ。

これでどちらかが出来なかったなら、未だ希望も持てたのだろうが……

火と対極の水や、土と対極の風では適正が在ったとしても、最低限の適正しか無い筈だ。

それでも、ユリアナは水系統を教える為にユートの前に立つと、ゆっくりと口を開いた。

残るはコンデンセイション（凝縮）とウインド（風）だ。

「では、次にコンデンセイションを教える……ユリアナがな」

そう言うと、サリュートがユリアナに席を譲る様に退き、それに併せてユリアナが前に出た。

「漸く私の出番ね」

満面の笑顔……というには程遠いが、それでも笑顔を“貼り付けている”。

ユートが既に、火系統と土系統に才を顕した以上は、反属性である

水系統と風系統は期待出来ない。

意気消沈しても仕方がないというものだ。

どちらかが発動していなければ、未だ期待が持てたのだろうが……

ユリアナは首を振ると、暗い考えを拭う。

息子が才を見せたのだ。

それが、自分の得意系統で在って欲しいというのは、所詮は親のエゴでしかないのだから。

「それではお手本を見せるので、それを元にやってみなさい」

「判りました、母上」

優しい声で言われ、系統が父親似だった事に少しだけ罪悪感が募り、せめて真面目にやろうと思った。

「イル・ウォータル……」

杖を振り、集中すると杖の先に水が顕われる。

流石は水のスクウェアだけあって、バケツ大の大きな水塊だ。

「凄いです母上！　では、僕もやってみますね」

お手本は見たが、魔力の流れなどを主に視ていた。

ユートは思う。

「（思った通り、ハルケギニア式の魔法はイメージをルーン・ワーズによって、魔法式に変換しているんだな。イメージが曖昧だと、まともに魔法が発動しないのも術式がちゃんと構築されないからか）」

勿論、それは系統魔法の話であって、コモン・マジックはまた別の要因があるのだろうが。

コモン・マジックは口語によるものだから、ルーンの言霊の術式構築は不可能。

というより、あり得ないのが言葉を変えても発動するのだ。

例えばサモン・サーヴァントの場合。

『我が名は〇〇〇〇。五つの力を司るペンタゴン。我の運命（さだめ）に従いし、使い魔を召還せよ』

これが普通に使われているサモン・サーヴァントを使う際の詠唱。

しかし、ルイズは文庫では描かれなかったが、アニメでは可成りぶっ飛んだ事を言っていた。

『宇宙の何処かに居る我が下僕よ！　神聖で美しく、強力な使い魔よ！　私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさいッ！』

“あれ”でも魔法は成立する訳だから、詞自体は関係無いのだろう。

だいたい、タバサの場合は“偽名”でも普通に発現しているくらいだ。

なら、コモン・マジックとは何なのだろうか？

魔力と思念と想像力が術式と成り、精神力を媒介にして成立する魔法と考えるのが妥当か。

ハルケギニア自体に何らかの術式が仕掛けられている可能性もある。

それがメイジの血に反応、魔法へと変換されるなど。

実際、召喚でルーンの刻印に言語翻訳まで成されるのはどう考えてもおかしい。

「（そういえば、バカテスって召喚獣を喚ぶ為に空間を特殊フィールドにしてたよな？）」

まあ、考えていたらキリがないし答えも出ない。

それに今は魔法の練習だ。

「イル・ウォータル、凝縮（コンデンセイション）」

水を集める魔法。

ユートは指輪に魔力を集中して、目を閉じる。

水、Ｈ２Ｏ……大気中に在る水分を集約するイメージで魔法を使う。

曖昧なイメージでは術式も安定しない。

しっかりとしたイメージを持つ。

「なっ！　これは?」

「なんて事なの?」

サリュートとユリアナの声を聞き、ソッと目を開けてみると空中に浮いた水塊が目の前に在った。

それも、ユリアナが見せた水塊と遜色ない。

驚いていたのは、火と水の才能が衝突（コンフリクト）する事なく、どちらも正常に使えた事にだろう。

ユートとしては単純に大気中のＨ２Ｏ（目に見えない水分）を、理科の実験を思い出しながら集めてみただけだったが。

「こ、これは風系統の方も期待出来るかしら?」

少し興奮気味のユリアナ。

自分の系統は期待出来ないと思ったら、十分な才能を見せてくれたのだ。

これは、ユリアナでなくとも興奮しない筈もない。

「次はウインド（風）です。ソル・ウインデ」

ルーンを紡ぎ、杖を振るうと風がまるで突風の様に吹いてきた。

「うわっ！」

ただ吹かせただけの風が、何て威力だよ？　とユートは思う。

「さ、やってみなさい？」

「は、はい」

何だか凄く良い笑顔だ。

先の凝縮で味を占めたのかも知れない。

ユートは風とは何なのかを考える。

風とは大気の流動。

基本原理はエネルギー保存の法則、上から下に向けて落ちる事が大気で起きているのだろう。

大気と大地の温度差なんかも関係している。

しかし、今回は魔法で吹かせるのだから、寧ろ扇風機みたいに風を魔力で動かすのをイメージしてみた。

己自身を扇風機に見立て、魔力の強弱を羽の速度、精神力の大小を出力の大きさだと考える。

「ソル・ウインデ」

イメージをルーンで術式化し、精神力を媒介に魔力を使ってイメージを現実のモノとするのが魔法。

確かなイメージは、正しく魔法を発動させる。

流石にユリアナ程の威力は無かったが、普通にウインドは発動していた。

サリュートは唸り、顎に手を添えて眉を顰める。

ユリアナはニコニコと嬉しそうだ。

「ユート、取り敢えず今日は精神力が尽きる寸前まで魔法のお復習いをし、上がりなさい」

「はい、父上！」

その日、ユートは精神力切れで倒れる寸前まで魔法を使って、フラフラになりながら夕餉を摂った。

.

第４話：系統魔法のススメ（後書き）

・

凝縮とウインドの詠唱は、ソレっぽいのを捏ち上げたモノで、実際には原作に出て来ません。

第5話：我に秘策有り　内政を始めよう（前書き）

・

テンプレ通り、内政にも手を出します。

正直、余り詳しくなかったりするけど……

第5話：我に秘策有り　内政を始めよう

・

コンコン……

「入りなさい」

扉を叩く軽快な音を聞き、室内で書類を片付けていたサリュートが応える。

「失礼します、父上」

ガチャリとドアを開けて入って来たのは、息子であるユートだ。

「うん、待っていたぞ。
椅子に掛けなさい」

促され、ユートは近くに有った椅子へと腰掛ける。

「それで父上、僕にいったい何のご用でしょうか？」

真面目な話しだと感じていたユートは、居住まいを正してサリュートに訊ねた。

「用件は二つある。一つ目は、魔法に関してだ」

「それは、全ての系統を使えた事でしょうか？」

「解っているなら話は早いが、練習に関してはともかくとしてもだ、

あまり全ての系統を使える事を幼い内から喧伝するのも良くあるまい」

父としてのサリュートは、息子の才能が嬉しい。

しかし、その才能をあまり早い内から周囲に知られると、要らぬ軋轢を生みかねない毒と為る。

それはユートも考えていた事だ。

だから、ユートは言う。

「その事は僕も考えていました。ですから、僕が現在使える系統は土と水という事にして下さい」

「何故、土と水なんだ？」

「錬金と秘薬作りをやりたいのです。勿論、戦闘メイジとして風と火の訓練もしますが、火のメイジだと薬作りは不自然ですし、風で錬金が得意なのも変でしょうから」

当たり前の事を言っているユートだが、当たり前であるが故に真理だ。

「判った。取り敢えずは、お前の系統を対外的に土と水にしておこう」

「はい。それで、二つ目は何ですか？」

サリュートは頷くと、机の上の紙の束をユートに渡して見せる。

それは、机の上に所狭しと置いてある書類とは違い、羊皮紙ではなかった。

所謂、紙だ。

羊皮紙は読んで字の如く、羊や山羊の原皮を使って作る紙の事。

材料が材料なだけに決して安価とは云えず、無駄遣いは出来ない。

しかし、サリュートが渡した書類は羊皮紙ではなく、紙で出来ている。

しかも内容が【製紙法と、その活用法】だ。

其処に書かれている内容は決して無視出来ない。

何故なら、製紙法を書き出した物がその紙だからだ。

詰まり、内容は出鱈目でも何でもない真実だと考えて良い。

「父上、此れがどうかしましたか？」

「惚けるな。それは少し前に私がお前から預かっていた物だろう」

「預けたのではなく、父上が勝手に持っていっただけでは？」

「む……」

ユートが魔法を習うよりも前の事、ユートはユリアナと部屋で過ご

していた。

その時ユートは、紙に件の内容を書いている最中。

丁度、書き終えた頃に部屋へと入って来たサリュートは、息子が何をしているのか気になって、覗いてみて吃驚する事になる。

内容があまりに高度。

しかも製紙法と、紙の活用法や売り方などに言及していたのだ。

オマケに書いていた物が、羊皮紙ではなく紙。

流石に無視するには大きくて、ユートから書類を預かった。

「ユート、この紙は何処で手に入れた？」

ユートには月の小遣いを、２００スゥ程渡している。

だが、紙は存在こそしているが製法が解らず羊皮紙よりも高価だ。

子供の小遣いでは数枚も買えない。

それ以前に、行商が売り歩く品でもなかった。

そんな紙を惜し気もなく使って、紙の製法を書いている息子。

驚くなという方が無理だ。

「何処で手に入れたも何も……僕は作り方を知っているのですから、

自分で作ったんですよ」

やっぱりかと、サリュートにとっては半ば判っていた答えだった。

「ふう、それで？　ユートがこの知識を何処で得たかは聞かんが、お前はこれをどうしたいんだ？」

「ウチで造り、シェアを握りたいと思います。その為にも、父上に力を貸して頂きたいのです！」

「……そうか」

熱く語るユート。

サリュートは暫らく目を閉じて黙考すると、決意をした目で我が子を見据える。

ユートは、そろそろ内政をしたいと考えていた。

しかし、幾ら何でも子供の意見が簡単に通る筈がない事も理解している。

ユートには勝機が在った。

何故かは判らないが、とある方法を使えばサリュートも目を向けると、確信めいた思いが在ったのだ。

その方法が、今回の製紙法を書いた“紙”をサリュートに見せるというもの。

そして、ユートは賭けに勝った。

これが後の、オガタ式製紙法の確立である。

紙の製作に関しては、もうサリュートに任せた方が良いと判断し、
ユートは次の政策へと乗り出す方向性で動く。

先の紙の功績を鑑みれば、ユートの意見を無碍にしはしないだろう。

これが作戦だった。

たった一つ、それも自分に可能な範囲で何か功績を作れば、以後の
意見も言い易くなる。

その為の製紙法。

更に、紙を使った商売をすれば紙の需要が増え、売り易くなる筈だ。

その方法として、娯楽の少ないこの地に娯楽小説を。

これも“何故か”頭の中に方法が入っていた。

ハルケギニアの読み物で、有名処は【イーヴァルディの勇者】とい
う戦記モノ。

ただ、文章が堅い文学小説の域を出ていない。

故に、目指すはライトノベルだ。

ユートは亜空間ポケットに手を突っ込み、一冊の本を取り出す。

タイトルは【ゼロの使い魔】だが、勿論これを書く訳ではない。

というか、書いたら某・宗教団体が煩いだろうし。

単に読む為に出したのだ。

「一応、原作のチェックはこれで可能だけど、魔Ｏ……なのはさん曰く、この世界は【ゼロの使い魔】と銘打たれた【原典】から枝分かれした分枝世界だから、現在介入すれば当然だけど原作知識も役に立たなくなる訳だよね」

どのように動くか……

ユートは【原作】を読みながら、色々と思索に耽っていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【？？？？】

ユッサユッサと揺すぶられる身体。

「ん？」

一瞬、身動ぎするが再び夢の中へとダイブする。

『起きて……』

また身体を揺すぶられた。

『起きなさい！』

「う～ん？」

プチ……

何やら、キレてはならないモノがキレた音が鳴る。

ユートを起こしていた人物は、大きく息を吸う。

そして……

『起っきろぉおおおおおおおおおおおおおおおおっ！』

「うわぁぁっ！？」

耳の傍で大声を出した。

あまりにもあまりな暴挙。

ユートは吃驚しながら目を覚ます。

「いったい何事？」

『やっと起きた』

「へ？　なのはさん？」

寝呆け眼をこすりながら、声がした方を振り返ってみると、白い魔王様が何処か嘆息しながら立っていた。

「今度はなのはさんか」

『？　今度はって？』

「ああ、何でもありませんです、はい」

首を傾げるなのはに、慌てて抑える。

「それで、人の夢に何の用ですか？」

『あ、判ったんだ』

「まあ、一応は……」

前回、５年前に金色の女王が夢を介して顕れた時と同じ感覚があり、これが夢というか【精神空間】の一種だと理解していた。

アニメなんかではよくある演出。

気絶している主人公が誰かと会って話すのが、云ってみれば今のユートの状態なのだろう。

『話は二つ。一つは原作への介入に関して。もう一つがユート君の今後の行動の指針……かな？』

「原作介入……ダングルテールの悲劇は僕の生まれる前の話だし、ジョゼフ暴走はトリステインの子爵家の息子でしかない僕には、何

も出来ない。ワルドの事もそう。子供の言葉なんて、聞いてくれる訳がない」

ユートは現状、何の実績も無いただの子供だ。

この世界の人間は、基本的に亜人も含めて他人を卑下するのが生き甲斐の様な、【自分最高】の連中が蔓延っている。

勿論、少数ながらそうでは無い者も居るが、大多数の権力財力持ちがそうだ。

自分の系統自慢程度なら、まだ可愛らしいモノ。

しかし、エルフが嘗て人間（ブリミル）がした事を指して、蛮族やらシャイターンやら呼ぶのは未だしも、同じ人間という種でありながら、ゲルマニアを野蛮人と蔑むトリステインの態度。

そのくせ、自分達が悪く言われれば誇りを汚されたと怒り狂う。

誇りじゃなく、驕りの間違いだろうと思うユート。

狂王もダングルテールの悲劇も、それらの積み重ねの必然でしかない。

レコン・キスタなど、貴族による議会政策、共和制とは名ばかりの王家の利権を強奪する為の謂わば、建前論でしかなかった。

共和制と銘打つなら、平民との格差を無くして彼らも政治に参加しなければ意味が無い。

レコン・キスタのやり方なんて、王家が複数の貴族に変わっただけだ。

それに、オリバー・クロムウェルも虚無や聖地に関して詳しくなかったとユートは考えている。

彼は何を以て、自分が虚無の継承者だと吹いたのだろうか？

もしも、虚無に詳しい人間に指摘を受けたら、彼は答えられるのか？

絶対に出来ない。

所詮はガリアの傀儡、マジックアイテムを虚無と偽った詐欺師に過ぎないから。

しかも、人間が忌み嫌っている上に、クロムウェルの様なロマリア司教などが異端と断じる先住魔法（精霊の力）を、在ろう事か虚無と偽ったのだ。

ユートはロマリアの神職者が基本的に嫌いだった。

だから……

「原作介入は出来る事を、出来る様にやります。例えば、ロマリアの権威失墜、ジョゼットの救出、ティファニアに関してもか……」

アルビオンに喧嘩を売る訳ではなく、モード大公が殺された後にウェストウッドに行き、彼女との渡りを付けておくという意味だ。

虚無の予備軍や虚無の担い手を、ロマリアの好きにはさせたくない

から。

ロマリアの権威失墜とは、虚無の担い手や亜人を匿うのにも役に立つ。

当然、ルイズに関しても考えなければならない。

というかだ、自分の両親が烈風のカリンやサンドリオン（ヴァリエール公爵）や、ナルシス（グラモン元帥）と知り合いなら、何れ関わる事になる筈……

「（烈風と関わる？　うわっ、嫌だな～）」

出来る事を少しずつ、普通の生活をするには普通じゃない連中をぶっちぎる必要があるという、凄い矛盾を孕んでいた。

「ん、原作介入については判ったよ。じゃあ、内政はどんな感じなのかな？」

「取り敢えず、五歳の子供が何を言っても普通は聞いて貰えないから、少し変わった切り口で試しました」

それが、製紙法を自身が作った紙に書いて見せるという方法。

それを聞いて、なのはが少し驚いた表情になる。

「よくそんな方法に辿り着いたね？」

「僕も不思議なんだけど、何故かな？　この方法って既に何処かで実証されてる気がしたんだ」

「っ！？」

なのはは更に驚いた。

「そっかぁ、此方は彼方の【受容世界】……か」

「？　じゅようせかい？」

「うん、そう。受容世界」

なのはは【受容世界】について説明をする。

それは即ち、世界を、人物を、一つの【物語】として俯瞰し受け容れる世界。

俯瞰して得た因果情報を、【物語】に再構築して小説や漫画やアニメというメディアで発表する。

「例えば、私はユート君を知らなかったけど、ユート君は私の幼い頃を識っているよね？　【高町なのは】を主人公にした【魔法少女リリカルなのは】っていう【物語】で」

ユートは何を言いたいのか理解し、コクリとなのはの確認に首肯した。

ジュエルシードの探索や、闇の書事件での戦い。

マテリアルとの戦い。

なのはの撃墜やリインフォース?の誕生。

ティアナとスバルの出逢いや、キャロとエリオのフェイトとの出逢い。

ＪＳ事件や、ヴィヴィオとアインハルトの出逢い。

エクリプス事件（仮）。

なのははユートを識らなくても、ユートはなのはが関わった色々を識っている。

アニメで、小説で、ゲームで、コミックで。

ユートの世界は、なのはの物語を情報として俯瞰し、メディアに変えて受け容れた世界。

成る程、受容世界とはよく言ったものだ……と、そうユートは思った。

「そしてね、貴方が識った方法は……同位体の貴方の友人が採った方法なんだ」

「そういう……事か」

ユートは理解する。

詰まり、別の世界の自分から得た因果情報を脳の無意識領域に受け容れて、紙の製作から関連付けをした事により、あの方法を【思い出した】と云う事だ。

よくアイデアが降ってくるとか、キャラクターが勝手に動くとか云うのも、そういう事なのだろう。

そんな話を聞くと、何を神懸かった事をと思ったものだったが……

どちらにせよ、今のユートには助かる話だし、問題も無い。

「じゃあ、スレイヤーズも実際に何処かの世界で有った事なんだ」

余計に【ゼロの使い魔】より【スレイヤーズ】の世界に行きたかったと、不届きな事を思ったがそれは内緒にしておく。

「でも、製紙法を独占するだけじゃ足りなくない？」

「と、言われても……」

言いたい事は判るのだが、実に我が父上様は領主として優秀だった。

それがユートの感想。

領地経営を調べて判ったのだが、ド・オルニエール領の元々の税収は体した事がなく、１２０００エキュー程度のものだ。

しかし、子爵位とド・オルニエールを陛下から下肢されたサリュートは、領地を全体的に見手回ると問題点を洗い出し、それらを改善していった。

お陰で、本来はサンドリオンと同じ世代のサリュートが、子供はユートだけという状態だが。

サンドリオン……ラ・ヴァリエール公爵には3人の娘が居るのにだ。

エレオノール、カトレア、ルイズ。

因みに、なのは（神）は原作に関わらせる気が満々だと理解出来る。

何故なら、ユートはルイズと同い年であり、ラ・ヴァリエール公爵とサリュートは明らかに知り合いを越えた間柄。

ユートも五歳になった事だし、そろそろラ・ヴァリエール家に行く事になりそうだと思っている。

何故って、サリュートが言っていたのだ。

『そろそろ、ラ・ヴァリエール公爵の次女、カトレア嬢の誕生日だな』

余りにもあからさま過ぎる言葉で、思わず固まってしまった。

それは兎も角、よく二次でやっている衛生管理は既にサリュートが行っており、糞尿の肥料化も済されてしまっている。

その為、サリュートが新たに設置したド・オルニエールの街や、それ迄にも存在していた村なんかも臭わないし、疫病も特に流行ってはいない。

王都トリスタニア一の通りであるブルドンネ街でも、ちょっと裏に回ればゴミや汚物で臭いと云うのに。

「（それだけ見ても、父上って実は転生者？　って思ったんだよな～）」

だが、今回のなのはからの情報で理解した。

恐らくは、サリュートも別世界から情報を受け取っていたのだろう。

「ま、父上に負けたくないし、温泉でも作るかな」

「温泉？　でも、ユート君の住むド・オルニエール領には、火山が無いよ？」

「火山なんて要らないさ。ド・オルニエールには切り立った山脈が有るからね」

「？」

ユートの言っている意味が理解出来ず、首を傾げているなのは。

「あのね、地熱は１００ｍ掘る毎に約３℃高くなる。なら、１０００ｍくらい掘れば３０℃になるよね？」

「確かに、その理屈なら」

「だったら、１５００ｍの標高差のある山の奥底まで水を染み込ませる水脈を造れば、山の持つ地熱で温泉が沸くって事だよ。一応、土と水のメイジって事で通すから可能なんだ」

元より、ユートが四系統の内で土と水を表に出すと決めたのは、温泉を造る為でもあった。

山の麓に温泉と宿を作り、温泉に何かしらの付随効果を持たせれば、十分な収入を獲られると考えている。

「うん、既に色々と考えてるみたいだね？　ご褒美に上げるね」

「へ？」

渡されたのは、死んでしまって見る事が叶わなかった【ゼロの使い魔】の新刊。

「じゃ、そろそろ行くよ。後、私は竜破斬や重破斬なんて使えないから」

そう言って、ユートが生前に使っていた携帯電話を投げて寄越してきた。

青褪めるユート。

どうやら、アプリケーションでパソコンを見れるヤツで、お気に入りにしていたアレを見られたらしい。

「と言うか、勝手に人の携帯を見ないで欲しい」

なのはが居なくなった後、ボソリと呟いた。

.

第5話：我に秘策有り　内政を始めよう（後書き）

・

ユートの同位体には、余り突っ込まないで下さい。
気にしたら負けなので……

次は温泉か、ヴァリエールか、どっちかになるかな？

第6話：ランクアップとカトレアの誕生会（前書き）

・

噺は内政に入っていきますが、魔法も忘れられてはいません。

遂に原作キャラとの邂逅。

第6話：ランクアップとカトレアの誕生会

・

あの白い魔王様との邂逅から暫らく経つ。

ユートは手頃な場所を見付けて、水脈を通す作業を始めていた。

勿論、温泉を造る為に。

とはいえ、未だに土も水もドットランクでは作業の方は遅々として進まない。

同時進行で、カトレア嬢の誕生日に贈るプレゼントを製作していた。

出入りの商人から偶々手に入れた水晶の原石。

石英（クォーツ）と呼ばれ、二酸化ケイ素（ＳｉＯ２）が結晶して出来た鉱物。

六角柱状の綺麗な自形結晶をなす事が多い。中でも特に無色透明な物を水晶と呼び、古くは玻璃と呼ばれた。

主要な造岩鉱物であり、花崗岩などの火成岩に多く含まれる。

ユートはこの原石を、無色透明の二酸化ケイ素結晶に錬金して、水晶に変えた。

更に、腕に傷を付けて血を流すと、血を水晶に掛けて錬金する。

水晶に血中の鉄分を錬金して、鉄イオン（Ｆｅ２＋）に生成した上で結合した。

微量の含有で無色透明だった水晶が、紫色に発色する為に必要な血は少しだけ。

そこら辺の砂鉄を集めても良かったが、ユートは敢えてそうしたのだ。

血とは魔術的な意味合いも在ったから。

銀のチェーンを使い、白金の土台を用いた大人しめのデザインのペンダント。

当たり前だが、未だ錬金で銀や白金を造れないユートは、少し安めな鉱石を手に入れて錬金で形にした。

元々、その金属を含有した鉱石から抽出するだけであれば、温泉を造るのに使っていた技術を応用出来る。

二週間の格闘の末、完成を見たペンダント。

「で、出来たぁぁぁ！」

漸く完成した紫水晶のペンダント。

紫水晶の石言葉は【誠実・心の平和・高貴・覚醒・愛情】だ。

「（きっと、カトレアに……似合う……な）」

そう思いつつも、ユートは疲労と貧血と精神力切れによって、意識を手放す。

其処には、遣り遂げた漢の安らいだ表情が在った。

結局、丸一日を寝て過ごしてしまったユート。

その後、机に置いてあったペンダントを入れる物が要るなと考える。

完成した紫水晶のペンダントは、現代に有る様な装丁の箱を作り、その中へと仕舞う事にした。

木箱に、市販の宝石入れを組み合わせて作り、ペンダントを仕舞った後で模様付けした紙で装丁。

リボンを掛けて完成だ。

「これでよしっと！」

ユートは完成品を見て満足そうに微笑んだ。

再び温泉街予定地へと向かうと、温泉を造る為に水脈を山に通し始める。

「あれ？　何だか楽に水脈を通せてるな……」

今までは水脈を通す為に、土系統による錬金を使った上で、水を操作してきた。

どちらも重労働で、作業の速度は決して早いとは言えない。

それがどちらも早く感じるのだ。

「あ、もしかして？」

家に籠もって紫水晶のペンダントを造った際、血から鉄イオンを錬金したりしたから、これまでの温泉作りと合わせて水と土がラインにランクアップした様だ。

「はは、これは正に棚から牡丹餅だったよ」

これまで、それこそ倒れる寸前まで水脈の操作をしてきたユートだったが、此処に来て遂にペンダント造りで倒れてしまった。

精神力も魔力も筋肉同様に使えば使う程、どんどん鍛えられていくもの。

其処へ来て実際に倒れてしまった事で、身体が危機感を持って一気に許容量を上げてしまった。

これにより、ユートは意図せずラインに成ったのだ。

初めての、謂わば社交界デビューに浮かれてしまい、その切っ掛けのカトレアに贈る物に力を入れた結果、ユートは新たな力を手にしたのだった。

それに気を良くしたユートは、喜び勇んで温泉造りを頑張ったものだ。

それから更に少し時が経って、カトレアの誕生日。

両親に連れられ、ユートは窮屈な服に身を包んで領地であるド・オルニエールを出て、ラ・ヴァリエール領へと向かう。

ユートが馬車に揺られながら思う事は、舗装されていない道をこんな馬車で走るのは、乗っているだけでも疲れるという事実。

何れはサスペンションやら何やらで、馬車を補強したいなと考える。

それに、馬車が走る道にはアスファルトを敷くのも良さそうだ。

ユートは、頭に在る雑学の中からアスファルトはどうやって造るのか、思い出してみる。

本気でやるならば、自領で必要な所のみにアスファルトを敷く。

街も雨で地面が泥濘む事が無くなるだろう。

まあ、やるならサリュートと要相談だ。

真逆、勝手にする訳にはいかないだろうし、反対されたら諦めねばなるまい。

それに、家臣から土メイジを借りる必要もある。

温泉は、水脈を通す知識の都合上1人でやっていた。

しかし全てを1人で出来るとも、やろうとも思ってはいない。

「（ま、取り敢えずはパーティーを愉しませて貰うかな？）」

背もたれに背中を預けて、少し眠る事にした。

「やあ、お久し振りだね。ジェローム殿」

「お久し振りにございますな、オルニエール夫妻」

老紳士は一礼して、オルニエール家の面々を迎えた。

ラ・ヴァリエールの執事を束ねる執事長、ジェロームは長年この家に仕えているのだ。

「では、これを」

ジェロームに渡されたのは封緘をされた封筒で、それはカトレアの誕生日パーティーの招待状。

サリュートとユリアナは、慣れた感じで屋敷へと入っていく。

ユートもまた、それに従ってラ・ヴァリエール邸へと入った。

初めての社交は、ユートにとって大変なものだ。

先ずはホストであるラ・ヴァリエール公爵と、その妻の公爵夫人への挨拶。

「久し振りですな、ヴァリエール公爵。公爵夫人」

「お久し振りです」

「うむ、久しいな。オルニエール子爵に子爵夫人」

「本当に久し振りですね、子爵殿。子爵夫人」

家格の低いサリュートと妻のユリアナが挨拶をして、それに応えるラ・ヴァリエール夫妻。

「ユート、公爵御夫妻にご挨拶をしなさい」

「はい、父上」

促され、後ろに控えていたユートが前に出ると、夫妻に頭を下げて礼をする。

「初めてお目に掛かります……私はユート・オガタ・ド・オルニエールと申します」

「うむ、しかし実は君に会うのは初めてではないのだよ。君が生まれた日に私は居たのだよ」

「え？」

サリュートを見ると、首肯した事からどうやら本当の事らしい。

「そうでしたか」

まあ、挨拶に間違いはないから問題も無かった。

次に、パーティーの主役のカトレアへの挨拶だ。

ハッキリ言って、周囲の連中……公爵令嬢とお近付きになりたい貴族子弟が邪魔となっていた。

どうやら、カトレアもいい加減で疲れているらしい。

「（この頃は未だ病気も表立ってなかった様だな）」

彼女の病気が表立っていれば、そもそもパーティーなど行われないだろう。

ユートは意を決する。

面倒はもうこの際、無視してしまおうと。

周りを取り囲む貴族子弟を掻き分け、カトレアの前に出てユートは挨拶をする。

当然、行き成り割り込まれた貴族子弟は渋い表情となり、眉根を顰めた。

ユート自身は知った事かとさっさと名乗る。

「初めまして、ミズ・カトレア。お誕生日、おめでとうございます。僕はド・オルニエール子爵家の嫡子、ユート・オガタ・ド・オルニエールと言います」

名乗りを聞き、伯爵家以上の家柄の者は新興の家だと嘲笑し、同じ子爵家や男爵家の連中は邪魔者を見る眼で口元を歪めた。

そんな中で、カトレアは少しユートに近付いて、自分も挨拶を交わす。

「初めまして、ミスタ・ユート。私はカトレア・イヴェット・ラ・

ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。今日は私の為に来て頂き、ありがとうございます」

某・ツンデレ虚無っ娘とは似ても似つかぬ笑顔を向けて、礼を言ってくれた。

「それと、これを」

綺麗に包装した匣を渡す。

リボンを掛けられた包装を見て、自分への誕生日プレゼントだと理解したのだろう、カトレアは子首を傾げる仕草に微笑みを乗せて、口を開く。

「ありがとうございます、ミスタ・ユート」

「拙い（つたな）自作の代物で恐縮ですが、一時を貴女の身の引き立てとなるなら幸いです。それでは、僕はこれで失礼致します」

一礼し、その場を辞する。

因みに、カトレアがこの場でユートを名前で呼んだのは、向こうが名前で呼んで来たからだ。

ミス・ヴァリエールと呼ばれてばかりで、家の事しか視ていない他の貴族子弟と違う空気を持つ年下の少年に、カトレアは少しだけではあるが興味を持った。

「（そう言えば、さっき彼は私をミズ・カトレアと呼んでいたわね？）」

そんな軽い疑問と共に。

必然的に、カトレアの興味は先程渡された匣に移る。

少年がくれた匣。

「（自作……手作りという事ね）」

ちょっとはしたないと思ったが、包みをこの場で開いてみた。

包装紙の中身は木箱。

木箱の蓋を開けると、その中にはシルバーチェーンに白金の土台、紫色の宝石が慎ましやかに取付けられたペンダントが入っていた。

「まあ……」

何故か、魅入られてしまうペンダント。

まるで魅了の呪いでも掛けてあったかの様な、そんな錯覚を覚えた。

そうではないのは、全くと言って良い程に奸な魔力を感じなかったから判る。

それはカトレアの“勘”が告げていた。

それでも魅了されずにいられなかったのは、仕上げに血液を用いたからだろう。

造った本人は識らなかった事だが、今のこのペンダントには【アダマス】程ではないが、高い圧力でユートの魔力が圧縮されて籠められている。

鉄イオンだけでなく、血中の魔力は全てアメジストに錬成される過程で封入されていた。

造った時にユートが思っていた“想い”と共に。

石は意思を持つ。

意思は石に反映される。

それは【アダマス】もそうだし、今のカトレアが首に掛けたアメジストもだ。

魔力を持って、魔力の主の意思を反映して……

それは一種の、血液魔術と宝石魔術。

普通の宝石に比べ、圧倒的な“存在感”を持つに至ったアメジストに、カトレアが目を奪われたのは当然だと云えた。

「（？　何かしら、身体が軽くなった気がする？）」

カトレアがペンダントを首に掛けた瞬間、重苦しかった身体の負担が少しだったが軽減された気がする。

それがユートの意思。

ユートの祈り。

ユートがカトレアの病気を識るが故の、純粋な祈祷の力が働いていた。

同じ頃、父親のサリュートはヴァリエール公爵と歓談に花咲かせている。

「ほう、サリュートはもう息子に領地経営を任せているのか？」

「まあ、本人にやる気が有りましたし、能力も有る。真逆、未だ5歳の身空で紙の製法に辿り着くとは思いませんでしたよ」

「羨ましい限りだな。私の子供は娘ばかりが3人だ。愛らしいから嫌ではないのだが、やはり跡継ぎと言う事を考えると、息子も欲しかったな」

ヴァリエール公爵と話をするサリュートの話題は、専ら息子のユートの事だ。

「今は温泉とやらに填まっておりますな」

「温泉？　何なのだその、温泉というのは」

このハルケギニアに、温泉の概念は無い。

貴族は風呂くらい入るが、よもや外で肌を曝した上で湯に浸かるなど、思考の埒外なのだろう。

サリュートは、ユートから受けた説明をその侭、公爵へと伝えた。

その説明に、少し眉根を寄せて顰めっ面になる公爵。

「わざわざ、外に出掛けてまで湯に浸かるのか？」

風呂なら邸に在るのだし、何も外まで出掛ける意味も肌を曝す意味も解らない。

「ユートが言うには、温泉というものは普通の水を沸かした湯と違い、みねらるとかを多分に含んでおり、色々と効能が有るとか」

「効能……とは？」

「確か、湯の成分次第ですが……美肌に良く、疲労の回復にも良い、神経痛、筋肉痛、関節痛、打ち身、慢性消化器病、痔疾、冷え性などにも効くとか」

「そ、そうなのか？」

流石に驚くヴァリエール公爵は、タラリと汗を流していた。

「やはり跡継ぎが居るというのは良いな」

溜息を吐いてしまう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃、ド・オルニエールの跡継ぎ君は、ラ・ヴァリエール家の長

女と末娘に捕まっていた。

カトレアへの挨拶後、食事を摂っていたユートだったが、ユートの顔を知らなかった2人が現れ、長女の方が自分に挨拶をしないとは何事かと、因縁を付けて来たのだ。

「申し遅れました。私の名は、ユート・オガタ・ド・オルニエールと云います。ミズ・ヴァリエール」

一礼して名乗る。

「みず？」

ピンクブロンドの髪の毛に鳶色の瞳の小さな少女が、首を傾げて聞いた。

「ミズって何よ？」

金髪の、年齢的に胸が残念な瞳の鋭い少女が訊ねる。

「ああ、えと……男の場合は一律ミスタだけど、女性は未婚者がミス、既婚者がミセスと呼び方が変わりますよね？　だから、僕はどちらも等しく呼ぶ事にしているんですよ」

ユートの説明に納得したのか、長女は眼鏡の位置を正して言う。

「成る程……」

男尊女卑のハルケギニアに於いて、女性蔑視は目に余るものがある。

まあ、一部に強い女性も存在しているが、所詮例外は例外に過ぎない。

だから、ユートは地球で行われる様になった統一された呼び方をしていた。

「まあ、良いわ。私の名前は、エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。カトレアの姉よ。おちび、貴女も挨拶なさい！」

「は、はい！　エレオノールお姉様。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。宜しくお願いします」

エレオノールに促されて、ルイズもペコリと頭を下げて挨拶をした。

どうやら、エレオノールは手遅れ……基い、既にツンが入っている様だが、未だルイズは性格が柔らかい。

恐らくは、ルイズがエレオノールやカリーヌみたいなツンが入るのは、魔法が上手くいかずに親姉妹は云うに及ばず、メイド達使用人にまで蔑まれていると感じる様になった事で、性格が歪んで捻じ曲がった結果なのだろう。

素質自体は、カリーヌから受け継いでるのだろうが、カトレアの例が有るからには、一概にツンが入るとは限らない。

あんな、爆裂ツンデレ娘になってしまったのは、それなりの歴史があったと云う事だ。

そして、それはエレオノールも同じだろう。

カリーヌだってそうだ。

【烈風の騎士姫】を紐解けば、それがよく解る。

十歳の、未だ少女だった頃のカリーヌは【臆病で負けず嫌い】な性格だった。

才覚は有り、姉さえ覚えていない風系統の浮遊を既に覚えていたくらいだ。

しかし、仮初めの“勇気”を得てからは【負けず嫌い】の方が際立った。

貧乏貴族だとは云えども、ド・マイヤール家の名前を背負って、４０エキューという端金を旅費に王都へと向かう。

魔法衛士隊に入隊する……その目的の為に。

男尊女卑の世界だ。

女騎士は当時も珍しくなくなっていたが、魔法衛士隊にだけは女では入れない。

故に、男装をして……

１４～１５にしては残念な大きさだった事もあって、上手く少年を演じていた。

だが、行き成り決闘騒ぎを起こした【負けず嫌い】な性格。

既にこの頃には、ツンが入っていたのだ。

サンドリオン、ナルシス、バッカスという三馬鹿と出逢い、エスターシュ大公との確執。

様々な事が在った。

人に歴史有り。

カリーヌのキツい性格も、時代からくる歪みだったのかも知れない。

それはエレオノールも同じなのだろう。

残念ながら、ずっと年上で原作でも余りその辺を描写されなかったエレオノールについては、ユートにも窺い知れないが……

そのツンが酷かったのか、バーガンディ伯爵とやらも逃げ出した。

「（アニメで観た限りで、固執する程じゃ無いと思ったけど……）」

失礼窮まりない事を思ってしまう。

エレオノールの事はユートにも知り様がないのだが、ルイズについては原作知識から理解も出来る。

頭脳は聡明であり、背や胸は残念だがカリーヌの若い頃そのものの美貌を持っていて、上級貴族のラ・ヴァリエール公爵家に生まれたアドバンテージ。

しかし、それら全てを貶めて余りあるマイナス要因。

正に、ハルケギニアという世界の在り方による弊害。

ただ一点……【魔法が使えないという】、それだけで貴族失格の烙印を捺された様なモノだった。

魔法を使えば爆発。

コモン・マジックで爆発。

系統魔法で爆発。

爆発、爆発、爆発、爆発！

家族も色々と調べただろうが、決して解明には至らなかった。

今は未だ、エレオノールも魔法学院にすら通ってはいないが、何れはアカデミーに入って研究者となる。

その主な理由が、カトレアの病の解明にその治療法の確立と、ルイズの魔法が爆発する理由と解決法の立案に在った。

貴族という枠組みでは厳しい父の公爵と、兎に角厳しい母のカリーヌ。

母の【負けず嫌い】によるツンを受け継ぐ、上の姉であるエレオノール。

家族の中でルイズに優しかったのは、【ちい姉様】のカトレアだけ。

カトレアからは見放されたと思い込み、それが故に使用人にも莫迦にされて蔑まれていると感じたルイズ。

下手に聡明だっただけに、変な疎外感を蔑みに感じたのだろうか？

彼女に残ったのは、間違った貴族のプライド（驕り）だけだった。

ユートは思う。

「（世界の都合で歪んでしまうのは、ルイズだけじゃないしな。だったら、取り敢えずはルイズだけでも何とか出来ないか？）」

【原作介入】

なのは（神）が言っていた訳だが、存外やってみる価値は有るのかも知れない。

世界の価値観に踊らされている者は、原作キャラの中に沢山居るだろうし、名前も出ないキャラだって世界の歪みの犠牲者が幾らでも居る。

平民蔑視もその一つだ。

歪んだ者が、更に歪みを生んでいく悪循環。

「（何処かで断ち切らないとな。純粋にこの世界の者じゃない僕は、歪みが見えているし原作知識も在る。幸い、立場も貴族だし）」

平民では難しいどころか、不可能に近い。

全てを上手く利用すれば、或いはやれるかも知れないと考えて、エレオノールとルイズの2人と話しながらも、マルチタスクで算段を練り始めるユートだった。

.

第6話：ランクアップとカトレアの誕生会（後書き）

・

本作品は、主人公のユートの成長などを主眼に、ゼロの使い魔の世界で動いていく噺です。

アンチや肯定は程々です。

第7話：カトレアの想いとスレイヤーズ魔法（前書き）

.

完成しました。

第7話：カトレアの想いとスレイヤーズ魔法

・

未だに親達は歓談を続けていた。

聞けば聞く程に、跡継ぎの存在が欲しいと感じる公爵だったが、流石に無い物ねだりは出来ないし、妻であるカリーヌが悪い訳でもない為、溜息を吐く。

製紙法の確立に、娯楽小説の執筆、印刷技術の獲得、温泉事業。

一つ一つは小さいが、此等を全て結集すれば可成りの上がりも期待出来る。

ヴァリエール公爵は、上がりがどうのこうのよりも、ソレを考えて実行したのがド・オルニエール家の跡取り息子であるという事実、それが羨ましい。

「ふむ。いっその事、上か下の何れかを彼に嫁がせるのもアリか？」

有力候補は一番下で、どっち道何処かに嫁に行く筈のルイズだろう。

嫡子であるユートの婿入りはあり得ないし、順当にいけばエレオノールは婿を迎える立場だから、嫁に出すのもどうか……

まあ、エレオノールが嫁に往く場合はルイズが婿を取って、ラ・ヴァリエールを継がせれば良い。

「駄目ですっ！」

「うむ、駄目……って？」

声がした方を振り返って見れば、其処にはカトレアの姿が在った。

その表情は、何処か焦った様子が見て取れる。

「カトレア？」

訝しむ公爵の言葉を聞き、思わず両手で口元を押さえてしまう。

自分は何を言っているのかというような、そんな顔をしていた。

「カトレア、何故駄目なのかね？」

公爵が訊ねると、カトレアは戸惑いと共に視線を泳がせて顔を俯かせる。

挙動不審なカトレアを見て公爵も戸惑うが、首に掛けられたペンダントに惹かれて目を向けた。

「カトレア、今日のお前の胸元を飾る装飾はそれではなかったと思うが、どうしたんだね？」

「これは、ユート君……ミスタ・オルニエールから戴いた物です」

「ほう、我が息子から」

「え？」

カトレアは話の流れから、考えてはいたがやっぱりかと思った。

「申し遅れましたな、ミス・カトレア。私は、サリュート・シュヴァリエ・ド・オガタ・ド・オルニエール……ユートの父ですよ」

「まあ、シュヴァリエ……子爵様なのに勲爵士の名も戴いておられるのですね」

「疎も、代々のオガタ家は勲爵士を戴く事で、細々と貴族の名前を維持して来た家系ですからな」

勲爵士、騎士侯、シュヴァリエなど呼び方は様々にあるのだが、貴族の爵位としては最下級。

しかし、この爵位は実力が認められなければ、国から下肢される事はない。

オガタ家は少し特殊な事情を持っており、公職に就くでなく、領地を持つでもない名ばかりの貴族だった。

貴族の名前も、初代から連綿と実力を示して、国から勲爵士の位を戴く事により受け継いで来たのだ。

勲爵士は、飽く迄もそれに相応しい実力を示した者に与えられる称号故に、一代限りの名前。

だが、オガタ家は二代目も実力を示して勲爵士を戴いて名を残し、三代目以降もそうやって勲爵士として、貴族を続けていた。

それに変化があったのが、サリュートの代。

サリュートも先祖に倣い、若い頃から実力を付けていき、そんな時にサンドリオン達と出逢う。

勿論、これは神の意図した事であり、偶然などではあり得ないのだが……

神ならぬサリュート達では気付く筈もない。

結果、本来の歴史であれば原典の開始から9年前……才人がド・オルニエール領をアンリエッタから下肢される１０年前には、領主が死亡して跡継ぎも無かった領地は、王領として召し上げられてしまい、老人ばかりの駄目領地となる道を歩む筈だったが、サリュートが３０年程前にド・オルニエール領を下肢される事になって、そこら辺の歴史が変化していた。

サリュートの領地改革が、無事に成功を納めた事もあって、活気に溢れている。

当然、年間の税収も大幅に上向いているのだ。

ラ・アウローラ領の長女、ユリアナを娶り小さな土地を併合した結果、当初だと３０（約１０Ｋｍ）アルパン程度の領地が倍の６０アルパン（約２０Ｋｍ）にまで膨れ上がっている。

それでも僅か２０Ｋｍ四方の土地など、領地として大した広さとは言えないが。

サリュートのした事は王城の方にも話が行っているのだが、法衣貴族達は嫉妬するばかりで具体的な政策を出す訳でもない。

領地持ちの貴族も、心無い貴族はサリュートを新興の貴族だと蔑み、ラ・ヴァリエール家などの一部の貴族は、新興のこの家を各方面から支えている。

そして、カトレアは父親が関係している事で、昔からド・オルニエール家については識っていた。

だからこそ、七歳程年が下の少年がどんな子なのか、逢うのを楽しみにしていたのだ。

最初に見た時は、誰なのか判らなかった。

名乗られて、漸く逢えたと喜んだ。

「（なのに彼は直ぐに行ってしまって、エレオノール姉様とルイズの2人とお話ししている）」

きっと周囲に遠慮したか、或いは面倒事はゴメンだと離れたのか。

周囲が漸く静かになって、自分も会話に加わろうと思って近付いてみると、父親とサリュートが会話をしていた。

内容は跡継ぎに関して。

父のヴァリエール公爵が、跡継ぎとなれる子供が居ない事を寂しいと思っていたのは知っている。

だからそんな会話が自然と出たのだろうが、聞き逃せない話しになった。

「ふむ。いっその事、上か下の何れかを彼に嫁がせるのもアリか？」

確かにそれなら、公爵にとってはユートが義理の息子だが、病気の事もあるのだろうが自分の事は考慮には入っていない。

自分の自慢話しくらいしか能の無い、カトレアを取り巻く貴族の子弟達。

それに比べ、ユートは何処か違う。

まるで別の世界にその身を置いている様な、とても気になる存在。

カトレアは思わず叫ぶ。

「駄目ですっ！」

自分でも訳が解らない。

噂程度にしか識らなかった年下の少年。

まだ碌に話をした事も無い出会ったばかりで、自分の心に楔を打った彼。

自分自身にも理解が及ばない感情は、何故か焦燥感で充たされている。

今、此処で何かを言わなければ、なし崩し的にルイズ辺りが婚約者に成りかねない勢いが在った。

「（解らない。初めて会った年下の彼に、私は何を求めているの？）」

それは少なからず、彼の血を与えられたアメジストの影響も在ったのだろう。

そして、欠落者として得た力が感じたのだ。

カトレアの生来の勘の良さは、生まれ付いての生命の欠落者として、代わりに得た能力。

それが、アメジストにより増幅されて、カトレアの心に影響を与えていた。

公爵達はカトレアから何かを感じ取ったのか、話しは此処までだと打ち切る。

其処へ、折りが良いのか悪いのか？　ユートがルイズとエレオノールを伴い戻って来た。

「あれぇ？　父上、母上、ヴァリエール公爵様、公爵夫人にミズ・カトレア？」

「む、ユート……と、それにエレオノール嬢、ルイズ嬢……」

ユートの声に振り返ると、サリュートは隣を歩いているエレオノールとルイズに気付く。

「エレオノール、ルイズも……ユート君と一緒だったのか」

「ええ、お父様。彼は中々の博識で、有意義な時間を過ごせましたわ」

エレオノールがヴァリエール公爵に、笑顔を向けて応えた。

「そういえばユート君」

「何でしょう、ヴァリエール公爵様」

「堅苦しいな、名で呼ぶ事を赦そう」

「え？　でも……」

流石に戸惑う。

心の内で、ヴァリエール公爵は『何れは身内になるやも知れぬしな』と、考えていたりする。

カトレアは、それを正しく感じ取った。

普段の父は、親バカのきらいがあるのだが、友人の息子という事を差し引いて、名前を赦すなんてあり得ない話だ。

「（先程の婚約とかは、本気なのかも……）」

ユート自身未だ五歳という幼さだし、最年少でルイズは四歳だ。

婚約話しが出るのは、まださきだろう。

だが、公爵が本気で考えているのは確か。

カトレアは、胸の埋に何か黒いモノが蟠るのを感じていた。

「それでは……失礼ながらピエール様と呼ばせて頂きます」

「うむ」

ヴァリエール公爵は、満足そうに頷く。

「それでは、ピエール様。先程の続きですが、僕に何のお話しでしょうか？」

「ああ、サリュートから聞いたのだがな。ユート君は魔法を上手く使えるとか。今はどんな具合かな？」

「はい。一応、父上と母上の系統を継いでおります。先日、土と水がラインとなりました」

「何と、その年でラインになったと云うのかね？」

「はい」

公爵の驚愕も当然だ。

普通のハルケギニアの人間だと、習い始めて直ぐランクが上がる事はまず無い。

ユートがこんなに早い時期でラインと成ったのは、神より与えられた能力と前世の経験値。

それに、毎日の様に魔法を倒れるギリギリまで精神力を使い、アメジスト製作で遂には倒れた事で、許容量（キャパシティ）が引き上げられたのと、祈りで精神が昂揚してトランス状態になったのが原因だ。

風と火も、直ぐにラインに上がるだろう。

「ふむ、是非とも見てみたいものだな」

「公爵、本日は我らは屋敷に逗留をする予定ですし、パーティーが終了後に何かやらせてみますか？」

「おお、サリュート。それは良いな」

「（いや、父上。せめて確認くらいしましょうよ）」

心の中で悲鳴を上げる。

「それで良いかね？」

「判りました。精一杯やらせて頂きますピエール様」

アニメでは親バカが目立ったものの、中々に常識的でユートもホッとなる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

カトレアの誕生会も終わって、夜の帳が降りる中庭にヴァリエール家とオルニエール家の面々が集合。

ヴァリエール家の執事とメイドを総括するジェロームに頼み、大きめの石を持ってきて貰った。

ユートがこれから見せるのは、オリジナルスペル。

本来なら、スクウェアとなる必要があるのだが、これから見せる魔法は其処までの必要は無い。

「それでは、少し暗いので明かりを点けますね？」

そう言って呪文を唱えた。

「火より生まれし輝く光、我が手に集いて力となれ。ライティング！」

光球が生まれ、辺りを昼間の如く照らす。

スレイヤーズの魔法の中でも簡単な、光を生む魔法であるライティング。

コモン・マジックにライトがある為、ちょっと光量の強いライトで通る。

事実、公爵達もライトなのだと誤解したのか、普通にしていた。

「貴方、指輪を杖に使っているのね？」

「はい、カリーヌ様」

目敏く指摘してきた公爵夫人に、ユートは首肯する。

因みに、ユートは彼女からも公爵と同様に名前で呼ぶ事を赦されていた。

「では、始めます」

パンッ！　と手を合わせると、詠唱を開始する。

詠唱はスレイヤーズの魔法の呪文を、此方側のルーンワーズに併せる形。

頭の中ではスレイヤーズの詠唱で想像、構築する。

「全ての命を育みし母なりし存在無限の大地。身体と理を循環し、我が手に集いて力と成せ！」

オリジナルの詠唱。

モデルは鋼の錬金術師。

手と手を合わせ、魔力を内で循環させる。

使うのは即ち……

「錬成！」

精神力を媒介に、魔力を頭の中の術式に従って構成して、大石に叩き込む。

やった事は【錬金】と変わらないが、ユートの【錬成】は精神力の

消費が少なくて済むし、可成りダイレクトに想像力を顕せる。

結果、大石は鉄へと姿を変えていた。

素粒子のレベルまで石を分解し、再構成する。

その際、術式に従い石の元素をＦｅに変換するのだ。

原作でも、シュヴルーズが石ころを真鍮に換えたし、ギーシュが土から青銅を創れる様に、ユートも石を鉄へと創り換える。

魔法による、石から鉄への変化に驚かれた。

石の質量をその侭、鉄の質量に変換は出来ない上に、錬成の際は不純物を極力排除した為、基より鉄は小さくなる。

それでも、これだけ純度の高い鉄なら申し分ない。

エレオノールはそれ以外で驚愕していた。

ユートは、ライティングを保持した侭で別の魔法を発動させている。

詰まりユートは、魔法を二つ同時に発動可能。

これに関しては、カリーヌ夫人とカトレアも気が付いていた。

ヴァリエール公爵とサリュートは、鉄を作ったという結果のみに目が往っている様だが……

ある意味で底知れない実力を示してしまったが、その事にユートは

全く気が付いてはいない。

「ユート殿、貴方は二つの魔法を同時に扱えるのですか？」

「は？　はぁ、使えます」

だからこそ、カリーヌ夫人に指摘を受けても理解が及ばなかった。

「あ、ああ貴方、その年齢でこれだけ高度な術を使えて、更に二つ同時に魔法を起動出来るなんて！？」

信じ難いのか、エレオノールは吃りながら叫ぶ。

今年で１５歳の彼女でも、あんな事は不可能。

１０歳も年下の少年の腕に吃驚させられたのだ。

「ふ～む。どうやらユート君は努力家の上に才能もあるのだね。やはり……」

公爵は『欲しいな』と思うのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ヴァリエール家の別邸に用意された部屋で、ユートは精神力集中している。

精神力そのものを、体内から体外に抽出するイメージで、気功の様

に……

詠唱をする。

「光よ、我が手に集いて閃光となり、深遠なる闇を打ち払え……」

両手の内に輝き、発生した白いエネルギー。

呪文詠唱により、精神力は魔力エネルギーに転換されている。

「烈閃槍（エルメキアランス）ッ！」

力ある言葉により、解放されたエネルギーが光の矢となって放たれる。

勿論、それは只の精神エネルギーに過ぎない為、物理的な破壊は行われない。

また、精神系の精霊魔法はコモン・マジック扱いで、マジックミサイルやブレイドの変形という事にして使う予定だ。

「成功……かな？」

【烈閃槍】

初歩的な精神系精霊魔法。光の様な矢が、アストラルサイドに直接作用する。

「うしっ、思った通りやれたな！」

魔法がイメージだというなら、精神力を直接抽出して放つ魔法だって使えるとは思っていた。

その思惑は見事に当たり。

「これに土を掛け合わせれば……」

ユートはダガーを鞘から抜き放ち、再び呪文の詠唱を始める。

「久遠と無限を揺蕩いし、全ての心の源よ、我に従い力となれ。魔皇霊斬（アストラル・ヴァイン）！」

力ある言葉と共に、魔法の効果が顕れる。

汎用魔法（コモン・マジック）に土の系統を合わせる事で、イメージ的には硬化と精神力を混ぜる心算で魔法を使った。

【魔皇霊斬】

精神系精霊魔法。

ゼルガディス・グレイワーズがよく使用していた魔法であり、剣の切れ味を上げると同時にアストラルサイドにも干渉する魔法。

ユートは魔法を掛け、色が変化したダガーを振るってみる。

試し切りは流石に出来ないが、まあ成功だろう。

「ま、こんな感じかな？」

満足そうに笑う。

さて、スレイヤーズの魔法を修得したいというのは、理解出来るとして。

魔族が存在しないこの世界に於いて、精神系精霊魔法を覚える意味があるのか？

実はこれが以外とある。

自身が一度死んだから解る事だが、世界にはゴーストだって存在するし、ゴーレムは精神力を媒介に動かしている為、烈閃槍なんかを放って中枢を破壊してしまえば割と簡単に潰してしまう事が出来る……筈だ。

理論上は。

「ま、やった事はないから判らないけどね」

ゴーレムを誰かに造って貰って、実際に試し切りとか試し撃ちをしたい処だ。

「う～ん。カリーヌ様に偏在を出して貰って試し切り……」

言ってみて青褪める。

「駄目だな、とっても悪い予感しかしない」

そんな事をカリーヌ夫人に頼もうものなら、思い切りカッタートルネードの連発で半殺しにされかねない。

というより、きっと訓練と云う名の“いぢめ”フラグが間違いなく

立つ。

ブルリと、背筋を冷たい何かが奔って震える。

「うん、ヤメとこ……」

ヘタレた。

「さて、じやあ次は拳用の魔法を」

三度、力を集中していく。

「全ての心の源よ、尽きる事無き蒼き炎よ、我が魂の内に眠りしその力、我が身に宿りて深淵なる闇を撃ち払え……」

拳を握り締め、力ある言葉を紡ぐ。

「霊王結魔弾（ヴィス・ファランク）！」

【霊王結魔弾】

アメリア・ウィル・テスラ・セイルーンがよく使っていた魔法で、拳に魔皇霊斬と同じタイプの強化魔法。

「取り敢えず、こんなものかな」

クラリ……

「う、精神力が尽きた」

何しろ、直接的に精神力を抽出して使っているのだ。

魔力の系統変換より遥かに精神力を消費する。

たったの三つ、魔法を使っただけでこれだけ消耗するのも無理からぬ事。

ユートはフラフラとベッドへと向かい、バッタリと倒れ伏してしまう。

そして翌朝、メイドさんに起こされたユートはグラつく頭をハッキリさせる為、魔法を使う。

「浄結水（アクア・クリエイト）」

の、名を冠したコンデンセイション（凝縮）と全く変わらない訳だが。

取り敢えず、一般人でも使える魔法なだけに、大した精神力も消費せずに使う事が出来た。

浄結水で出した水で顔を洗うと、食堂へと向かう。

ユートは、着々とスレイヤーズ系の魔法を修得しつつあった。

食堂ではヴァリエール家とオルニエール家、両家による朝餉を楽しむ。

「ユート君、来年はルイズにも魔法を教えようと思うのだが、良ければ君の魔法の使い方など教えてやってはくれないか？」

食後に、紅茶を飲みながらそんな無謀な事を公爵が言ってきた。

ルイズは虚無系統。

教えた処で、爆発するだけだと判っているユートは、どうしたものか思案する。

ルイズの性格自体の矯正は難しいが、上手くやったら柔らかくなるかも知れないと考えると、やる価値もあるだろう。

ユートはそう判断した。

「へ？　ああ、構いませんが……」

少し間抜けな返事になったものの、ヴァリエール公爵は満足気に頷いている。

「そうですね、では代わりにユート殿が１０歳になったら、このわたくしが直々に訓練を付けて上げましょう」

「（要りませんよ、巨大なお世話ですっ！）」

とは、流石に本人を前にして言えないユートだった。

「ユート君、またお会いしましょうね？」

カトレアは微笑みながら、ユートを送り出す。

エレオノールとルイズも笑顔で送り出してくれた。

こうして、ラ・ヴァリエール家での出来事は終わる。

「（ユート君……）」

1人の少女に、一つの楔を打ち込んで。

.

第7話：カトレアの想いとスレイヤーズ魔法（後書き）

.

まあ、スレイヤーズ魔法をどんな呪文で使っているとか、細かい突っ込みは無しの方向性で。

第8話：あーぱー（アンリエッタ）姫との出逢い（前書き）

・

アンリエッタ姫登場。

ユートも彼女にはあまり関わりたくはなかった。

第8話：あーぱー（アンリエッタ）姫との出逢い

・

ユートは現在、王城の廊下を歩いている。

勿論、王城というのは自国トリステインは王都トリスタニアにある宮殿の事だ。

決してリュティスやウインドボナやロンディニウムではない。

だからこそ、現在ユートの隣を歩いているのはユートと同じ年頃の少女。

肩の上で切り揃えられた栗色の髪の毛、南の海の様に鮮やかな青い瞳で、白く透明感漂う肌。

薄い桃色のドレスを着て、小さなティアラを頭に載せた【アンリエッタ・ド・トリステイン】

ユートが属するトリステイン王国のお姫様だ。

容姿“だけ”を観たならば成る程、トリステインの一輪の花と呼ぶに相応しい。

天は二物を与えず。

幾らトリステインの一輪の花だとて、頭の中までお花畑でなくていいものを。

ユート曰く、あーぱー姫。

「（くっ！　必要があったとはいえ、何でこんな事になったんだ？）」

ユートは眉根を顰めながらアンリエッタを見た。

彼女と“お友達”にはなりたくはない。

それなのに何故？

何故、自分は彼女の隣を歩いているのか？

ユートは一つ、コッソリと溜息を吐いた。

愉しそうに歩くアンリエッタだが、ユートとしては困った事態。

正直に言えば、演技であれ素であれ【お友達】を平然と戦地に送り込む様な人間とは前述した通り、絶対に仲良くはなりたくない。

下手をすれば【お友達】という名を盾に、何をやらされるか知れたものじゃないのだから。

何しろ【お友達】のルイズを危険な戦地へと、しかもヴァリエール公爵には何の報せもしない侭に、密命として赴かせるのだ。

自分はきっとあの辺には関われないだろうし、どうやってもあのイベントは変えられない。

あーぱーの理由が解らなければ、性格の改変も不可能だろう。

「（まあ、恐らくは王家の者としての重圧から逃げてるだけかな）」

王家に生まれなければ良かったとか思っているのだろうが、それはとんでもない甘えでしかない。

当然だ。

所詮は、隣の芝生とは青いもの。

平民は自由だとか、王族は縛られているだとか巫山戯るなとユートは言いたい。

権利の行使者は、その対価として義務を負う。

あーぱー姫の言っている事は、権利は欲しいが義務は負いたくないという事だ。

王女は平民になれないし、平民は王女になれない。

己の立場で出来る事をやって、成せる事を成す。

人間はそうして生きていくしかないと云うのに、ソレを彼女は頑無視している。

「（王族なんてみんなそんな感じだし、ハルケギニアの歪みとは関係ないな）」

本当に、どうしてこうなったのやら？

ユートは再び嘆息した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

それは一昨日の事……

「ユート、王城に行くぞ」

「え？　あ、うん。行ってらっしゃい父上」

「何を惚けた事を言ってるんだ？　お前も行くんだから支度をしなさい」

サリュートの言葉を聞き、タップリ１０秒は固まってしまう。

「え……と、何で？」

「ユートが考案した製紙法で、可成り紙のストックが出来たからな。王家に少し献上して、紙の利権の約束を戴きに……な」

成る程、サリュートの言っている事は正しい。

せっかくの事業。

紙を市場に流すのならば、他の貴族連中に掻っ攫われる前に、王家から利権関係をハッキリ約束して貰った方が良い。

連中ときたら、そういう嗅覚だけは無駄に鋭い。

だけど……だ。

「僕も行かなきゃ駄目なのかな？」

紙に関しては、既に任せた心算だったのだが。

だが、サリュートは言う。

「何を言っている。製紙法を考案したのはユートだ。献上の品について、陛下にご説明申し上げるのは考案者であるお前に決まっているだろう」

そこら辺も引っ括めて任せた心算のユートとしては、正に青天の霹靂。

「さあ、支度せよ！」

サリュートは、ユートに有無も言わさず反論も赦さずに行ってしまった。

暫らくユートは茫然自失となって、廊下に立ち尽くしていたという。

正気に返ると馬車に乗り、王宮に向かった。

道中、ユートがサリュートに道路舗装の話をしてみると、割りと良い感触で聞いて貰えた事に驚く。

「父上、本当に宜しいのですか？」

「うむ、アスファルトとか言ったか？　荒れた道を往くよりは良かろう」

「判りました。温泉の開発が終わりましたら、温泉への道から街までの道を実験的に舗装してみます」

こうして、新しく道路工事も行う事になった。

「（やっぱり1人じゃ限界だな。人員が欲しいか）」

【例の計画】を少し前倒しにしようと考える。

丁度良く、国王陛下に謁見出来る事だし。

ユートはあーぱー姫と出逢うデメリットと、計画の為に国王陛下に会うメリットを天秤に掛ける。

1日掛けて、トリスタニアまでやって来た。

謁見の間に呼ばれ、ユートはサリュートの後ろを付いていく形で扉を潜る。

謁見の間には、玉座に国王陛下が座っており、その隣にはマリアンヌ王妃。

摂政のマザリーニ枢機卿が陛下の右斜め前に立つ。

ファンタジー小説ならば、宮廷魔術師の立ち位置。

とても名誉な位置だ。

なのに、12年後の原作時にはガリガリに痩せこけ、鳥の骨とヴァリエール公爵からも揶揄される。

恐らくは、ユートが知る限りトリステイン一の忠臣。

ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世との婚姻を進めて、何とか同盟を結ぼうとしたのもトリステインを護る為に必要な一手。

実際、タルブ戦の後で必要が無くなれば、ゲルマニアとの政略結婚は白紙に戻している。

他には特に誰も居ない。

珍しい事だが、案外陛下が他の者を下げたのだろう。

「この度は、陛下と王妃様にご尊顔の拝謁の栄誉を賜りまして、真に恐悦至極に存じます」

サリュートが膝を突いて、頭を下げる。

ユートもそれに倣って膝を突いた。

「良い、わざわざ他の者を下げたのだ。堅苦しいのはよせ、サリュートよ」

「はっ、陛下」

サリュートが除(おもむろ)に顔を上げると、人の悪そうな笑みをうかべる国王の姿が在った。

身分の差は有れど、知らない仲ではない。

これは、サリュートに対する信頼の現れだ。

「それで？　此度の謁見はどのような理由だ？」

「はい、最近になり我が領内では製紙法を確立致しまして、大量生産に漕ぎ付けました」

「ほう？」

「本日は出来ました紙を、王宮へ献上をしに参った次第にございます」

千枚一組の紙の束を、全部で五つ積み上げた綺麗な棚に載せて、国王陛下の前に差し出した。

マザリーニ枢機卿は差し出された紙を、国王の許まで持っていく。

試しに中身を確認したが、東方から流れてきたとされる紙と遜色なく上質な紙。

しかも五千枚をポンと献上してきたからには、既に量産体制が整っている上に、在庫も可成り溜め込んでいると考えられる。

実際、領民達を雇って量産を行っていた。

流石は領地経営３０年以上のベテラン。

サリュートの政策は、息子のユートにも見習うべき処が多々有った。

領内では紙も普及しつつあって、其処から派生した新しい娯楽としてライトノベルを売り出している。

印刷は現状で魔法を主に使っているが、その内に完全な技術として確立する予定だった。

小説はユートの持っているライトノベルから、ある程度の噺を引っ張りだしているが、全部をパクリで済ます心算は無い。

領内の中で、噺を創れそうな人間を平民、メイジには拘らず募集を掛けている。

紙が普及しているから可能な事で、ハルケギニア初の出版社……【オルニエール出版社】を設立。

社長には、総責任者としてユリアナを据えた。

優秀作には賞金１００エキューが出る為、数多くの噺が寄せられている。

当然だが、本になった暁には売り上げの一部が支払われる事になり、何れはこれで稼ぐプロの小説家が出て来るだろう。

パクリは飽く迄も、その日までの繋ぎとどんな噺が在るのかを見せるお手本だ。

取り敢えず、ゼロの使い魔はヤバいのでスレイヤーズなどを、ロマリアから見て当たり障り無い様に手直しした上で書いていた。

独自に領内に限り、事業展開をしているのだが、他領には伝えていない。

１０年もすれば、芽の出る事業を独占する為だ。

王宮へはその辺も踏まえて報告しており、サリュートはユートの手柄として包み隠さず話してしまった。

国王はユートに興味を持ったのか、ユートに話し掛けてくる。

「そなたが、サリュートとユリアナの息子。ド・オルニエール子爵領の嫡子か」

「初めてお目に掛かります……先程、父上より紹介に上がりました。ユート・オガタ・オルニエールと申します。陛下と王妃様に於いてれましては、ご尊顔を拝謁奉り、恐悦至極に存じます」

サリュートを真似て、挨拶をしてみた。

「良い、面を上げよ」

ユートは顔を上げ、真っ直ぐに玉座の２人を見る。

そして、自分が始めた（事にされた）事業と、将来的な予定などを話した。

その際、一つのお願い事をする。

それは断られても構わない事だ。

今回は断られても、原作の開始数年前までに行えれば良いと思っていたから。

杞憂だったが。

話してみた処、やってみるが良いと言って目的の物をアッサリとくれた。

この辺は意外と云えば意外で、事は他国の貴族の不祥事にすら発展し、国際問題にすらなると思うからだ。

「（もし駄目なら切り捨て御免って事だな）」

“目的の物”をマザリーニ枢機卿から受け取り、そう考えた。

「時に、ユートよ」

「はっ！」

「此処からは、サリュートとマザリーニを交えた大人の話し合いがあるのだ」

「……？」

席を外せと、言外に言っているのだろうか？

「その間、我が娘アンリエッタの話し相手をしてはくれぬか？」

「ハァ？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「（完全にしてやられた）」

アレを貰った立場上、断る選択肢などある筈も無い。

只でさえ、臣下の立場では断れないのだから。

『初めまして』から『お城を案内して差し上げます』と言われ、現在に至る。

正直、頭を抱えたい。

あーぱー姫とは、出来得る限り知り合いたく無かったというのに。

現実は……

「まあ、ド・オルニエールではこの様な読み物が流行っているのですね」

万が一の説明資料として、ユートが用意していた小説を、アンリエッタに見せていた。

広い王宮とはいえ、いい加減に観るモノも無くなり、お茶会にしようとあーぱー姫が提案してきたのだ。

何と、お茶会にはマリアンヌ王妃も巻き込んで行われている。

「（い、居心地が悪い）」

将来のあーぱー姫とニート大后とのお茶会、気分良くとはいかない。

しかし、マリアンヌ王妃は【烈風の騎士姫】に於いては、女のカリーナでさえ、ドキリとする容貌だったと云うだけあって、年齢を感じさせない美しさだ。

その容姿を受け継いで生まれたアンリエッタも、当然ながらレベルが高い。

ユートは、母子揃って何故に将来はアレなのか、理解に苦しんだ。

ユートがアンリエッタ母子とのお茶会をしていた頃、サリュートと国王は執務室で話を詰めている。

本来なら、この手の話には高等法院が横槍を入れてくるのだが、今回は国王による鶴の一言で決まった。

高等法院は売官制により官職を購入した法衣貴族により構成されている。

通常の司法権限だけではなく、勅令や法令の登記や国王に建言する立法的行政的権限も有しており、劇場で行われる歌劇や文学作品などの検閲、街の市場や各商店などの取り締まりをも行う機関である。

王国に於いては可成りの重要機関である為、大きな権限を有して政策を巡り貴族階級の特権を擁護する事で、王政府と意見対立する事さえある。

また、法衣貴族とは領地を持っている貴族とは違い、王国の官僚となって仕事に従事する貴族の事。

彼のダングルテールの悲劇を引き起こした張本人の、現・高等法院長リッシュモンもその1人だ。

だからこそ、領地貴族の既得権についてはとやかく口を挿んで来る。

利権、既得権、とかく金に薄汚いが故に。

「サリュート、お主の跡取りは中々に優秀じゃな」

「いえ、それ程では」

「わしがアルビオンより、このトリステインに婿入りして随分立つ。そなたに彼の地を割譲したは、わしの信頼の証よ」

「……は」

ド・オルニエール領は元来は王国の直轄地となる予定であったが、前の領主に子がなかった事から、早々にサリュートをねじ込んだ。

前の領主には十分な年金、王都での住む場所の提供をして、退いて貰った。

その侭、サリュートは子爵としてド・オルニエール領を割譲される。

そして、それを以てアウローラ侯爵の長女のユリアナと結婚したの

だ。

因みに、前領主は歳で病に臥しており、あと1～2年で没するらしい。

「サリュートよ、良ければアンリエッタとユートを妻合わせてみるか？」

「御戯れを。ウチのユートは“オガタ”の跡継ぎで、アンリエッタ様はトリステインの跡継ぎ」

跡継ぎ同士で妻合わせる事は、普通しない。

況してや……

「新興の我が家の血筋を、トリステインに入れるのは不可能ですよ。高等法院も黙っておりますまい」

「ふっ、そうだな。許せ」

ハルケギニアは、平民は疎か王侯貴族さえ理想も夢も語れない世界だ。

在るのは只、驕りと嘲りと汚職。

それがハルケギニアの貴族社会だった。

戯れはこの程度にし、現実的な話しに移行する。

製紙法の既得権を許可し、印刷や製本を行う出版社をド・オルニエ

ールに建てる事の許可証を出す。

完全に後付けの許可だ。

勿論、其処には温泉の既得権や街から温泉までの道路を整備する許可、更に小説の王都での流通と既得権の許可。

ド・オルニエール領に帰ったなら、様々な書類仕事が待っている事にさめざめと涙した。

「処で陛下、ユートに与えた許可ですが……良ろしかったのですか？」

「構うまいよ。あのような大胆不敵な事は、アンリエッタには出来まいしな」

自分の代で出来る最後の事だと考え、ゴーサインをだしたのだ。

下手を打てば国際問題となるが、果たしてユートに交渉を成功させる事が出来るかどうか？

実は結構、楽しみにしている国王。

可成り分の悪い賭け。

そして、大きな期待。

ユートはブルリと、背筋に冷たいモノが奔るのを感じた。

「な、何だ？」

「どうかしましたか？」

アンリエッタが小首を傾げて訊ねる。

「あ、いや。何でも……」

ユートは不可思議な感覚に戸惑った。

「あら、アナタ」

マリアンヌがユートの後ろを見て言う。

ユートが振り返ると、確かに国王が居る。

父のサリュートと共に。

「父上、話し合いは終わりましたか？」

「ああ。用事も済んだし、帰るぞユート」

「まあ、待てサリュート。せっかくだし、わしらも茶を呼ばれようではないか」

国王の御言葉で、ある意味で豪華絢爛なお茶会となってしまった。

それから結局は一晩泊まる事になり、ユートはラ・ヴァリエール家でやった様に魔法の披露をやらされた。

対外的に土と水のメイジである為、見せたのはやはり錬成。

真逆、攻撃魔法をこんな所で放つ訳にはいかない。

錬成をしながら、ユートはこれを使った事業も考え始めていた。

この新魔法、某・鋼さんっぽくやって色々と作れそうな気がするのだ。

そう例えば、海に行って海の水を錬成して水と塩化ナトリウムを分離。

海水は水９６．６％、塩分が３．４％となっており、海水を干上がらせれば作れる代物。

更に塩分は幾つかのミネラルから成る。

上手く錬成で水と塩分を頒けて、塩を取り出す事が出来ればこの上なく便利だ。

まあ、それも温泉造り何かを終わらせてからの話し。

ユートは色々と、未来に思いを馳せていた。

.

第8話：あーぱー（アンリエッタ）姫との出逢い（後書き）

・

力を付けるなら、やっぱり内政は必須です。

次回はとある場所へ逝ってきます。

第9話：ガリア王国の姫（前書き）

・

少し無理が在るかも知れませんが、こういうモノだと思って下さい。

尚、精神系のスレイヤーズ魔法はコモン・マジックと同じ扱い、他はルーンで唱える系統魔法でスレイヤーズの詠唱は頭の中で唱えているものと思って下さい。

その為、表記は『』によるスレイヤーズの詠唱でも、口では普通にルーンを唱えています。

“本物”の黒魔法は混沌言語（カオスワーズ）です。

第9話：ガリア王国の姫

・

ユートは現在、ガリア王国の王都リュティスはヴェルサルテイル宮殿の【グラン・トロワ】な在る謁見の間に居る。

王家の紋章は組み合わされた二本の杖を象っており、人口約１５００万人というハルケギニア一の大国で、魔法先進国でもある。

その為、貴族の数が多く軍事力は非常に高い。

また、様々な魔法人形が使われている。

原作に於ける【無能王ジョゼフ】の居る国で、彼の娘のイザベラと弟のシャルルと、シャルルの娘のシャルロット（タバサ）も居る事だろう。

ユートがそんな大国の謁見の間に居るのには、勿論理由が在った。

疎も、ユートがトリステイン国王より貰ったモノが、ガリア王国の国王への謂わば紹介状。

初めから、ユートはガリアに来る為に国王の許可を得ようと考えていた。

力を欲しているユートは、ソレを獲る為に危ない橋をも渡る心算でいる。

ただ、目的は未来の無能王ではないし、シャルロットやイザベラ、

況してやシャルルなどでは決してない。

意図せずして逢う事くらいあっても、それは目的ではないのだ。

その為にこそ、目の前に座るガリア国王に頭を垂れ、その許可を獲る交渉を始めている。

「正気か？　あそこは疎も不可侵ぞ！」

「存じております、陛下。されど、其処を押してお願い申し上げます」

「ぬう……」

苦々しい表情になり、国王はユートを睨み付けた。

確かに厄介な所だ。

悪習の蔓延る地だ。

だからといって、他国の者に好きに踏み入らせて良い場所でも無い。

「あそこの存在は、他国に漏れていないと思っていたのだがな。真逆、お前の様な子供に知られているか」

献上品は悪くなかった。

紙と今後の交易に於ける紙の値引き。

可成り純度の高い鉄と銀。

特に、治療の魔法と併用する為の触媒となる水の秘薬とは違い、それ単体で回復可能なポーション（回復薬）は中々の出来だ。

しかし、その対価があそこで起きる事への黙認。

とはいえ、あそこをあの侭にしておけば、これからもあそこが使われる。

国王として、そんな悪習は何とかしたかった。

計画はそれなり。

穴はあるが、自分がフォローに回れば或いはどうにでもなるだろう。

「（此処で断ち切るべきなのかも知れぬな。彼が来たのは始祖の思し召しか）」

永い、とても永い黙考。

軽々しくは答えられない。

問題が問題故に。

高が小国（トリスティン）の子爵家の子供程度、そんなユートの言葉ではあったがガリア王は悩んだ。

大国（ガリア）の王がだ。

彼も“あそこ”について、以前より考えていた。

それは三年前に、あの子があそこへと送られたと知ってから、更に悩んだ。

今も悩んでいる。

それでも、決断をしたのか顔を上げてユートの顔を見据えた。

「判った。善きに計らうが良い」

「っ！　は、ご英断に感謝を致します！」

ユートは嬉しそうに頭を下げた。

ガリア国王の許可を取り付けたユートが、意気揚々とヴェルサルテイル宮殿を歩いていると突然、広場から声が掛かる。

「おい、おまえ！」

広場を振り向くと、肩まで掛かる青髪の少女が居た。

青い髪の毛は、ガリア王族の血を引く証。

それに、年齢がユートと変わらない様に見える。

シャルロットは三歳。

1人で出歩いているとは思えない。

ならば、消去法から言って答えは一つ。

「（イザベラか！？）」

予期せぬ原作キャラの登場に、ユートは驚いていた。

「おまえがお祖父様の客人か？」

「お祖父様？」

「アタシはガリア王の孫娘で、おうじジョゼフの娘のイザベラ・ド・ガリア」

「成る程、姫様でしたか。そうですよ、僕はトリステイン王国、ド・オルニエール子爵の嫡男でユート・オガタ・ド・オルニエールと云います。イザベラ様」

ユートはイザベラに名乗り返す。

その手には杖が握られている事から、魔法の練習をしていたのかも知れない。

そう思ったが、ユートは敢えて聞いてみた。

「イザベラ姫様は、こんな広場で何をなされておられたのですか？」

「……魔法の練習」

少し間を置いて、イザベラはそう答える。

どうやら、原作の通り魔法が苦手らしい。

確か、原作では水のドットでコモン・マジックも上手く使えなかった筈。

「イザベラ姫様、僕も姫様と同じ年頃で修行中の身ですが、宜しければ少し僕と魔法について語り合いませんか？」

ユートは何故か、下手くそなナンパみたいな口上で、イザベラを誘っていた。

イザベラを伴って、ユートは広場に座り込んで魔法の講義を始めた。

内容自体はトリステインもガリアも変わりない内容であり、イザベラ的にも教師達から教わった内容と大差ないらしい。

「あのさ、それならウチで教えてくれる家庭教師と変わらないよ？」

それで出来る様にならないのだからこそ、彼女も困っていたのだから。

「実際、僕が父上から教わった内容と、イザベラ様が教わった内容は確かにこの世界的（ハルケギニア）に見れば一般的ですね」

「おかしな言い方だね？　まるでハルケギニア以外にも世界が在るみたいだ」

「そうですね」

ハルケギニアの理を当たり前とする人々には、やはり解らない概念の様だ。

「それは兎も角、僕のやり方は父上とは少し考え方が違います」

「違う？　ユートのやり方が？」

「はい」

そして、凝縮を使って見せるユート。

ユートの両手の内に凝縮で作り出した水が浮く。

「す、凄い……」

全く淀み無く、スムーズに魔法が発動した事に驚愕していた。

「伯父上と同レベルの早さで発動したよ」

「伯父……シャルル様の事ですか？　風のスクウェアであるあの方と並べられるのは、少し恥ずかしいですね。僕は未だラインな訳ですから」

「いや、アタシと同年代でラインなら、十分に大したもんだよ？」

胡乱な表情でユートを見つめながら、イザベラは至極真っ当な事を言った。

「それで？　ウチの家庭教師連中や、貴方のお父様のやり方とは違うやり方ってのは、極めればあんな事が出来る様になるのかい？」

「勿論それも努力次第だけど、多分……ね」

「ちゃんと魔法が使えるんなら、幾らでも努力はしてやるさ！　けど、アタシの父上も魔法が出来ないからさ。その娘のアタシが魔法を使えない可能性は、十分にあるんじゃないかな？」

確かにメイジの魔法は血に依存している。

故に、二親等くらいであれば資質が同じでもおかしくはなかった。

だが……

「（ジョゼフは虚無の担い手だ。魔法が使えないというよりは、ルイズが爆発している様に微かに加速してるんだろうな）」

どういう原理かまでは判らないが、虚無魔法はまともに使える様にならない事には、木漏れ日程度の初級魔法が発動するらしい。

ルイズは爆発（エクスプロージョン）。

ジョゼフは加速（アクセラレーション）。

加速なんて、自発的に動かなければ判らないだろう。

「確かに、メイジの魔法は血筋に遺伝しますが、必ずしもそうとは限りません。ですから、諦める必要はありませんよ？」

そう言うと、ユートは魔法の講義を続けた。

「魔法がイメージだとは、勿論識っていますね？」

「それは……ね」

魔法の初歩だ。

当然ながら初めに教わる事だし、教わらなくても理解している項目。

「頭で思い浮かべた想像力（イマジネーション）を、身体の内の集中力（コンセトレーション）で形に変え、制御（コントロール）力を以て放つのが基本です」

再び凝縮を唱えて、水を作り出す。

「ふむ、成る程ね……」

イメージを魔法の術式に換えて、詠唱で術式に精霊力の付加効果を与える事で、魔法は成立する。

最後に力在る言葉で放出。

詠唱に変化を加えたなら、魔法のアレンジも可能なのは、スレイヤーズと変わらないと思われる。

ただ、コモン・マジックは少し違う。

コモン・マジックは外側の精霊力ではなく、人の内側の精霊力に干渉して使用されている。

だからこそ、ルーンではなく口語で発動出来るのだと考えればどうだろうか？

それだけに、本人の魔力とイメージがより顕著に必要とされるのだ

ろう。

「なので、例えば念力なら魔力で動かすのではなく、手で動かすイメージでやってみると良いでしょう」

「は？　手で？　魔法を使って動かそうっていうのにわざわざ手で？」

「飽く迄もイメージです。手はとても万能な器具と言われます。これは魔法だからと云う、固定観念は一端捨てて下さい」

「固定観念……か」

イザベラは、成る程そうかも知れないと思った。

「……手で動かす」

イザベラは頭の中に明確な自分の手をイメージして、そこら辺に有る小石を摘んで持ち上げるイメージを足してみた。

「念力……っ！」

ピクピクと石が震える。

「くっ、動け～！」

しかし、少しだけしか動いてはくれない。

残念そうな表情になる。

「だ、駄目か」

「なら、よりイメージを明確にする為に、最初は長い詠唱でやってみましょう」

「長い詠唱？」

ユートは【アダマス】の指輪を着けた手を、先程の石に向けて口語で唱えた。

「久遠と無限を揺蕩いし、全ての心の源よ。尽きる事無き熱き意志よ、我が手に集いて力と成れ……念力」

フイッと石が浮かぶ。

「我が手より放たれよ！」

浮かんだ石が、人差し指を向けた方へと飛んでいく。

イザベラはそんな様子を、ユートの一挙一動を逃さずに見つめ続けた。

「さ、やってみて？」

「うん」

素直に頷くと、杖を別の石へと向けて詠唱する。

先程と同じイメージで、今度はユートから教えて貰った詠唱をしながら……

「久遠と無限を揺蕩いし、全ての心の源よ。尽きる事無き熱き意志よ、我が手に集いて力と成れ……念力」

詠唱の意味は、何となくではあったが理解出来る。

イザベラは決して愚昧などではなく、寧ろ聡明な方だと云えた。

だからこそ、ユートが会話の端々に撒いていたキーワードを無意識だろうが、拾い上げていたのだ。

血筋に遺伝しますが、必ずしもそうとは限りません。

固定観念は一端捨てて下さい。

ジョゼフが魔法を使えないから、自分も魔法が使えないという固定観念。

「（先ずはその幻想からぶち殺す！　なんてな）」

イザベラの中のマイナスのイメージが、魔法が成功するイメージの欠如に一躍買っていた。

だからそのイメージを払拭させる為、長々と説明をしてきたのだ。

念力は見事に成功し、石は少しだけ動く。

「で、出来た？」

ユートに比べれば、何という事もない力。

それでも今まで失敗ばかりしていた事を思えば、大きな前進だと云える。

イザベラは少し興奮気味にユートを見た。

「それじゃ、次は水の魔法を使ってみましょうか」

「え、でも……」

「適度な自信は、善きイメージに繋がります」

「うん……」

ユートはルーンを口にすると同時に、頭の中ではスレイヤーズ系の呪文の詠唱を始めた。

『優しき流れ揺蕩う水よ、我が手に集え。浄結水（アクア・クリエイト）』

「あくあくりえいと？」

「凝縮（コンデンセイション）ですよ。浄結水はオリジナルスペルなので……」

スレイヤーズ魔法をそんな風に誤魔化す。

「水とは大気中に漂っている水分、Ｈ２Ｏが集まったものです」

「えいちつーおー？」

「（あ、其処からか）」

よく解らない単語を聞き、イザベラは目が点になってしまった。

ユートは先ず、水の概念から教えるべく頭の中で講義の内容を吟味する。

ユートは思案の末、四元素の在り方についてイザベラに教える事にした。

四大元素……系統魔法と同じく【火】【土】【水】【風】の四つが存在し、世界の理に沿ったこの世界でも比較的判り易い物理法則。

「それでは、水とは何か？　其処から始めますか」

「は？　何って、水は水じゃないか」

「先ずはその認識から改めましょう。水は簡単に言うと、水素原子2個と酸素原子1個が結合した水の分子が複数集まった物です」

「……え、と？」

ハルケギニアに原子だとか分子なんて概念は、全くと言っても良いくらい存在していない。

小学校の理科レベルでさえ理解出来ないし、中学校の数学も理解不能だろう。

だが、問題は無い。

自分だって、何も識らない状態から少しずつ教わって今の知識を持

つに至った。

イザベラも決して頭が悪い訳ではない。

なら、自分と同じ少しずつ教えれば良い。

「始祖ブリミルは仰いました。系統魔法とは魔力で小さな粒に干渉する事で、世界を動かすモノだと」

「そんな話、聞いた事が無いんだけど？」

「この世の全ての物質は、小さな粒により為る。四の系統はその小さな粒に干渉し、影響を与え、且つ変化せしめる呪文なり。その四の系統は【火】【水】【風】【土】と為す。ブリミルが遺したとされる、とある遺産の序文ですよ」

「そんな物が？」

「はい」

嘘ではない。

但し、ライトノベルによる原作知識だが。

何しろ、それが書かれているのは王家の秘宝。

自分が読める訳もない。

「その小さな粒を原子だと仮定して、この原子に干渉する事で魔法に換えるのだとすれば？」

「確かに……」

「ただ、水素原子と酸素原子に直接干渉しなくても、世界には水の分子がふんだんに存在してます」

そう言って、今度は普通に凝縮を使って見せた。

「なので、大気中の水分子を集める感じで凝縮を使います」

「ふぅん、教師連中も同じ事を言うけど、ユートの方はもっと突っ込んだ内容なんだね」

「もう少し判り易い様に、少し実験をしてみますか」

ユートは錬成で硝子を造り上げ、ソレをビーカーへと再錬成すると、凝縮で作った水をビーカーに入れる。

更に、穴を掘って火事にならないようにすると、軽く火を点けてビーカーを火の上に置いた。

硝子が熱されて、水は徐々に沸点に近付く。

「水がどうなるか、見ていて下さい」

ユートに言われ、イザベラはジッと見つめる。

やがて湯が沸いて、水蒸気を上げていく。

「この湯気、水蒸気と呼びますが、これが先程までは水だった物で

す」

白い水蒸気は、直ぐに空気に溶ける様に消えた。

本当に簡単な理科の実験に過ぎないが、そんな単純な知識がハルケギニアという世界ではアカデミー級の知識なのだから凄まじい。

暫くすると、ビーカーの中で沸騰していた湯は、全てが水蒸気となって消える。

「斯くして、硝子の中の水は水蒸気という大気の成分となってしまいましたね。その水蒸気と同様の物が、空気中には目に見えない形で沢山散らばっています。ソレを集めるのが【凝縮】という魔法ですよ」

ユートの説明を聞き、実験までして立証されては疑う余地も無い。

イザベラはそういうモノなのだと、そう理解した。

ただ、教師達の様に空気の中には目に見えない水が沢山在りますと、口先だけで言われるよりは理解もし易い内容だ。

イザベラは先程の水蒸気を発生させた過程を、逆回しにする様なイメージで凝縮を唱えてみる。

「（さっきは火で温めたからああなった。水蒸気……だっけ？　ならその逆で、冷やしたら……）」

そのイメージが固まったのか、量は大した事もなかったが確かに水が顕れた。

ユートの凝縮がバケツ一杯なら、イザベラの凝縮などコップの一杯にすら満たない量だったが、確かに魔法は成功している。

「や、や、やった……？　ユート、やったよ。初めて系統魔法に成功したよ！」

それでも、今まで碌に魔法が使えなかったイザベラには、まるで天地が引っ繰り返った様な出来事だった。

「お見事ですね、イザベラ様。後はお復習いを、反復練習を繰り返して完璧に出来る様になりましょうか」

「うん、うん！」

「他の魔法……水の系統はこの延長です。それと魔力ですが、基本的には使い切って下さい。倒れない程度にですが」

「？　何故？」

首を傾げるイザベラに対して、ユートはその理由を説明した。

「魔力は筋力と同じです。鍛えればより強くなりますし、量も増えます。特に、使い切るくらいで使ってやれば、回復の過程で一層増える筈ですよ」

「そういうものなんだ」

「それでは、魔法の講義も終わりましたし、僕はこれにて失礼を致します」

「え？　あ……」

イザベラは思い出す。

ユートは祖父を訪ねてきた客で、自分の講師ではないのだと云う事を。

とても同じ年頃とは思えない物腰だから、いつの間にか本物の講師の様に接してしまっていた。

「ちょ、ちょっと待って……っ！」

「？」

立ち止まるユート。

イザベラは思わず止めてしまったが、何を言えば良いのか判らず固まる。

「う……その、あ……りがと……」

真っ赤になって、搾り出す様な声で言った。

「教えた通り、精進して下さい。イザベラ様」

ユートは思う。

一日であれだけ出来るのなら、きっと直ぐに上達するんじゃないかと。

そして、イザベラと別れた後は行くべき場所を目指して馬車に乗り込んだ。

「さあ、行くか！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日のヴェルサルテイル宮殿で、イザベラは従姉妹の少女と一緒に居た。

「どうしたの、イザベラねえさま？　なんだかうれしそう」

「そうかな？　エレーヌ」

何だか今日は上機嫌な『ねえさま』に、シャルロット・エレーヌ・ド・ガリアは声を掛ける。

「ちょっと楽しい事があったんだよ」

「たのしいこと……どんなことがあったの？」

未だ三歳の、舌っ足らずな口調で必死に喋る。

「楽しい事……さ」

それはきっと、泡沫の夢。

こうして、ユートの小さな介入によって、イザベラは原点の様に魔法を苦手にはしなくなるのだった。

.

第9話：ガリア王国の姫（後書き）

・

イザベラへのフラグになるかどうかは、不明です。

イザベラの口調は、現代のものを参考に柔らかくした感じにしてみました。

“あそこ”への干渉って、本来なら国王でも出来なかった様な気が……

第１０話：心を満たす闇（欲望）とＴＳな少女？（前書き）

・

今回はユートの弱さが露呈します。

オリキャラ登場。

第１０話：心を満たす闇（欲望）とＴＳな少女？

・

「此処が、あの……」

目的地へと辿り付き、その景観に絶句するユート。

一応は【ゼロの使い魔】を呼んで、ある程度は識っている心算だった。

だが、所詮は“識っている心算”に過ぎなかったと、そう思う。

陸の孤島。

突き出した岬の突端に位置する“其処”には、先ずを以て陸路が通じていない。

切り立った岸壁は、船も近付けない。

此処にやってくるには、成る程……空路しかあり得ない訳だ。

しかし、それだけにユートの目論見は上手くいく。

漆黒の闇……双月が浮かぶ夜、見付かれば変質者扱いは間違いない状況の中で、ニヤリと口角を吊り上げていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

此処は、ガリアが管理する【セント・マルガリタ修道院】と呼ばれる監獄だ。

暮らす人間は全部で三種類が居る。

この修道院を運営している本物のシスター。

世を儚み、祈りばかりしている女性達。

比較的幼い少女達。

ユートの狙いは、比較的幼い少女達だ。

別に精神年齢２５歳であるユートが、ロリコンに走ったとかではない。

必要なのは、彼女達が持っている血筋。

謂わば、貴族の……メイジとしての能力なのだ。

ユートが考えた“力”を得る方法の一つ、それこそが自分以外のメイジを増やすと云うもの。

そして、セント・マルガリタ修道院は基本的に定期船以外には訪れる存在は無いし、総勢で２０人近く居り少なくとも１０人位の貴族子女が住んでいた。

此処の貴族子女は、決して表には出せない出自の者が集められている。

ある意味、人間の愚かしさを象徴した施設。

ガリアで忌避された双子の片割れ、平民の侍女に手を出して出来た娘、酔った勢いで近親相姦をしてしまい出来た娘。

どんな理由であれ、醜聞となるが故に此処へ棄てに来るのだ。

男ならばまだ、跡継ぎにと考えられるのだろう。

が、女の子では棄てるという選択しな無かった。

男尊女卑のハルケギニアらしいやり口だ。

それに……

ガリア王国に在る施設とされるが、ガリア王国に限らずトリステインやアルビオンからも棄てに来る貴族は居るのだろう。

説得について言えば、貴族子女達は良い。

外に出すと言えば、一もなく二もなく集まる筈だ。

実際に原作でも、外に興味津々でヴァネッサ（ルイズ）から外の事を聞きたがっていた。

「（それに未だ三歳だろうけど、此処にはジョゼットも居る筈だよな）」

今ならこの事をヴィットーリオも知らないだろうし、虚無の予備た

るジョゼットを確保して、将来的に見てヴィットーリオから隠す事も可能になる。

エルフとの戦争、聖地奪還の名の許に【聖戦】なんて起こさせる気など、ユートには全く無い。

一番の問題が、世捨て人となった【聖女】達だ。

【聖女】とは、貴族子女達が世捨て人の女性を差してよぶ隠語。

世捨て人なだけあって、簡単には誘いを受けてはくれないだろう。

だけど、セント・マルガリタ修道院には、そもそも無くなって貰う心算だから、残す訳にもいかない。

修道院長を始め、シスター達も【聖女】も貴族子女達も全員、外に出す。

「さあ、交渉開始だな」

ユートは修道院に向かって歩き出した。

夜中だけに、貴族子女達も【聖女】達も寝静まっているようだ。

しかし、修道院長だけは起きて仕事をしているのか、建物の一角のみ灯りが点いている。

ユートは窓を軽くノックをした。

その音に気が付いたのか、修道院長が窓を覗き見るが透かさず隠れ

る。

何も見付からず、首を傾げて窓を開けた瞬間、ユートは窓を閉められない様に、手で押さえた。

「っ！？」

悲鳴を上げそうになる修道院長だったが、ユートが掛けたサイレントで声が洩れる事はなかく、直ぐに部屋へと滑り込む。

よくよく見れば、子供だと判って修道院長も大人しくなる。

それを確認し、サイレントを解除するとユートは優雅に礼を執った。

「修道院長とお見受け致します、先触れも無く夜分遅くに訪問した無礼を先ずはお詫びします」

「あ、貴方は一体？」

見た目の幼さに似合わない態度に、修道院長はユートに疑問をぶつける。

「僕は、トリステイン王国の貴族で、ユート・オガタ・ド・オルニエールです」

そう言って、ド・オルニエール家……否、オガタ家の紋章が入っているブローチを修道院長に見せた。

紋章は太刀と懐剣が斜めに十字を組んだモノ。

オガタ家の初代から使用される紋章だった。

「まあ、トリステインの」

オガタ家の紋章は、意匠の複雑さから偽物は簡単に造れない事もあるし、何より騙る意味も無い。

そのお陰かどうかは兎も角として、幸いにも修道院長は信じてくれたらしい。

「今夜の用向きは、貴女にご相談したい事がありましてね……」

ユートは伝える。

この、セント・マルガリタ修道院に居るシスター達、【聖女】達、貴族子女達を自分の領内で受け容れたいと言う事を。

「この書類をご覧下さい」

ユートは自身がガリア国王に与えられた書類を、修道院長へと渡す。

「これは、この書類は本物なのですか？」

「勿論ですよ。ガリア王に直接お会いして、受け取った書類です」

ガリア王家の紋章を象った封蝋で、封緘された封筒を裏返し修道院長に見せる。

「これは！」

此処は飽く迄も教会の管轄ではあるが、何しろやっている事が事な

だけに、王国の後ろ楯がなければやっていけない。
ちょっと修道女が他よりも多いだけの修道院。
対外的には、そういう事になっていた。

「我が領内にも修道院を建てる事になりますし、貴族子女達は屋敷で引き取る形になります。貴女達も仕事を失う事はありませんよ。やる事が、このセント・マルガリタ修道院からウチのオルニエールに変わる……それだけですから」

「……理解はしました」

尤も、納得は仕切れていない表情だったが。

「その、あの子達はどうなりますか？」

「屋敷で働きつつ、自分の未来を考えて貰う事になるでしょうね。此処で無駄に生を貪るよりはマシな生き方が出来るかも知れませんし、或いは苦難の道かも知れません」

「成る程、正しく生きていくのですね」

「鳥籠の鳥は安全と引き換えに、狭い世界で退屈なだけの生活をする事になる。野生の鳥は、危険や苦難と引き換えにして自由を謳歌する事が出来る。鳥にとってどちらが幸福なのか？」

「難しい命題ですね」

こうして、修道院長の許可を得たユートは、最も厄介だろう【聖女】

の説得を、翌日から始めるのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

当然の事ながら、彼女達の説得は難航する。

解ってはいてもゲンナリとしてしまう。

大抵はアッサリと断られてしまい、中々思ったようにはいかない。

「（くっ、判っちゃいたけどここまで難物だとは）」

悔しそうに思いながらも、井戸から水を汲んで、氷を作るとカップに氷水を淹れて飲んだ。

「ふう、魔法はある意味で便利だよね」

水を飲むならやっぱり冷たい方が良い。

真冬ならともかく……だ。

「あら、氷ですか？　私にも頒けて戴けると嬉しいのですが」

「は？」

振り返ると、翠の髪の毛を後ろ髪で三つ編みお下げにした女性が立っていた。

瞳は昏い赤色で、年の頃は２０代半ばだろうか？。
修道服を着たその女性は、軽く挨拶をすると氷を頒けて欲しいと云う。

「まあ、構いませんよ」

桶に幾らか氷を入れてやると、女性は嬉しそうに笑顔を向けてくれた。

「ありがとうございます」

「いえ。暑い日には冷たいモノが欲しいですよね」

「はい。あ、私はセシリアと申します」

「セシリアさんですかぁ。申し遅れました。ユート・オガタ・ド・オルニエールと云います」

「まあ、貴族様でしたか。マントを羽織られてなかったので……」

驚いた表情でユートを見るセシリア。

氷を出したとは云っても、平民メイジの可能性だってある訳だ。

況してやこんな絶海の孤島などで、貴族の子供だと判る名前を出すと云う事自体あり得ないのだろう。

「何故、貴族様がこんな所まで？」

「欲しいものややりたい事が有るからです。その為の第一歩としてこのセント・マルガリタ修道院を選んだと、それだけの事です」
そんな小さなやり取り。

その間、セシリアは見極める様な瞳を向けていた。

「例えば、此処に居る貴族の出の少女達なら、メイジとして役に立ちましょう。それ以外でも“色んな事”に役に立つかも知れませんね。シスター達にしても、教会や修道院を置くならば幾らでも働けます。でも、私達の様な中途半端な女はどうしたら良いのです？」

「っ！？」

思い知った。

勿論、切り捨てる心算などユートには無い。

無いが、彼女達【聖女】は深い深淵の絶望の淵に居るのだと云う事を、その事を本当の意味で思い知らされてしまった。

凡百な言葉が、聖女として世捨て人となった彼女らに届く筈もない。

何故なら、外の世界で一度は絶望を味わい、それ故にこんな孤島にある修道院に引き籠もっているのだ。

セシリアの瞳も昏い。

本来なら、ルビーの様に鮮やかな紅い瞳だったのだろうが、今はくすんだ色。

どれ程の絶望を視たなら、感じたならあんな瞳になるのだろうか？

ユートに理解が出来る訳もない。

何故なら、彼の人生は決して悪いものではないから。

前世では優しい母、厳しいけど割と子煩悩な父、少しブラコン気味だがよく懐いてくれた妹が居た。

今生では神より依頼を受けたとはいえど、貴族という特権階級に生まれたのだ。

きっと、莫迦貴族の治める（まともに治めてないけど）領地の平民に生まれるよりずっと良い生活だろう。

「僕はまだ子供で、今のところは苦労らしい苦労もしていないから、貴女に満足な答えを返せない。領地を継いでる訳でもないから、保証ですら父上任せだ」

「……」

「貴女方を引き受けるのだって此処の貴族の子女と、ある人物を懐に容れる為に必要だったから。それが無ければきっと、貴女達と会う事……いや、此処を思い出す事すらなかった」

「正直ね」

誤魔化しても仕様がない。

彼女が【聖女】の1人であるなら、誤魔化しは不信感を買うだけだ

し……

「僕がもし、神から生まれながらにして使命を与えられた……なんて言ったら、貴女はどう思いますか？」

「……本当に言っても良いのかしら？」

「忌憚ない意見をどうぞ」

「正直痛い……誇大妄想家の自愛主義者（ナルシスト）かしら？　貴族より神官になった方が良いわよ？」

本当に忌憚ない意見を貰ったユートは、膝と手を突いて嘆いた。

背中にでっかい影を背負いながら。

「え……と、何だか判らないけどごめんなさい？」

「いえ、貴女の所為じゃあ無いです。シクシク……」

泣きたくなったが、話が進まないので続ける。

「その痛い使命を背負わされまして、将来的にせめて普通の人生を謳歌出来る様に今から頑張ってます」

「は、はぁ……」

「この世界は、王侯貴族の自業自得と自然現象、それに“ソレ”を掻き乱して哂う存在により滅びます」

セシリアは流石に目を白黒させる。

何をしに来たのかは判らないが、貴族の名前を名乗るお坊ちゃんを突(つつ)いてみたら変な話になった。

ただ、どうやら未だ貴族の大人に染まっていないのは判る。

利用出来るかも知れない。

純粋な子供みたいだから少し気は引けるが、セシリアにも目的が在るのだ。

だけど真逆、世界の滅亡なんて痛々しい話しをされるとは……

「（貴族じゃなく、ロマリアの思想にでもかぶれてるのかしら？）」

そんな話題は、貴族ではなく生臭坊主向けだ。

「それで？　貴方は滅亡する世界に生まれて、ソレを回避したいの？　だけど……こんな世界は一度滅んだら良いんじゃないかしら」

「確かにそうかも知れないけど、それでも僕は未来(あした)が欲しい！」

「貴方（貴族）の我侭で？　平民には生き難い、死んだ方がマシかも知れない世界で未来が欲しいの？」

辛辣な台詞。

「だから、少しでもマシな世界に変えたい。けれど、今の僕には力が無い。変えるには幾らでも力が必要なんだ……そう、欲しかった

んだ力がっ！　こんな下らない世界を変えてしまえる力がっ！　1人では何も変えられないから！」

仲間（ちから）が欲しい。

そんな嗚咽にも似た叫びを聞いて、それを自分に重ね合わせてしまった。

せめて“アイツら”に一矢報いる為に、自分も必死に牙を研いでいたから。

「（演技でも自己陶酔でも無い。この子は本当に何かを背負っている？　なら、私が協力すれば、この子は私達の立場を確約してくれるかも知れないわね）」

セシリアは心を半ば決めて質問をする。

「貴族なら、幾らでも力は獲られるわよ？」

メイジとしての力。

貴族の領地。

財力。

権力。

その気になれば幾らでも、今からならあーぱー姫さえ堕として、トリステインを手にする事も出来る。

「それじゃ駄目なんだよ。独りで獲た力なんて、僕の役には立たない……」

だから欲しかった。

みんなで獲られる力が。

その為、聖女達も受け容れようとしたのだ。

何という欺瞞。

何という偽善。

理解はしていた。

己(おの)が身勝手を。

「人間は誰しも欲望に塗れて、身勝手なものですよ。貴方の瞳に見える昏い色、それが貴方が抱えた闇（欲望）なのですね」

セシリアは何処か遠い目をして、ユートに語る。

「確かに身勝手で……」

グサリ！

「欺瞞で」

グサリ！

「偽善に満ちている」

グッサーッ！

セシリアに言われる度に、何かが突き刺さった。

「でも、他の貴族に比べれば遥かに良いかもね？」

「エッ？」

セシリアの瞳に、僅かではあるが光が灯っている。

「不遜ながら確かめさせて頂きました。私達の事を、未来有る貴方に託しましょう……ユート様」

「でも、僕は……」

「その年齢で、抱え込み過ぎているわ」

「セシリア……さん？」

ギュッと抱き締められて、戸惑いを隠せないユート。

「私に任せなさいな」

そう言って、セシリアは奥に歩いて行ってしまう。

「……と、止める暇も無かったな～」

ユートは茫然自失となりながら、セシリアの歩いて行った先を見送った。

「あれ？　貴方はどちら様ですか？　基本的に修道院は男子禁制ですよ」

「あ、僕は……え？」

声が聞こえ、ユートが振り向くと長めの銀髪で、少し年下な少女が居る。

「（真逆？）　ジョゼット……なのか？」

「はい、そうですが？」

三歳にしては、やけに確りとした受け答えをする少女だが、虚無の予備として生を受けたジョゼット。

桶を持った少女（ジョゼット）は、小首を傾げて微笑みを浮かべていた。

「君は……誰？」

銀髪の少女が訊ねてきた。

「えと、僕はユート」

「ユート君？　“ボク”に何か用なのかい？」

「は？　ボク？」

銀髪の少女は、ジョゼットである事を肯定している。

ジョゼットの一人称は“私”った筈だ。

それとも成長の過程で矯正されたのか？

ユートは考えた。

「（いや、有り得ないな。女の子がボクッ娘になる背景には、周囲の影響が強いと思うし。女性や女の子に囲まれたセント・マルガリタ修道院で、男っぽい口調になるもんか？）」

絶対ではないにしろ、まず無いような気がする。

仮にそうだったにしても、シスターが口調を矯正するだろうし。

「（ま、偏見だけどね）」

とは言うものの、原作知識でのジョゼットと云えば。

恋に恋するロマンチスト。

騙されていると知りつつ、竜のお兄様（ジュリオ）に付いていき、タバサに成り代わって女王になった挙げ句の果てに、執念でジュリオを使い魔ミョズニトニルンにしてしまった。

その所為で、才人がガンダールヴとリーヴスラシル、ジュリオがミョズニトニルンとヴィンダールヴに成るというおかしな状態に……

そんな夢見がちな少女だったのだが。

目の前の少女は、明らかに理性的な対応をしている。

「（それとも、時間の経過と共にあんなにぶっ飛んだ性格に？）」

割と失礼な事を考えながらジョゼットを見た。

「君は本当にジョゼット……なのかな？」

「そうだよ」

小首を傾げ、何だか可愛らしい仕草のジョゼット。

「どうしてそんな風に思ったのかな？　ひょっとして口調が“原作”と違うから戸惑ってるとか？）」

「なっ！？」

余りに驚愕するユートを、愉しそうな瞳を向けてくるジョゼット。

「ど、どうして？　真逆、君は……」

「二次小説風に云うなら、ＴＳ憑依転生ってヤツ？」

「っ！？」

明らかに現代日本人の使う用語。

しかも、ＴＳ憑依と云う事は前世は男で、ジョゼットとして生まれ

変わったと言う事になる。

「やっぱりね。こんな所に普通は誰も来ないもんな。あの酔狂な【竜のお兄様】みたいに、目的を持っていない限りは……」

「ジョゼット、君は俺と同じ【受容世界】の人間か」

「受容世界って？」

「とある世界を俯瞰して、情報を受け容れる世界って意味らしいよ」

「成る程、【ゼロの使い魔】の世界を因果情報として捉え、ソレをメディア化した世界って事だね」

驚くユート。

たったあれだけの情報で、真実に辿り着いたのだ。

「驚いてるね。ボクは科学が好きなんだよ。だから、そういうのは結構ね、理解が出来るんだ」

「な、成る程。それじゃ、ジョゼット？　も何か力を貰ったのか？」

「前世の名前は橋本祐希。だけどジョゼットで大丈夫だよ？　因みに、貰った力は虚無の覚醒と科学技術」

祐希が貰った力、初めから虚無魔法を使える能力。

杖さえ有れば、呪文を唱えて発動出来ると云う力。

科学技術は、現代世界に於ける科学的な技術の知識や造り方の知識。
系統魔法の使い手と組み、科学技術との擦り合わせも可能であり、図面の通りに正確な物を造れる能力だ。
虚無とも組み合わせれば、可成り凄い事が出来る。
「流石に、虚無と系統魔法を同時に得る事は出来ないって言われたんだよね」
「ひょっとして、下級神に転生をさせて貰った？」
無茶なチートを与える能力を持たない神。
「下級かどうか知らない。ただ、ボクの同位体を識ってるから転生させてくれたらしいけど？」
何処ぞで聞いた話だ。
「あとは、なの姉には負けないとか何とか……」
「は？」
「リリカルなのはの主人公の高町なのはの髪型をさ、ポニーテールにしたような人だった。名前は確か高町はるな」
「誰それ？」
ジョゼットは苦笑をしながら『さあ？』と、リアクションをする。

取り敢えず、ユートは目的を祐希……ジョゼットへと告げた。

この修道院の人間を纏め、ド・オルニエールに居を移して、ユートの専属の部下になって貰う計画を。

「良いよ、ボクが纏めておくよ」

「助かる」

ジョゼットは計画に、二つ返事で了承した。

元より、原作が始まる頃には【竜のお兄様】を騙くらかして杖契約をしてから、テレポートを使って逃げる予定だったのだ。

それが早くなっただけ。

そもそも、祐希が転生を決めたのには理由が有った。

その目的に【竜のお兄様】は要らない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

修道院脱出計画が発動。

この修道院の子供は基本、貴族の子供。

１０人はメイジが増える。

この修道院の人間は総勢で２３人居り、内分けは貴族子女がジョゼットを含めて１０人。

シスターが５人、聖女と呼ばれる女性が８人。

原作では３０人は居たが、１２年も前だから７人くらい少なかった。

「そう言えば、どうやって此処に来たの？」

「黒塗りの船。飛翔魔法のフライで梯子を掛けてあるんだよ」

切り立った崖の孤島の為、空路以外は不可能であったが、フライで登って上から梯子を掛ければ船でも十分いけた。

修道院にはヒトガタの肉を残し、火を掛けてしまう。

恐らく、碌に調査もされずに事故で処理される。

此処に居るのは、教会にも国にとっても厄介者が居たのだから、寧ろ隠滅されるだろう。

腐れた貴族社会も、時には役に立つものだ。

修道院長がシスターを。

セシリアが【聖女】を。

そして、ジョゼットが貴族子女を説得して、夜の内に脱出する事になる。

端から見捨てられた修道院だっただけに、割りと上手くいってしまった訳だが、今の貴族社会のザル警備は後で見直した方が良いなとユートは思う。

脱出後、馬車でジョゼットから荷物について聞く。

何故か修道院にマインテンバイクを発見し、一緒に持って帰る事にした。

修道院に、場違いな工芸品として置かれたのだと聞いたユート。

どうやら、車輪から乗り物だとは解ったが乗れる人間が居なかったらしい。

唯一ジョゼットだけが乗れたのだが、何せ小さな孤島なだけに意味が無かった。

馬車の中で、ジョゼットから聞いた話は余りにも間抜けな顛末。

話しの後、トリステインとガリアの国境で検問を悠々と抜けるユート達。

幾ら何でも、袖の下次第で簡単に怪しい馬車を通すなんて、流石に拙いだろうと言わざるを得ない。

「（そういや、シルフィードが誘拐された時も、袖の下で通していたな）」

ユートは呆れながら、今だけは莫迦共に感謝しつつもド・オルニエール領に戻るのだった。

第１０話：心を満たす闇（欲望）とＴＳな少女？（後書き）

・

オリキャラ、セシリア登場です。

ジョゼットは半オリキャラとして登場しました。

くどいようですが、作品間の繋がりに関してはスルーをして下さい。

第１１話：ユートの郷愁（前書き）

物語が余り進まないけど、月日は経っている筈？

第１１話：ユートの郷愁

・

「ハァ……」

ド・オルニエールの屋敷の一室で、ユート・オガタ・ド・オルニエールはアンニュイな雰囲気を醸し出し、溜息を吐いていた。

魔法の訓練、連れて帰った女性達の世話。

忙しさから解放された朝っぱらから、何故かこんな感じで空を眺めている。

そう……

セント・マルガリタ修道院でのミッションを終えて、暫らくの時が経つ。

多少の混乱こそあったが、現在は確りとした統治機構のお陰もあり、既に落ち着きを取り戻していた。

ジョゼット（祐希）もオガタ家で預かり、年齢が一定に達したなら杖契約をして、魔法が使える様になる筈。

それもあって、ジョゼットはオガタ家の養女となる。

また、セシリア達【聖女】は一部がオガタ家のメイドとなり、ユリアナの世話をする事になった。

更に、葡萄畑から葡萄を採ってオルニエールワインを造る者、街で商売を始める者などが居る。

セシリア本人は、娘であるフィアと共に、オガタ家でメイドをしていた。

フィアは貴族子女と一緒に育てられ、本来であるなら母娘として名乗る事は出来なかった筈だったが、修道院を出た事でお互いに名乗れる様になる。

ユートはフィアの存在を聞いた時、予感はしていた。

そして予感は正しかった。

フィアはメイジの力、魔力を持っていたのだ。

珍しくはないが、胸糞の悪くなる様な話し。

セシリアはガリアのとある伯爵家でメイドをしていたが、其処の莫迦息子が仲間と大挙して押し寄せ、輪姦してしまう。

汚らしい液体に塗れ、茫然と倒れていた処へ伯爵が帰って来たが、息子を叱るどころか『自分が最初に手を付ける心算だったのに』と吐き捨て、更に犯した。

疲労と痛みでボロボロの身体を引き摺り、浴場で汚いモノを自分から掻き出し、身体を擦り切れるくらいに洗いながら泣き続ける。

それ以降も、味を占めたのか莫迦息子と伯爵に犯され続け、時には社交界パーティーの裏で賄賂の様な形で貴族の慰みモノにされた。

未だ幼さの残る頃から数年間、そんなただ辛いだけの日々が続く。
数年間は何とか平気だったのだが、とうとう父親が誰とも知れぬ子供がデキる。

結果、奥方にバレてしまいセシリアは、生まれた娘と共にセント・マルガリタ修道院に入れられた。

セシリアがユートの話しに乗ったのは、ユートの性格を分析してフィアの庇護を頼めると判断したから。

フィアは確かに、誰が父親かも判らない子供だった。

それでも、セシリアにとっては最後の家族。

せめてフィアは幸せに……

その為、ユートを利用したとも云えるが、ユートにしてもセシリアに協力して貰うのだから、其処は対価だと考えている。

フィアはユートと同い年、しかも貴族の血が入っているが故に、メイジの力を持っていた。

ユートは杖契約をさせて、フィアに魔法を教えていく事になる。

セシリアという母親が居なければ、ジョゼットと同様に養女にするのも良かったかも知れない。

専ら、教えるのはユリアナとサリュートだったが。

ユートが余りにも優秀で、基本を教えたら後は勝手に覚えてしまい、フラストレーションが溜まっていたらしく、甲斐甲斐しい教師っぷりだとか。

セシリアも苦笑しながら、新しい主人夫妻へと頭を下げた。

貴族子女達は、大体が三歳～六歳程度の年齢だったが真逆、全員を養女にする訳にもいかない。

下手に調べられでもすれば気付かれるからだ、彼女らが焼け落ちた修道院に居た貴族子女だと。

其処で、サリュートは彼女らにはメイド見習いの立場を用意して、メイジとしての修練をさせる事にした。

修道院長を除く、シスター達に養子縁組をさせる事で屋敷に住まわせる。

形としては、住み込みで働くメイド親子という触れ込みで、彼女達を将来的にはユートの部下として活躍をして貰う心算だ。

本来、同じ立場である筈のジョゼットより立場が下になるが、何事も無かった場合でもそれは同様。

ジョゼットは王家の血筋、他の子は最大でも侯爵家。

だから特に問題は無い。

物心も付かない少女が多かった為、特に不満も出る事は無かった。

最初はぎこちないだろう。

それでも年月が経てばある程度、本物の親子にもなれると思われる。

修道院長は新設した修道院の管理を任せた。

ロマリアが煩かった事への対策の一環だ。

多少の寄付と献金で成り立った修道院で、ロマリアの本国に金がいかない様に、理論武装で無理矢理納得をさせた。

『修道院への献金を本国が吸い上げると、修道院は立ち行かなくなる。かといって献金は飽く迄も善意によるモノであり、増やす事を強要するのは始祖の顔に泥を塗る行為である』

そう言われ、生臭坊主共は引き下がるしかなかった。

普段、始祖がどうのこうの言っており、その教えを広めている連中は、ド・オルニエールが教えに反している訳ではない分、何も言えない。

また、聖女の中でも外に出なかった者はそのまま修道院で洗礼を受け、シスターとなった。

これがセント・マルガリタ修道院に於ける顛末。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

全てを終え、気が抜けたのかユートはずっと溜息ばかりを吐いていた。

「お・に・い・さ・ま♪」

「おわっ！？」

行き成り後ろから抱き付かれて、ユートは吃驚して声を上げる。

「ユーキ？」

ジョゼットは現在、オガタ家の長女……【ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエール】と名乗っている。

オガタの名前は直系の跡継ぎであるユートと、妻しか名乗れない。

だから、オガタの名前は名乗っておらず、ジョゼットの名前をミドルネームに残して、前世の名前【祐希】をファーストネームとして名乗る事になった。

前世云々は、ジョゼットとユートの間のみの話しで、サリュート達にはユーキの名前は下手に本名を名乗る訳にはいかないと説明。

何処の血筋かも説明はしてあり、サリュートもユリアナも納得した。

フェイスチェンジは使っているが、顔の作りは以前と違ってユリアナをベースとしてある。

流石に、シャルロットという双子の姉が居る上、髪の毛の色が青で

は誤魔化しが利かないから、フェイスチェンジを使うしかない。
そんなユーキは、義兄となったユートにベッタリだ。
勿論、お互いに性的な意味合いは無い。
「何を黄昏てるのかな？」
「いや、別に……」
「ふ～ん？」
「ただ、ちょっとさ。この数年間は駆け抜けたって感じで、だけど大きなヤマを越えたからか、少し気を抜いたら郷愁の念に駆られちゃったんだよ。女々しいかもだけど、前世の両親とか妹を思い出してね」
「そっか」
ユーキはそう言って、自身の胸にユートの顔を埋めて抱き締める。
「って、ユーキ？」
「君は忙しいくらいが丁度良いのかも知れないね」
暫らくはそうして、離れるとにこやかに笑顔を浮かべて言う。
「早く降りて来なよ、お兄様！」
食堂に向かったのだろう、行ってしまったユーキ。

「ったく、ユーキの奴」

『兄さん！』

「っ！　白亜……」

前世の妹、緒方白亜を思い出し、ユートはずっと仕舞ってあった匣を取り出して見つめる。

白亜の高校入学の祝いに買っておいたペンダント。

「父さん、母さん……」

今の生活に不満は無い。

それでも、突然の死による別れは辛かった。

「父さん、母さん、白亜、ごめん、ごめんなさい」

ポロポロと涙を流し、呟くユートを扉の向こうで窺っていたユーキは、意を決した様に食堂に向かう。

一頻り泣いて、少しは気分も落ち着いたユートが食堂に来ると、待っていたのかサリュート達は未だ食事に手を付けていない。

「遅いぞユート」

「すみません、父上」

頭を下げ、メイドが引いてくれた椅子に座って食事を始める。

オガタ家では基本、始祖ブリミルがどうのこうのと、祈る事はない。

「「「「戴きます」」」」

この挨拶は、オガタ家初代から続く伝統だ。

「ユート」

「はい？」

朝餉も終わり、紅茶を飲みながらサリュートはユートを呼ぶ。

「今日は虚無の曜日だし、珠には2人で出掛けてみないか？」

「へ？」

サリュートの突然の提案を聞き、思わず目が点になってしまうユートだった。

食事から一時間くらいが経って、サリュートは用意した馬車でユートと共に本当に出掛ける。

珍しい事もあるものだと、ユートは思う。

この数年間、一緒に暮らしていたが、母であるユリアナを伴わず出掛ける事なんてついぞ無かった。

少なくとも、仕事絡み以外では。

今回は１００％プライベートなお出掛けだ。

仕事ではないのだし、新しい家族を放ったらかしにしてまで出掛ける意味は何だろうと、考える。

「どうしたユート？　今日は母さんも家でジョゼットの着せ替えを楽しんでいる頃だし、私達は私達で男同士愉しもうではないか」

「着せ替え？」

「うむ、ユートよ。母さんも私もお前に不満がある訳では無いがな、領地の大事な跡継ぎである。だがな、母さんは娘が欲しかったらしくてなぁ」

何処か遠い目をする。

何というか、遣り切った男の哀愁が漂っていた。

「お前が二歳になった頃から毎晩励んだが、どうにもデキなんだよ」

「（父上、未だ五歳の息子にナニを言ってる？）」

突然の猥談に、ジト目になってしまうユート。

「（ってか、毎晩かよ!?　道理で母上の肌が艶々してて、父上がやつれてた訳だな……）」

「いっその事、女物の服をお前に着せようかと言っていたな～」

「……え゛？」

思わずユートは硬直する。

「ち、父上……。今、何と仰いましたか？」

「“お前に”女物の服を着せると言っていたのだよ」

「（は、母上ぇぇぇっ！）」

危うく女装させられる予定だったと知り、ユートは思い切り心の埋で叫んだ。

「そう言えば、温泉作りはどうなっている？」

「あ～、はい。取り敢えず来年には施工が完了するかと思われます」

毎日少しずつ工事をして、半分くらいの進捗状況だと自負していた。

其処までで約半年。

残りを半年とすれば、一年で完成と云う事だ。

今年中の完成は不可能だと考えている。

「来年、温泉が完成したら旅籠を造りたいので、父上の部下をお借りしたいのですが？」

「構わんぞ」

「それと、旅籠は貴族用と平民用で頒けるので、二つ用意します。温泉も数ヵ所に掘って、頒けますから」

ユート自身は平民に隔意を持たないが、貴族……取り分け驕り（プライド）だけは一丁前なトリステイン貴族は、平民と同じ湯には入らないだろう。

「そうした方が善かろう」

サリュートもそれが解っているから、ユートに何も言わない。

「ところでユート、先程から気になっていたんだが、足元の匣は何だ？」

「これですか？　クーラーボックスですよ」

「く～ら～ぼっくす？」

「はい。断熱材を内側に張り巡らせた木の匣の中に、氷を入れて溶け難くした物です。プロトタイプですが今回、ちょっと遠出すると云う事なので持って来ました。中身は水とワイン……それに、缶ジュースです」

ユートが取り出して見せた物は、プルタブの缶に入ったジュース。果実を絞ったジュースに、錬成で炭酸を混入した物をアルミ缶に封入。

プルタブで簡単に開けられる仕様となっている。

まんま、現代の缶ジュースだったりするが、印刷が無い銀色の缶に【炭酸飲料】と書いて、オガタ家の紋章が刻んであった。

鉄だと重いし錆びるので、アルミニウムを錬成してみたのだが、この試みが殊の外上手くいったのだ。

勿論、缶の中は真空状態でジュースが直ぐに悪くなる事もない。

その内、1ドニエで販売を予定している。

空き缶は1スゥで回収する心算だ。

「飲んでみますか？」

サリュートに渡す。

自分もジュースの缶を手にすると、プルタブを開けて炭酸砂糖水を飲んだ。

サリュートに渡したのは、アップルジュース。

「ごくごく、ふぅ……」

飲んでみて、サリュートは驚愕した。

「冷たいな。確りと冷えている様だ」

ずっとクーラーボックスに入れてあったし、保冷だけでなく中身を冷やす効果も抜群だった。

「大きめのクーラーボックスを造れば、魚の輸送にも使えると思うんですよね」

「成る程な。確かに売れそうだ」

勿論、冷えた缶ジュースの販売にはこのクーラーボックスが力を発揮する。

流石に冷蔵庫を造るのは、未だ無理だったがその代用にはなるだろう。

ユートはこうして、試作品を造ってはサリュートに試して貰い、コスト等を考えて売れるかどうかの意見を聞いていた。

大丈夫そうなら、造り方をサリュートに教え、部下のメイジを使って量産して貰う事になる。

売れれば金になるし、今や小遣いは貰っておらずに、技術量としてパテントを取る形で大金を獲ていた。

それは秘薬の分野にも及んでいる。

「新しい秘薬の開発は進んでいるのか？」

ジュースを飲み続けながらも、新しい話題を振る。

「はい。先に造った、ポーションやハイポーションが好評でしたので、解毒薬を造ってみました」

「解毒薬？」

「はい。蛇、百足、蜂、蛙など毒を持つ生物は数多く存在します。人間が毒物を調合する事もありますし。そんな毒を消す為の薬が、解毒薬です」

現代人なら普通に暮らしていれば、案外と毒物と無縁でいられるが、この世界では開発が進んでいない分、毒と無縁ではいられない。

実は可成り重宝する薬だ。

最近になって完成させた、スレイヤーズ魔法の一つの【麗和浄（ディクリアリィ）】の効果を付随させた秘薬で、大概の毒は消える。

尤も、あのエルフが調合した毒には効果が無いと思われるが。

「流石に魔法が関わってくると、残念ながら効果範囲外でしょうけど」

「それでも十分だな」

少なくとも、現在まで出回っている人間の造った毒物や、自然界の毒は粗方を消していた。

即死さえしなければ、治療は可能だと云える。

ユートが開発→サリュートに報告→実験→部下に量産させる→王家に献上と利権の確保→商人組合を使って販売……。

現状の販売までの流れだ。

「今回はクーラーボックスと缶ジュースと解毒薬か。忙しくなるな」

帰ってからの仕事量を考えると、サリュートは嬉しい反面で頭を抱えた。

「無事に売れたらパテントを宜しく、父上」

「判っているよ」

笑っていると……

ガタンッ！

「うわっ！」

「な、何だ？」

突然の急停車で、物凄い振動があった。

ユートもサリュートも振動に揺られ、吃驚してしまって叫ぶ。

「痛タタ～。何があったんだ！？」

「それが、近くの村の娘でしょうか？　飛び出して来ましたので。お怪我は有りませんか？」

「私達は平気だが、その娘は平気なのか？」

「挽いて訳ではありませんので、大した怪我は無いかと思われますが」

どうやら、村娘が飛び出して来たのが急停止の原因だったらしい。

ユートが馬車から降りて、近付いて固まる。

少女は黒い瞳をしており、艶のある黒髪をボブカットにして、村娘っぽい素朴な服を着ていた。

帽子を両腕で胸元に抱えていて、見ればユートと同い年くらいの年齢だ。

そんな少女を見て、硬直したユートが呟く。

「……くあ……？」

ポロリと、ユートの頬を伝う一筋の涙。

少女は真っ青な表情になっており、頭を擦り付けるくらい低心平頭で叫ぶ。

「き、貴族様！　申し訳ございません、どうかお赦し下さい。生命ばかりはお赦しをっ！」

ガタガタと震えて、只々謝り続けていた。

そんな少女に対し、ユートはギュッと抱き締める。

「ヒィッ！？」

混乱したのか、少女はいっそ憐れな程に恐怖して悲鳴を上げた。

だが、ユートは気にも留めずに抱き締めながら名前を呼んだ。

「白亜っ！」

抱き付かれた少女も、見ていたサリュートと御者も、意味が判らずに呆然となっていた。

「ひぃいいっ！？　嫌ぁぁぁぁぁっ！」

抱き締められた少女は必死に逃げようと、ジタバタと藻掻く。

しかし、ユートの力が強くて抜ける事が出来ない。

少女の表情は、真っ青を通り越して最早蒼白になっていた。

貴族。

少女に……否、平民にとっては恐怖の対象。

魔法という脅威にして悪魔の如き力を行使し、力無き平民を虫けらの様に殺す。

故に、平民は貴族に隷属するより他に道は無く、貴族のする事に文句を言う事など出来はしない。

例えば、貴族が伽を命じれば嫌でも従わなければならない。

拒否すれば、逃げ出せば、その累は家族に向かう。

自らを高貴だと謡ながら、高貴とは程遠い行いを平然とする。
それが少女の識る貴族。
少女は思う。
自分はこの貴族様に目を付けられた。
自分の人生は終わったと。
必死な表情で藻掻き、逃げようとしながらも最早、諦めていた。
「こら！」
ガイン！
少女から見た大人の貴族が少年貴族を叩く。
「痛てぇ！　父上、何をするんですか？」
「まったく、何かは知らんがな。お嬢さんが恐怖に引き吊っているぞ！」
「っ！？　あ、ごめん！」
サリュートに言われ、慌てて手を放して離れる。
そんな様子に、少女は目をパチパチと瞬き、窺う様な顔でユートを見つめた。

未だ顔面蒼白だが、少しは落ち着いたらしい。

「済まないな、お嬢さん。息子も悪気は無かったんだろうが、きっとお嬢さんの愛らしさに理性が飛んでしまったのだろう。赦してやってくれないか？」

「あ、いえ……。そんな」

大人の貴族の言葉に、恐縮してしまう。

「って、父上っ！　何ですか、人を変質者みたいに」

「近付いて行き成り女の子に抱き付くのは、変質者ではないのか？」

「うぐっ！」

流石に先程の行為を鑑みると、反論が出来ない。

バツの悪い表情で、ユートは少女の顔を見た。

「（白亜な訳がない。大体にして、顔が似てる訳でもないし。黒髪と黒瞳で、懐かしさから白亜を思い出して血迷った事をしたな）」

冷静に分析するユート。

「（あれ？　ハルケギニアに黒髪黒瞳？　この娘って真逆……）」

ハッとなり、サリュートへ振り返ると訊いてみた。

「父上、この辺は何処ですか？」

「うん？　ラ・ロシェールを越えたアストン伯の領地だな」

「やっぱり！　（タルブ。だとしたなら、シエスタかジェシカか？）」

兎に角、この侭というのも良くない。

ユートは少女に手を差し伸べる。

「突然、抱き付いたりして本当に済まない。さ、立てる？　怪我は無いかな？」

「そ、そんな？　畏れ多いです！　……っ！？」

遠慮して立とうとしたが、顔を顰めてしまう。

「何処か怪我を？　脚を診せて！」

「脚……」

顔を赤く染める少女。

「怪我を診るだけだから、変な想像はしないで！？」

叫びながら、長いスカートに隠れた脚を診る。

勿論、スカートは捲って。

転んだからか、膝から血が流れていた。

「父上、クーラーボックスから水の入った瓶と、綺麗な布を！」

「ん？　父を使うか？」

「立ってる者は親でも使います！」

「やれやれ」

サリュートは、言われた通り水と布を出す。

土と火を得意とする故に、水系統の治療は苦手だ。

だから、サリュートは息子に任せるしかない。

「少し染みるよ」

ユートは瓶の蓋を開けて、少女の膝に掛ける。

「うっ！」

土埃が着いた傷口を、水で洗う流して布で拭く。

そして、治療の為の魔法を少女に掛けた。

口では……

「イル・ウォータル・アース・デル」

と、唱えている。

しかし、頭の中では……

『聖なる癒しの御手よ、母なる大地の息吹よ、願わくば我が前に横たわりしこの者を、その大いなる慈悲にて救い給え……』

スレイヤーズの呪文を詠唱していた。

「治癒（リカバリー）」

水を主体とした治療魔法だが、イメージ的に大地の自浄力が在った為、水・土のラインスペルを使う。

【治療（リカバリー）】

スレイヤーズに於いては、割と一般的な回復魔法。

使い手も数多い。白魔術に分類されるが、実際は精霊魔術である。

被術者の体力を代価とする為、風邪の時に使うと抵抗力を失い、却って悪化する。

見た目の効果は【癒し（ヒーリング）】と変わらないが、触媒である水の秘薬を必要としない魔法だ。

勿論、癒し（ヒーリング）も秘薬無しで使えるが、効果や消耗がやはり違う。

傷はあっという間に消えてしまった。

「もう立てると思うよ」

少女はソッと立ち上がる。

確かに痛くない。

「あ、あの！　ありがとうございます、貴族様。只、お代なんですが……」

「お代？　要らないって。こっちにも非はあるしね」

「え？　でも……」

吃驚した表情になった。

「貴族が恐いと思うのは、まあ判るよ。普通なら一方的に君を罰するだろうし。でもね、僕も父上もそんな心算は無いから安心して」

怖ず怖ずと、少女はユートの表情を見定める。

直ぐには信じられないが、この侭というのも失礼だ。

「わ、判りました……」

少女の立場では、こう言うしかない。

「お嬢さん、タルブを知っているかね？」

「は、はい。私の住んでいる村ですが……」

「それは丁度良かったな。良ければ案内して貰えないかい？」

サリュートの言葉に、否を言える筈もなく……

「わ、判りました」

「あ、僕はユート。あっちは父上のサリュート。君の名前を教えてくれる？」

「は、はい。わ、私は……シエスタと申します」

少女は、そう答えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【タルブ村】

広大な草原、深い森。

その近くに在る村。

葡萄畑が所狭しと並ぶ。

それがタルブ村。

ワインの名産地で、これはオルニエールワインも適わない分野だ。

サリュートは、鬱ぎ込んだユートに草原を観せてやろうと、初めからタルブ村を目指していた。

序でに。飽く迄も序でに、タルブ名産のタルブワインを購入しよう

とも思っているが……。

タルブ村に着くなり、村人が群がって来る。

貴族の家紋を刻む馬車が来れば、村人としては確かに気になるだろう。

最初に出て来たのは大人の貴族。

次に、子供の貴族。

更に、子供の貴族に手を引かれて出て来たのは、村の住民たる少女だった。

全員が驚愕する中で、村長が進み出る。

「これは貴族様。この様な村に何用でしょうか？
それと、我が村の娘が何故ご一緒に？」

サリュートは、事のあらましを村長に告げた。

「成る程、そうでしたか」

村長は納得する。

と言うか、貴族が言う事である以上は納得“するしかない”だろう。

シエスタは、家族と抱き合って無事を喜んでいる。

解ってはいたが、これこそ貴族と平民の隔意と言う事なのだろう。

祖父らしき老人よりも更に年老いた老人が、シエスタに近付く。

「曾祖父ちゃん！」

「おお、シエスタ」

シエスタの祖父より老いていながら、明らかに足腰が確りとしている。

「（曾祖父って。じゃあ、あの人は佐々木武雄さんなのか？）」

原作時、今から12年後の噺で彼は『数年前に亡くなった』とある。

詰まりあと数年の寿命ではあるが、現在は生きていても不思議ではない。

シエスタと佐々木武雄翁。

図らずも、ユートは原作組と邂逅を果たすのだった。

・

第１１話：ユートの郷愁（後書き）

・

前世の郷愁に襲われ、家族に心配を掛けてしまった。

妹に気遣われるダメ兄貴？

今回の噺の為、プロットを二回も破棄しました。

上手く書けていれば良いのだけど……。

外伝噺：ボクがジョゼットになった理由（わけ）（前書き）

.

時間軸的には、次の噺より後になります。

R－15な表現が在るのでご注意下さい。

外伝噺：ボクがジョゼットになった理由（わけ）

・

ユートが魔法を部屋に掛けると、銀髪の少女が科を作りながら宣う。

「お兄様、深夜に部屋に呼び出した上に、扉にロックを掛けてサイレントまで念入りに。ボクはこれから、お兄様に押し倒されて襲われたゃうのかな？」

スパカーンッ！

「あ痛ぁぁぁぁぁっ！」

その瞬間、愛刀？　ハリセン丸が少女のド頭にヒットした。

「お兄様……。乙女の頭になんて事を！」

少女はハリセンに叩かれ、赤くなった部分を擦りながら文句を言う。

「ド喧しい！　五歳の僕と三歳のユーキで、んな艶っぽいイベントが起きる訳がないだろう！？」

「プーッ！　お兄様ってばシエスタを連れ帰って元気になったのは良いけどね、その切っ掛けを作って上げたんだから、もう少しボクを労って欲しいよ」

「ハァ……。それは感謝してるけどな」

ユートは盛大な溜息を吐いて、床に座った。

少年の名前は、ユート・オガタ・ド・オルニエール。

現在は五歳で、ド・オルニエール領の次期領主。

実は【受容世界】と呼ばれる世界から、このハルケギニアに転生した【転生者】でもある。

【受容世界】

それは、とある世界を俯瞰して因果情報を受け取り、容れる世界。

この土地で起きるだろうある出来事を、ユートの世界の人物が受け取って、ソレをメディアで発表する事で、原典を識る一助となった。

ユートの世界に於いては、【ゼロの使い魔】と称される作品として。

そして、ユートの目の前の少女。

名前は、ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエール。

ガリア王国の王子、シャルル・ド・ガリアと夫人の間に生まれた双子の片割れ。

シャルロット・エレーヌ・ド・ガリアの妹だ。

故に、ユーキが身に付けているアクセサリーであり、マジックアイテムを外す事で、青い髪の毛となる。

ジョゼットがド・オルニエールを名乗っているのは、先のセント・マルガリタ修道院襲撃？　事件で貴族の子女や、修道女、聖女達と共に連れ帰り、サリュート・ド・オガタ・ド・オルニエールと、ユ

リアナ・オガタ・アウローラ・ド・オルニエールの養女となったからだ。

ユーキは年齢的に、ユートの義妹と云う事になった。

それでは何故、ジョゼットが名乗るファーストネームがユーキなのか？

理由は二つ。

一つ目は、ジョゼットを名乗り続けてはヴィットーリオやガリアに目を付けられ易くなる。

二つ目は、ジョゼットが実はユートと同じ転生者で、嘗ての名前が【橋本祐希】だったから。

「それで、義妹の純潔を弄ぶのが目的じゃないなら、何の用？　未だ三歳の身には、夜更かしは辛いんだけどな」

「今の内に訊いておきたい事があるんだ」

「訊いておきたい事？」

「この前は有耶無耶になったけど、ユーキが……否、橋本祐希がジョゼットとして転生した詳細をだよ」

ユーキは目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をして再び目を開き、ユートを見据える。

「ま、何れは聞かれるんだろうとは思ってたよ。兄貴は抜けてる様

で、存外と確りしてるしさ」

茶化す気が無くなったのだろう、からかい半分で呼ぶ【お兄様】から【兄貴】に変わっていた。

「話すよ。橋本祐希の人生と、転生の理由を……さ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【橋本祐希】は、【緒方優斗】の様に江戸時代は武家だったとか、そんな背景がある家柄に生まれた訳ではなかった。

両親は不仲で、高校に進学してからは、見たくもない夫婦喧嘩に巻き込まれたくなかったから、学校の近くのアパートを借りてバイトをしながら暮らす。

だからだろうか？　基本的には内向的で、趣味に没頭する時間が多かった。

ライトノベルの世界に逃げ込んで、昔から好きだった発明品造りをする事によって、外界からの情報をシャットアウト。

とはいえ、友人が居なかった訳ではないし、彼女だって居た。

飽く迄も、趣味に没頭している時だけシャットアウトしていたのだ。

幾つかの発明品が当たり、特許を獲られたから金回りも中学三年生になった頃には、随分良くなっていた。

時折、突拍子もない発明品を造る以外は、特に問題もない素行の良い生徒。

それが橋本祐希が周囲から受ける評価だ。

そして発明品に関しては、早い内から彼の閃きや造り出す手腕に目を付けた財団が在った。

高倉財団のトップを務める高倉家当主、高倉　譲。

譲翁は既に６０歳を越え、息子の高倉庄治に当主の座を譲ろうかと考えていた。

高倉庄治には妻、高倉秋奈との間に３人の娘が居る。

高倉結芽（２３）

高倉恵那（２０）

高倉翔子（１６……付き合い出したのは１３）

譲翁は、未だ中学生の頃に孫娘の１人の翔子に、祐希の恋人となる様に命じた。

翔子は所謂、大和撫子に育てられた少女であり、祖父の言葉に逆らう事は無い。

しかも、余りに真っ正直にアプローチをしたのだ。

『私は祖父の命令で、橋本君の頭脳を手に入れる為、貴方とお付き合いをしたいと思います』

呆気に取られた祐希。

それはもう、いっそ清々しいくらいに裏表が無い言い回し。

ただ、譲翁は孫娘を大事にしているのは確からしく、そんな大事な孫娘を使ってまで望まれたと言うなら、それも良いかと考えた。

翔子との交際は、中学二年から高校二年まで続いて、唐突に終わる。

別れたのでは無い。

発明品の事故で、祐希が死んでしまったのだ。

しかも事が事だけに、表沙汰には出来なかった。

バイオリズムを応用して、性交中に相手の受ける感覚を、自分にフィードバックする実験。

切っ掛けは翔子との初体験以後、翔子が至った時の感覚を識りたいという欲求。

発明家だけあり、祐希には知的欲求を抑えられない処があった。

上手くいって、システム化出来れば殴られる痛みを、殴った相手に教えられる様になる。

そうなれば、無駄な争いや暴力主義も減るんじゃないかと考えたの

だ。

シャワーを浴びて、ホカホカと肢体から湯気を立ち上らせ、翔子が困った表情でペタリと座り込んでいる。

相互に感覚を共有する為、これから翔子が行おうとしている事は、祐希の感じた感覚を自分も感じるという事だからた。

確かに、興味が無いと言えば嘘になる。

しかし、実際にするとなるとやはり躊躇う。

「本当にするの？」

「うん。頼むよ翔子。他に頼める相手も居ないし」

「居たらお祖父様に殺されると思う……」

「……かもね」

クスクスと笑い、少しは吹っ切れたのか翔子は祐希の股間へと、顔を近付けた。

第一の実験は成功。

誤算だったのは“味”までフィードバックしてしまった事だろうか。

「ウプ、変な味……」

祐希の絶頂を、していた側の翔子も感じて、同じ様に絶頂していた。

同時に、得も知れない味が祐希の舌に感じられる。

「み、味覚は切れる様にしておくべきだったよ」

「あの、それっていつも私が味わってるんだけど?」

胡乱な目付きで、祐希を睨む翔子。

「アハハ……」

笑って誤魔化すしかない。

「と、取り敢えず次の実験に進んでみようか?」

次……本番という訳だ。

祐希は翔子を抱き抱えて、ベッドに横たわらせる。

自分は翔子の上に覆い被さると所謂、前戯を始めた。

翔子の受ける快楽が、祐希にフィードバックされる。

触れてもいない祐希の部位に、触れられて感じた事の無い感覚が在った。

2人はまるで溶け合う様な感覚を覚えながら、快楽に耽って抱き合う。

祐希が翔子の乳房に触れれば、同じ部位に同じ刺激が奔る。
逆に、翔子が祐希の敏感な部位を擦れば、同じ刺激が奔った。
そんな繰り返しを続けて、遂に核心へ。
そして2人共が高まっていき、同時に果てた。

「ハァ、ハァ、ハァ……。いつもと全然違うよ。一緒に男の子も感じちゃった」

肩で息を吐きながら祐希を見るが、祐希は反応を返してこない。

「……祐希？　疲れて寝ちゃったの？」

祐希を揺するが、起きてくる気配は無かった。

「初めて味わう女の子の絶頂、気絶するくらい良かったのかしら？……え？」

ふとした弾みで触れた祐希の左胸。

「嘘、心臓……動いてないよ？　祐希？」

何度も揺さ振るが、全くの無反応。

「嘘、嘘、嘘っ！　起きて祐希！　ねぇ、目を開けて……ゆうきぃいいいっ！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あれ？　此処は？」

「やるね、色男。腹上死なんて男の野望（ゆめ）なんじゃないかな？」

何故か真っ暗な空間に独りで漂う祐希。

キョロキョロと辺りを見回すと、上の方から声が聞こえてきた。

祐希が見上げると、其処には栗色の長髪をポニーテールに結った、紫水晶を思わせる瞳の女性が、白い服を纏って浮いている。

「高町なのはのコスプレ……？」

余りに似ていた為、呟くと桜色の刃が頬を掠めた。

「……」

「私は高町はるな。なの姉と一緒になんてしないでくれるかな？」

「イエス・マム！　（妹？　そんなの居たっけ？）」

先程のは、はるなの得意技ディバインセイバーだ。

祐希は、脂汗を流しながら答えた。

「さて、橋本祐希君」

「はい？」

「貴方は死にました」

「は？　何故に？」

理解が及ばない。

死ぬ要因が在ったとは思えなかった。

「あのね？　女の子の絶頂ってさ、初めからそれ前提に創られてる女の子の身体と違って、男の子には負担がキツいんだよ。詰まり、祐希君は翔子ちゃんの絶頂を受けて、心臓が麻痺して死んじゃったの」

「マジ？」

「大マジ！」

祐希は膝を突いてしまう。

「僕は、何てアホな理由で死んだんだ！？」

全く同情の余地も無い。

「翔子は？　翔子はどうなったんだ？」

「あの子は生きてるけど、貴方の死で精神的に壊れちゃったかもね？」

「そんな……」

それは二重の絶望だ。

自分は死んで、その所為で恋人が壊れてしまった。

「発明の趣旨は良かったんだけどね、使い方が悪かったんだよ」

はるなの声は、既に死んだ身にすら死刑の宣告に聞こえる。

いっその事、自分も壊れてしまえればとすら思う。

「何とかして欲しい？」

「出来るのかっ！？」

「私はこれでも【異天の星神】という、神名を戴く神だからね。君が私の依頼を受けてくれるんなら、対価として救けて上げるよ」

【異天の星神】

高町はるなが神化した際、与えられた神名。白き騎士と共に、世界間を跳び回っている異界の天（そら）を瞬く星という意味。

「依頼？　依頼って、何なんだ？」

「とある世界群に、なの姉が選んだ人物が邪神を追い出す為に転生したんだよ。貴方は彼を追って、それを手伝ってくれれば良い」

「とある世界群？」

「確か、【ゼロの使い魔】の世界。なの姉には負けられないからね、私も君を送り込むんだよ」

「どうして僕だったんだ？　僕である必然性が解らないんだけど」

「嘗て、君の同位体。詰まり、別の世界の橋本祐希君が同じくハルケギニアへと転生したんだ。それを見込んで祐希君を監視していたんだ」

観ていたなら、止められたんじゃないかと思ったが、それが八つ当たりだと気が付いて言わなかった。

それを呑み込んで訊ねる。

「二次創作よろしく転生って事は、何か特典が付いたりするのか？」

邪神を追い出せと言うなら力が要る。

「私は下級神だから大した力は上げられないけどね、それなりの力は大丈夫」

「……。ゼロの使い魔か。なら、虚無を使いたいな」

「虚無？　私の力だと既存の人物への憑依転生させるしかないよ？」

「へ？　それって、ルイズかティファニアかジョゼフかヴィットーリオになるしか無いって事？」

はるなは頷く。

どの人物を選んでも、先に転生したらしい味方と無関係に原作ブレ

イクしてしまいそうで、それが怖い。

それに下手をしたら、味方の筈が敵視されてしまうかも知れない。

「（そうだ、いっそ全部をリセットしよう。男だった事実も……。それに中盤までは関わらないキャラだったらイケるかな？）」

そう考え、ものは試しに言ってみた。

「ガリアの虚無の予備であるジョゼットに転生して、初めから虚無に目醒めている状態。呪文も覚えている様にして。あと、僕の科学技術を彼方側で造れる様、何かが欲しい！」

「ま、それならやれるよ」

「え？　本当に？」

ダメ元で訊いたのだが。

「（性別が女の子なら、憧れのあの人の傍に居られるよね）」

祐希は【ゼロの使い魔】だけではなく、色々なライトノベルを読んでいる。

だから知識も豊富だ。

「それじゃ、送るよ？」

「は、はい。翔子の事を、お願いします」

「うん。解ってるよ」

「（さよなら、翔子……。そして、ゴメンな？　勝手に死んじゃってさ）」

パカッ！

「へ？」

「お約束……だよ」

「ウワァァァァァァァァァァァッ！？」

ニンマリと、魔王な笑みを浮かべるはるなの顔を最後に、橋本祐希はジョゼットへと転生するのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……と、言う訳だよ」

「訊いた僕が莫迦だった」

ユートは頭を抱える。

真逆、そんなマヌケな死因だったとは。

しかも、恋人が居たなんて思いもよらなかった。

何か、ヤリまくってるし。

「（俺、彼女すら居なかったのになぁ……）」

嘆息するユート。

「もう寝るわ」

ユートはベッドに入った。

「う～ん。一応、真面目な話だったんだけどな。ふわあ～あ！　眠い……」

三歳の身には本当に夜更かしが辛い。

ユーキも寝るべく、ベッドへと入る。

自分の部屋には帰らずに、ユートのベッドへ。

翌朝、起こしに来てくれたシエスタに見られ、ユートはアタフタする事になるのだった。

・

外伝噺：ボクがジョゼットになった理由（わけ）（後書き）

.

これが橋本祐希君が、ジョゼットに転生した理由。

可成りアホな理由にしてしまいました。

第１２話：一石三鳥でＧＥＴだぜ！（前書き）

タイトルが少々、アレだけど完成です。

第１２話：一石三鳥でＧＥＴだぜ！

・

「珍しいのぅ、貴族様が村に来るんは……」

成る程、佐々木武雄翁は元とはいえゼロ戦を駆って、飛び回った軍人。

シエスタの祖父よりずっと歳が上にも拘らず、ガッシリとしている。

実際、あと数年の生命だとは思えない。

だが、悲しいかな。

生物の寿命とは必ず訪れるものであり、先に生まれた者が先に逝くのは突発的な事故や、病気などでもない限り運命（さだめ）だろう。

「初めまして。シエスタの曾お祖父さんですか？」

「ほう、随分と丁寧な貴族様よな。初めまして、私がシエスタの曾祖父の佐々木武雄です。あ、いや。此方風ならタケオ・ササキとなりますか」

「ご丁寧にどうも。ユート・オガタ・ド・オルニエールと云います」

「ん？　オガタ？」

まるで“日本人”の様な名前に、佐々木武雄翁は首を傾げた。

そんな武雄翁に、ユートは更に話し掛ける。

『是非とも2人で話をしたいのですが、宜しいでしょうか？　武雄翁』

「っ！？」

日本語で言われ、驚愕に目を見開く。

この六十年近く（未だ六十年は経っていない）、永らく人から純粋な日本語を聞く事は無かった。

武雄の言葉は日本語だが、何故か勝手にハルケギニアの言語に変換され、誰かが話すハルケギニアの言語は日本語に変換されている。

それが、口の動きに合わせた日本語は初めてだ。

周囲も、ユートが何を話したのか理解出来ていない事から、それが純粋に日本語だったのは間違いない。

ハルケギニアの人間が直接使った日本語故に、翻訳されずに伝わった。

鏡の様な召喚ゲートを抜けると、召喚された人間の言語は自動的にハルケギニアの言語となり、聞く言葉は日本語になる。

詰まり、彼方は普通にハルケギニアの言語を喋っているに過ぎない。

ところが、貴族の少年が発したのは日本語。

ゲートを潜った訳ではない為、翻訳はされない。

「貴族様、アンタは日本語が解るのか？」

『ええ。判りますよ』

「判りました。では後で、羽衣の場所へ来て下さい。場所はシエスタが判りますから」

そう言って、家に引っ込んでしまう。

「曾お祖父ちゃん？」

シエスタは首を傾げた。

どうやら曾祖父は、貴族様を“あそこ”へと案内しろと言っていたが、どういう事なのかが判らない。

それに突然、意味の判らない言葉で話し始めた貴族様の言語を理解していた。

シエスタには本当に判らない事ばかりだ。

「それで、貴族様。今日はタルブにどのようなご用でしょうか？シエスタの件だけでしたか？」

村長がサリュートに訊ねると、思い出したと言わんばかりに頼む。

「タルブのワインを購入したいのだが、売っては貰えないか？」

サリュートの注文に、村長は笑顔になった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【佐々木家】

シエスタの家では、貴族を歓待する為の宴が催されていた。

サリュートとユートのたっての願いで、タルブの名物料理を食べたいと言われ、本家本元の佐々木家で食べる事になったのだ。

「あの、これがタルブ名物のヨシェナベです。しかし本当にこんなモノで宜しかったのでしょうか？」

シエスタの父親が、恐縮しながら訊いてくる。

「勿論ですよ。ふむ、良い匂いだ」

「あの、これが取り皿になります」

シエスタがサリュート達に取り皿を渡す。

ヨシェナベは鍋料理。

その為、大鍋に具材を炒れて煮込んだモノを、思い思いに箸で取る。

皆に行き渡ると、申し合わせたかの様に唱和した。

『『『全ての食材に感謝を籠めて、戴きます！』』』

って、それは某・美食屋の挨拶だ！？

ってか、何故識っている？

それは兎も角、野菜や肉を煮込んだヨシェナベは美味しく、サリュートもユートも舌鼓を打った。

サリュートに至っては、名産のタルブワインを飲んで上機嫌だ。

「うん、旨い！　ウチのも悪くはないが、タルブワインはまた格別だな！」

「父上、余り飲み過ぎないで下さいよ？」

「判っている！」

どう見ても自重していない飲みっぷりに、ユートは溜息を吐く。

「ユート様、どうぞお代わりです」

「ありがとう、シエスタ」

具を装って貰い、どんどん食べる。

シエスタの笑顔と、美味しい鍋料理。

ユートも愉しくて、いつの間にか郷愁や寂寥感は無くなりつつあった。

その所為か、心にも余裕が出てきて少し冷静に物事を考えられる様になる。

そんな頭で改めてシエスタを見ると、黒髪のボブカットに黒曜石みたいな瞳。

貴族の女性が大輪の薔薇や百合なら、シエスタは野に咲く一輪の雛菊。

しかし、それはそれで鄙びる可憐さで魅了されるものがある。

「（シエスタ、可愛いな）」

あーぱー姫。

ルイズ。

カトレア。

エレオノール。

ジョゼット。

フィア。

イザベラ。

これまでに出逢った誰とも違う魅力、きっと多少踏み付けられても逞しく咲いていられる強さ。

「（欲しいな……）」

ユートがそんな風に思ったとしても、それは当然の流れだったのかも知れない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【その頃のド・オルニエール領の邸】

「お義母様、そろそろ勘弁して下さい」

「まだよ、ユートが男の子だったから出来なかった事を存分にやりますからね」

「まだドレスを着せるのですかぁ？」

義母（ユリアナ）の手には、臙脂（赤紫）色のドレスが握られている。

子供用のドレス。

一体、どれだけ買っていたのか……

「さ、ジョゼット。脱ぎ脱ぎしましょうね？」

「だ～れ～か～、た～す～け～て～！」

ユーキは延々と、ユリアナに着せ替え人形をやらされていたという。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

夜も深まり、しかし未だに宴も酣であった。

そんな中、ユートは羽衣の場所へと案内される。

「こちらです、ユート様」

「ありがとう、シエスタ」

最初は貴族様だったのが、今は名前で呼んでくれているシエスタ。

目標は、原作での才人と同じ【さん】付けだ。

暗がりを掻き分けながら、先導するシエスタを見つめてそう思った。

「武雄翁、来ましたよ」

「来られましたか」

まるで神社の鳥居の様な造りの門構えを抜け、着いた其処には間違いなくアレが存在している。

原作ではカヌーに翼みたいな物を付けただけ、こんなインチキが飛ぶ訳がないといわれた【竜の羽衣】。

その実体は、日中戦争から太平洋戦争後期まで使われた戦闘機。

「貴族様には、これが何か判りますかな？」

「零式艦上戦闘機。通称はゼロ戦。１９４０年（昭和１５年）、皇紀２６００年に制式採用された機体。故に皇紀の下二桁から零式と言われている」

挑発的な態度で質問され、ユートは【竜の羽衣】について識る事を答える。

それを聞き、佐々木武雄翁は驚愕の表情となった。

「この世界（ハルケギニア）の人間が、どうして零戦の事を……？」

況してや、皇紀は基本的に日本でしか通用しないし、雷電などでは廃止されているが、当時は皇紀の下二桁を使って形式番号としていた事実も識っているなど、日本の歴史に詳しくなければ判る筈もない。

『翻訳されない日本語を話している時点で、僕は純粋なハルケギニア生まれの、トリステイン人貴族です。だけどね、日本の事も僕はよく識っているんだ』

「っ！　日本語……」

武雄翁の日本語は、ハルケギニアの人間には現地後にしか聞こえないから、口の動きと聞こえる台詞が合っていない。

その逆もまた然り。

ハルケギニアの人間が話すハルケギニアの標準語は、武雄翁の耳に入る際に日本語に翻訳される。

だから、ユートの口の動きと武雄翁の聞こえる台詞は普通、合っていない。

だが、先程の台詞は明らかに口の動きと聞こえる台詞が同期していた。

詰まり、ユートが先程使った言語は日本語だったと云う事だ。

「何故、貴方が日本語を使えるのですか？」

警戒心を顕に、武雄翁が訊ねる。

『僕は確かにこの世界で生まれた人間ですが、その前……前世が日本人だったからですよ。日本帝国　海軍少尉、佐々木武雄さん』

「私の身分までっ！？」

『此方はまた、別のソースですけどね』

因みに、シエスタも同席していたが、よく理解が出来ない言葉でユートが喋り、曾祖父が吃驚しているというシュールな光景を目の当たりにし、呆然とその様子を眺めていた。

そんな彼女に気が付いて、武雄翁はシエスタに言う。

「シエスタ、儂はこの方と大事な話がある。戻って宴に参加して来なさい」

「あ、はい。曾お祖父ちゃん」

シエスタは武雄翁の言葉に素直に答えると、一礼して家に戻って行く。

「これで宜しいですな？」

「翁のご配慮、痛み入ります」

ユートは、今だけは貴族である事を忘れ、日本人として年長者たる佐々木武雄翁に礼を尽くす。

「して、前世とは？」

「僕が僕になる前……俺は緒方優斗と名乗っていました。だけど、二十歳の時に車に挽かれそうな少女を救けようとして、自分が挽かれて死んでしまったんですよ。しかも結局、救けられなかったし」

「むう？　何と……」

「その後、あの世に逝く筈だと思ったけど、平行世界からの因果が繋がり、前世の記憶を保持した侭で転生する事になったと、女神（魔王）様に言われました」

「む？　因果？　平行世界ですと？」

太平洋戦争時代の人間である佐々木武雄翁に、因果律や平行世界は少し難しかったらしい。

「まあ、結果だけ見たなら死んだ俺が、今の僕に生まれ変わったと云う事です」

「な、成る程……」

「ですから、本当の意味で日本人に逢うのは、主観時間で五年振りです。実際、シエスタの黒髪と瞳を見たら懐かしくて、つい涙腺が弛んでしまいましたよ」

シエスタは日本人としては四分の一くらいしか血を継いでないが、先祖帰りとか隔世遺伝とかで、日本人にしか見えない。

顔の作り、瞳や髪の色が。

「それは、前世の記憶か在るならさぞや寂しい思いをしたのでは？」

「この五年、そんな事を考える余裕が無かったから、寂しいとは感じませんでしたが、少し落ち着いたからでしょうね。今更郷愁に襲われて、落ち込んでしまったんですよ。それでタルブの景観でも観せようと思ったのか、父上に此処へ連れられて来たんです」

「そうですか、善きお父上ですな」

「はい」

それに、ユーキもだ。

恐らく、サリュートに此処に連れて行く様に進言したのはユーキ。

原作知識が在る以上、郷愁に喘ぐユートを落ち着かせるのに、日本

人に触れるのが妙薬になると考えての事だろうと、ユートは考えていた。

「此処に来たのは偶然だったけど、折角来たのだから佐々木武雄翁にお願いがあります」

「お願い……ですか？」

「はい。このゼロ戦を僕に譲って戴けませんか？」

「む、うう？」

余りに突拍子もない事を、平然と言うユートに武雄翁は言葉を詰まらせた。

「貴方がハルケギニアに流れ着いて、もう６０年近く経ちます。ゼロ戦をお返しするべき陛下は既に亡く、彼方は年号も変わってしまって約２０年。最早空を往くは、ゼロ戦など及びも付かない技術の飛行機です。ならこのゼロ戦を、停滞した湖の如きハルケギニアに一石を投じる一助として、僕に譲って欲しい！」

頭を下げ、佐々木武雄翁に希う（こいねが）ユート。

ユートが望むのは力。

この似非中世のハルケギニアでは成る程、確かに力と成り得るだろう。

原作で才人が使った様に。

武雄翁は考える。

自分にはもう先が無い。

既に８０歳に届く自分が、日本に帰って陛下に零戦をお返しする事は不可能だ。

それに、確かにユートの言う通りで、当時の陛下は亡くなっていてもおかしくはない。

目を閉じ、黙考して暫らく考え続ける。

どれくらい経ったか、目を開くとユートを真っ正面から見据え、口を開く。

「条件があります」

「条件？」

「何時の日にか、万が一にも地球へ行ける時が来たなら、儂に変わり陛下に零戦をお返しして欲しい」

「僕は召喚で来た訳では無いですし、不可能かも知れませんよ？それに、場合によっては壊れるかも」

別にユートはこのゼロ戦を使う心算は無い。

複製して、そちらを使えば良いのだから。

幸いにもその宛が、最近になって出来た。

ユーキの能力と知識だ。

元が発明家のユーキなら、ある程度の知識はある筈だろうし、ユーキが神から貰った能力は、ある意味破格のモノ。

系統魔法の使い手と組み、科学技術を此方でも製作、量産が利く。

故に、ゼロ戦をコピーする事が可能となった。

それに、これまたユーキに頼む事になるが、虚無魔法の世界扉で彼方へのゲートを開いて貰えば、武雄翁の要望は満たせる。

「構いません。儂もあと、１０年は生きられんでしょうし……な」

ただ、万が一でも希望が欲しかった。

それだけの事。

「判りました。その条件を飲みます」

いい意味で誤算だったのはユートに、条件を満たせる環境が有ると云う事だ。

「（それにしても、１０年は生きられないか。原作の数年前に亡くなったなら、確かにそうだよな。いや、待てよ？　うん、イケるんじゃないかな？）」

自分の考えを纏め、ユートは武雄翁に話してみた。

「武雄さん、もしも宜しければウチの領地で働いて貰えませんか！」

「？　しかし、儂ももう歳が歳です。満足に働けませんぞ？　連れ合いも疾うに亡くして、暇と言えば暇なのですが……」

働き者だったとはいえど、彼は召喚されたのが二十歳だったとしても、八十歳に近い老体。

既に、仕事関係を引退して久しいのだろう。

「それ程、力を使う仕事ではありませんよ。少し葡萄畑を拡げる予定が出来たので、素人の人にノウハウを伝えて欲しいんですよ」

「成る程、それなら儂にも出来ますな」

「あと、ゼロ戦の操縦を僕に教えて貰いたいんです」

「はぁ、教えるのは構いませんが、今の零戦は飛べませんぞ？」

「ガソリンなら僕が造りますから、再びゼロ戦を飛ばす事も可能です」

「ほう……」

武雄翁の目が輝く。

やはり、彼も老いたとはいえ空の人なのだ。

某・白い魔王（神）様が飛び続ける事に拘った様に、彼も飛びたかったのだろう。

これで、元聖女の女性数人に葡萄畑を耕す為の知識を伝授して貰い、手に入れたゼロ戦を飛ばす知識と技術を獲られる。

それに、此方は少しアレではあるが、温泉療法で多少の延命が出来るかも知れないのだ。

温泉に延命効果は無いが、健康保持は可能。

環境的に、平民の寿命が短い可能性もあるから、温泉で延命出来るかもだ。

それに、オルニエール領に来て貰えれば、食事療法が出来る。

平民は食べ物を選ぶ範囲が極端に狭い。

ギリギリまで税を搾られ、生活の余裕が余り無いのが理由なだけに、少々申し訳が無気がする。

別にユートの所為では無いし、徴税官に何かを言える立場でも無いから、責任は無いのだが……。

オルニエールは所得税制度を実施して、所得によって税額が変わるし、それ程の税率でもない為、平民達の購買力も上がっている。

結果的に税収も上がるから今のオルニエールは、嘗ては一万二千エキューだった税収が、サリュートが領主となってから３０年経ち、数倍に膨れ上がった。

流石は無意識の知識持ち。

お陰で、ユートは領地経営だけに意識を割かず、存分にやりたい事をやれる。

「あ、そうそう。オルニエールでは現在、温泉を作ってますから完成したら入れますよ」

「ほう？　温泉ですか！」

完全に堕ちた。

「（さ～って、次だな）」

話し合いも終わり、２人は家に戻る。

そして、シエスタの父親に話しを通した。

「祖父とあの竜の羽衣をですか？」

「はい。竜の羽衣は後日、搬送の手配をしますので。それと……竜の羽衣は一応武雄翁の私物ですが、購入という形で引き取ります。千エキューを、これも後日にお支払いしましょう。武雄翁の給料ですが、月額六十エキューとなります」

「六十！？」

シエスタの父親が驚く。

平民の年収は平均、１２０エキューだと云う。

詰まり、税金を抜いて月額１０エキューも入れば良い方だ。

それを考えれば破格。

「それから年に二回の賞与が与えられます」

所謂、ボーナスの事だ。

他にも細かい条件を提示、武雄翁はこれ以上無い待遇で迎えられた。

「それからですね」

此処からが本番だ。

高鳴る心臓を抑えながら、シエスタの方を向く。

「彼女を、シエスタをウチに欲しいのですが……」

「は？　それは、あの……どういう？」

「現在、僕の世話をしてくれているアニーが退職する事になって、専属のメイドを捜しています。とはいえ年齢が離れていると、また直ぐに寿退職になってしまうので、歳の近い娘を雇いたかったのですよ」

これは本当だ。

サリュートも既に承知している話し。

尤も、未だ決まっていなかったりするが。

最近、大量に入ってきた娘の中から選ぶ心算だったのだが、シエスタを見て彼女がほしくなった。

その為の交渉で、その為に武雄翁を雇い入れたのだ。

「仕事は僕の専属メイド。それから、武雄翁のお世話も仕事の一つです」

正に、一石三鳥。

しかし、簡単にはいかないだろう。

子供とはいえ、貴族の専属メイド。

歳を経れば、お手付きとなり妾とされる可能性があるのだから。

当然だが渋る。

貴族の要請には逆らえないが、それでも心情的に賛成出来ない。

「それは、将来的にお手が付く事も視野に？」

「っ！　はい……」

わざわざ指名したのだ。

誤魔化すのは愚策。

誠意を以て当たるのみ。

シエスタが平民である以上は、身分的に正妻や側室には出来ない。
それで無理を通して、敵対勢力に隙を見せれば却って不幸にする。
だからこその措置だ。

「シエスタを不幸にしたい訳では無いので、幾つかの条件を出します」

ユートは条件を言う。

もしも、シエスタに好きな相手が出来れば祝福する。
１６歳を越えるまでは絶対に手を出さない。
他の貴族にも、手出しはさせない。
仮令、１６歳になったとしてもシエスタの意思を尊重する。
後は、給料や休み等の条件を整えた。

「さて、シエスタ」

「は、はひっ！」

シエスタは真っ赤になり、返事で噛んだ。

「こういう仕儀になった訳だけど、僕の所に来て貰えるかい？」

「はう……。は、はい」

最終的には、行く行かないをシエスタ本人の意思に委ねた。

シエスタの両親、祖父母、姉弟も此処までの譲歩をされては納得するしかない。

サリュートとユートの人柄から、信頼出来る数少ない貴族だと判断したという事もある。

それに、数年は一緒に行く武雄翁が居る訳だし。

こうして、ユートはゼロ戦を回収、武雄翁とシエスタの雇用に成功した。

.

第１２話：一石三鳥でＧＥＴだぜ！（後書き）

・

タルブ篇が終了です。

先の番外編はこの噺の後に当たります。

第１３話：水の聖痕（前書き）

・

今回はテンプレ、水の精霊に名前を付けるイベントが勃発します。

第１３話：水の聖痕

・

メイドの朝は早い。

取り分け、専属するご主人様が居るメイドは寝坊を赦されない。

「ご主人様、朝です。起きて下さい」

ユッサ、ユッサと揺さ振られているユート。

起こしに来たのは何時ものアニーではない。

アニーなら『若様』と呼ぶだろう。

ユートを『ご主人様』と呼ぶのは、現状でたった1人だけしか居ない。

最近になってオルニエール家で雇われたシエスタ。

彼女だけだった。

シエスタは、ユートと同じ五歳とは思えない程の確りとした娘で、朝の早い仕事をきっちりと熟す為、先任のアニーが早くもユートを起こす役を譲ったのだ。

もうすぐ辞めるので、後継者となるシエスタを育てておかなければならない。

シエスタは嬉々として役目を受け継いだ。

今日はその初日と云う事もあり、シエスタも張り切って起こしに来た。

シエスタの格好は、トリステイン魔法学院のメイド服を小さくしたものだ。

昨日、出来上がったばかりの新品で、ユート自身が自ら仕立て屋に注文した。

やっぱりシエスタはコレだろう……とは、ユートの弁だ。

中々にしぶといユートに、業を煮やしたシエスタ。

「ご主人様、いい加減に起きて下さいっ！」

ピキリ……ッ！

一気に布団を剥ぎ取る荒技を仕掛け、硬直する。

ユートの隣に、ユートより小柄な銀髪の少女が眠りながらしがみ付いていた。

「な、何をしてるんですかぁぁっ！　ユーキ様っ！」

シエスタは顔を真っ赤に染めると、大きな声で怒鳴り付ける。

「うんあ？　ああ、朝か」

当の本人は、何食わぬ顔で目元を擦りながら欠伸をして起き上がった。

「お早う、シエスタ」

「お早うございます。で、何故ユーキ様が、ご主人様と同じベッドで寝てるんですか？」

「何だよ、妹がお兄様とのスキンシップで、一緒に寝てただけだろ？　カリカリするなよ。何なら、明日からシエスタが添い寝をしてみるか？」

からかう様な口調で言ってみるユーキ。

「なっ！？」

シエスタの頬が、これ以上は無いくらい紅くなった。

「～～～っ！　ば、莫迦な事を言ってないで早く出て下さい！　大体、妹は妹でも義妹、血は繋がってないじゃありませんか！」

「気にするな。尚、ボクは気にしない」

「気にして下さい！」

シエスタの抗議にも笑いながら応え、さっさと自分の部屋へと戻る。

着替える為だ。

「ハァ……」

シエスタは溜息を吐くと、再びユートを起こしに掛かった。

今度はすんなり起きる。

「お早う、シエスタ」

「お早うございます、ご主人様」

シエスタは笑顔と共に一礼するが、若干顔が赤い。

何気に先程の話が尾を引いているらしい。

何故か、ユートも少し紅潮している。

「あ、あのさ……」

「はい？」

「添い寝、してくれるのかな？」

ボンッ！

ユートが言った途端、まるで瞬間湯沸器の如く湯気を上げて、真っ赤になった。

「ご、ご、ご、ご主人様？　さっきのユーキ様とのお話し、訊いて！？」

「そりゃ、あれだけ大声で叫ばれたら起きるよ」

「はわ、あわわわ……」

余りの慌てっぷりが可愛いかったが、いい加減にしないと朝餉に遅れる。

「シエスタ、そろそろ着替えるよ」

「え？　あ、はい！」

ユートの言葉で熱が覚めたらしく、専属メイドとして仕事を始めた。

その内容はズバリ、お着替えだ。

原作に於いて、ルイズが言っていたアレだ。

『平民のあんたは知らないだろうけど、貴族は下僕が居る時は自分で服なんて着ないのよ』

まあ、実際の処は多少違うのだが……。

本来は仕事の分譲で、自分で出来る事も他人に任せて時間を空け、その分を別の何かに充てる。

ハルケギニアみたいな封建社会では、これは至極普通の考え方だ。

尤も、ハルケギニアの様な貴族が驕りを以て体現した世界では、間違った方向性に逝くきらいも在るが。

ユートは寝間着を脱ぐと、替えのパンツを履く。

その後、シエスタがズボンと上着を着せてくれる。

原作を読んだ時は、正直に言ってどうかと思ったが、中々に良かった。

何が良いって、着替える際に身体のあちこちを触れられて、微妙にこそばゆい。

相手が男だとそうでも無いのだが、それが異性だと思うと擽ったくて心地好い。

「（けど、流石にもう少し大きくなったらやめておいた方がいいな）」

ユートはそう思う。

何故なら、あと数年後には精通する。

そうなればシエスタに触れられて、勃たない自信が全く無かった。

今だから出来る事だと割り切っているからこそ、現在はやって貰っているのだ。

着替えが終わると、食堂へ移動する。

「それじゃあ、シエスタも武雄翁を連れて食事に行って来なよ」

「はい、それでは一時失礼致します」

これが日常。

ユートとしては、親密度を上げてもう少しざっくばらんに遣りたい処だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

【食後】

朝餉を済ませ、今日の予定を報告し合う。

一種の朝礼みたいなもの。

ユートが幼いながら仕事を始めた為、息子の動向を把握すると同時に、自分や妻のしている事を教える意味もあった。

とはいえ、大抵は同じ事を繰り返している訳だが。

「お兄様、ラグドリアン湖に行ってみませんか？」

「は？　ジョゼット、何を行き成り突拍子も無い事を言ってるんだよ？」

因みに、両親の前では普通にジョゼットと呼ぶ。

「お兄様は温泉を造っているのでしょう？」

「そうだけど……」

「なら、ラグドリアン湖の水の精霊のご加護を授かれば、普通よりも健康に良い温泉になりますよ。だって彼の精霊の一部、精霊の涙は水の秘薬の材料になるのでしょう？」

ジョゼット……ユーキの言う事は間違いではない。

確かに水の精霊の祝福を、少しでも獲られれば温泉の成分も一層の効果が獲られる筈だ。

協力をして貰えればの話しではあるが、ダメ元で交渉するのも悪くはない。

「しかし、それなら交渉役をしているモンモランシ伯爵家に頼まねば、出て来てはくれまい？」

サリュートが言う。

ユーキは何食わぬ顔だ。

「お父様。多分、大丈夫ですよ。駄目ならモンモランシ家を頼りますから、手紙を書いて欲しいですけど、取り敢えずは行って試してみましょう」

結局は、ユートとユーキの2人がシエスタを伴って、ラグドリアン湖へと向かう事になった。

ラグドリアン湖に向かったのは、サリュートを含んだ少数だけ。

ユリアナは今回も留守番でご立腹だったが、何とか宥め透かして納得して貰う。

「此処がラグドリアン湖なんだぁ」

ユーキがとても眩しそうな表情で、ラグドリアン湖の湖面を観ていた。

それは現代日本では、中々あり得ない美しい景観で、ユーキはあの牢獄から早めに解放してくれたユートに感謝をする。

あの侭、自分の計画を貫けば出れたかも知れないが、あと12年は代わり映えしない修道院に軟禁され続けていたのだから。

あちらにはあちらで考えが有っての事、結果的でしかないのは理解している。

それでも恩を感じていた。

ユーキがからかい半分とはいえ、ユートを“お兄様”と呼んで色々と手伝っているのも、偏(ひとえ)にその感謝故なのだ。

「シエスタも早くおいで。綺麗な景色だよ～！」

「は、はい。ユーキ様」

シエスタは、手早く荷物を降ろそうと急ぐ。

「良いよ、荷物は僕が降ろしておくから、ユーキの方の相手をしてくれる？」

「え？　その、宜しいのでしょうか？」

「ユーキの相手も仕事だからね」

「は、はい！」

深く一礼をして、シエスタは湖の方へと向かう。

ユートはそんな姿を、何か目映そうに見つめていた。

「ユート様、お手伝い致しましょう」

シエスタの曾祖父、武雄翁が言う。

「武雄さんの歳で、こんな荷物を？　流石に危ないのでは……」

「甘いですな。老いたりとはいえ元軍人。そこら辺のモヤシより力はあります」

そう言って笑いながら荷物を持ち上げ、簡単に降ろしてしまう。

「（本当に数年の寿命なんだろうか？　パワフル過ぎだろう、爺さん！）」

ユートはそんな様子を見て引き吊った。

それから夕飯の準備をし、日が落ちた頃にはみんなで夕餉と洒落こんだ。

普段は流石に、食堂を貴族と使用人で頒けてあるが、わざわざ少人数で来たのにそれは無粋の極み。

「はい、ヨシェナベが出来ましたよ～」

「これこれ♪」

「父上、すっかりお気に入りですね？　ヨシェナベ」

美味しそうにヨシェナベを頬張るサリュートを見て、ユートは大粒の汗を流しながら苦笑する。

「お上品で量が過多な貴族の食事より、このしょうゆやみそを使ったヨシェナベは良いな」

「ありがとうございます。サリュート様」

故郷の郷土料理を誉められたシエスタが、嬉しそうに微笑んだ。

サリュートは、タルブ村でヨシェナベを食べて以来、味付けを甚く気に入っていたらしい。

実は、とある理由から舌の味蕾が日本人に窮めて近いサリュート。故に、この味噌（に近い）味や醤油（に近い）味が、彼は好きだった。

大豆が無い中、大豆に近い植物を見付けた武雄翁は、うろ覚えな醤油や味噌を作り上げ、寄せ鍋を完成させてしまったのだ。

尤も、呼び難かったのだろうか？　何故か訛った呼び名が定着していたが。

一頻り、ラグドリアン湖で愉しんだ面々。

そして、日が完全に暮れて月と星が辺りを照らす夜となり、虫さえも眠りに就く深夜……

ユートは1人だけで湖畔を歩いていた。

この事は初めからの予定として、サリュートを始めとした全員が知っている事。

この時間に、ラグドリアン湖の水精霊と接触する心算でいた。

ユートは服を脱ぎ、裸になると足を湖に入れる。

チャプン……

静かな水の音が辺りに響いて、ユートの足を濡らす。

そんな様子を近くの茂みから覗く双眸が二つ。

ユーキとシエスタだ。

「どう？　お兄様の裸は」

「ど、ドキドキします」

ユーキに誘われ、シエスタはこんな所まで来てしまったが、よもや覗きの片棒を担がされるとは流石に思わなかった。

「（ユート様、綺麗……）」

貴族であるが故か、月明かりに照らされたユートは、何処か幻想的に見えた。

だが、今のシエスタは寧ろ煩悩と妄想というフィルターを通して視ている。

主に、ユートの股間を凝視していた。

それはもう、真っ赤に頬を染めて……。

そんな興味本位の視線には気付かず、ユートは意識を集中させる。

ラグドリアン湖を住処としている水の精霊は、不変と誓約を司る。

不変であるが為、変遷する人間に興味を持って交渉に応じているのだろう。

「（水の精霊よ、僕の呼び掛けに応えてくれ）」

目を閉じ、意識を深く深く集中をいや増し、心の内にて訴え掛けた。

それはきっと、魔法を使う時に似た精神状態。

ユートは刻と共に次第と、一種のトランス状態へと陥っていく。

「（世界の四天を統べる四つの精霊、その内の一つたる水の精霊よ！）」

世界の四天、即ち四大属性（系統）の事であり、それを統べる四つの精霊は【土】【水】【風】【火】の事。

ハルケギニアに於ける基本の精霊。

このラグドリアン湖には水の精霊が存在し、意思を持って悠久の刻を在り続けてきた。

ならば、こうして精神力を放射して、自分の意思を流していれば気が付く筈。

接触の意思に。

茂みの向こうでハラハラしているシエスタと裏腹に、ユーキは至極冷静に事の成り行きを見守っていた。

ユーキは数多在る二次小説を読み、主人公が精霊に接触する噺を識っている。

自分もだが、前世の記憶を持っているのは本来は自然な状態ではない。

故に、前世の記憶を持っている者に彼らは、興味を惹かれてきたと推測する。

彼ら風に言えば、数えるのも愚かしい程、双月が交差するくらいの永きに渡って在り続けたのだ。

変わった魂の持ち手に興味を持つのも、別に不思議でも何でもあるまい。

精霊が他の生物とメンタルが違うとしても、意思が在るなら代わり映えしない日々に飽く事もあるだろう。

人間との契約にしてもその一環だと考えれば、ユートが精霊の興味を惹く可能性は大きい。

ユートは更に指先を歯で噛み切ると、湖面へと垂らしてみる。

流れる体液は、精霊にとって判り易い目印だ。

水に入って雄に一時間。

コポリと水が沸き立つと、不定形ではあるが人の形を採り始めた。

『大いなる加護を受けし単なる者、汝か？　先程より我に語り掛けていたのは』

そうそれは、紛う事無き水の精霊の意思だった。

「貴方が水の精霊……？」

「如何にも、我がこの湖を住処とする精霊だ。して、何用なのか？」

不定形なスライムが無理に人型を採ろうとしているかの如く、姿形が安定していない。

実に落ち着かない事だ。

とはいえ、氷の彫像の様で美しい。

その姿はまるで……

「白亜？」

「ふむ、貴様の記憶にある姿を模したのだが」

そう、１４～１６歳くらいの少女で、ユートもよく識る【緒方白亜】の姿を採っていた。

ユートは懐かしい前世の妹の姿に困惑したが、ブンブンと首を振り水の精霊へと語り掛ける。

「水の精霊、僕は貴方との契約を望む。願わくは了承して欲しい！」

「フム。何故に？」

「僕が望む未来（あした）の為に、どうしても力が欲しいのです！」

「……大いなる金色に守護されし単なる者よ、我は貴様との契約は望まぬ」

「っ！？　（駄目か……）」

ガックリと項垂れ、ユートは意気消沈してしまう。

簡単にはいかないとは思っていたが、アッサリと断られてしまった。

「勘違いをするな、我は望まぬ。しかし、我を生み出せし母なる水との契約を、貴様に推奨しよう」

「は？」

落とされて、今度は持ち上げられた気分になる。

しかし解らないのが、水の精霊の“母なる水”だ。

「単なる者は識る由もあるまいが、我は所詮母なる水の一滴に過ぎぬ」

「っ！　そうか、水の精霊は代行者なのか！」

ユートの答えに満足したのか、水の精霊はユラユラと蠢いている。

「貴様を我が母なる水の元へと送る」

「へ？　あの、少し心の準備を……」

ユートの言葉を丸っと無視して、水の精霊は“扉”を開いてしまう。

「では、大いなる金色に守護されし単なる者よ、逝って来るが良い」

「それは、字が違うぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！」

ユートは水柱に巻き上げられてしまい、扉へと吸い込まれてしまった。

その様子を茂みで見ていたユーキとシエスタは、真っ青に青褪めてしまう。

「あの、ユート様が水柱にゴーって巻き込まれて消えちゃいました!?」

「消えちゃったな～」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「此処は……」

真っ青な空間。

ユートはその空間を揺蕩いながら、薄れゆく意識を繋ぎ止めていた。

「誰……？」

空間そのものから感じられる気配は、あまりにも強大で逆に判らない。

「消える……」

その大き過ぎる気配は、強大さ故に人間であるユートの小さな意識

を塗り潰していく。

それは、蟻が恐竜に踏まれている様なものだ。

矮小な人間の意識などは、大いなる意思の前に無力でしかない。

然れど、人間は意思の力で奇跡さえ起こす生物。

ユートは流されながらも、脳裏に浮かぶ記憶の奔流を観ていた。

『お兄ちゃん、中学に進学したし今日から兄さんって呼ぶね？』

「白亜……」

『優斗、明日から大学生になるんだし、働いて小遣いを稼いでみろよ』

「父さん……」

ゆうちゃん、見て見て！　ドレス～！　ほら着てみてよ～っ！』

「はは、母さん。俺、男なんだよ？」

『もう、しょうがないな。貴方の名前はユート・オガタで、わたしの名前はシーナ・ナユタ』

「……誰？」

見た事の無い筈の長い黒髪の巫女さんが、ユートに対して『仕方ないな』といった表情で見つめている。

識らない……

そもそも、巫女さんに知り合いなんて居ない。

居ない……筈だ。

「しいな？」

しかし、何故だろうか？

識っている気がする。

何処かで逢っている様な、そんな気がしてならない。

〔汝……我と契約し、我が代行者なりや？〕

「水の精霊……王？」

〔然り〕

消えかけていた意識、それを【しいな】という名前が再構築してくれた。

それを“水の精霊王”が認めたのだ。

「僕は、俺は……、貴方の　代行者になります！」

強い意思。

それがユートをこの空間で……強壮なる意思によって形作られた精霊王の内で、意識を取り戻させた。

この空間こそが水の精霊王そのもの。

精霊王とは概念。

水の精霊王とは、水という概念そのもの。

声も意思を言葉として意訳しているだけで、決して肉声で喋ってはいない。

ラグドリアン湖に在る水の精霊は、正に水の精霊王の意思の一滴なのだ。

ユートに刻まれるモノは、即ち聖痕（スティグマ）。

水の精霊王の地上代行者である証、水の聖痕。

ユートが目を開くと、その瞳が深い蒼に染まる。

気が付くと、ユートは再び現世へと還っていた。

「戻ったな、我が兄弟よ」

「兄弟？」

「母なる水に御印を与えられた人間、それは我と同じ存在である事を意味する」

何処か嬉しそうな雰囲気が感じられた。

「ユート」

「む？」

「僕の名前だよ」

得心がいったのか、理解の雰囲気が解る。

これも聖痕の力か。

「なれば、我も名で呼ぶが良い」

「え？　名前、在るの？」

「無いな」

「キッパリと言い切った！？」

「ユートが付けるがいい」

「僕が？」

意外ではない。

お約束だと思えば。

「う～ん……水かぁ」

何だか凄い期待されている気がするが、それは決して気のせいではあるまい。

冷や汗を流しつつ、名前を考える。

「（ラグドリアン湖、湖……か）」

水の精霊が住まうラグドリアン湖を見つめ、何となく出てきた名前を口に出す」

「ラクス」

「ほう？　意味は？」

「その侭、湖って意味なんだけど……」

【Ｌａｃｕｓ】
ラテン語で湖の意。

「うむ、悪くはないな」

どうやら気に入ってくれたらしく、ユートはホッと胸を撫で下ろした。

「ユート、今後は我をその名で呼んでくれ」

「あ、うん。そうさせて貰うよ、ラクス」

早速、ラクスと呼んでみると喜んでいる雰囲気と共に湖に消えた。

「ユート様ぁぁぁっ！」

「お兄様ぁぁぁっ！」

振り返ると、ユーキ達が走って近付いて来る。

「ユーキ、シエスタ？」

どうやら、行き成り消えたユートが行き成りまた現れて、思わず飛び出して来たらしい。

「来ないように言ったのにな、しょうがないな……。あれ？　何だこれ？」

ユートはいつの間にか右手に持っていた石を見つめ、首を傾げるのだった。

・

第１３話：水の聖痕（後書き）

・

次回はオガタ家に関して。
そして、石の正体も……

第１４話：緒方とオガタ（前書き）

・

完成しました。何だか余りスレイヤーズの魔法が出てないな～と思う今日この頃だったりします。

第１４話：緒方とオガタ

・

「ふむ、水色の玉……か」

ユーキは野球ボールよりも二回り小さい、水色の玉を陽に透かしたりして眺めている。

向こうが透けて見えるくらいの透度、宝石よりも寧ろ玻璃の様な石だ。

「ユーキ、何か判るか？」

「うん、水石の類いだと思うよ」

「水石？」

「アルビオンを浮かしてる原因で、ヴィットーリオが聖地奪還の根拠にしている風石の親戚みたいな物で、精霊力を凝縮して圧縮したモンだよ」

その説明で思いだし、亜空間ポケットから【ゼロの使い魔】のライトノベルを取り出し、ページを捲る。

「って、待てい！」

「どうした？」

「それは何だ？」

「？　読んだ事くらいあるだろう？　ゼロ魔の小説」

「んなん、解ってるよ！　ボクが言ってるのは、何故にこの世界にライトノベルが、それも【ゼロの使い魔】が有るのかって事だ！」

あっけらかんと言うユートに、ユーキはついついエキサイトしてしまう。

「なのは（神）さんが亜空間ポケットと一緒に、実家に置いていたライトノベルを根刮ぎ入れてくれてたんだよねぇ」

さぞや緒方家では、誰より妹の白亜が大混乱をした事だろう。

事故死した家族の持ち物だけが、忽然と消えているのだから。

「ズッルい！　こんな暇潰しが在ったなんて？」

ライトノベルを取り上げ、中身を読みながら文句タラタラ叫んだ。

「うわ、懐かしいな～！　マジ、ズルいよ兄貴！」

「……仕方ないだろう？　こんなん、そこら辺に置いとけないし」

何しろ原典情報を書き綴った本だ。

介入無しなら、預言書と言っても過言ではない。

「確かに、危険かもだな。シエスタに見られたらどう思われる事か？」

「う〜、そんな事よりも！　これが水石なのは間違いないのか？」

誤魔化す様に水石？　を手に取り、ユーキに訊ねた。

「そうだね、間違いないと思うよ。ただの水石じゃなさそうだけどね」

「……？　と言うと？」

「凄い精霊力を感じるよ。普通の精霊石じゃないね」

キランと瞳を輝かせ、玉石を見つめて言う。

「風の聖痕で云うところの神器……【炎雷覇】や【虚空閃】みたいなモノだね」

「詰まり、精霊王から下賜された神器だと思えば良い訳かな？　この石……」

「そうだね、契約者（コントラクター）として、精霊王の地上代行者としての証ってとこかな？」

炎雷覇や虚空閃の様な武器の形こそしてはいないが、それは間違いなく代行者の証であり、契約者（コントラクター）の御印。

「水石より尚、高い水の精霊力を持つ謂わば、【水霊石】ってトコだね」

「でもさ、これってどう使えば良いんだ？」

「大きさ的に、魔血玉（デモンブラッド）の代わりに使えないかな？」

「魔血玉！？」

【魔血玉（デモンブラッド）】

それは赤の竜神（スィーフィード）の世界、所謂処の【スレイヤーズ】の世界に於いて、リナ・インバースがゼロスから５５０万にて買い上げた呪符（タリスマン）こそが魔血玉を嵌め込んだモノだった。

魔血玉は全てが紅い宝石であり、それぞれの魔血玉が【赤眼の魔王（ルビーアイ）】【白霧（デスフォッグ）】【蒼穹の王（カオティックブルー）】【闇を撒く者（ダークスター）】を表しているという。

『四界の闇を統べる王、汝の欠片の縁に従い汝ら全ての力以て、我に更なる魔力を与えよ』

混沌言語（カオス・ワーズ）で唱えると、魔力許容量を拡大増幅してくれる魔導師には便利なアイテムだ。

元はパシリ魔族（ゼロス）が上司、獣王ゼラス・メタリオムから下賜されたモノだったのだが。

「精霊王石を呪符にして、この世界で増幅器（ブースター）として使えるかも。風霊石、火霊石、土霊石も手に入ればね？」

「あと三つ？　真逆、王全員に逢えと？」

「敵は曲がりなりにも神を名乗る存在だよ？　必要最低限で全てを揃えるくらいしないとね」

力は幾ら有っても足りないのだ。

個人の力、仲間の力、経済の力、権力など、力というモノは様々。

「ハァー」

溜息を吐くユート。

「取り敢えずさ、マントの留め金に加工しておくと良いんじゃないかな？」

「……だな、そうするよ」

これで水の系統が1ランク上がる。

今のユートはライン。

水霊石の呪符を使ったら、トライアングル級の魔法が使用可能になるだろう。

因みに普通に精霊術を使うなら、スクウェア級の力を使えるのだろうが、現状は使う心算はない。

下手に使っても系統魔法と反りが合わないだろうし、ユートは精霊術師ではなくメイジなのだから。

というよりも、水霊術だけ使えても余り意味は無い。

まあ温泉造りには役立ちそうだけど、何よりわざわざ敵に手札を見せてやる趣味などユートには無かった。

敵が何処に居るとも知れない以上は、切り札になる力をホイホイと使ってしまう訳にはいかないのだ。

「そうだ、そろそろ身体も鍛えないとな」

魔法だけではない、腕力も鍛えていかないと……。

ユートは、ひ弱でモヤシなメイジになる気はない。

某・元帥な伯爵家の四男、アレみたいなヒョロヒョロ君はゴメンだ。

「まあ、早く鍛え過ぎても背が伸び悩む事になるし、程々にな？」

「お前も鍛えろよ……」

「ボク、女の子だし～♪」

そっぽを向いて、明後日の方向を見やるユーキ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【サリュートの部屋】

「何？　剣を教えて欲しいだと？」

「はい、聞いた話によれば父上は剣を使うとか」

「うむ、シュヴァリエに叙されたのも、剣の腕を見込まれての事でな」

勲爵士、騎士候とは一代限りの貴族位。

オガタ家は代々、嫡子たる長男がシュヴァリエに叙勲される事によって、貴族位を維持してきた一族。

サリュートの代に入って、正式な子爵位を叙勲された為、もうシュヴァリエに拘る理由も無い訳だが……

実はユートも、サリュートの様にシュヴァリエに叙勲されたいと思っていた。

「まあ、良いだろう。外へ出なさい」

「はい！」

2人は邸の庭に出て、互いに木刀を手に取る。

そしてユートが構えた。

「何だと？」

サリュートも構える。

「え、何で？」

サリュートとユート、2人の構えはそっくりだ。

「どうして父上が？」

「何故、ユートが？」

2人の台詞が重なる。

『緒方逸真流（オガタ・イッシン流）を！？』

それは正に、二つの緒方（オガタ）家が重なる瞬間だった。

ユートとサリュートの2人が、互いに木刀を握り締めて駆け出す。

鈍く軽い、木刀同士がぶつかり合った音が、オガタ邸の庭に響き木霊した。

鍔迫り合いの音が耳に響いて、2人共が顔を顰めながら相手の顔を見る。

「ユートよ、何処でこの技を、オガタイッシン流の技を知り得た？私はお前にイッシン流を見せた事など無い筈だがな？」

「なっ！？　父上の剣技が緒方逸真流？」

サリュートも驚いていた様だが、ユートもまた吃驚していた。

自身が使う【緒方逸真流】とは、戦国時代の緒方家の先祖が編み出して、江戸時代を経て現代（平成）に伝えられた流派だ。

それが同じ名前、同じ技が本来は交わらぬ世界である筈のハルケギニアで、しかもオガタ家に伝わっているなど、想像の埒外。

「（試してみるか？）」

ユートは鍔迫り合いから、一旦バックステップで後方へと飛び、再び駆けた。

「む？」

下段からの攻撃、サリュートの木刀を上方へと弾き、出来た隙を突いて袈裟懸けに木刀を降り下ろす。

だが、いち早く察知していたサリュートは、身体を僅かに後ろへ反らして紙一重で避けると、完全に降り下ろされたのを確認したら、回転しながら横薙ぎに木刀を振るう。

「ガハッ！」

勢いを殺せなかったユートは、それをマトモに喰らってしまった。

勢いよく吹き飛ばされて、ユートは気絶する。

未だ五歳の身である故に、身体が軽かった所為だ。

「む、いかん！　ついついやり過ぎてしまった！」

慌ててユートに近付いて、介抱するサリュート。

「ふぅ、どうやら骨などに異常は無さそうだ。然し、ユートが使ったあの技は、オガタイッシン流【コダマオトシ】に相違ない」

サリュートがユートに使った技が、オガタイッシン流【コマノマイ】と云う。

どちらも謂わば、基本技に過ぎない。

それでも、恣意的に使ったという事実は、その技を識っているという事だ。

「ユートよ、お前は……」

謎ばかりが残り、多少モヤモヤするサリュートだが、メイドを呼んで部屋に運ばせて自室に戻った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【ユートの部屋】

一時間もすると、ユートは自ずから目を覚ます。

いの一番に目に入ったのは天井。

「知ってる天井だ……」

「何を当たり前な事を言ってるんですか？」

「シエスタ？」

声がした方に、首だけ動かして見るとシエスタが椅子に座っていた。
心なしか目が赤い。
まるで、涙でも流していたみたいな瞳だ。
「もしかして、看病をしてくれてたんだ？」
「はい」
「心配……した？」
「当たり前です。直ぐには目を覚ましてくれななくって、生きた心地がしませんでしたよ！」
「……そっか」
大丈夫だと頭で理解していても、やはり心配なものは心配なのだろう。
「ありがとな、シエスタ」
右腕だけ伸ばし、手で頬にソッと触れて軽く撫でる。
触れられた感触が気持ち良いのか、シエスタは目を閉じて頬を朱に染め、撫でられるに任せていた。
「ゴホンッ！」
「え？」

「キャッ！」

ユートの死角になる場所で聞こえた咳払い。

吃驚して手を放す。

シエスタも、小さな悲鳴を上げて肩を震わせた。

「ゆ、ユーキ。居たのか」

身体をシエスタに手伝って貰い、ベッドから起こして咳払いのした方を向くと、銀髪の少女が壁に背中を預けて立っている。

「ゴメンねぇ、お兄様？　気が利かなくてさぁ」

言外に、イチャイチャしてんな莫迦兄貴と言われた気がした。

「（まったく、順調に好感度を上げているな。こんのギャルゲー体質め！）」

ユーキは心の中で愚痴る。

からかわれた2人は、頭のてっぺんまで血が上って、真っ赤になっていた。

「コホン、ユーキもお見舞いに来てくれたのか？」

そんな心情を誤魔化す様に咳払いをして、ユーキに話し掛ける。

「まあね。お父様に一撃で熨された可哀想なお兄様を慰めに……ね？」

「うぐっ！」

胸にグサリと、何かが突き刺さった。

然し、直ぐに真面目な表情になると、あの模擬戦での事を思い出す。

「父上が使ったのは、間違いなく緒方逸真流の技だ」

「オガタイッシン流？」

「僕が使った技は、敵の刀を下段から上方に弾いて、返す刃で袈裟懸けに斬る技……【木霊落とし】だったけど、まるで識っているかの様に避けて、更に返し技で【独楽乃舞い】を放って来たんだ」

ギュッと掛け布団の裾を掴み、睨み付ける。

「？　サリュート様が同じ技を使うのは、そんなに変な事なのですか？」

ユートの驚きが、いまいち理解出来ないシエスタは、軽く小首を傾げていた。

ユートはシエスタに微笑むと、少し苦笑する。

「まあ、そうだね」

同じオガタ家の親子なのだから、同じ流派を使ってもおかしくは無

いとシエスタは思っているのだろう。

然し、それは違う。

緒方逸真流は、ハルケギニアを俯瞰する受容世界での剣技なのだ。

それが、何故この世界にも伝わっているのか？

古くは戦国時代から才を顕した緒方家の先祖が、時代の流れに乗って江戸時代、明治維新、世界大戦を生き延びて平成の世まで細々と伝えた【緒方逸真流】。

当然、最早意味こそ無くなっていたが、緒方家の次期当主として緒方優斗も習わされていた。

幸い嫌いではなかった為、高校を卒業後もずっと続けていたが、未だに未熟者として免許皆伝を獲る事が出来ずにいたのだ。

事実、奥義とかの類いは教わっていない。

自分ではもういけると自惚れていたのだが、実際に剣をサリュートと合わせてみてよく解った。

五歳の肉体、五年間離れていたブランクなど、言い訳は幾らでも出来るだろう。

だが、サリュートの流れる様な動きには無駄が無く、自分がどれくらい未熟者だったかを見せ付けられた。

「（本当なら、木霊落としから直ぐに【継ぎの舞い】に移行しなき

ゃならなかったのに、避けられて勢いを利用出来ずに振り切ってしまった……）」

緒方逸真流では、行動は舞いの如くと言われており、最初の動きから継いで直ぐに新しい動きに移る。

これが【継ぎの舞い】と呼ばれていた。

優斗だった頃は、取り敢えず出来ていた動きだったのだが、目の前でサリュートの動きを色眼鏡というフィルター無しで視て、見に染みて理解してしまう。

「（爺ちゃんの言っていた通りだったな。僕は確かに未熟者だ）」

嘗ての祖父、緒方優介の言葉が脳裏に甦る。

『優斗、主はまだまだ未熟者よ。免許皆伝など１０年早いわ！』

そう笑いながら言われたものだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あれから一週間が経つ。

今は剣の練習も身体を基礎能力の強化に充て、温泉を造りつつも魔法の練習をするという、ハードスケジュールを熟している。

朝の朝っぱらから、ランニングをして準備体操。

木刀を使っての素振り。

今の身体にも慣れつつある今、勘を取り戻さなければならない。

技なんて未だ数年は早いと思っている。

昔は……前世では早く技を習いたくてウズウズしていたものだが、技を使う反動がやけにキツかった。

今は覚えても、きっと振り回されるだけだ。

ユートは素振りをしながらあの時の、基本技に過ぎない【木霊落とし】を使った際の反動を思い出す。

「木霊落としみたいな初歩でアレじゃあな」

それに、ユートは奥義こそ伝授されていなかったが、それ以外は大抵を教わっている為、改めてサリュートから習う必要も無い。

慌てずに、今は力を蓄える雌伏の時期だ。

木刀の風を斬る音を庭に響かせ、そう考えていた。

「（それに、カトレア様の誕生会の時にカリーヌ様が仰っていた事……）」

『そうですね、では代わりにユート殿が１０歳になったらわたくしが直々に訓練を付けて上げましょう』

ルイズへの訓練が実際に行われるなら、あの時の言葉も実行される可能性が非常に高い。

「（１０歳か。猶予は僅か5年、その時までに烈風に対抗出来る手段を構築しておかないと、軽く逝けるんだろうな～）」

この歳で臨死体験なぞしたくはない。

ブルリと背筋を奔る冷たいモノを感じ、ユートは肩を震わせた。

剣の練習が終わり、温泉造りに精を出す。

ド・オルニエール領には、幸いにも高い山が存在しており、傍には葡萄畑が並んでいる。

葡萄畑は兎も角、結構高い山の為、温泉造りの条件を十分に充たしていた。

山の地脈を通す様に、水脈を作っていくとそれを麓にまで持ってくる。

それにより必要十分な温度を備えた湯が、ユートの目論見通りに沸き出てきた。

これを予め数ヶ所に造り、掘り出した場所が湯溜まりとなって温泉となる。

折角だから、水の精霊力を使って効能も上げておき、枯れない様に水の精霊達を常駐させた。

温泉そのものは完成だ。

「後は旅籠を造って温泉街の切っ掛けにすれば、客も呼べる様になるな」

サリュートから土メイジの部下を借り、大きな旅籠を造る必要があるだろう。

貴族御用達の旅籠と、平民でも気軽に泊まれて入れる旅籠の両方を建てる。

貴族御用達の方は、多少の値段設定を高めにしても構わないだろう。

「食事やら何やらも要るよな。女将にはセシリアさんを置いて、中居や女中なんかも必要かな？　料理長と料理人、雑用には誰を置こうか？」

未だ仕事が決まっていない【聖女】も居るし、近くの村から雇うのもアリか。

取り敢えず、セシリア母娘を旅籠の方に移動して貰う必要がある。

「何れにせよ、旅籠が完成してからだよな」

精霊の涙と呼ばれる水を、大量に創れるユートは温泉の成分に、それを秘薬に近い形で混入してある。

「武雄翁やカトレア様には薬効成分として、それなりに効く筈」

邸に帰ると、早速サリュートに報告をしに行く。

「父上、温泉が完成しましたので土のメイジを貸して頂けませんか？」

「む？　早いな、もう完成したのか。判った、手配をしておこう」

「ありがとうございます。旅籠の施工に当たり、設計書を作っておきました。
この設計書の通りに建築して下さい」

「ふむ？」

設計書を受け取り、目を通すサリュート。

設計書の概念は、現代日本の中でも情緒溢れた老舗の旅館をモデルにしている。

行き成り高級ホテルを建てろなんて、ファンタジーな世界の人間には土台無理な注文だ。

それに比べ、１００年以上の歴史を誇る老舗旅館であれば、ファンタジーな人間にも建造は可能と考えた。

「よく出来た計画の様だ。女将、中居、料理人などはユートが手配しろ」

「はい、父上」

温泉が一段落付いて、夜になるとユートは白金の鉱石を使い、マン

トの留め金を製作していた。

白金を石から錬金は、未だ出来ないユートだったが、大元の鉱石を錬成によって加工は出来る。

時間は掛かったが、何とか形にはなっていた。

魔血玉ならぬ、精霊涙（エレメンタル・ティア）と呼べる水霊石を、白金で造った土台に嵌め込んで自分のマントを留めるのに使用。

試しに着けて、姿見で確認をしてみる。

「うん、悪くはないな」

石の色こそ違うが、スレイヤーズに出てくる魔血玉の呪符と同じデザイン。

「何か、こうなってみると両腕の手首とベルトにも欲しくなるか」

土台は兎も角、精霊王石は各精霊王に会って契約するしかあるまい。

そして、そんな決意をした日の夕餉の時間。

「ユート、話しがあるから食後に私の執務室の方まで来なさい」

「判りました、父上」

来たかと思った。

寧ろよくぞ一週間も待ったものだと思える。

きっと剣の流派に関しての話しだろう。

ユートは食後の紅茶を飲みながら、どう受け答えるかを考えていた。

15分程して、ユートは言われた通りにサリュートの執務室まで足を運ぶ。

コンコン……

木の扉を軽く叩く。

「父上、参りました」

「入りなさい」

入室を促され、扉をユートは開けて入る。

「失礼致します」

父、サリュートが机の書類を片付け、ユートの方を向いて口を開く。

「何の話しかは察していよう？」

「僕の構えや技が、習ってもないのに父上と酷似していた件ですか？」

「うむ。まあ、それに関しては良いのだよ」

「は？」

「永い歴史の中、脈々と受け継がれてきたのだから、そういう事も有ろう」

達観した様な父に、首を傾げてしまう。

「でしたら今宵、僕を呼んだ理由は……？」

「本当はもっとお前が成長してからと、そう考えていたのだがな。温泉を八ヶ月で造り上げたお前は、親の予想より早く成長しているのかも知れん。故に話しておこうと思う……」

サリュートはそこで一拍を置いて、目を閉じる。

ユートは我知らず、ゴクリと溜まった唾液を飲み込んでいた。

「そうだ、我がオガタ家の歴史……、成り立ちをな」

.

第１４話：緒方とオガタ（後書き）

・

そして次回は、オガタ家の歴史が明らかに？

ま、大した歴史でもありませんが……。

第１５話：ガンダールヴの槍とユートの剣（前書き）

.

噺が余り進んでいない気がします。

第１５話：ガンダールヴの槍とユートの剣

・

それは神による干渉。

ユートも知らなかった。

よもや、自身の転生が過去にすら干渉していた事に。

力無き神……【純白の天魔王・高町なのは】が、如何にして過去にまで干渉出来たのはは不明だ。

それでも彼女は、緒方家の過去に干渉してオガタ家を創る切っ掛けとなった。

過去への干渉、過去の捏造……余りにも荒唐無稽で、そして余りにも身勝手な。

平賀才人もきっと、こんな気持ちだったのだろう。

サリュートから話を聞いた後で、ユートはそんな感想を抱いたのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「我がオガタ家の成り立ちは覚えているか？」

「へ？　それは勿論……」

サリュートの執務室に来たユートは、そんな質問がきた事が予想外で間抜けな声を上げて返事をする。

「では、この私にオガタ家の歴史を開帳してみてくれないか？」

「は、はい」

きっと意味が有るのだろうと思い、オガタ家の歴史を訥々と語り始めた。

それは１００年以上も昔、緒方家の始祖たる存在……【ユーゾー・オガタ】が、トリステイン王国に現れたのは本当に突端な事だ。

何故かは判らないが、始祖の名前はユートと同じく、まるで日本人の様な名前だったらしい。

本当に唐突で、しかも姓がオガタという。

お陰で、ユートの今生での姓も【オガタ】となる。

ユーゾー・オガタは変わった形の剣を持ち、魔法すら使って戦っていたらしい。

片刃の剣で、持ち手の部分には紐による装飾が成されており、滑り止めの代わりにしている。

普通の剣だと、滑り止めには大概がスリットを彫っていた。

刃には紋様が浮かび、刃と持ち手の境目にはとても美しい彫りが成された、美術品の様な物が嵌め込まれていたという。

ユートはそんな剣に覚えがあった。

それは、【日本刀】と呼ばれている一種の美術品で、誰かを殺せる殺傷の為に造られた武器。

だから、オガタ家での訓練には日本刀を模した木剣、即ち【木刀】を使う。

そして、基本的には魔法よりも剣で戦う事を好む。

何処で手に入れた剣なのかも判らないし、ユート自身も興味を抱かなかった。

然し先日、サリュートが使った剣技を見ておかしいと感じる様になる。

【オガタイッシン流】は、
ユートが前世で習っていた【緒方逸真流】と全く同じ剣技だった。

【緒方逸真流・独楽の舞い】は、敵の攻撃を刀で防御して回転を入れながら、背後に廻って攻撃を当てる技で、【木霊落とし】と同じ初歩の技。

ユートは魔法を使う事から祖先を、ハルケギニア人と決め付けていた。

だが、緒方逸真流を使えたとなれば話が変わる。

ユートは歴史を思い出しながら、オガタ家が持つ異常性に気が付いていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

緒方優三は、日本の江戸に住む旗本の三男坊として世に産まれる。

某・暴れ好きな放蕩将軍と違い、正真正銘の貧乏旗本の三男坊だ。

大した石高も無い。

嘗ての日本に於いて、このハルケギニアの貴族と同じ存在でもあるが、そんな中でも旗本寄り合い席に入れない２０００石以下の石高だった。

そもそも広義の旗本とは、将軍に謁見の資格を持ち、参勤交代の時に関所で下馬する事を免除された大名、及び大名の扱いを受ける者以外で、将軍に謁見の資格を有る者を指す。

そんな旗本の家に生まれた緒方優三は、突如として消えてしまったという。

三男坊など家を継げない、そこで身一つで立身しなければならなかった。

優三は頑張りに頑張り抜いた結果、将軍よりとある刀を拝領する。

消えた優三は、割りと多くの人間がその場面を見ていた為、神隠しとして扱われていた。

銀の鏡の様な、得体の知れないモノに吸い込まれたのだ……と。

優三は見た事もない景色に茫然自失となり、ヘタリ込んでしまう。

そして、運が良いのか悪いのか？　行き成りトラブルに見舞われた。

トラブルに見舞われたという意味では悪いが、優三の今後の人生を考えれば悪くはなかったのだろう。

少女とそのお付きの騎士、貴族の一向がオーク鬼の群れに襲われていたのだ。

中にはトロルも混じって、危機に陥っていた。

事情は判らないし、怪物なども見た事がなかったが、優三にとってやる事はたった一つだけ。

優三は少女の一向を、怪物から救け出す。

少女は、ラ・ヴァリエール公爵家の次女だった。

救われた少女は、恩人としてラ・ヴァリエール公爵領へと招く。

その後、紆余曲折有ったが2人は愛し合う。

勿論、東方の貴族の家に生まれたメイジで娘の恩人とはいえ、ヴァリエール公爵が簡単にそんな事を許す筈もなく、優三は少女と駆け

落ち同然で家を出た。

その影に、ヴァリエール家の嫡子と長女の助けがあった事を、優三は感謝する。

優三は自らを【ユーゾー・オガタ】とし、手柄を挙げていく。

その実力を、王宮に認められてシュヴァリエに叙勲された優三。

本来なら有り得なかった筈だが、何故かそれは上手く可決されたのだ。

そこには神の見えざる手が在ったが、その事実は誰も知らない。

一代限りの貴族位であるが故に、優三は少女との間に出来た息子に、立身出世を家訓として義務付けた。

優三の息子、ユーヤ・オガタはその家訓に従い、手柄を挙げてやはりシュヴァリエとなる。

また、娘のおユウは義兄の息子……従兄と恋に落ち、結婚する事になった。

【ユーゾー】の持っていた刀には、固定化が掛けられた後に家宝とされる。

尤も、ユーゾー以外に鞘から抜ける後継者も居なかった為、ずっと死蔵されていたのだが。

サリュートはユートが歴史を語った後に、始祖であるユーゾー・オ

ガタがこの地に来てからの人生を話す。

そして、ユートは緒方家で語り継がれた怪談噺の様な伝承を思い出し、その結果として真実に辿り着いた。

緒方優三は、拝領した刀がハルケギニアに召喚されたのに巻き込まれ、異世界たるこの地を踏んだ。

そして、ラ・ヴァリエール公爵家の次女と結婚して、オガタ家の始祖となった。

ガンダールヴの槍。

恐らく、オスマンの恩人や佐々木武雄翁と同様に。

【ガンダールヴの槍】

ハルケギニアの召喚システムを応用し、神の左手たるガンダールヴの為の武器を地球から喚び込んでおり、喚び込まれた武器や兵器をガンダールヴの槍と呼ぶ。ロケットランチャーや零戦も、それで喚ばれた“槍”の一つだと思われる。

問題は自分の世界が受容世界と呼ばれている世界で、其処ではこの世界は物語の世界に過ぎないという事。

槍の召喚が成されている訳がない。

「（恐らくはなのはさんの仕業だよな～）」

槍の召喚をねじ曲げ、自分の前世の地球に繋げる事で刀を緒方優三ごと、召喚したのだろう。

召喚された緒方優三が幸福な人生を歩めたか、それは当時を生き抜いた緒方優三本人が決める事。

ただの子孫に過ぎない自分が決めていい事ではなく、況してや召喚の原因であるユートが考えても、詮無い事でしなあるまい。

そうなると、気になってくるのが“ガンダールヴの槍”として喚ばれた刀が一体どれ程のモノか。

その一点に尽きる。

「父上、家宝の剣を見る事は出来ますか？」

「ん？　正式な継承自体はゲンプクしてからとなる。だがまあ、見るくらいは良かろう」

「（ゲンプク、元服かな。成る程、大人として認められる年齢で継承か）」

【元服】

男子の成人を祝った儀式。１１～１６歳の間に行われて、髪形と服装を改めて冠をかぶった。

「では、地下の宝物庫に行ってみようか」

「あ、はい！」

サリュートに連れられて、ユートは宝物庫に有るという【ガンダールヴの槍】として喚ばれた刀を観に行く事になる。

地下宝物庫とは、どうやら原典に於ける愛人部屋？　の事だった様だ。

あの虚無のマジックアイテムとか呼ばれていた鏡が、確りと鎮座している。

起動すれば、あーぱー姫の部屋に有るだろう姿見の鏡と空間を繋げられる筈。

他にもガンダールヴの槍として喚ばれたのか、様々なアイテムが在った。

ロマリアなら兎も角、何故こんなモノが数点とはいえ置かれているのか？

「父上、見たところ随分と変わった物が有りますが、何処で手に入れたのでしょうか？」

「うむ、我がオガタ家ではこういったアイテムを積極的に集めていてな、使い方が解らない物も結構有ったし、纏めて宝物庫に容れてあるのだよ」

銀の六連装式リボルバー。

弾丸も１２セット有る。

手に取って視ると、間違いなくアレだった。

本物かレプリカかは判らないが、どちらにせよ普通に使えるだろう。

「（少し改造すれば、割と使い勝手の良いマジックアイテムになるな。ユーキの護身用には丁度いい）」

ユートはそう考える。

実際、前世でも妹の白亜を大切にしていたユートは、兄バカと言っても過言ではなかった。

虚無を使えるとはいえど、普段から虚無をブッ放す訳にはいかない。

なら、こういう護身武器は持っていた方が良かろう。

「父上、このマジックアイテムを戴けませんか？」

「何？　それが何か解っていっているのか？」

「はい、拳銃ですよ」

「……お前に必要とも思えんがな」

息子の実力を把握している訳ではないが、ラグドリアン湖では某（なにがし）か得たと確信している。

ユートに拳銃が必要だとは思えなかった。

「勿論、僕には必要ありませんよ。僕は刀の方が使い勝手が良いですし、遠距離なら魔法が有りますから。これは、ジョゼットに持たせる心算です」

「何んと……、ジョゼットにか？」

「はい。あの子は僕や父上みたいな力は有りません。なら、距離を取る事を前提に護身武器として持たせたいと思います」

そう言われ、顎に右手を添えると暫く黙考する。

これはサリュートが熟孝する際の癖みたいなモノで、某・頓知小坊主が人差し指に唾を着け、頭に擦り付けて座禅を組むポーズと同じ様な意味合いだ。

一分は経っただろうか？

サリュートが目を開くと、リボルバーと弾丸のセットをユートに渡す。

「使い方は解るか？」

「はい！」

「なら、お前も練習をしておきなさい。ユーキが五歳になって、魔法を習い始めたら折りを見て渡してやると良い」

「判りました！」

思いがけず手に入ったの物は、某・魔導探偵が使っていた銀色の六連装式リボルバー。

某・魔導探偵は、これを使って【イタクァ】の術式を放っていた。

リボルバー部分を改造し、魔装銃として使えば良いだろう。

別名、　魔弾銃。

でも魔弾銃ではあからさま過ぎるから、魔装銃という名前にしようと考えた。

「さあ、早く来なさい」

「あ、はい！」

サリュートに促されて、駆け足で追い付く。

最奥に飾ってあったのは、立派な装飾をされた一振りの刀だ。

魅入られる様な美しさ。

肝心の刃を見ずして、魅入られる自分に気が付いて、身震いした。

「父上、触ってみても？」

「まあ、構わんが。扱いには注意しろよ？」

「はい」

五歳の身に真剣は危険ではあるが、サリュートも既にユートをただの五歳児とは思っていない。

取り敢えず、自分が見ていれば大丈夫だろうと思うくらいには信頼していた。

ユートは先ず、柄を右手に鞘を左手に持つと、グッと力を入れて引っ張る。

思った通り、大した力も要らずスルリと抜けた。

「真逆!?　始祖以来、誰にも抜けなかった剣が?」

これには、特定の人間以外が抜こうとしても抜けない魔法、一種の識別魔法が掛かっていたのだ。

誰の仕業かは、考えるまでもあるまい。

「全長１０６サント、刃渡り７６サント、柄長２４．５サントか……、ん?」

刃紋を見て、拵えを確認してから気が付く。

「ば、莫迦な?」

この刀が緒方優三の物であるならば、それは将軍から下賜された物の筈。

徳川将軍家は、“コレ”を忌避していた。

自分達の手持ちを全て破棄していたと記憶している。

旗本や大名も破棄するか、若しくは銘を削っての所持だったのだから。

それが、徳川将軍が手ずから下賜していたなど、有り得ない。

「どうした、ユート？」

「いったい、何故……」

故に、ユートは驚愕と共に見つめるしかなかった。

「妙法村正……、初代村正が何故此処に！？」

そう、有り得ない。

村正は、伊勢国桑名で活躍した刀工の名で、その作になる日本刀の銘。

千子村正の名前が有名で、四代目は徳川による忌避が原因で、大名や旗本が持つのを嫌がり、千子と改名。

初代が晩年に打った作品が【妙法村正】だ。

だからこそ有り得ない。

村正は別名、妖刀村正。

勿論、何の霊的や魔力的な根拠も盛り込まれていない“切れ味が良いだけ”の刀が妖刀の筈もない。

誰かを呪う事もある訳がないのだが、徳川家康をとことんまで苦しめた刀の銘が村正だった為、村正を徳川に仇成す妖刀として忌避するようになった。

まあ、解らなくもない。

徳川家康の祖父の清康と、父の広忠は共に家臣の謀反によって殺害されており、どちらの事件でも凶器に使われたのが村正の作刀。

また、家康の嫡男の信康が謀反の疑いで死罪となった際に、介錯に使われた刀も村正の作であったという。

更には関ヶ原の戦いの折、東軍の武将である織田長孝が、戸田勝成を討ち取るという功を挙げた。その槍を家康が見ている時に、家臣が槍を取り落とし最に指を切った。その槍も村正で、家康は怒って立ち去ると、長孝は槍を叩き折った。

これらの因縁から、徳川家は村正を嫌悪するようになり、徳川家の村正は全て廃棄され、公にも忌避されるようになった……筈だ。

民間に残った村正も隠されてしまい、時には銘を磨り潰してまで隠滅した。

「どういう事なんだ？」

そんな曰く付きの村正が、よりによって将軍から拝領したなどと、真逆知らずに持っていた物を下賜した訳でもないだろう。

「（これもなのは（神）さん　の仕業か？　まあ良いか。折角の名刀だ有り難く貰っておくさ）」

妖刀と呼ばれた由縁は二つあり、一つ目が徳川に仇成したという事で、二つ目が切れ味の良さにある。

何故……なんて最早、どうでもいい。

神が認識阻害を掛けていたとでも思うだけ。

納得は出来ないが、此処に妙法村正が在る事実だけを受け止めれば良いのだ。

尤も、この村正が貰えるのは１０年は後になるが。

つまり、当座の武器が必要になると云う事。

「（エルフの国、ネフテスに言って調達するかな？　こっちは水の精霊王の地上代行者だし、向こうも無碍には出来ないだろうし）」

生命の維持に絶対欠かせない水、それを盾にされては仮令エルフとはいえどうにもならない。

生物は、飢えに耐える事が出来たとしても、渇きには耐えられないものだ。

「方針は決まったかな？」

ユートはそう言って、柄と鐔を分離し、茎を外す。

柄から刃を分離して、銘を確認すると、【村正】と間違いなく彫られていた。

刃にも欠けたり伸びたり、歪んだりという事も無い。

刃紋を見ると、直刃に湾(のた)れを基調とする古刀期に於いては珍しく、表裏で焼きが揃うという特徴が確りと出ている。

正しく本物。

ユートは、嬉しそうに元の状態に戻して納刀した。

「随分と気に入った様だなユート」

「はい、父上。元服の日が楽しみですよ♪」

在りし日の優斗は、無銘の刀しか扱えなかっただけに本当に楽しみだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

取り敢えず、手に入れたのは銀色の六連装式のリボルバーだ。

これを改造して、テストにエルフの国の首都ネフテスへ行く時持っていく。

きっと戦闘になるだろうから、武器は必要だ。

そんな訳で早速、ユーキの部屋へと直行した。

【ユーキの部屋】

「フ～ン。しっかし、よくもまあ……」

部屋に来てユーキに粗方の事を話すと、物珍しそうにリボルバーを見ながら少し呆れた声を出す。

現物が在れば、ユーキが持つ能力とユートの錬成とを併せて、複製量産が可能となる。

ユートのアイデアは中々に面白い。

発明家魂も触発され、ヤル気満々だった。

「取り敢えずは一丁、複製してから改造しようか」

「応っ！」

実際に【イタクァ】の術式を組んでみて、あの不規則な氷の弾丸の軌跡を再現してみて、それから魔弾作成を行う予定を立てる。

ユーキは、自分の武器の事を考えてくれていたユートに感謝しつつ、自分の趣味を久方ぶりに満喫しようと気合いを入れた。

製造過程をユートの持っている本から確かめ、一丁を複製して量産ラインを確立する事になる。

其処まで行くのに二ヶ月は欲しい。

歪み無く、精密な複製を造るなら最初が肝心だ。

まあ、最初の複製の段階でユートの錬成に、ユーキの能力による補

正を掛けるのが作業の一環な訳だが。

完成すれば、量産初ロットは家族で回す予定となっている。

サリュートは要らないが、護身に銃は使い勝手が良いし、持っていて貰う。

装填には、リボルバーを丸々カートリッジ化する事により、単純化する心算だ。

これにより、数秒で六連装を全て換えられる。

勿論、従来の弾込めも可能だから、状況に応じて柔軟に装填が可能。

こうして、ユートの差し当たっての“剣”はなんとか出来た。

「そろそろガソリンの錬成も始めないとな」

ゼロ戦で空を飛ぶ。

それは、佐々木武雄翁との約束でもある。

勿論、それに当たって自分も操縦を教えて貰う。

原典に於ける、ガンダールヴ（才人）最初の槍。

シエスタを渡す心算など無いが、複製したゼロ戦の方は渡してやる。

彼にはルイズを、虚無の担い手を護って貰いたい。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

様々な予定を立てて、時は流れていく。

ユートとシエスタは六歳、ユーキは四歳になった。

多少の時間は掛かったが、銃の複製とゼロ戦の複製が完了する。

ゼロ戦の操縦も、武雄翁から確りと教わって習熟し、いよいよ初フライトの日。

この日ばかりは、家族総出で見学をしていた。

「本当に飛ぶ日が来るなんて、思いませんでした」

ユートの後ろには後部座席が設けられ、一緒に乗れる仕様になっており、その後部座席にはシエスタが乗っていた。

実際に飛ばしてみてからと言ったのだが、シエスタは頑なに初フライトで飛ぶ事を希望したのだ。

元々、シエスタを乗せて飛ぶ予定だったが、行き成りは危険だと思って試験飛行となる初フライトは、１人で乗る心算だった。

「良いんだな、シエスタ」

「はい、ご主人様！」

既にクランクは回し、エンジンも掛かっている。

「私はご主人様を信じています」

シエスタは、ユートの真摯な行動を見てきて可成り、信頼度や好感度が上がっているらしく、微笑みと共に言い切った。

「上等！」

ユートは武雄翁と合図を送り合って、滑走路に沿ってゼロ戦を走らせる。

武雄翁の零号機が飛ぶ。

そして……

「テイク・オフッ！」

操縦桿を引くと、ガンダールヴの槍でありながらも、ユートの剣の一つでもあるゼロ戦壱号機が、家族達が見守る中で大空を翔けるのだった。

.

第１５話：ガンダールヴの槍とユートの剣（後書き）

・

漸くユートが六歳に。

ユートは着々と力を蓄えていっています。

第１６話：無垢なる刃の片鱗　と無垢なるメイドの仕事（前書き）

.

第１６話です。
どうやらとんでもない誤字が在った様です。

取り敢えず、気が付いた箇所は修正しました。

第１６話：無垢なる刃の片鱗　と無垢なるメイドの仕事

・

それは所謂、居合い抜きと呼ばれている技術。

「緒方逸真流・抜刀術……【玻璃の壱式】！」

抜刀術、若しくは居合い術とは、日本刀を鞘に収めた状態で帯刀し、鞘から抜き放つ動作（抜刀）で一撃を加えるか、相手の攻撃を受け流して二の太刀で相手へとトドメを刺す技術を中心に構成された武術だ。

【玻璃の壱式】とは、玻璃（硝子）を砕かずに斬り裂く技の一種。

勿論、砕いては失敗。

ガシャァァァァァンッ！

高速の鞘滑りで加速して、抜き放たれた刃は硝子へとぶつかる。

だがユートの目の前にある硝子が砕けてしまい、技は失敗に終わった。

「チッ！　やっぱり駄目だったか」

「今のは居合い抜きだよね？　砕いちゃ駄目な訳？」

「斬らないと駄目なんだ」

然し、これぱかりは腕前の問題だけではない。

六歳のユートでは、どうしても未熟な腕になる。

一応、緒方逸真流は覚えているのだが、身体に覚え込ませていない為、動きも滑らかとは云えずぎこちないのだ。

手続き記憶が真っ新な状態では仕方のない事。

記憶には大きく分けて三つの分野が有る。

思い出を司る【挿話記憶】

知識を司る【意味記憶】

運動神経を司る【手続き記憶】

この三種の内、ユートには挿話記憶と意味記憶しか残っていない。

何故なら、その二つは単純に新しい肉体の脳にぶち込めばれば良いが、手続き記憶に関しては身体が出来てもいないのに、無理矢理容れてしまうと筋肉や関節などを壊してしまう。

二十歳の動きを六歳で行うのは、医学的にも危険なだけなのだ。

「【玻璃の壱式】は、飽く迄も窮めて砕け易い硝子を“斬り裂く”技だ。それが出来て初めて成功、本来の威力だと言える」

「ふ〜ん。でも腕を上げれば良いんだよね？」

「いや、腕は当たり前だ。問題なのは武器なんだよ」

ユートは右手に持った刀を掲げ、不満気な表情になるとブン！　と唐竹に振る。

腕前が良いのは当たり前。

そう、この技は腕だけでは決して成功しない。

「最上の刀と最高の腕が相俟って、相乗効果を齎らしてくれるんだ」

「そういうモンなの？」

これが成功すれば斬鉄は疎か、様々なモノを斬り裂く事さえ敵うだろう。

然し、今現在のユートが持っている刀と言えばユートが錬成した鋼を、鍛冶屋に鍛造させた代物。

元より剣の普及率が低く、況してや鍛造が窮めて難しい刀の製作だ。

切れ味も低いし、硬いだけのナマクラ刀が出来上がってしまう。

鋼にしても、刀の鍛造には特殊な焼きを鋳れたモノ、【玉鋼】が必要だったが、ユートの錬成では未だ造れなかった。

イメージは在る。

術式は完璧で、呪文の構築も万全。

玉鋼を造れなかった理由、それは魔法のレベルが低かったという事だ。

砂鉄を使い、石炭を媒介に錬成を行う。

使うった魔法は、土土火のトライアングルスペル。

それで完成したのが銑鉄。

玉鋼の中でも決して高くはない等級。

玉鋼は、出来によって六種類の等級に分けられる。

即ち、1級A、1級B、2級A、2級B、銑鉄、卸鉄の六種類だ。

銑鉄は、下から数えた方が早いくらいに低い。

不純物を最大限除いた中、僅かに出る最上級品質でも2級Aが最大だろう。

家宝の妙法村正は、恐らく最上級の1級Aを使った刀だろうと思われる。

当時、そんな等級は無かったのだろうが。

更に鍛冶師の腕前が最上級とくれば、村正の品質が最高なのも当然だ。

これは最上級品質の鋼材、最高の鍛冶師の二つが相俟って、その相

乗効果で生まれた作品と云う事だから。

そう。村正の腕だけでも、良い玉鋼だけでも駄目だ。

「ユーキ、これは剣士だけには留まらない理論だよ。某・ピンクの髪の毛の歌姫も言っていた」

そう言ってユートは、右腕を挙げて人差し指を立て、天を仰ぐ。

「力だけでも、思いだけでも駄目だと」

「あ～、確かに言っていたよね～」

「他にも、某・眼鏡を掛けた元勇者も言っていた！　愛や優しさだけでは必ずしも他人を守れない時もあるのです。正義なき力が無力であるのと同時に、力なき正義もまた無力なのですよ……と」

「そ、それは何かが違う気がするけど。まあ、何を言いたいかは理解した」

村正の腕が幾ら良くても、玉鋼の品質が低ければ刀の品質も下がる。

逆に、どれ程の素晴らしい品質の玉鋼でも、扱う人間の腕が低ければ此方もまた品質が下がる訳だ。

「実際にさ、砂鉄と石炭は良いものを揃えたんだよ。でも玉鋼の品質は銑鉄だ」

ユートの魔法の力が低いから、材料ばかりが良くても玉鋼の品質は高くない。

「な～る、真理だね」

「せめて僕の腕がスクウェアなら、もっとマシな品質だったろうに」

「いや、六歳でトライアングルなら腕としては十分。刀を打つのに足らなかったってだけでしょ？」

変な拘りから、自らを卑下するユートを胡乱な表情で見ながら、ユーキは突っ込みを入れた。

「どの道、元服の年齢になったら村正なんて特上な刀を貰えるんだよね？　なら焦らなくても良いんじゃないかな？」

「それにしたって、少なくとも九年後の話だ。それまでの繋ぎとして、品質の高い刀が欲しかったんだよ」

「ああ、それでか。エルフのカウンターをどうすれば破れるとか、水の精霊をどう使えば交渉出来るかとか物騒な事を言ってたのは」

「まあね」

東方からの流入品を手に入れるなら、直接エルフの国に行って交渉した方が確実だとユートは考えた。

商人を通じてでは、何時になるかも判らない。

だから、自分で捜しに行こうと云う訳だ。

「兄貴、もう少し自分の身を大切にしてくれない？　お父様もお母

様も、家臣団もシエスタやメイド達も、それにボクだって兄貴の事を心配してるんだよ？」

「……ユーキ」

「コホン！　ほら、銃の扱いを教えてくれるんだろ？　早く見せてよ！」

真っ赤になったユーキ。

言ってて照れたらしい。

「照れ隠しか？」

「わざわざ言うなよな？　莫迦兄貴！」

そんな悪態を吐くユーキは耳まで紅い。

ユートはくつくつと笑いながら、トランクに容れてあった銀色のリボルバーを取り出して、カートリッジをセットする。

改造リボルバー。

銘は【アンブロシウス】

彼の、セラエノ断章の鬼械神（デウスマキナ）の名だ。

銃の形状が、魔導探偵が使う【イタクァ】と同じであることから名付けた。

弾丸には予め魔法を付与してあり、撃鉄を打たれるとバレルを通って、銃口から魔法が放たれる仕組みだ。

六連装だから、連続で六発放つ事が可能。

マスケット銃よりも装填が早い、カートリッジシステムを採用している。

手に入れた去年からゼロ戦共々、少しずつ改造をしていたユート渾身の逸品。

「ほら、ユーキ」

「サンクス、兄貴」

そして、ユーキは新たなる“力”を手に入れた。

「【アンブロシウス】は、一撃の威力より速度を優先した造りだ」

「まあ、原作でもそんな感じだったよね」

ラバン・シュルスベリィにより執筆された写本が存在するだけの、セラエノ断章のオリジナルたる石板。

セラエノ断章のオリジナルは、プレアデス星団の恒星セラエノの大図書館に在った破損した石板。

石板には【外なる神々（アウターゴッズ）】や、その敵対者に関する秘密の知識が刻まれていると云う。

内容は【旧き印（エルダーサイン）】やクトゥグアの召喚術法、黄金の蜂蜜酒の製法が記載されている。

また、【名状し難き者】や【星間宇宙を歩く者】と異名を取る【ハスター】や、他の旧支配者に関する知識が刻まれている為、シュルズベリィの執筆したセラエノ断章から、風属性のアンブロシウスという鬼械神を招喚出来る。

その知識の一部に……

ハスターの姿を見てしまった人間は、そのおぞましさの余り発狂してしまう為、正確なハスターの姿は判らないが、鱗のある蛸の様な姿だと綴られている。

ハスター自身は、ヒアデス星団アルデバラン（牡牛座）の暗黒星の湖黒きハリ湖に封印されており、この湖から出る事は出来ない為に、ビヤーキーという眷族に奉仕されているのだ。

そのハスターの眷族の一つが【イタクァ】で、【風に乗りて歩む者】という異名を持つ。

ユーキに渡された銀色の六連装式リボルバーのオリジナルは、機神咆哮（斬魔大聖）デモンベインで主人公の大十字九郎が使っていた銃でイタクァを術式として放つデバイスとして使用。

基本的には、一撃で全てを放って不規則な軌道で敵を翻弄する。

此方は魔法を詰め込んだだけの改造銃だ。

当然、そんな効力は無い。

「ね、ね、撃って良い？」

「的を用意するから、少し待ってくれ」

ユートはクリエイトゴーレムを使う。

『全ての命を育みし、母なりし存在、無限の大地よ。我が意に従い形と成れ！』

口頭ではルーンを唱えて、頭の中ではスレイヤーズの魔法詠唱を行っている。

「霊呪法（ヴ＝ヴライマ）」

力在る言葉を口に出して、大地に手を突いた。

指環……【アダマス】へと精神力を注ぎ込み、頭の中のイメージを術式に変換。

それは魔法と成って、それは形と成る。

土が盛り上がり、土の像を象（かたど）った。

それは数体の土人形。

【霊呪法（ヴ＝ヴライマ）】

大地の精霊（ベフィモス）に干渉し、ゴーレムを造り出す魔法。割と簡単に使えるのか、リナやナーガだけでなくゼルガディスなんかも使用可能。

「おおっ！」

パチパチと、ユーキは拍手をした。

実際に誰かが魔法を使うのは見た事はあるが、ユートがスレイヤーズ系の魔法を使用したのは初めて見る。

それに少し感動したのだ。

「それじゃ、アレを的にしてみようか？　土人形だから強度も低いし、試しには丁度良いだろう」

「うん！」

然し、幾ら精神年齢が見た目より高いとはいえ、四歳の子供に銃を持たすのは、果たしてどうなのだろう？

尤も、ユーキは嬉しいのか【アンブロシウス】を手にして、楽しそうな笑顔を浮かべている。

「取り敢えず、ゴーレムは動かさないから１０メイル程離れて撃ってみるか」

「オッケー」

ゴーレムから１０メイル離れると、アンブロシウスを構えるユーキ。

「腰が引けてる。もっと落として」

「こう？」

「それからサイティングは確りと、そのスリットから見える部分が命中するポイントだから」

「ん！」

ユーキはゴーレムに確りと照準して、トリガーを指に掛けた。

「よし、撃てっ！」

指先に力を籠めて、トリガーを引く。

ターーンッ！

軽快な音と共に、弾丸に籠められていた魔法が銃口から放たれる。

ただの【エアハンマー】ではあるが、それは圧縮術式で固まっており、それが解放されて空気の槌が土人形に向かう。

ズガンッ！

エアハンマーは、明らかに別の場所で炸裂していた。

「あれ？」

ユーキは目を点にして、的を凝視する。

「外れた？」

「外れたな～」

「何でさ！？」

剥れた表情でユートを見るユーキは、頬を脹らませて唇を窄めた。

「上半身がブレていた」

放つ瞬間、銃の反動で身体の上半身がブレてしまい、結果的に狙いが逸れてしまったのだ。

僅かなズレは、狙った位置に来た頃に大きく外れてしまう。

「立ち止まって、動かない相手に当てるだけがこんなに難しいなんて……」

「貸してみ？」

「ん……」

ユーキはアンブロシウスをユートに手渡す。

それを構え、銃口をゴーレムに向けると殆んど狙いも付けずにトリガーを引く。

ターーンッ！

やはり軽快な発射音を響かせて、圧縮されていた術式が飛翔しながら解放され、ジャベリンに変換されるとゴーレムに突き刺さった。

「な、何で？」

「前世で少しだけ銃を撃った事があるし、これでも鍛えてますから」

シュッと、響鬼のポーズを取りながら言う。

「ちょっ、撃ってた？」

「１８歳の時、高校卒業の記念に米国の射撃場に連れてって貰ってね」

一応、ライセンスも持ってはいたから。

「父さんが刑事で、教官の資格も取っていたからね」

だから、ユートはある程度の知識があった。

「んじゃ、今度こそ当ててやる！」

アンブロシウスを受け取って、再びゴーレムへと構えると放つ。

ファイアボールが放たれ、そして外れた。

「ま、僕も初めから当てるのは出来なかったよ」

苦笑を浮かべ、ユーキに銃の扱いを教える。

それこそ手取り足取り。

カートリッジを六つ、空にした頃には何とか当たる様になった。

「ハァー！」

溜息を吐き、座り込む。

「ほら、ユーキ！」

流石に疲れたのか、疲労感が漂うユーキに乾いたタオルを投げ渡し、ブドウ糖を含有した甘めの水が入った缶ジュースを渡してやる。

「サンクス」

汗だくで、薄布で出来ている服はベタ濡れとなって、身体にピタリと張り付いてしまっていた。

「うえ～、気持ち悪ぅ～」

「体力が無さ過ぎだろう。少しは鍛えないとまともに撃てないぞ？」

「あう～、少しランニングするかな？」

ユーキは涙目になり、笑う膝を押さえながら脹ら脛を揉む。

「シエスタにマッサージをして貰ったらどうだ？」

「上手いの？」

「武雄翁や祖父母のマッサージを、よくしていたって言ってたよ」

「へぇ？　お兄様ぁ～？」

「何だよ？」

ユーキが“お兄様”と呼ぶのは誰かが他に居る時と、ユートをからかったりお強請りをする時。

「それを知っているってこ・と・はぁ、もうして貰ってるんだ♪」

「うっ……」

ユートは真っ赤になってしまった。

「そういえば、良かったのか？　お父様は五歳になってからって言ってたんじゃなかったっけ？」

「ああ。だけど、改造した銃の調整には、どうしても使う者が撃たない事には、どうにもならないからな。父上を説得したんだよ」

確かに、サリュートからは銃を渡すのは五歳になってからと言われたが、後になって気が付いた。

改造後の調整が、ユーキ無しでは出来ないと。

そこで、アンブロシウスに改造した後、ユートは早速サリュートに頼む。

ジョゼットの銃の練習は、魔法に先駆けてやらせて欲しいと……。

サリュートは渋い表情になったが、ユートが責任持って視るならと、許可を何とか取り付けた。

「そうだったのか」

ユートから説明され、納得したユーキはアンブロシウスを大切そうに持ち、右腰のホルスターに入れる。

どうやら、図らずも兄妹の絆が育ちつつあるらしい。

本人達が、今の肉体に引っ張られていると云う事もあるのだろうが、ユートの兄としての気遣いが前世では兄弟の居なかった祐希に、凄く擽ったかったのだ。

加えて、前世でお年頃な妹を優斗は持っていた上に、割と兄バカだった事も手伝って、妹への気遣いがバッチリだと云うのが正直大きいだろう。

血の繋がりこそ無いが、初めて兄をもったユーキと、嘗て妹を持っていたユートは存外上手くやっていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ユーキの初訓練も終えて、汗だくになった2人。

「兄貴、お風呂入ろ？」

「そうだな～」

夕餉までまだ時間がある。

先に風呂に入るのも良いだろうと、ユートは何気無く返事をした。

「んじゃ、行こ！」

「は？」

いつの間にか、腕を組まれてズルズルと引っ張られている。

「いや、待て！　別々に入るんじゃないのか？」

いつもそうしているのに、何故に今になって一緒に入ろうとしているのか？

多いに疑問なユート。

「兄妹だし、この年齢なら気にする事も無いよ」

「か、確信犯！？」

「大丈夫、ボクは前世で飽きるくらい見ているから」

「何をっ！？」

「ナ・ニ・を♪」

クスクスと笑いながらも、ガッチリと組んだ腕を放す事はない。

「あの、何をなさっているんでしょうか？」

廊下で兄妹とはいえ、腕を組んで歩いて……否、兄妹だからこそ何故に腕を組んで歩いているのかと、胡乱な瞳でユートを見つめるのはシエスタだった。

「あ、丁度良かった。これから忙しい？」

「は？　いえ……」

突然のユーキの質問に戸惑いながら答える。

シエスタは基本的にユートの専属。

詰まり、命令権の第一位はユートにあった。

勿論、サリュートやユリアナが命じれば応える義務もあるが、その時にユートの命令を遂行中なら、そちらが優先される。

実質、シエスタや武雄翁やガリアからの亡命者で邸に居る者達は、ユートが稼いだお金で俸禄が支払われていれからだ。

だから、ユートが何か命じなければ、シエスタは暇で仕事をする事も無い。

体裁が悪いから、他の人から仕事を貰うくらいはするが、シエスタの仕事は飽く迄もユートの命令が優先されるのだ。

それに、この時間はメイドの仕事も特に無い。

メイドの仕事は、それぞれに粗方は割り振られている為、忙しいのを手伝うならまだしも、そうでないなら徒に仕事を奪う結果になっ

てしまう。

シエスタがこの廊下を歩いていたのも、そろそろ夕飯だから使用人用の食堂へ向かおうと思ったからだ。

だから、主たるユートから命令を受ければ、食事より命令の遂行を優先する。

「これから食堂に行こうと思っていただけですから、御用なら伺います」

「んじゃね、ボクとお兄様はこれからお風呂に入るからさ、シエスタも一緒に入らない？」

「……」

シエスタの頭（ＯＳ）が一瞬フリーズした。

「（今、ユーキ様は何と？　ご主人様とお風呂って？　しかも、私も一緒に）」

フリーズしていても目紛るしく思考は働いているらしく、高速で思考の淵を考えが右往左往している。

Ｑ：２人が一緒に入浴？

Ａ：２人きりにさせるのはＮＧだ。

Ｑ：自分も入浴……？

A：ご主人様と入るのは恥ずかしいけど、ご命令ならメイドの仕事です！

Q：ご主人様に肌を視られるのは？

A：少し恥ずかしい。

Q：ご主人様の裸を視るのは？

A：寧ろご褒美です！

ファイナルアンサー？

「“是非”ともご一緒させて戴きます！」

そう言って、バスタオルや着替えを取りに向かう。

その間、ユートの方もＯＳがフリーズして、知らぬ間に浴場まで連れてこられていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「な、何故こんな事に？」

「何か仰いましたか？」

「何も……」

「そうですか」

今、ユートの後ろに声の主であるシエスタが居た。

バスタオルを肢体に巻き付けて、ユートの背中を粗布で擦っているのだ。

詰まり、背中を流している真っ最中。

呆けていたら、いつの間にか浴場に来ており、ノロノロと服を脱いで入ったら、シエスタが入って来た。

顔を真っ赤にしたシエスタが、吃りながら言った台詞はユートにも驚愕の一言。

『お、お背中、お流し致しますね？』

因みに、ユーキはそんな兄の姿を笑いながら見物していたりする。

「ご主人様、痒い所はございませんか？」

「な、無いよ！」

丁寧に背中を擦り、全くと言っていい程不備は無い。

言葉通り、痒い所に手が届く細やかな気配り。

腕も、脚も、耳の裏や首筋に、背中越しに胸元や腰に至るまで細部に渡って確りと擦ってくれた。

更には胯間迄も……

「（ん？　胯間……？）」

ハタと気が付き、見てみるとシエスタの手が胯間へと向かっている。

「って、わぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？　シエスタ、其処は自分でやるから！」

「え？　そうですか？」

何処と無く残念そうに聞こえるのは、きっと気のせいだと思いたい。

布を借りてユートは自分で股座（またぐら）を洗う。

その間に、シエスタは髪の毛を洗ってくれた。

最後にお湯を全身に掛け、泡を流して終わる。

「それじゃあ次はユーキ様ですね」

「へ？　ボクは自分でやるからいいよ……」

「駄目です。これはメイドたる私の仕事ですから」

結局、ユーキも洗われてしまった。

最終的にユーキはシエスタと、互いに洗いっこをしていたりするが、流石に恐縮している。

湯船に浸かり、溜息を吐くユート。

「私、貴族様の浴場なんて初めてです」

「別に使用人の浴場と大して違わないだろ？」

「そうですね、ユーキ様。装飾は多少、華美ですけど余り違いはありませんね」

ド・オルニエール家では、邸を改築して食堂や浴場を二つに分けている。

貴族用と使用人用だ。

使用人用は男女にも分けているが、貴族用は特に分けてはいない。

貴族と使用人で分けるのも客が来た時の配慮と、流石に妻の肌を使用人とはいえ見せたくないし、浴場の中でのあれこれも視られたくはなかったのだ。

ホカホカと湯気を上げて、３人は風呂を出ると水分を拭き取って、新しい服に着替える。

「では、ご主人様。結構かお手前でした」

一礼するシエスタの顔は、未だに紅い。

「結構なお手前って、いったい何が？」

「クックッ、ナニがだろ」

最後の最後まで、ユーキにからかわれてしまうユートだった。

.

第１６話：無垢なる刃の片鱗　と無垢なるメイドの仕事（後書き）

・

少しずつタグを解放。
ユートはスレイヤーズで、ユーキはデモンベイン。

こんな感じです。

第17話：ヴァリエール家の来訪（前書き）

・

ヴァリエール家再び。

第17話：ヴァリエール家の来訪

・

「どうです、ご主人様？」

「ん、気持ち良いよ」

「でしたら此処などはこうして、こうです♪」

「うわ、シエスタは本当に上手だよ！」

「はい、ご主人様」

割かし艶っぽい会話だが、やっている事は単なるマッサージだ。

夕餉の後、ユートは激しく動いて筋肉が疲労している為、シエスタの按摩を受けているのだ。

流石は、祖父母や曾祖父に四歳の頃から“お手伝い”の一環として、マッサージをしていただけあり、巧妙な手管で揉んでくれる。

明日への疲労を残さぬ為、適度な按摩はスポーツでも普通の事。

按摩を確実に身体へと伝える為には、厚手の服ではいけない。

薄い服……寧ろ、上半身を裸で受けた方が芯まで伝わるものだ。

お陰でシエスタの肢体を、全身で感じていた。

もうそろそろ、こういったイベントで下半身の一部が自己主張を始めるのでは？　と、ユートも少し困ってはいるが、男の子としては嬉しいもの。

なので、ついつい心地好さに浸ってしまう。

一方のシエスタは、主たるユートが自分を求めて（性的な意味に非ず）くれるのが嬉しかった。

恐ろしい貴族様という括りで、フィルターを掛けて見ていたから初めて会った時は恐怖したものだが、他の貴族様とは明らかに違う、そんなご主人様に今は懸想すらしている。

お父さんが確認したから、ご主人様のお手が付くのも仕事の内。

約束が有るから、１６歳に成るまではそうならないのだろうが、逆に言えば既に“売約済み”だとお墨付きを貰った様なものだろう。

平民である以上、大きな夢を視る心算は無い。

それでも、許されるならばご主人様の下に、メイドとして在り続けたかった。

２人は何の約束も無いし、あらゆる契約もしない侭で主従であり、男と女であるといえた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ジョゼットとして転生して以来、ユーキは愉しい人生を送っている。

15年はあの退屈な修道院で、鬱屈とした毎日を送る事になると覚悟していた。

実りも展望も期待出来ず、未来など夢見る事すら烏滸がましい人生。

前世で莫迦をやって、彼女を置いてきぼりにして死んだ自分が、何の因果か転生の権利を得た。

「ま、別の世界の自分との因果なんだけどね」

【ゼロの使い魔】の世界へと、二次小説よろしく転生するに当たって、能力を貰える事になり虚無を選んだ訳だが、虚無は既存している誰かに憑依転生する以外に使う術が無いと言われ、ジョゼットを選んだ。

選んだ時点で、鬱屈とした人生が約束されている訳だが、それをぶち破った人が居た。

それが、ユート・オガタ・ド・オルニエールだ。

自分が味方と成るべき相手にして、同じ転生者。

殆んど成り行き任せだったが、ジョゼットの身分を鑑みてユートと兄妹となる。

転生前は兄弟なんて居なかったから、それが少しだけ嬉しくて愉しい。

成る程、ジョゼットが何故【竜のお兄様】に執着したのか、正直に言えば判らなかった。

だが、今なら解る。

あの地獄から救い出してくれた【お兄様】だからか、自分も同じ立場になったから理解出来た。

ジョゼットにとっては【竜のお兄様(ジュリオ)】が、自分にとってのユート。

その感情の向かった先が、恋愛か兄妹愛かの相違は在れど、その過程が全く同じだったから。

「うん、だからお兄様……ボクは君の味方なんだよ」

隣室で兄の艶かしい声が聞こえる中、笑顔を浮かべてユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールは呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ふむ、収支報告はこれで終わりかね？」

「はい、旦那様」

執事長のルーカスと話し合いをしているサリュート。

内容は今月の収支報告。

幾つかの事業を３０年間、色々と考えて行ってきたものだが、去年から息子であるユートが考案した事業に手を付けてみた結果、経営は以前より上向いていた。

製紙法の確立、印刷技術の確立、出版業界の設立。

紙自体の売れ行きも美味しいが、印刷技術による本の増産体制の強化。

それによる本の値下げと、一般大衆への深い受け容れは平民が本を読むという、今までなら有り得ない状況への素地を作った。

平民に対する簡単な文字の習得授業を、出版している本を教科書代わりにする事で効率化を図り、文字を読める様になった平民を雇う事で雇用対策も出来る。

仕事をして給金を獲た平民達は、出版された本を買って広めていく。

金が回れば、領内の税収も必然的に上がる。

直ぐには結果が出なかったが、半年間も続けていくと明らかに税収は上がった、

領民の懐を潤し、商人の懐を潤し、最終的に領主たる自分達も潤う。

その螺旋構造は、無意味に領民を取り立てたりするよりも長続きする。

最近では缶ジュースやクーラーボックスなど、割りと売れていて税収も本当に上向いていた。

また、事業の拡大に伴って領民の中からも、どんどん雇用している。
魔法の要らない部分が多々あり、それを魔法の使えない領民に任せていった。
ユートがガリアから連れて来た女性や少女達、彼女らもまた貴重な戦力だ。
暫く後に、温泉郷の展開が始まる。
これも新しい事業となり、領内は更なる活気に充ち溢れてくれる事だろう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「父上、お呼びと聞きましたが何かご用ですか？」
「ああ」
ユートは父、サリュートから呼び出しを受け、執務室へとやって来ていた。
サリュートは走らせていた羽ペンを置き、ユートへと向き合うと本題に入る。
「ラ・ヴァリエール公爵より書状が着てな、それがお前宛てだったのだよ」

「公爵……？　ピエール様からですか」

ユートは、サリュートから手紙を受け取ると封筒から手紙を出す。

其処には、ある意味で予想通りの内容があった。

要約するとこうだ。

『久し振りだなユート君。以前した約束を覚えているだろうか？
単なる口約束というよりは戯れ言に近いものだったが、少々ウチで問題が発生したのだよ。
五歳になったルイズが魔法を習い始めたが、その悉くを失敗してしまう。故に、恥ずかしい話だが優秀な君に、一度ルイズを視て貰えないだろうか？』

……というモノだった。

ユートは手紙を読み終わると、丁寧に折り畳んで封筒に再び仕舞うとサリュートに言う。

「父上は手紙の内容をご存知でしたか？」

「一度、公爵から相談を受けてな。お前に話してみる事を提案した」

「そうですか……」

ユートは暫く黙考すると、結論を話す。

「父上、ヴァリエール公爵家族をウチの温泉郷に招待して下さい」

「な、何？」

「名目は、ミズ・カトレアの湯治という事で」

既に温泉郷は半ばまで完成を見ている。

現在は、総女将のセシリアが中居や料理人を鍛えている真っ最中で、料理や部屋は直ぐにでも準備が出来ていた。

「その小旅行の間に、僕が訓練を付けます」

「成る程、対外的にはただの旅行。ルイズ嬢の魔法の事は公にならんと云う訳だな」

下手にユートを呼び付ければ、要らぬ詮索をする者も出て来る。

それこそ、ルイズの魔法とは無関係で、しかも事実無根な話が広まりかねない。

「判った。ラ・ヴァリエール家へ招待状を贈ろう」

ユートの考えを理解して、サリュートは確り頷いた。

「ほう……」

「どうしました、アナタ」

金髪にモノクルを掛けた髭の紳士が、真剣に読み耽る一通の手紙。

その内容に感心したのか、感嘆の溜息を洩らす。

夫の動向が気になったのだろう、ピンクブロンドを掻き上げ、赤色に窮めて近いピンクの服を着た女性が、話し掛けた。

紳士の身分ははヴァリエール公爵、名前はピエールという。

夫人の名前はカリーヌ・デジレといい、身分はヴァリエール公爵夫人だ。

ラ・ヴァリエール夫妻は、三女のルイズが魔法を習い始めて頭を抱えていた。

長女がトリステイン魔法学院に行き、次女は病の影響で引き隠りがちになって、魔法で構う相手が三女であるルイズだけとなった為、家庭教師を雇って魔法を習わせたのだ。

然し、ルイズは座学の成績こそ良かったが、いざ実践となるとその全てに於いて失敗する。

理屈こそ解らないものの、兎に角爆発するのだ。

念力……ドカーン！

施錠……ドカーン！

解錠……ドカーン！

灯り……ドカーン！

コモン・マジックの悉くを爆発させていた。

仕方がないので、系統魔法を先にやらせてみる。

発火……ドカーン！

凝縮……ドカーン！

錬金……ドカーン！

ウインド……ドカーン！

基本となるごく簡単な魔法を使わせて、やはり悉くが爆発に終わる。

もう意地になり、ルイズが魔法を精神力の限界まで放つ為、庭中がクレーターだらけになっていた。

その都度、部下の土メイジに言って庭を修繕させる。

三女とはいえ、公爵家令嬢たるルイズが魔法の失敗を繰り返す。

余りにも風聞として悪い。

其処で、ヴァリエール公爵は起死回生の一手として、去年のカトレアの誕生会に来ていた少年に相談した。

「去年のカトレアの誕生会に来ていたサリュートと、ユリアナ殿の息子を覚えているかい？　カリーヌ」

「ユート君ですわね。鍛え甲斐のある子でしたわ」

ヴァリエール公爵だけではなく、カリーヌもまた自身の後継者が居ない事に嘆息していた。

昔は女だてらに騎士を目指して都に上がり、わざわざ男装をしてまで動く。

紆余曲折あって、フィリップ三世陛下から騎士叙勲を受け、シュヴァリエとなる事が出来たカリーヌ。

その事は、誇りにすら思っている。

尤も、思い出すのも憚る様な黒歴史もあったが。

とはいえ、それを娘に期待出来る訳も無い。

明らかに学者肌の長女。

病弱な次女。

魔法の使えない三女。

まあ仮令、資質があったとしても娘に昔の自分と同じ真似は、決してさせなかっただろうが。

そういう、後継者的な意味では息子が欲しかったと考えても無理はない。

息子なら、“多少の無理”では壊れないだろうし……

「それで、ユート君がどうしました？」

「うむ、ルイズの事で相談してみたのだよ」

「ルイズの事で？　ですが幾ら何でも、未だ六歳程度の子供ではアレを解明出来るとも思えませんが」

魔法の才能は確かに豊か。

始めて間もないユートが、既にラインに届いていると聞いた時は、カリーヌとて驚愕したものだ。

だが、実践と理論はまた別物だろう。

どれ程に優れた論理展開が出来ても、魔法の才能が無ければ実践は出来ないし、その逆もまた然りだ。

「ワシもそう思うよ。だがね、娘の為に打てるならばどんな手段も講じたいと、そう思ってもいるのだよ」

「アナタ……」

それはルイズの魔法の話しだけではなく、カトレアの病に関しても同じ事。

金が掛かろうが、異端に触れようが、カトレアの病を治せるならばあらゆる手を考えたい。

本当に治したなら、地位も財産もくれてやるくらいの意気があるのだ。

娘をやるのは業腹だが。

「読んでみなさい」

「では、失礼しますわ」

ヴァリエール公爵から手紙を受け取り、カリーヌ夫人はそれを読み始める。

「これは……？」

内容は、完成した温泉への招待状であり、その遊興の間にルイズの魔法を見るといったモノ。

「真逆、カトレアの事まで気遣ってくれるなんて」

そう、温泉自体はカトレアの為の湯治。

ルイズだけでなくカトレアの事も併せて考えた上で、招待状を贈ったのだ。

「温泉とやらで、カトレアの病が治る訳ではあるまいが、症状の緩和にはなるやも知れん」

「更に、ルイズの魔法の面倒まで……」

ヴァリエール公爵は、彼の気遣いに感謝した。

カリーヌ夫人も、此処までしてくれたのだから、年齢が達したら確りと特訓をして上げようと考える。

ヴァリエール公爵は兎も角としても、カリーヌ夫人の場合は明らかに恩を仇で返している気はするが、本人は恩返しの心算で悪意など全く無いのだから、質が悪いとしか言えないだろう。

同じ頃、ユートの背筋に震えが奔ったのは言うまでもあるまい。

「ジェローム！」

「は、旦那様」

「カトレアを呼びなさい」

「畏まりました」

執事長のジェロームに娘を呼びに行かせ、自身もまた庭で破壊活動の……元い、魔法の練習に勤しむルイズを呼ぶべく立ち上がった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日の内にヴァリエール家が所有する馬車が邸より走り、家族が簡単な小旅行を行った。

一応、鷹を使って招きに応じる旨を手紙に認め、先触れとして送ってある。

「お父様、何故この様な時期に旅行に？」

魔法を習い始めて、それが失敗ばかりのルイズとしては、少しでも練習（という名の破壊活動）をしたかったのに、旅行先では練習も儘ならない。

「なに、少しは息抜きをせねば上手くいくものもいかなくなる」

「そうですよルイズ。根を詰めれば良いという訳では無いのです」

ヴァリエール公爵と夫人に言われ、項垂れるルイズ。

煮詰まっているのは確かではあるし、魔法の練習（破壊活動）も余り上手くいっていない事実がある。

そんなルイズの頭に手を乗せ、撫でてやるカトレア。

「ちいねえ様」

「小さなルイズ、私も少し心配よ。最近の貴女、鬼気迫る感じだもの」

「は、はい……」

優しい姉に心配を掛けていた事を知り、頬りに反省をしてしまう。

とはいえ、実はカトレアは少しだけ浮かれていた。

自分を一瞬で魅了した宝石を造った男の子。

ルイズより一歳上でしかなく、自分より七歳も年下。

だけど、彼に会えると聞いてカトレアは一もなく二もなく喜んだ。

カトレアの胸元には、十二という年齢（未だ誕生日を迎えていない）としては、破格の双丘を飾る紫の輝きが光る。

その輝きを、カトレアは優しく見つめていた。

パカラン、パカラン……

馬の蹄の音が、軽快に木霊している。

その癖、馬車の車輪の音は大した事もなく、静かなものだった。

「余り揺れなくなりましたわね」

「そうだな」

カリーヌ夫人の言葉に応えるヴァリエール公爵も、不思議に思う。

ド・オルニエール領に入った途端、揺れや音が最小限にまで減ったのだ。

オマケに、蹄鉄の音は大きく響く。

まるで石の上でも走っているみたいに。

暫く馬車を走らせていると屋敷が見える。

「あれがオガタ家の屋敷ですか？」

カトレアが外を眺め、父である公爵に訊ねた。

「うむ、昔からの屋敷を全面的に改築したらしいな。だから、基本的な構造は同じだと言っておったよ」

最近は公務もあり、来てはいなかったが昔は招待を受けて行く機会もあった。

その際に、サリュートから説明をうけていたのだ。

屋敷の庭に入ると、夜中だというのに随分と明るい。

庭には、オガタ家の当主であるサリュートを中心に、家族や住み込みの臣下一同で出迎えて来た。

「よくおいで下さいましたな、ヴァリエール公爵」

「うむ、此度はご招待痛み入る」

当主同士、挨拶を交わす。

「これはヴァリエール公爵夫人、いらっしゃいませ」

「この度はお世話になりますね、オルニエール子爵夫人」

夫人同士も挨拶を交わしている。

当然ながら、ホスト側であり家格も下な子爵家の息子であるユートも、公爵家の子女たるカトレアとルイズを歓待する。

「いらっしゃいませ、カトレア嬢、ルイズ嬢」

「ユート君、お世話になるわね」

「お、お世話になるわ」

ニコニコと笑顔を浮かべたカトレアと、少し怖ず怖ずと挨拶をするルイズ。

未だ幼いからか、人見知りしているらしい。

「それとご紹介しますね。僕の義妹です」

後ろに控えていた銀髪少女を前に出す。

予め言われていた為、少女は直ぐに自己紹介をした。

「初めまして。ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールと云います」

「まあ、ユート君に妹が居たの？」

「はい。年齢は四歳なのでルイズ嬢の一つ年下になりますね」

「宜しくお願いします」

「ええ、宜しくね♪」

「よ、宜しく……」

深々と頭を下げたユーキを見て、カトレアは笑顔で挨拶するが、やはりルイズは何処か自信無さげだ。

ユートもユーキもその理由は思い当たる。

習い始めて間もないとはいっても、まるで成功しない魔法。

公爵家の娘として、自信を無くし掛けているのだ。

これでは、将来のルイズに残るのは無駄な公爵家令嬢としてのプライド（驕り）くらいだろう。

否、それしか残りようが無かったのだ。

貴族＝魔法至上主義封建世界であるハルケギニアで、魔法をまともに扱えないなど在ってはならないから。

少女はどれ程、社会構造に傷付けられて歪められたのだろうか？

前世では魔法が存在せず、今生では神（なのは）から与えられた能力故に、大きな苦労をしなかったユートには、計り知れない感情に焼かれていたのだろう。

ユートに同情などする権利も資格も無いが、少しくらいの介入は許されて良いだろうと考えた。

「では、屋敷をご案内致しましょう」

いつの間にやら大人の話は終わったのか、屋敷に入る段階に来てい

たらしい。

ユートはカトレアとルイズを、客間へと案内した。

夕餉も終わり、明日の予定を話し合う。

「明日、件の温泉郷へ案内しましょう」

「うむ、楽しみにしているぞサリュート」

軽く酒を飲み、赤い顔をして話している辺り、そろそろ子供だけになっても良さそうだ。

「母上、僕達も部屋に戻りますね」

「ええ、お二方を宜しくねユート」

「はい。それではカリーヌ様、今宵は御前を失礼致します」

「そうですね、娘の案内を頼みましたよ」

ユートは挨拶をして、二階へとカトレア達を案内する事にした。

「こちらがカトレア嬢達の泊まる客室です」

開けると、確りとベッドメイクされた大型のベッドが用意されている。

普段、ユートもユーキも使わないサイズだが、ルイズはカトレアと寝るのだろうから用意させたのだ。

今日はもう寝るだけ。

明日は温泉郷に行き、温泉に浸かったり魔法の練習をしたりと忙しくなる。

英気を養う意味で、キッチリと寝ておく心算だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「兄貴、明日はルイズの魔法を視るんだろ？」

「そうなるな」

「良かったのか？　下手すると、原作からかけ離れてしまう」

ルイズの性格が丸くなればそれだけ、原作とは違った展開になる。

「多少は問題無いさ。世界の修正力は半端じゃないだろうし、因果率が神格化された宇宙意思からも警告なんか来てないしね」

「因果率が神格化？」

昔の神の中でも、地球独自の神とは基本的に自然現象を神格化した【顕象】と呼ばれる存在だ。

人間というノイズ無しで生まれ、故にこそ正しく神化した為、絶大な力（本能）と心（理性）を持っている。

その中でも、神界や魔界を治める最高指導者はやはり強大な力が有る。

それはハルケギニアも無縁ではない。

因果率が神格化された存在である宇宙意思は、世界の崩壊を防ぐ事はしない。

然し、余りに突出してしまうと修正力を以て行動制限をしてくる。

ある意味では公平だと言えるし、別の意味では不公平とも言える存在だ。

因みに、神格は【純白の天魔王】など及びも付かない程の高位に当たる。

「ふ～ん、やり過ぎなら判るんだ？」

「水の精霊王の地上代行者に成ったからかな、少しだけど世の理（ことわり）ってヤツが視えるんだよ」

「成る程ね」

ユーキは納得したのか、部屋へと戻る。

「じゃ、兄貴。お休み」

「ああ、お休みユーキ」

ユートもまた、部屋へと戻っていった。

.

第17話：ヴァリエール家の来訪（後書き）

・

次回はルイズの魔法訓練。
そしてお約束？

第１８話：特化型メイジ（前書き）

.

風の聖痕も少しだけですが関わってきます。

第１８話：特化型メイジ

・

翌朝、ユートが目を覚ますとその隣には、寝る前には居なかった筈の盛り上がりが在った。

「……」

大粒の汗を流し、茫然自失となってその盛り上がりを見つめると、掛け布団を剥ぎ取る。

其処にはメ、イド服を着た黒髪ボブカットの少女が、ユートの腕にしがみ付いて眠っていた。

「し、シエスタ……」

“あの日”以来、シエスタは本当に添い寝をするようになり、ユートをドギマギさせている。

今は幼いから未だ良いが、相応に成長したら襲ってしまいそうで、自制心を働かせなければ危険だ。

勿論、普通の貴族なら厳罰どころの話ではないのだろうが、ユートだから許されていた。

シエスタとしては、いずれお手付きになるのならば、慣れておきたいのだろう。

この歳で既に其処まで考えているのは凄いが、世界情勢を鑑みれば

平民は当たり前に知識が在った。

貴族は平民を塵芥と視ていながら、少し容姿が気に入れば平然と手籠めにする。

早い内から知識を与えるのは、寧ろ当然の事だ。

そんな訳で、割りと覚悟完了なシエスタは、ユートから何時お呼びが掛かっても良いように、ユートの蒲団に潜り込んでいた。

少なくとも、ユートは約束通りに１６歳までは手を出さないが。

つまり、あと１０年は時間が有ると云う事だ。

その頃には、覚悟完了を通り越して掟破りの逆夜這いくらいはして来そうで、今から戦々恐々てしている。

「シエスタ、そろそろ起きようか？」

身体を揺すり、シエスタを起こすユート。

ハッキリ言って、アベコベである。

本来は、メイドのシエスタがご主人様を起こさねばならないのだ。

「うん……？」

朝日に目を焼かれ、心地好い揺れに目を覚ました瞬間に、ガバリと布団を跳ね避けて真っ赤になる。

「ゆ、ゆ、ユート様っ？　わ、私ってば何て粗相を……っ！」

「良いから、落ち着け！」

「はうっ！？」

取り敢えずは、シエスタのド頭にチョップを喰らわせて黙らせた。

「着替えるから、シエスタは手伝ってな？」

「か、畏まりました！」

慌ててタンスから服を取り出して、ユートの着替えを手伝った。

これがシエスタの朝の日課だったりする。

着替えの手伝いがだが。

誰よりも早く起きたユートは、庭で木刀を振る。

早く身体を慣らして、本来なら使える剣技を再現するべく頑張っていた。

次に起きてくるユーキも、やはり運動を始める。

少しは鍛えておかないと、折角の拳銃（アンブロシウス）が使えない。

言わば基礎体力作りでしかないが、やらないより幾分かはマシだろう。

「お兄様？」

「何かな？　ユーキ」

2人っきりでの“お兄様”発言ほど警戒するモノも無いユートは、若干引き攣りながら訊ねた。

「シエスタの温もりはどうだった？」

「っ！？　真逆、ユーキの差し金か！」

今朝を思い出し、顔を朱に染めて怒鳴る。

変だとは思った。

何時もなら、シエスタが布団に潜り込んで来るのは、寝る前の事。

既に寝ている状態では流石に入って来ない筈が、今日は潜り込んでいて吃驚したのもだった。

ユーキの差し金（悪魔の囁き）なら成る程、確かに有り得るかも知れない。

「クスクス、お兄様の理性が早々と崩壊しないと良いね？」

「ユーキィッ！」

ユートは逃げるユーキを、木刀片手に追い回す。

ユーキはユーキで、キャーキャーと言いながら笑顔で逃げていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

鬼ごっこも程々に、ユートは風呂で汗を流すと食卓に着く。

出された朝食を、ヴァリエール家と合同で摂り、紅茶を飲んで朝礼を開始した。

「今朝はヴァリエール家と一緒に朝礼を始めます」

議長のサリュートではなく副議長たるユートが司会をして、話を進めていく。

「先ず、昨夜はそこそこの紹介だった義妹、ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールを、ヴァリエール家の皆様に改めてご紹介致します」

言われて立ち上がる。

「改めて初めまして、只今ご紹介に与ったユーキ・ジョゼット・ド・オルニエール、四歳です。宜しくお願いします」

一応、昨夜の内に粗方の事は説明してあり、ピエールとカリーヌには本当の事も言ってあった。

その為、特に疑問も無い侭に朝礼は進む。

本日の朝礼の最大の焦点、それはユーキの事では無いという事もあ

る。

「今日から五日間、温泉郷へと赴いて、カトレア嬢の湯治を行います。また平行して、ルイズ嬢の魔法訓練も行う予定となります」

「え？」

其処を聞いていなかったのか、ルイズが吃驚した表情でユートを見て、文句を言おうと立ち上がるが……

「尚、これはピエール様とカリーヌ様もご承知です」

「っ！？」

……こう言われては、従うより他に無かった。

朝礼も終わり、三台の馬車で温泉郷に向かうべく外へ出て、ヴァリエール公爵は改めて驚く。

それは道。

黒い道。

石の様な黒い道が、敷き詰められていた。

「サリュートよ、この道は一体何なのだ？」

「ユートによると、道路と云うらしい。アスファルトと呼ばれるモノを敷いて、強固で安定した道を造り出した様だ」

「真逆、これもユート君がやったのかね？」

「ああ」

自然破壊をしない為にも、アスファルトを敷いているのはメインストリートと、温泉郷への道だけだ。

これにより、馬車は安定した走りが可能となったし、雨でぬかるむ事も、凸凹になる事も無い。

石畳の様に、壊れて欠ける事もなかった。

勿論、経年劣化はあるだろうが……

こうして、ヴァリエール家とオガタ家は、然したるトラブルに見舞われる事も無く温泉郷に向かう。

因みに、従者として何人かのメイドも連れている。

カトレアは早速、温泉へと向かった。

やはり心配なのか、一緒にカリーヌも付いていく。

案内を勤めるのはセシリアで、既に女将が板に就いている。

中居がまだまだ半端なモノらしく、大貴族を案内するには何かと不備があると云う事で、女将が自ら案内を買って出たのだ。

流石は元メイドだけあり、その接待能力は高い。

とはいえ、やはり心配な事もあった為聞いてみた。

バカ貴族の強姦で痛い目を見たのに、また貴族を相手に接待する事に隔意は無いのか……と。

それに関しては、仕事だと割り切っているらしい。

確かに、決して安くない給金を払っているのだから、隔意で接されても困る。

だからと言って、お触りがアリの風俗では無い訳で、それ込みの給金では無いのだし、余り割り切り過ぎる必要性も無い。

嫌な事は嫌だと言っても良いし、杖の持ち込みは基本的に禁止してある。

当然、従業員の人権も守られた職場にする心算だ。

その為の言わば、用心棒も必要だと考えていた。

それは兎も角、セシリアの話では温泉に2人共、十分に満足しているらしい。

当然と言えば当然。

水の聖痕の力をわざわざ使って、温水に水の精霊王の祝福を附与してある。

流石にカトレアの病を完全に癒す事は不可能かも知れないが、それでも病で受けたダメージをある程度緩和出来る筈だ。

少なくとも、湯治の間は病の症状も出ないだろう。

ユートが個人的に嬉しかったのは、カトレアが掛けていたペンダント。

去年、彼女に贈った物だ。

プラチナの台座に、紫水晶を嵌め込んだあのペンダントを、カトレアは大事に着けてくれていた。

『カトレア嬢、ペンダントを着けてくれてるんだ？』

『だって、ユート君がくれた初めてのプレゼントだったから』

はにかみながら言ってくれた言葉に、自然と顔が熱くなる。

製作者冥利に尽きるのか、それとも別の感情なのかは判断出来なかったが、自分の顔が真っ赤になっている事は理解していた。

そう……感情の行方はどうあれ、嬉しかったのは紛れまない事実だったから。

問題が有ったとするなら、それはニヤニヤと口角を吊り上げていたユーキの事、それから何故か口を利いてくれないシエスタの事だろうか？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

シエスタは思う。

思考の淵で。

私は所詮、平民の娘。

やっぱり貴族は貴族同士、平民の小娘なんて入り込む余地は無いよね。

ご主人様、カトレア様を見て顔を赤くしてた。

それに、カトレア様が掛けているペンダント、あれはご主人様が造って贈った物らしい。

ちょっと、ううん。

凄く羨ましい。

貴族に生まれたかったなんて、そんな贅沢は言う心算なんて無い。

だって、平民でタルブ村に生まれたからご主人様とも出逢えたんだから。

平民にも変わらずお優しいご主人様、せめて好きでいさせて下さいね？

だから、少しだけ嫉妬しても良いですか？

１６歳になったら、一度だけで良いので、ご主人様のお情けを下さい。

ちょっと暴走気味だった様だが、シエスタは胸の埋でそう思っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ユートとルイズとユーキの３人は、ユートが温泉を造っていた頃、訓練に使っていた広場に居る。

ルイズの魔法を見る為だ。

「じゃあルイズ嬢、一度魔法を見せて貰えるかな？」

「待って！」

「？　何かな？」

「その前に、ルイズ嬢っていうのをやめて欲しい」

ルイズは少し困った表情で言って来た。

「曲がりなりにも教えを乞うんだもの、ルイズって呼んで……」

「でも、ルイズ嬢の家庭教師はミス・ルイズか、若しくはルイズ様って呼んでなかったかな？」

「呼んでたけど、その……う～～～っ！」

何故か真っ赤な顔で、手足をジタバタさせる。

「！　それじゃ、ルイズ。ボクと魔法の練習をしようね？」

閃いた、と言わんばかりの表情でルイズの前に移動すると、ユーキがにこやかにそんな事を言い出して、手を差し出す。

「え……っと？」

ユーキの手と顔を交互に見て、ルイズは訝しげな表情になる。

「手を握れば良いんだよ」

ユーキは尚も笑顔でルイズに教えた。

「え、ええ！　一緒に頑張りましょう！」

握手という文化が無かったのか、或いは戸惑い故なのかは判らないが、ルイズはユーキの意図に気が付いて手を握った。

ユートも漸く意味を理解したのか、右手を差し出してルイズに言う。

「宜しくルイズ」

「宜しくね、ユート」

完全にはスレていない為、少し素直なルイズだった。

相互理解も終わり、魔法の練習に入る。

「じゃあルイズ、早速なんだけど魔法を見せて貰えるかな？」

「判ったわ」

ユートの指示に従い、杖を翳すと詠唱を始めた。

目を閉じて、荘厳な雰囲気を醸し出しながらルーンを唱えるルイズ。

「ウル・カーノ、発火！」

ドカーンッ！

初めて見たが、何と言おうか……凄まじい。

杖の先が突如、何の前触れも無しに爆発したのだ。

「（どういう原理だ？）」

普通に視ても判らない。

「ルイズ、今度は凝縮を使ってくれるか？」

「う、うん」

少し不安そうに答える。

ルーンを唱え、凝縮を使うもやはり爆発。

この際、ユートは少しだけ力を解放して目に蒼い光を宿していた。
全開でなければある程度、力を使えると判ったのだ。
見えたのは、水の精霊へとルーンが干渉している情景だった。
ルーン自体は水の精霊へと干渉していたが、実際には水の精霊とは無関係な効果を及ぼす。
精霊よりも細かく細分化された何か、どうやらそれが反応していたらしい。
「（虚無の精霊？　いや、違うか……）」
錬金……ドカーンッ！
ウインド……ドカーンッ！
他の系統魔法も爆発する。
ルイズはユートを恐る恐る見た。
何だか凄い表情でブツブツ言っていて、果てしなく怖いのは決して気のせいではあるまい。
「ゆ、ユート？」
「……判った！」
「ひあっ？」

突然の大声に、ルイズは驚いてしまう。

「ルイズの魔法特性に関して、大体判ったよ」

「ほ、本当に!?」

ルイズの表情がパーッと、輝いていた。

「だ、だけど……家庭教師の先生は疎か、お父様も、お母様も、エレオノール姉様も、ちい姉様にも判らなかったのに?」

『(そりゃ、答えを知っているからね~)』

ユートもユーキも苦笑してしまう。

答えは既に判っている。

とはいえ、幾ら何でも行き成り看破は有り得ない。

だから少しだけ魔法を見せて貰ったのだ。

ルイズにはちゃんと解答を用意してあり、それを教える心算だった。

「先ず、見た限りでは系統魔法に一切、適正が無いみたいだね」

ビクリと、ルイズが肩を震わせて表情を歪める。

「ルイズの適正は特化型にあるんだよ」

「特化型？」

「身近で言えばカリーヌ様かな？　風系統特化メイジだね」

カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールは、烈風の騎士姫と呼ばれるくらいの風系統の使い手。

風系統なら、ただのウインドが突風になる程強い。

然し、それ故に他の系統が使えない。

多少は使えるのかどうかは知らないが、恐らくは全く使えないのだろう。

その代わりに、風であれば天災級という訳だ。

１０歳で、風系統の浮遊を容易く使ったカリーヌは、騎士になる為にトリスタニアに出て来て、ウインドで三バカを驚かせている。

「特化型は、とある一点にのみ秀でている為、その他の能力が使えないんだよ。所謂、メモリ不足ってヤツだね」

思い出されるのは、ユートが知るライトノベル。

【風の聖痕】

丁度、ユートもアレの主人公と同じ、精霊王との契約で聖痕を獲ている。

だから、亜空間ポケット内の小説を見直して、ルイズに説明する資

料とした。

このメモリ不足に関して、主人公が米国の炎術師のお嬢さんに言った台詞だ。

精霊獣に“特化”され過ぎていて、強力過ぎる精霊獣を出している間は、自分で炎術を使えない。

それを称して【メモリ不足】だと言ったのだ。

まあ、元ネタはまた別に有る訳だが……

「じゃあ、私はお母様みたいに何かに特化しているから、系統魔法を使えないって事なの？」

「そういう事」

成る程、物分かりが良い。

頭の方は決して悪くない、考える機会を与えてやれば答えに辿り着ける様だ。

ユートは少し感心した。

「ルイズの場合は恐らく、空間制御特化型だ」

「空間制御特化型？」

ルイズは鳩が豆鉄砲を喰らった様な表情で、ユートを眺める。

「そう、空間制御特化型」

「（また、凄い言い訳を）」

ニコニコと言うユートを見て、ユーキは思った。

「ルイズの爆発は、正しい詠唱とイメージが成されていないから、本来の力として発現していない木漏れ日みたいなモノだよ」

「本来の力？　木漏れ日……って？」

「あの爆発は、失敗でも何でも無い。ルイズの本来の魔法が木漏れ日の様に顕れているだけなんだ」

【空間制御特化型】

言い得て妙だ。

虚無の魔法は正に、空間と記憶を前面に押し出した様な魔法。

【爆発（エクスプロージョン）】ですら、空間制御による魔法だ。

破壊するモノ、しないモノを設定するのは空間把握が必要だし、実際に爆発しる場所を指定するのも制御が有ってこそ。

だから、ユートは少しだけではあるが、虚無を教えておく。

正しく制御が出来る様に。

「ルイズ、空間制御の魔法のルーンを教えるからさ、後に続いて唱

えてみて？」

「あ、うん」

問題は、ヴィットーリオやワルド辺りに目を付けられ易くなる事か？

ユートは水の力を辺りに充満させ、水のルビーの力を擬似的に造り出す。

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ」

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ」

言われた通り、ルイズは後に続いて詠唱していく。

仕種もユートを真似た。

ユートは予め的として造ってあったゴーレムに、伸ばした手を向ける。

ルイズも同じくだ。

「爆発（エクスプロージョン）ッ！」

「爆発（エクスプロージョン）ッ！」

チュドーンッ！

ユートの方は何も起こらなかったのだが、ルイズの方は周囲の精霊力を押し退けてゴーレムを爆破した。

「あ、あれ？」

何かが違う。

結果は今まで通り爆発。

だけど違うのだ。

今までは周りが言う通り、失敗魔法だと言われて納得出来た。

これは失敗で間違いないのだと。

だが、先程の爆発は何故か成功した実感がある。

「それが、指定した空間を爆破する魔法、エクスプロージョンだよ」

「エクスプロージョン」

意味は【爆発】

ルーンを唱えて、力在る言葉を紡いだ時に感じたのは充足感。

足りなかった欠片（ピース）が充ちていた。

“これが私の魔法”なのだと、ハッキリ言える。

充ちていた。

満ちていた。

満ちて、溢れ出していた。

ルイズの朱鷺色の瞳から、涙が溢れていた。

それはきっと、カラカラに渇いていた心が満たされていたから。

それを見ていて、ユート達は一息吐く。

結局、爆発させた事には違いないから、満足してくれるか不安もあったのだ。

途中までのエクスプロージョンの詠唱を教え、力在る言葉で正しく小振りに発動させるのが、今回ルイズに教えた魔法。

フルで詠唱させる訳にもいかない為、本当に一部のみを詠唱させたのだ。

当然、ユートが詠唱しても何も起きない。

「後、もう一つ教えよう」

「え？」

「また同じ様に、後から続いて唱えて」

「わ、判ったわ」

確りと頷くルイズ。

「ウリュ・ハガラース」

「ウリュ・ハガラース」

「ボクの後ろを視て、其処へ行きたいと思って唱えるんだ、テレポート！」

「テレポート！」

言霊を紡いだ瞬間、ルイズはユートの目の前から消えて、後ろに移動していた。

「視認した位置に瞬間的に移動する“古代魔法”だ」

本来なら、完璧な発動をすれば記憶に在る場所を思い描いて、何処までも跳べるのだろう。

だけど中半端な詠唱では、そんなモノだ。

そして、ユートはこれらを【古代魔法】と、ある意味嘘とは言えない言い訳を使った。

.

第１８話：特化型メイジ（後書き）

ルイズの魔法は、本人には古代魔法として暫くの間、誤魔化すユートでした。

第１９話：遺失魔法と虚無（前書き）

最近、少し遅れ気味……

第１９話：遺失魔法と虚無

・

魔法の訓練を終了後、温泉に入るルイズ達。

勿論、男女別に入った。

ユーキに危うく女湯へ引っ張り込まれ掛けたが、流石にルイズが阻止してくれたのだ。

これにはホッと、胸を撫で下ろしたものだった。

先に入っていたカトレアを思い出す。

正確には、温泉から出たばかりの艶姿だが。

この旅籠には、お客が歩き回る為の服として、浴衣を用意してある。

日本情緒の浴衣だったが、カトレアにも十分似合っていた。

湯上がりで、普段は白い肌が薄っすらと桃色に染まって、頬に朱が差している。

ホコホコと湯気を上げて、笑顔を浮かべるカトレアの艶姿は、ユートの幼い煩悩に直撃した。

そのお陰で、話し掛けられた時に目のやり場に困ってしまう。

未だ１３歳とは思えない。

チラリと見える胸は、既に結構な脹らみを魅せていたし、本人の柔らかな雰囲気も相俟って、とても子供には見えなかった。

岩を背に、凭れ掛かりながら空を見上げてポケーッとするユート。

夜空に浮かぶ双月が、何故かシエスタとカトレアの姿になる。

「うえ!?」

思わず、自分の妄想に吃驚してしまった。

「お、俺ってこんな女好きだったっけか?」

我知らず、前世の口調が突いて出るくらいの驚愕。

ブンブンと頭(かぶり)を振り、顔にお湯を掛ける。

先程、双月に見た幻視を振り切る様に。

ユート・オガタ・ド・オルニエール６歳、頭の中身は既に２６歳であり、精神年齢は大体１４歳くらい。

そろそろ煩悩に悩むお年頃だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

全員が食堂に揃った処で、夕餉の時間となる。

セシリアが雇った料理人達が、腕によりを掛けた料理を食べて皆がご機嫌だ。

特にルイズは、やっと満足のいく魔法が使えて本当に嬉しそうにしている。

ユートとしても、少し胸を撫で下ろしていた。

これで必要以上にルイズが歪む事も無い。

歪んだルイズを矯正するよりも、歪む前に方向修正をした方が楽だ。

食後の団欒も和やかに行われて、全員が笑顔を浮かべていた。

魔法の成功を喜ぶルイズを見て、目尻をだらしなく下げるヴァリエール公爵。

カリーヌ夫人も、そんな姿を優しい瞳で見守る。

普段のキツさが嘘みたいな穏やかさで、ユートも多少困惑していた。

「（カリーヌ様、あんな顔も出来るんだな）」

「ユート君、何か思いましたか？」

「いえ、何も！」

聡い感性で、不穏当な事を考えたユートを流し目によって牽制して来る。

カトレアがそんなユートを見て、クスクスと手で口元を隠しながら笑っていた。

「（カトレア嬢には確実に気付かれてるな）」

原作でも、エスパーも斯くやと云わんばかりに才人の考えを読んでいたくらいだし、ユートの考えを察しているのだろう。

下手にカトレアの前でエロエロな想像をすれば、確実にバレると思っていた方が良さそうだ。

ユートはゾッとしない考えに、背筋を震わせる。

食事も終わり、カトレア、ルイズ、ユーキを部屋に戻して残った人間で話し合いを始めた。

「ではユート君、ルイズの魔法に関する報告をして貰えるかね？」

ヴァリエール公爵がユートに報告を促す。

「判りましたピエール様。先ず、ルイズ嬢の魔法資質は多少異質です」

「異質？」

「はい。その為、ルイズ嬢はどれだけ系統魔法を使おうとしても、ただの爆発しか起きなかった」

異質。

その意味を考える公爵だったが、いまいち実感を掴めない。

「本人には古代に失伝し、喪われた空間制御魔法だと話しておきました」

「空間制御魔法？」

「それ自体に嘘は有りませんが、完全に真実という訳でもありません」

「では、真実とは？」

ヴァリエール公爵は核心に触れてくる。

「……虚無です」

「っ！？」

少し間を空けると、ユートは“真実”を暈す事も無く答えた。

それは余りに重たい、然し逃げる事も、目を反らす事も出来ない真実。

「虚無……ですって？」

やはり信じ難い話なのか、掠れる様な声でワナワナと呟くカリーヌ夫人。

「ユート、始祖ブリミルが行使したという虚無だと言うからには、ちゃんとした確信が有っての事なのだろうな？　これは流石に冗談では済まされんぞ」

厳しい声で、サリュートが口を挟む。

そう、冗談では済まない。

真実ならそれはそれで大変だが、冗談で口にして良い単語ではないのだ。

【虚無】とはそれだけ重たい単語。

「勿論、冗談ではありませんし、確証（原作知識）が有っての事ですよ」

ユートは【虚無】に関し、黙っている心算は無い。

何より、ルイズの親であるヴァリエール公爵と夫人は知っておくべきだ。

識らなければいざという時に何も出来ず、後手後手に廻ってしまうが、識っていれば対策も考えられる。

始祖ブリミルが使ったという【虚無】は、伝承されているだけでも強力なのは解るし、別の意味でも隠しておきたい理由が有った。

【虚無】は、基本的に四つの血筋にのみ顕れる。

四つの血筋とは即ち、旧き三つの王家と初代ロマリア教皇家。

トリステイン王家。

アルビオン王家。

ガリア王家。

ロマリア教皇家。

尤も、教皇は王とは違って世襲制では無い為、現在は何処の誰が初代教皇の血筋なのか判らなくなっている（ユートは当然、知っている）のだが。

「さて、これから僕が独自に書物（ライトノベル）から識った知識を開帳します。それに当たって、もし父上と母上に知られたくないと仰るなら、部屋を出て行って貰いますが？」

これには実は二重の意味が有った。

サリュート達を巻き込まない為、そしてヴァリエール公爵が選ぶ為。

仮に、サリュートが巻き込まれる事を良しとしても、ヴァリエール公爵は巻き込む事を良しとしないかも知れない。

秘密を知る知らないは今更な訳だが……。

「サリュート、どうする？　お前さえ良ければ知って欲しいが、下手に知ってしまえば危険かも知れん」

「“サンドリオン”よ、騒ぎに巻き込まれるのは今更だよ」

昔の渾名で呼ぶサリュートの表情は、ユリアナと共に決意に満ちていた。

どうやら4人共、話を聞く事にしたらしい。

「判りました、話します。先ず、認識して頂きたいのがヴァリエール公爵家は、ずっと昔に王家から分家した庶子です。故に、公爵を名乗っているのです」

「うむ、その通りだ」

ヴァリエール公爵がユートの話しに首肯する。

公爵とは、基本的に王家の血を引く分家筋に与えられる爵位の事で、大公は更に近い血筋だ。

クルデンホルフ大公家は、ゲルマニアを出自としているが、トリステインの王家の血を入れた事によって、トリステイン大公の地位を獲ている。

そういう意味では、クルデンホルフから虚無が顕れてもおかしくはなかった。

「虚無とは姉祖ブリミルの血を引く三王家、それから初代ロマリア教皇聖フォルサテの血筋から顕れます。故に、トリステイン王家の血を引くヴァリエール公爵家のルイズが虚無でも決しておかしくないのです」

「……確かにな」

理路整然と説明されれば、理解は出来る。

然し、納得出来るかと言われれば、それは否だろう。

「そして、虚無というのは真の王家に顕れると考えられている事もあって、これが周囲の雀連中にバレてしまうと、ルイズを擁立して甘い汁を吸おうって莫迦が出て来るでしょうね」

「……」

その情景が余りにもリアルに思い浮かび、眉根を顰めるカリーヌ。

権力に意地汚い宮廷雀共ならば、それは十二分に有り得る話しだ。

「僕がルイズに真実を伝えずに、欺瞞に近い事を言ったのもそれが理由の一つ」

「一つ……だと？」

「ロマリアですよ」

「ロマリア……、聖戦か」

ヴァリエール公爵は苦々しく感じ、渋面を作る。

ハッキリと言ってしまえば冗談ではない。

大切な娘を、よりによって宮廷雀の好きにはさせられないし、況してやロマリアが聖地に向かう道具になど許容出来る訳がなかった。

聖地奪還の名の許に、聖戦が発動すると云う事は即ちルイズがエルフとの戦争に於いて、尖兵と成ると言うに等しいのだ。

親として許せる訳もない。

「僕としても、それを許容出来ませんから。だからと言って、魔法が出来ない侭にしてしまえば、ルイズの人格が歪みます」

「確かに……」

カリーヌが頷く。

流石は、歪んだ青春時代を送った張本人である。

「だから、虚無魔法を失伝した古代空間制御魔法として教えたんだ」

「待て、ユート！」

「父上、何ですか？」

「お前は虚無を何処で知ったんだ？　何故？　ルーンまで識っているとは！？」

「書物（ライトノベル）で」

口では“しょもつ”と言いながら、心の内では“ライトノベル”と言っていた。

ユートは決して嘘は言っていない。

書物で知ったのは間違いないのだから。

「それに真っ赤な嘘って訳でもないです。虚無魔法は調べた限り、記憶と空間を制御する魔法が多いから」

爆発（エクスプロージョン）の魔法は、ルイズに教えた分だけでも指定した空間を爆裂させる。

最大の威力で使えば、指定した空間は言うに及ばず、自分自身の思い（記憶）一つで破壊の対象を選ぶ事すら可能だ。

瞬間移動（テレポート）等、言わずもがな。

「どうやら、ルイズの魔法に関しては君に任せた方が良さそうだな。何処で虚無を知り得たかは聞かない。宮廷雀共やロマリアに渡すなど、業腹だからな」

「宮廷の方は僕に出来る事は無いですね。ただの新興の子爵家の息子じゃ、権力とは無縁ですし」

ユートは所詮、爵位も未だ継いでいない子供。

そっち（権力）には太刀打ち出来ない。

「うむ、此方はワシの仕事だな」

ヴァリエール公爵は自らが担当するべき仕事に、決意を新たにした。

それは愛娘を護る為に。

「ロマリア皇国に関してですが、そちらには僕に考えがあります。可成り危険ですが……」

「うむ？　然し、ユート君を危険に晒す訳にはゆくまいよ」

「大丈夫ですよ、ピエール様。策が有りますから」

そう言って、ユートはニヤリと口角を吊り上げる。

其処には十分な自信の程が見えている。

「いったい、どうする心算なんだ？　下手にロマリアに逆らえば、異端審問に掛けられるぞ」

「クスッ、それは僕としては“望む処”ですよ」

「「「「はっ？」」」」

ニコリと笑顔を浮かべて、ユートはとんでもない事を平然と宣った。

まるで気負う事無く、言ってのけたのだ。

だが瞳には力が籠り、信じたくなる言葉。

ヴァリエール公爵も、夫人も、サリュートも、ユリアナも、皆が子供の台詞を真剣に聞いて、対策を考えようと思える何かがあった。

瞳が言っている。

其処には説得力があった。

故に……

「ならば対策を聞かせて貰おうか？」

「はい！」

ユートはその場の全員に、ロマリア対策を話した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【翌朝】

ユートは何時もの場所で、魔法の練習をしている。

『炎に燃ゆる精霊達よ、我に従い力となれ。爆煙舞（バーストロンド）ッ！』

【爆煙舞】

窮めて簡単な火の魔法で、複数の光球を生み出し目標の傍で炸裂させ、炎を撒き散らす。見た目は派手だが殺傷力は全く無い。

火のドットスペル。

毎日毎日、魔法をギリギリまで使っていた事で、全てがドットを越えている。

水と土がトライアングル、風と火がラインにランクを上げていた。

やはり練習量が違うからだろうか、風と火は土と水に比べて一段落ちる。

だから、ユートはこんな事も出来る様になっていた。

『全ての力の源よ、輝き燃ゆる赤き炎よ、我が手に集い収束し、敵を薙げ……！　炎熱鞭（バムロッド）！』

【炎熱鞭】

掌から伸びる炎の鞭を生成して、目標を攻撃する。

威力は炎の槍（フレア・ランス）に等しいが、鞭を自分の意志で制御出来る為、目標への命中率が高い。

多少の持続性がある。

ユートは生み出した炎の鞭で、予め用意していたゴーレムを薙ぎ払った。

火火のラインスペル。

因みに、もう少しランクを上げたら黒魔法を系統魔法で再現しようと、画策していたりする。

ガサリ……

「誰だ！？」

「キャッ？」

フワリとしたピンクブロンドの髪の毛、柔らかい表情に浴衣を羽織った少女。

「カトレア嬢……？」

カトレアが居た。

嚇かしたみたいで何となく気まずく、ユートが黙ってしまうとカトレアの方から話し掛けて来る。

「熱心なのね？」

「うん……と、まあ……。（ヤバいな、見られたか？　火系統のライインスペルを使っていたのを）」

口に出している詠唱自体はルーンだから、カトレアも判らなかっただろう。

然し、土と水系統であると謳っていたのに、火系統を如何無く使用しているのは余りにも不自然。

普通、水系統を得意とする場合は火系統が苦手なものだからだ。

「カトレア嬢は何で此処へ……？」

「あら、何を焦っているのかしら？」

ギクリ……

フンワリとした笑顔を浮かべてはいるが、相変わらず人の内心を知

るという意味合いでは鋭い。

端からはきっとあーぱー姫みたく、お花畑な頭に思える雰囲気なのだろう。

然し、雰囲気に騙されてはいけない最たる例、それがカトレアだ。

「フフ、ユート君がこっそりと出ていったから捜していたのよ」

言葉に窮してしまい、応えられないユートを見て、先にカトレアの方が質問の答えを言う。

尤も、意外性の欠片も無い答えだったが。

「僕は普段、朝に魔法や剣の練習をしていますから」

飽く迄も軽くやるだけだ。

朝っぱらから精神力が尽きては困るし……

「ユート君、土と水系統って前に言っていたけれど、火系統も使えたのねぇ？　もしかして、風系統も使えたりするの？」

「（ノーッ！　やっぱり勘付かれてるよぉぉぉ！）」

土と水系統を得意としているメイジが、火系統をアッサリ使っていれば、気付かれても仕方がない。

本来なら、絶対ではないとはいえ中々有り得ない事。

簡単なモノなら使えるかも知れないが、やはり精度の問題が在るのだ。

例えば、土系統に特化しているギーシュも、風系統の浮遊（レビテーション）や、飛翔（フライ）程度なら精度を見なければ使える。

どちらも風のドットだし、浮遊はコモン・マジックと思われていた（【烈風の騎士姫】で風系統と判明しているが、アニメではルイズ以外の生徒全員が使っていた）くらいだ。

「え……っと」

場違いにも可愛いな～とか思ってしまい、答えが思い浮かばない。

タラリと汗が頬を伝うが、暑いからではなかった。

猫に追い詰められた鼠か、蛇に睨まれた蛙の気分だ。

「別に採って食べようなんて思わないわよ？」

「（内心はバレバレですか？　そうですか！）」

ガックリと項垂れる。

「ね、もっと見せて？」

「は？」

「ルーンの組み合わせや、魔法の名前は聞いた事が無いモノだったわ。ユート君のオリジナルスペルよね？　他にも見せて欲しいわ」

可愛らしくお強請りされてしまって、流石にユートも陥落した。

「判ったよ。但し、誰にも言わない事！　知ってるのはウチの家族だけなんだ。余り今の内に流布したくはないしね」

特にヴァリエール公爵夫人には知られたくない。

「うん、判ったわ」

カトレアは、魔法を使うと息切れを起こしてしまう。

その為、魔法は滅多に使わないのだ。

だから珍しい魔法をユートが使うと知り、もう少し見てみたくなった。

ユートはそんなカトレアの心を知りはしないが、彼女の為に魔法を使う。

『空と大地を渡りし者よ、永久を吹き行き過ぎ往く風よ、盟約の言葉によりて我に従い力となれ……』

風風のラインスペル。

勿論、口ではルーンを唱えているが、頭の内で術式はスレイヤーズ系の詠唱から成っている。

「風魔咆裂弾（ボム・ディ・ウイン）！」

【風魔咆裂弾】
風の力を高め、一気に解放する術。高圧力の強風が、術者の前方に向かって吹き荒れ、敵味方問わずに吹き飛ばす。殺傷性は無い。

力在る言葉と共に、右中指に填めた【アダマス】を通じて精神力が増幅されて、術式が精霊に干渉する。

風の精霊が術式に応じて、大気を動かすとイメージの通りに暴風が吹き荒れた。

カトレアは浴衣の裾が風に煽られた為、風で乱れる髪の毛と一緒に押さえる。

「凄い……けど、Hな風」

綺麗な脚線が一瞬、露になり頬に朱が差していた。

対象を吹き飛ばすだけで、鎌鼬が発生する訳でもないこの魔法は、殺傷性が極端に低い。

だからこそ選択した訳だ。

風を吹かせるので一つと、圧縮で一つ。

効果はストームを圧縮解放した感じか。

尤も、彼の烈風が未熟な頃でも精神力を絞り出して、２００ｍの風力を引き出したらしいから、籠める精神力や精霊との親和性次第で

更に力も上がるだろう。

ユートは風魔咆裂弾（ボム・ディ・ウイン）を放った　後、考察をして考える。

「（風の精霊王と契約すれば、もっと威力が上げられそうだな。アルビオンにでも行って、風の精霊王を捜して契約するか？）」

どの道、全ての精霊涙（エレメンタル・ティア）を獲るなら、避けては通れないのだから。

「（１０歳までに契約して烈風対策をするかな？）」

ロマリア対策、内政、精霊涙の獲得、虚無、エルフ。

やる事が目白押しだった。

それに、聖地奪還の聖戦発動の根拠も早めに潰しておかないと、本来の最終目的の足を引っ張る。

いつの間にやら大変な話になっていた。

「あれ、ちい姉様？」

「あら？　ルイズも魔法の練習かしら？」

「はい！」

「頑張りなさい、私の小さなルイズ」

ニコニコと笑顔で言われ、ルイズは上機嫌となる。

“何故”の部分がどうでもよくなったのか、ユートに練習の内容を聞きに行く。

カトレアはその侭、みんなの練習を見学した。

ユーキも銃の練習に来て、何時もの朝練が始まる。

「ルイズ、昨日は空間制御魔法を教えた訳だけどな、あれは古代遺失魔法だから現在は余り数も無い。判り次第教えるけどな」

「うん」

「だから今日は、コモン・マジックを練習しようか」

「へ！？」

訳が判らないといった風情で、間の抜けた声を上げたルイズに説明をする。

内容は簡単。

コモン・マジックはどちらかと言えば、系統魔法より空間制御（虚無）魔法寄りの魔法で、自分の特性を把握した今なら練習次第で普通に使える筈だ。

そう言われ、ルイズは真面目に練習を始めた。

ルイズは本当に優秀だ。

記憶力、理解力、判断力が並外れている。

ただの的当てから、実践形式に移行してみると、最初こそ数体のゴーレムに苦戦を強いられていたが、次第にコツを覚えて勝利した。

やはり爆発（エクスプロージョン）は、戦闘向けだ。

何の前触れもなく、ルイズがイメージで指定した空間を爆破出来る訳で、図に嵌まれば楽勝でゴーレムを全滅してくれる。

お陰でついつい、朝練の範囲を越えてしまったのは、ちょっとしたご愛嬌か。

ルイズは確りと、コモン・マジックの灯り（ライト）、念力（フォース）を修得。

依頼者のヴァリエール公爵を、大いに喜ばせた。

.

第１９話：遺失魔法と虚無（後書き）

・

スレイヤーズの魔法の詠唱は、公式なものが判らない場合それっぽくでっち上げています。

第２０話：マジックアイテム（前書き）

今回、少しタイトル負けをしたかも……

第２０話：マジックアイテム

・

温泉郷でのヴァリエール家の接待は、事の他上手くいって一安心なユート。

自分の目的の一端を伝える事も出来たし、目論見の方は上々だと云える。

ルイズもコモン・マジックと虚無の一欠片を使える様になり、必要以上に歪む事も無いだろう。

「ね、兄貴？」

「何？」

「将来さ、ルイズが才人を喚んだとして、原作の通りにいけばガンダールヴになるよね」

「そうだな」

原典に於ける虚無の使い魔の内分けは……

ルイズ→才人（ガンダールヴ）

ティファニア→才人（リーヴスラシル）

ヴィットーリオ→ジュリオ（ヴィンダールヴ）

ジョゼフ↓シェフィールド（ミョズニトニルン）

ジョゼット↓ジュリオ（ミョズニトニルン）

何にしろ、愛が重要な要素だとかで最終的には才人とジュリオがWルーンだ。

然し、原典通りにはもう成らないだろう。

ジョゼットが此処に居る上に、ジュリオに愛情なんて全く抱いていない。

ユートは以前、気になって聞いた事がある。

ユーキが言っていた好きな相手とは誰か？

明確には答えてはくれなかったが、少なくともあの透かした神官（ジュリオ）では無いらしい。

原典沿いに進んだとして、ジョゼフが死んでユーキが代わりに……とはならない訳だし、ジュリオがミョズニトニルンには成らないと思われる。

ユーキが誰を召喚するにしても、ジュリオだけは有り得ない。

ルイズはイレギュラーさえ無ければ、才人を召喚する事だろう。

イレギュラーとは……

「転生者とか、神の介入が無ければ問題無く平賀才人を召喚するだ

ろうな」

「だね。ボクは誰を召喚するのかな？」

「少なくともジュリオは無いとして、どうなるんだろうな？」

2共、少し不安らしい。

「まあ、誰になるにしても女の子が良いかな」

「は？　百合か？」

「そうじゃなくて、前にも言ったよね？　好きな相手が居るってさ」

「言ったな」

「その人以外にキスなんてしたくないよ」

成る程、至極最もな話し。

元は少年とはいえ、現在が女の子であるなら余りやりたくはあるまい。

それを考えれば、ルイズもよくヤれたものだ。

ユートはそう思ったが、好きな相手が居るか居ないかの差もあるか……と、納得した。

「話しはそっちじゃなくてさ、才人の相棒に関してはどうする？」

「デルフリンガーか」

インテリジェンスソードの【デルフリンガー】。

６０００年前には存在し、エルフ族でガンダールヴとなった【サーシャ】が使っていたという剣。

その能力は、魔法の吸収と吸収した量に応じ、使い手を動かすというモノ。

「先に手に入れて、才人に直接渡すか、或いは原作の通りにするのか……」

「そういう事か。先に手に入れて……改造するか？」

クスリと笑いながら、改造案を頭に思い浮かべた。

その頃、トリスタニアに在る武器屋では……

『ブルルッ！』

「どうした、デル公？」

『な、何だか悪寒が！』

「ハァ？」

某・喋る剣と店主がそんな会話をしていたとか？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「それじゃあ、今度お父様がトリスタニアに行く時、また連れてって貰う？」

「ああ、そうしようか」

デルフリンガーにとって、良いのか悪いのか判断が付かない決定が、本人の与り知らない所で決められてしまった一瞬だった。

「そうだ、兄貴。欲しい物が有るんだけど」

「欲しい物？」

「マジックアイテムの作り方に関して云えば、科学者気質なボクより上だろ？」

「欲しい物って、マジックアイテムか」

ユートは去年、カトレアに造った紫水晶のペンダントを癒しのマジックアイテムとした事から、宝石の類いを使う事を主とした魔導具を研究している。

あの時、目を覚ましてペンダントを見たユートは小躍りしたものだ。

マジックアイテム生成という得難い、そして便利な能力を偶々とはいえ手に入れたのだから。

とはいっても、半年で造るには時間的に短い為、未だ種類は少ない。

一度造れば量産も利くし、意外と金にもなるから研究はしている。

最初に研究したのが宝石に術式を刷り込んで、精神力を媒介にしたマインド・トリガーシステム。

既に術式が張り付けられているが故に、それは平民でも使用可能。

尤も、平民の精神力は魔法に慣れていない分、ドットメイジよりも結構低い為、余り回数は使えない。

身近に例外も居るが……

このマジックアイテムを造るのに、知恵を貸してくれたのが【アダマス】だ。

ユートはアダマスを二度程起こして、ジュエルズ・タリスマンやアミュレットを製作したり、ユーキに渡した改造銃【アンブロシウス】の様な物を造っていた。

最近、造ったのは魔皇霊斬（アストラル・ヴァイン）を白系の宝石に籠め、刀に埋め込んだ魔法剣。

能力はアストラル系への斬撃を可能とし、マテリアル系でも強度を上げて切れ味を増すというモノだ。

マインド・トリガーにより魔皇霊斬が発動して、初めて効力を発生させる。

また、斬撃を飛ばす事も出来るが、やるとまた発動し直さないと効力が切れてしまっているが。

一度発動させれば飛ばしたり一定時間が経過したり、或いは自発的に切らない限りは持続する。

持続時間は5分。

魔皇霊斬や、基となっているブレイドと違って発動中常に消耗はしない。

護符や呪符と云えば、去年カトレアに贈った紫水晶のペンダントは、護符（アミュレット）の一種で、自身がマントの留め金として身に付けているモノが、呪符（タリスマン）に該当する。

「ユーキが欲しいのって、どんな物？」

本来なら割りと高額で売っているが、流石に義妹から取る気にはならない。

モノにも由るが。

「うん、魔法から身を護れるモノと物理的防御が上がりそうなモノが良いな」

「また、面倒な事を……」

ユートは少し考えてみる。

アイディアは在るが造るのは難しい。

そんな感じだ。

チラリと魔王様の顔を思い出した。

「時間が掛かるぞ？」

「今すぐ必要じゃないし、ボクも少しは手伝うよ」

「どういう意味だ？」

「忘れてないよね？　ボクも虚無の担い手だよ。自分の身を護れないと拐われたらどうすんのさ？」

「あっ！」

未だユーキは直接的に魔法の練習をしていない。

だから周りも知らないが、ユーキは【ジョゼット】であり、本来はジョゼフが死んだ場合の予備だ。

神(はるな)が与えた能力により、既に虚無に目醒めている。

本当なら有り得ない5人目の虚無足り得る存在。

虚無の担い手が居るなど、知られれば面倒な事になるのは目に見えている。

一応、血筋的に別に不思議では無いとはいえ、場合によればジョゼットの正体がガリア王家の血筋とバレてしまう。

そう、系譜を遡れば不思議では無いと判る。

ユーキがサリュートの実の娘だと思われれば、オガタ家はヴァリエール（トリステイン王の庶子）の血が混じっているからだ。

ただ、一定以上の権力（高等法院など）を持っていれば恐らくは気が付かれる。

だから、出来得る限り虚無の担い手だとはバレたくはなかった。

必要なのは武器と防具。

武器は既に在るから、後は防具だ。

「判った。造ってみよう」

「ん♪　期待してるよ」

ユーキはとびきりの笑顔でそう言った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

意外な程、トリスタニアへ簡単に行く事が出来た。

理由は簡単、サリュートは毎月の収支報告を王宮へと提出し、自領

の政策と成果を報告しているからだ。

月に一度、必ず王宮に赴くサリュートに付いていけばトリスタニアで暇潰しという名目で、街を歩く事も出来る。

勿論、王家のお膝元とはいっても治安が良いとは言えない街を歩くのだし、武装はちゃんと持ってきた。

2人共マントを羽織って、ユートは留め金に水霊石の呪符（タリスマン）、左腰にはマインド・トリガーシステムを付けた刀を佩いており、右中指に【アダマス】を身に付けている。

ユーキも腰に佩いたホルスターに【アンブロシウス】を納め、魔法をユートに入れてもらったカートリッジもぶら下げて、簡易護符（アミュレット）をベルトのバックルに装備していた。

ユーキは対外的に魔法を習っていない為、杖は持っていない。

勿論、本当は杖契約をしているし、虚無も使える。

取り敢えず、大っぴらに杖を持ち歩けるのは来年以降となる予定だ。

ユートとユーキはトリステインの王都、トリスタニアの最大の街であるブルドンネ街を歩いていた。

目的地は【デルフリンガー】を置いている武器屋。

因みに、その武器屋では当のデルフリンガーがブツブツと呟いている。

《悪魔、悪魔が来る……》

まあ、虚無の担い手というのはエルフから、悪魔（シャイターン）のレッテルを貼られているから、強ち（あなが）間違いではない。

然し、真の（デルフリンガーにとっての）悪魔はその隣のユートだという罠。

「うわ、汚な……」

裏側に来た途端、顔を顰めるユートとユーキ。

「兄貴、ウチ（オルニエール）での成果は王宮に上がってるんじゃないの？」

「その筈だけどな」

「んじゃ、全く反映されてないってどういう事さ？」

ド・オルニエール領では、汚物の処理を現代知識を得ているサリュートが、正しく行っている。

その為、ド・オルニエール領内に限れば清潔感溢れる土地だ。

その成果は、サリュートが可成り昔に報告している。

なのに、王都トリスタニアですら全くの手付かず。

これでは何の為に報告しているのか判らない。

「ま、仕方がないよ」

「どうして？」

「父上は領地を賜った貴族としては、未だ初代の新興に過ぎない。陛下はともかくとして周りの莫迦共には侮られている。そんな父上が有効な情報を献策して、莫迦共が面白い訳がない。だから足を引っ張ってくれているのさ、多分な……」

これはユートの想像でしかないが、見事に大当たりだったりする。

王宮勤めの法衣貴族達は、サリュートに強い嫉妬心を懐いていた。

高が元シュヴァリエ風情が土地と爵位を与えられて、国王陛下の覚えもめでたい上に、ヴァリエール公爵との個人的な繋がりを持つ。

しかも領地からの上がりも年々、増えていて懐事情も暖かいときては、面白いと思う訳もない。

故に、折角の献策も資金繰りを理由に待ったを掛け、嫌がらせをしていた。

政治は国王の鶴の一声で決められない以上、それが罷り通る事も屡々ある。

フィリップ三世の御世でのエスターシュ大公の例もあるし、中々に上手くはいかないものだった。

そんな話をしながら、武器屋の看板を見付けるまでの間、会話で臭気を誤魔化して歩く。

馬車を使うには、路が狭い上に要り組過ぎる。

大通りの路幅が五メイルしか無いのは、どんな嫌がらせかと思う。

お陰で歩いて行く以外に、進む方法が無い。

セント・マルガリタ修道院に有った自転車、あれは確かに乗ろうと思えば乗れるのだが、実際には大人用で普通に走るには背丈がどうしても足りない。

まあ、最低でも魔法学園に行く年齢くらいまでお預けだろう。

「ユーキ、大丈夫か？」

「まあね」

体力作りを始めて間もないユーキは、余り長時間歩くのは辛いらしく、疲労が見えていた。

「まったく、無意味に要り組んでるから歩き回らされたな」

ド・オルニエール領は路幅が広く、大きくても大体が拓けている。

だから徒歩でも割りと快適に歩けるが、トリスタニアはサリュートの献策から、全く進歩していなかった。

整地もなっておらず、石畳は壊れていたり、捲れていたりして足を引っ掛けると危険だ。

狭いが故にスリもやり易いと思われる。

これで王都だというのだから、もう笑うしかない。

「あ、あの看板かな？」

ユーキが指差している看板には、確かにＲＰＧっぽい剣の絵柄が描かれていた。

「みたいだな」

やれやれと、ユートはトラブルに巻き込まれなかった事に安堵の溜息を吐く。

羽扉を開くと店主が気が付いたのか顔を上げて、その瞬間嫌そうに舌打ちをして愛想笑いを浮かべた。

露骨だな～とは思ったが、ユートも顔には出さないで店内に入る。

薄暗い店内には、ランプの灯りが点っていた。

「これはこれは、貴族の坊っちゃん。ウチはお上に目を付けられる様な商いはしていませんぜ？」

「客だよ」

「ほっ？　貴族様が剣ですかい？」

「珍しいか？」

「ええ、まあ。界隈じゃあ坊主は聖具を振る、兵隊は剣を振る、貴族は杖を振る……そして陛下はバルコニーからお手をお振りになると、相場は決まっておりますんで、へい」

「兄貴、原作でもあれって同じ事を言ってたけどさ、明らかに舐められてるね」

「だな～」

貴族とはいえ、所詮は世間知らずの餓鬼くらいにしか思っていないのが、ありありと視て取れた。

まあ、わざわざ相手にする必要も無い。

ユートはさっさと用事を済ませる事にした。

「オヤジ、此処にインテリジェンスソードが有るな？　それを貰おう！」

「へ？　デル公ですか？」

余りにも意外だったのか、鳩が豆鉄砲を喰らった様な表情で聞いてくる。

「そうだ」

首を傾げ、デルフリンガーを置いてある雑多な剣置場にカウンターを出て向かうと、拾い上げた。

「こいつが、インテリジェンスソードのデル公でさ」

「デル公？」

「名前はデルフリンガー、何処の誰が思い付いたんだか、剣に意思が宿っているマジックアイテムでさ」

ユートはデルフリンガーを店主から受け取り、鞘から引き抜く。

錆び錆びの刃。

「？　寝てんのか？」

喧しいくらいだと思っていたが、全然デルフリンガーは喋らない。

「おい、デルフリンガー！　何とか言ったらどうだ」

《ヒィッ！　あ、悪魔～》

「悪魔ぁ？」

「少し前からこうなんでさぁな。悪魔が来るとか言って震えて？るんでさ」

剣だから震えるという表現もどうかと思うが、悪魔とはユートの事だろう。

来たのはユートとユーキの2人だが、手に入れようとしているのはユートだ。

「悪魔ね。悪魔でも良いよ……悪魔らしいやり方で、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをさせて貰うだけだから♪」

《ごめんなさい、もう言わないから赦して下さい！》

目が笑っていない笑顔で、ユートが見つめる（睨む）と透かさず謝るデルフリンガーだった。

「まあ、良いけどな」

デルフリンガーにとって、確かに悪魔だろうし。

心の中で呟いて、ユートは店主に向き合う話す。

「オヤジ、幾らだ？」

「本当に買うんですかい？　まあ、厄介払いが出来るんであたしゃ構いませんですがね？　後で返品とかは止して下さいよ」

「判ってるよ」

「それじゃ、１００エキューと言いたい処ですがね、８０エキューで良いです」

何しろ店主にとって、本当に厄介払いだ。

「返品無しの保証金代わりでさ」

「ん、それじゃあ８０ね」

革袋から、エキュー金貨を８０枚取り出すとカウンターに置く。
店主はそれを数えて、確かめると鞘を出してユートに渡す。
「もしも煩ければ、鞘に納めてやれば静かになりますよ」
「ありがとう」
「っ！？」
何故か驚いた表情のオヤジを残し、ユートはユーキと連れ立って出て行く。
「何を驚いてたんだ？」
「貴族がお礼を言うと思わなかったんだろ？」
「ああ！」
ユートは合点がいった。
「あれ？　兄貴、持って来た剣は売らないの？」
「これはマジックアイテム専門店に行って、買い取って貰うんだよ」
刀と一緒に佩いた剣をポンポンと軽く叩き、次の店へと向かった。
買われて以降、デルフリンガーは歯の値が合わずカタカタと震わせている。

永い年月を生きてきた勘、故に改造される事に何と無く気が付いているらしい。

「さて、父上に合流するかな？」

「だね」

ユートとユーキは待ち合わせ場所へと向かう。

あの後、２人はマジックアイテム専門店に行き、剣を２０００エキューで売却していた。

ユートの刀以外では、あの一振りしかない稀少性と、それなりに強力な魔法が付与されている事が評価されての値段設定だ。

「しっかし、２０００エキューか。彼のシュペー卿の彫金した装飾剣より安値なんてな～」

「仕入値を考えれば同じくらいじゃない？」

ガクリ……

沈み込んでしまった。

「あれ？」

ユーキとしては、励ました心算だったのだが、逆効果だったらしい。

まあ、苦労して造った魔法の剣が、宝石を散りばめただけのナマクラと同じ扱いじゃ泣けるかも知れない。

「兄貴、行くよ～！」

「あ、ああ」

落ち込んでいてもしょうがないと、ユートはユーキを追い掛けた。

合流までは少し時間もある為、宝石店にも寄る。

「兄貴、何を買うのさ？」

「取り敢えず、原石を幾つかと完成品を何か……」

宝石に魔術式を焼き付け、魔宝石に換えてからマインド・トリガーシステムを付けたアイテムと匣着する。

それにより、ただの道具に魔力を付与出来るのだ。

その為の触媒となる宝石を購入したい訳だ。

術式の焼き付けには時間が掛かるし、失敗してしまうと宝石は喪われる。

当然、数が欲しいが宝石は高価であり、そんなに買う事は出来ない。

カッティングも焼き付けも研磨もしてない原石なら、幾分かは安い。

「余り良い物がないな」

純度の低い宝石が多い。

ハルケギニアの技術では、そんなものなのだろう。

「あ、これは悪くないな」

「あら、中々の目利きじゃない？」

「え？」

振り返ると、まるで新緑の様な髪の毛を靡かせた金瞳の少女が立っていた。

若葉色のドレスがよく似合っている。

「悪いんだけど、それ譲って貰えない？」

「何に使うんだ？」

「女が宝石を求めるなら、それは自分を飾る時よ」

そうとは限るまいが、少女は年齢に似合わない妖艶な流し目でユートに語った。

「（彼女……）」

マントを着けているなら、商人ではなく貴族。

それに紋章は……

「（サウスゴータ家か）」

アルビオンはサウスゴータ地方を治める貴族。
将来、歴史通りに往くなら魔法学園で逢う事になるだろう少女、マチルダ・オブ・サウスゴータ。
「レディファーストと云う事で、どうぞ御持ち下さいレディ」
「クス、中々の紳士じゃない？　他のバカ貴族もその程度には礼儀正しいと良いのにね……」
ニコリと柔らかい微笑みを浮かべ、少女……というかマチルダがユートの頭を撫でた。
確か、カトレアと対して変わらない年齢の筈だが……
店主に件の宝石を包んで貰いながら、ユートに向かい合うと話し掛けてくる。
「処で、貴方は宝石をどうするの？　見たところ貴方自身も妹さん？　も宝石を着けてないみたいだけど、装飾目的じゃないの？」
昔は姐御口調ではなかったようだ。
「僕はマジックアイテムの製作に、色々な宝石を使っているからね」
「へぇ？　マジックアイテムか～」
少し興味が湧いたのか、目を輝かせている。

その後、暫くは取り留めのない話をして店を出た処で別れた。
アルビオンに行ったら必ず立ち寄ると約束して。
ちょっと時間的に遅くなった為、早足でサリュートとの合流地点へと急ぐ。

「にしてもさ、マチルダ・オブ・サウスゴータに此処で逢うとはねぇ」

「そうだな」

「これは兄貴にティファニアを、ハーレム入りさせろって天の啓示じゃね？」

「んな訳……って、待て！　激しく待て！　何なんだハーレムってのは？」

「ハーレム。イスラム教国の王室や上流家庭の婦人部屋。近親者以外の男子は出入りが禁制だった。または1人の男性が沢山の女性を侍らせる所。語源はアラビア語で【禁じられたもの】から来ている」

「誰も意味や語源なんて聞いてない！」

ユートは、国語辞典よろしく蘊蓄（うんちく）を垂れるユーキに突っ込んだ。

「冗談だよ。けど、兄貴は胸に脂肪がタップリのった娘が好みなんだろ？」

「厭な言い方すんなよな。というか、誰がそんな事を言ったんだよ」

「だって、カトレア嬢にしろシエスタにしろ、将来は揉み甲斐のある大きさに育つじゃん」

何か唇を尖らせている。

確かにカトレアもシエスタも、将来を（胸の大きさ的に）約束されているが……

正に約束された勝利の胸。

だからと言って、ユートはティファニアの胸を見て、バストレボリューションとか言って喜ぶ心算は無い……と思う。

「ボクは15歳になっても平坦だって、それが判っているからね～」

「……あのな～」

まあ、実際に一卵性双生児であるタバサがアレだし、挿絵を見る限りジョゼットの胸には将来性が無いのは判るが。

「そもそも、そんな話しじゃなくて、何で僕がハーレムを作る前提なんだよ？」

「既に、カトレア嬢とシエスタを囲う気の癖に」

グサリッ！

何かが胸に突き刺さる。

「ま、別に良いんじゃないかな？　彼女を放っておく気も無いんだろ？」

「……まあね」

放っておけば、下手をするとヴィットーリオ辺りに、ジョゼットの代わりとして利用される可能性がある。

二重の意味で放ってはおけない人物だ。

「あ、お父様……」

「もう来てたか」

手を振っているサリュートと合流する。

「2人共、楽しめたか？」

「はい、父上」

「結構、有意義だったよ」

「そうか、そうか。此方は余り芳しくないな。ブルドンネ街の裏街道を見たなら解るだろうが、高等法院を始めとして私を嫌う連中に献策を邪魔ばかりされているよ」

然も在りなんと思う。

ああいう手合いは自身を高める努力を一切しないで、他人を貶めて相対的優位に立つか、他人の足を引っ張って自分は高尚だと悦に浸

るか、何れにしても最低な人種ばかりが揃っている。

「それと、アンリエッタ姫が会いたがっていたぞ？」

「は？」

「随分と気に入られているみたいじゃないか」

「（兄貴、何をした？）」

「（前に会った時に未来のニート王妃も含めて、お茶を飲みながら話したくらいだよ！）」

アイコンタクトで話す。

器用な事だ。

「（とにかく、なるべく会わないように……）」

「来月、連れていく約束をしたからな？」

「って、父上ぇぇぇ！？」

いつの間にか、あーぱー姫に売られたユートだった。

.

第２０話：マジックアイテム（後書き）

・

次回、あーぱー姫再び？

かも知れない……

第２１話：デルフの性質とあーぱー姫対策（前書き）

・

あーぱー姫を押し付けるか取り込むか……

権力というメリット、地雷女というデメリット。

他にも政争とか、動き難いというデメリットもあるから、ハイリスク・ローリターンだったり。

第２１話：デルフの性質とあーぱー姫対策

・

父、サリュートに売られたユートは、ムスッとした顔で邸に帰る。

まあ、サリュートの立場も解るのだが、機嫌が悪くなるのは仕方ない。

あの、あーぱー姫は原作で『わたしのおともだち、せんそうしてるあるびおんにいってちょうだいね♪』と言って、ルイズを裏切者と一緒に戦時中のアルビオンに向かわせたのだ。

まあ、ワルドが裏切者なのは知らなかったから置いておくとして、そもそも公爵家令嬢たるルイズを戦地に向かわせるなど仮令、王女とはいえ軽々しくやっても良い事では無い。

それでルイズ達に何か有れば、洒落で済む問題ではなくなるからだ。

原作では無事に戻って来たから、公爵に報せなくても済んだ。

然し、万が一の事が有れば公爵はどう動くだろうか？

莫迦な娘だと捨て置く？

あり得ない。

軍人でもなく、爵位を継いでいるでもないただの学生であるルイズを、戦時中のアルビオンへ個人的な理由で送り込んだのだ。

お友達だから……と。

保護者である公爵に、何のお伺いも立てずに。

確かに手紙の存在が知れたら、不利な交渉を強いられるだろうし、ゲルマニアはタルブ戦役でトリステインを見捨てている。

場合によれば結婚も同盟も白紙となっただろう。

だが、アンリエッタは通すべき筋を通さなかった。

当然、全ての責任を負うべきなのは、アンリエッタ。

そもそも、戦争はごっこ遊びでは無いのだから、軽々しく使者を送るべきではないし、況してや摂政にすら内緒にして送るなど言語道断だし、元はと言えば自身の立場を弁えず、恋文など送る事からして間違っているのだから。

権力者とは、権利を有する代わりに義務が生じる。

それを弁えないなら、彼女が信じなかったバカ貴族達と何も変わらない。

己の権利ばかりを主張し、義務から目を背けているのだから。

綺麗なドレスを着て、美味しいご飯を食べていられる代わりに、婚姻の自由が得られない。

ただそれだけの事だ。

第一、アンリエッタは権利を主張出来るだけの何をしていただろうか？

殆んど何もしていない。

マザリーニに言われる侭、ゲルマニアには行っていただろうが、それだけだ。

王の決裁が必要な書類一つ取ってみても、マザリーニが判を捺していた筈。

ニート王妃が引き篭って、仕事をしなかったのだから仕方がないが、本来の彼の役割からは外れている。

彼の、マザリーニ枢機卿の役割は飽く迄も王の相談役であり、政治そのものを司る者ではない。

原作で王の死後、政治を司るかの如く動いていたのは偏に、王妃が引き篭っていた上にアンリエッタが幼くて、王の冠を頂くに足りなかったからだ。

本来、トリステイン王国はマザリーニ枢機卿に対し、最大限の謝意を表すべきだろう。

本当ならロマリア本国に帰って、教皇にすらなれた筈の人物を縛り付け、亡国となるのを防いでくれていたのだから。

だからこそ、ユートは一つの計画を練っている。

問題は、マザリーニ枢機卿をどう説得するか。

そして、如何にあのお花畑をウェールズに押し付けてしまうかだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「兄貴ってさ、アンリエッタ王女が嫌いな訳？」

「何でだ？」

「だって、黙ってれば凄い美少女じゃん？　顔もそうだし、スタイルだってさ。いっその事、ハーレム要因にしたら？」

「だ～か～ら～、僕は別にハーレムなんて目指している訳じゃ無いって！」

邸へと戻った後、ユートとユーキはユートの部屋で、雑談に興じていた。

言っている事はご立派なのだが、既に2人の少女に目を向けている辺り、説得力が皆無だったりする。

コンコン……

「シエスタです。飲み物をお持ちしました」

「どうぞ」

ノックの音が響き、その後にシエスタの声。

ユートは入室を許可する。

「失礼致します」

扉を開き、トレイを片手に入って来るシエスタ。

トレイを置くと、グラスにワインを注いだ。

「先日、故郷から送られてきたワインですよ。どうぞ御賞味下さい」

注がれた赤い液体が、ゆらゆらと揺らめく。

とはいえ、前世の記憶がある2人としては、少し抵抗があるのか苦笑していた。

ワインは確かに美味しい。

オルニエールのワインより出来が良さそうだ。

「さて、取り敢えずデルフを研究しないとな」

「研究ですか？」

「ああ、研究が進んで上手くアイテムが完成したら、シエスタにも造って上げるよ」

「え？」

予想外な話しに、シエスタは頬を朱に染めた。

詳しくは知らないのだが、ユートの造るマジックアイテムは可成りの高額で取り引きされるらしいと、曾祖父から聞いている。

そんな代物をくれるというのだ、少しくらい自惚れても良いのかな？　と、そう思った。

「という訳でぇ、デルフの構造を全て洗いざらい調べてしまおうか？」

《ヒィィィィィッ！　お～か～さ～れ～る～！》

余りに人聞きの悪い事を言ってくれるデルフリンガーだが、剣の身では逃げる事も叶わず柄を掴まれてしまいその侭、研究室として使っている部屋へと連れ込まれてしまった。

「……ご主人様は随分と愉しそうでした」

「ま、ボクもそうだけど、一度目覚めてしまうとこうなるんだよね。所謂処の、マッドサイエンティストってヤツにさ」

シエスタの呟きに応えるかの様に、ユーキは嘆息しながら言う。

強度、材質、何故魔法を吸収出来るのか、何故魔法を吸収すると使い手を操れるのか、デルフリンガーの持つ意思はどう固定されているのか……

知りたい事は幾らでも有るし、其処から技術を取得して流用出来るかどうかも調べたい。

正に、デルフリンガーとはマジックアイテムの叡智の結晶だ。

何しろ、本人の意思で見た目を錆びた様に見せる事も可能な訳だし。

「あ、そうそう。シエスタはお兄様をご主人様と呼んでるよね？」

「はい」

そもそも、シエスタを初めとしてユートが傍に囲っている同い年くらいのメイド達は、ユート自身が稼いだお金で雇っている。

つまりサリュートでなく、ユートこそが主なのだ。

シエスタがユートをご主人様と呼ぶのは、そういった意味合いもあった。

「お兄様は、名前で呼んで欲しいと思ってるんじゃないかな？」

「え、でも……」

突然の言葉に、シエスタは驚いてしまう。

「お兄様は否定しているけどさ、お兄様にはハーレムを作る素質があると思うんだよね」

「は、ハーレムですか？」

背中からソッと抱きしめられて、シエスタはドキマギしながら訊ねる。

「うん、ハーレム。それにシエスタの身分じゃあさ、妻には成れな

いよね？」

「っ！　は……い……」

肩をビクリと震わせ、途切れ途切れに答えた。

互いの気持ちはどうあれ、貴族と平民には違いない。

平民を妻にしては、ユートの弱味となるのは必定。

精々、一時の情を交わすだけの関係にしかなれまい。

それにユートの正妻の思い次第では、そんな関係すら許されない可能性もある。

例えば、公爵家を継いでいるヴァリエール公爵なら、普通はそんな娘がいてもおかしくはないが、カリーヌ夫人がそれを許すまい。

それは原作のルイズを見れば、想像に難くないのではなかろうか？

「だけどね、ハーレムを作ってその中に紛れ込ませるのは可能だと思わない？」

「っ！？　それは……」

「ボクはね、お兄様が女の子を複数囲うのを推奨しているんだよ。シエスタの事はボクも気に入ってるし、幸せになって欲しいから」

「ユーキ様？」

「だからね、その肢体に磨きを掛けてぇ……お兄様を名前で呼んで上げなよ」

「名前で？」

「そう、ご主人様とかじゃなくてね、ちゃんと名前で呼ぶの。それからだよ？　全てはそれから……」

何だかそれだと“お友達”になってしまいそうだが、彼女達の後の関係を鑑みれば、寧ろ異性だから上手くいきそうだ。

ユーキは思う。

自分は最低だなと。

自分が好きな娘を幸せに出来なかったからと、ユートとシエスタを結び付けようなんて、代償行為にも程がある。

「（兄貴はカトレア嬢にもシエスタと同じ気持ちを抱いている。そして兄貴なら或いは気付く。彼女の病を治す方法を……）」

ならきっと、カトレアを娶る事も出来るだろう。

つまり、カトレアが正妻としてオガタ家に入る可能性が高い。

身分は少し離れているが、元々は結婚を絶望視されていたカトレアを治療するのだから今更、政略に使いはしないだろう。

それに、彼女は原作通りなら分家してラ・フォンティーヌ地方を一

代限りで与えられて、ラ・フォンティーヌ子爵となる。

子爵位をユートが継げば、対外的な身分は同等。

カトレアがラ・フォンティーヌ領を、公爵に返還して嫁げば良い。

そしてカトレアなら、初めから“そう”だと判っていれば、ハーレムも受け容れる可能性が高かった。

「（クスクス、最低なら最低なりに徹頭徹尾、貫かせて貰うさ）」

ユーキはそう考えながら、黒い笑みを浮かべる。

因みに、いつの間にかセクハラのレベルで触っていた所為か、真っ赤な顔で頭がショートしてしまい、気絶するシエスタが居た。

それに気が付いて、慌てて放してやる。

その頃、工房ではユートがデルフリンガーに解析を描けたり、サンプルを採ったりしていた。

デルフリンガー本人？　は気絶していたりする。

それでも可成りの組成や、システムは視る事が出来たものだった。

アニメで観た限り、魔法の吸収は刃から行っている。

然し、魔法を吸収する金属など存在しない。

「だとすれば、精霊魔法の一種って事か？」

ハルケギニアで精霊魔法というのは、人間が先住魔法と呼んでいる魔法だ。

系統魔法も先住魔法も実は同じ精霊の力を使い、魔法の効果に換えている。

違いがあるとすれば、系統魔法は術式によって精霊を動かしているのに対して、先住魔法はその地の精霊と契約する事で力を借りている魔法。

簡単な魔法なら契約無しでも使えるが、大魔法となると入念な契約が必要だ。

それ故に、先住魔法の使い手は護りには向いているのだが、攻めには全く向いていない。

「護り……か」

成る程確かに、云われてみればアレは護りの力。

「刀身その物を契約対象として、吸収の先住魔法を掛けてあるか？　更にそれをエネルギー源として鍔辺りに貯蓄、貯蓄した魔法を魔力という動力源とし、組み込まれた術式回路で柄を通して動かす……」

完全に判明した訳ではないが、仮説自体は立った。

全てが先住魔法で造られてはいない筈なら、系統魔法……というか術式なども流用されていると思われる。

「いや待てよ、デルフリンガーの意思が魔法の役割を果たしているなら？」

原作に於いて、デルフリンガー自身が言っていた。

あの指環、アンドバリとは同じ理屈だと。

『あいつらと俺は根っこは同じ魔法で動いてんのさ。とにかくお前らの四大系統とは根本から違う、【先住】の魔法さ。ブリミルもあれにゃあ苦労したもんだ』

デルフリンガーの意思とは何か？

恐らくはＧＳ美神に登場している様な、人工精霊みたいな存在。

渋鯖人工幽霊壱号やマリアやテレサ。

詰まり、色々な仮説を考えてみたが、一番シックリとくるのがデルフリンガーが人工精霊で、魔力吸収とは彼の魔法の一種。

金属が吸収しているのではなく、飽く迄もデルフリンガー本体が魔力を吸収しているのだろう。

そして、その魔力を用いる事で使い手が及ばない動きで、緊急避難をする。

デルフリンガーの使い手を動かす能力は、その為に造られたモノ。

「だとすれば、剣その物はただの器……か？」

人間などの生命体と同じ、霊魂の宿る器。

「なら【アダマス】みたいな存在なら？」

成る程、アダマスは自然発生型で一種の九十九神。

「或いは、エルフに教わるくらいかな？」

亜空間ポケットから文庫本を取り出す。

背表紙が緑色で、表紙には両膝を着いて右手で杖を揮うルイズが描かれており、【ゼロの使い魔１９】＞始祖の円鏡＜とタイトルが書かれていた。

２２２ページ～２２３ページには、確かにエルフが造ったとある。

剣やモノに意思を付与するのは、エルフの十八番（おはこ）であると、ルクシャナが言っているのだ。

「ふむ、やっぱり一度は行くしかないかな？　エルフに会いに砂漠（サハラ）に。エルフの国の首都、ネフテスに……」

話し合いより、向こうの態度次第ではＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩになるだろうが。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

デルフリンガーの能力解明の目処は立った。

剣自体は単なる器ならば、専用の銃を用意して魔力を触媒に物質化し、服へ変換する。

「形状はデモンベインに出てくる【クトゥグア】用の銃、既に使っている銃の形が【イタクァ】の銃だし、丁度良いかもな」

そう言いながら、亜空間ポケットを探るとデモンベイン関係の本を捜す。

序でだから、意思を持たない武器を収納出来る様な、そんな機巧としてみようかと考えた。

「フッフッフ、人間デモンベイン計画……」

研究者にありがちなマッド方面に傾いたが、ユーキも人の事は言えない為、問題も無い……筈。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それから約一ヶ月が経ち、いよいよ王宮へと向かう日がきてしまう。

「あーぱー姫とあんまり会ってたら、ギャルゲーよろしく好感度が上がりかねないし、どうするかな?」

「何だったら、喰っちゃえば?」

「あのお花畑を？」

「容姿は悪くないってか、寧ろ上物だしさ。将来的なスタイルだって約束されてるじゃん。お花畑っても、友達のルイズを戦地に向かわせたり、立場も弁えずに亡命を望むし、似非ウェールズにノコノコ付いていった挙げ句に友達も家臣も攻撃したり、ウェールズの復讐に取り憑かれて戦争を率先したり、その所為で才人が死に掛けたのに『王になんかなるんじゃなかった』とか平然と職務放棄な事を言うし、国宝を売り払おうとするし、友達の想い人を寝取ろうとするし、教皇にコロッと騙されるし、狂人と話し合おうとするくらいだろ？」

「お前、あーぱー姫の事が嫌いだろ……」

これだけ挙げれば充分だ。

アンリエッタがどれくらいあーぱーか、ハッキリ証明されてしまった。

まあ、敢えて弁護するなら風のルビーなどを売ろうとしたのは、その価値を全く教えられていなかったのが原因だろう。

才人への誘惑や似非ウェールズに従ったのは、弁護のしようも無いが……

「兎も角だ、確かに育てばトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の話とか、誰かが言ってたけど……今、ユーキが並べ立てた悪行を考えるとな～」

手を出す気にはやはりなれない。

どう考えても痛々しい人が決定だろう。

「例えば、光源氏作戦」

「今から鍛えろと？」

ユーキは鷹揚に頷いた。

「改善されない可能性もあるから、リスクが高いな。だいたい、何であーぱー姫との付き合いが前提なんだよ？　ボクはさっさと色男にくっ付いて貰いたいね」

「でも、原作でアンリエッタ姫がウェールズ王太子と恋に落ちるのは、原作開始の2年くらい前だよ？」

詰まり、8年は彼氏無しのアンリエッタと会う機会が有るという事だ。

遠くのイケメンより、近くの親愛。

殆んど逢えないウェールズより、近くに居るユートに転ぶ可能性が非常に高い。

実際、ユート自身がどう思っているかは知らないが、少なくともユーキは好きな相手が予め居なければ、惚れていたとと考えている。

それ程の優良物件だった。

実際、顔はウェールズ程では無いにしろ、充分に整っている。

マジックアイテムを造り出す頭がある上に、内政にもそこそこ明るい。

現代日本での知識を、此方風にアレンジして販売。

魔法も神から与えられた親和性が有るとはいえ、可成りの腕前。

武術、戦術、戦略も充分で軍人としても優秀。

うらぶれた後なら、モンモランシーを簡単に落とせるのではなかろうか？

容姿が優で稼げて強い。

ユーキの、ユートに対する評価だ。

しかも、無自覚にそういう雰囲気を醸し出している。

故に、カトレアやシエスタもユートが好きなのだろうし、アンリエッタに気に入られつつあるのだろう。

魔法学院に入学したなら、顔だけのギーシュより余程持てると思われる。

ユーキだって、好きな相手が居ながら『ちょっと勿体ないかな～』と考えているくらいなのだから。

「それで、結局はどうするのさ？」

「さっきも言ったが、さっさとウェールズ王太子に押し付けるよ」

「どうやって？」

「少し後になるけど、僕はアルビオンに行く心算だ。その時にあーぱー姫を連れて行って、ウェールズ王太子にフライングで逢わせるんだ！」

「な！？」

余りにも莫迦げた作戦に、ユーキは開いた口が塞がらない。

「どうやってさ？」

「アルビオンにはウチから商品を輸出している」

「え？」

知らなかったユーキは首を傾げる。

「内政の一環で、　馬鈴薯と呼ばれる食物を風石と引き換えに輸出していた」

「馬鈴薯？」

風系のマジックアイテムを造る為、トリステイン王国を通じて打診をした結果、アルビオン王国はそれを快諾したのだ。

未だ始めたばかりだったが結構な好感触で、栽培法を教えて欲しい

て言ってきている。

馬鈴薯は、痩せた土壌でも栽培し易くて、ビタミンや澱粉が豊富に含まれている上に、茹でる等の簡単な調理で食べられ、加熱してもビタミンが壊れ難い。

その為、江戸時代に幾度となく発生した飢饉の際に、薩摩芋と同じく主食である米等の穀物の代用品として食べられ、馬鈴薯によって飢餓から救われたという記録が残っている。

馬鈴薯は、アルビオンでも充分に栽培が見込める食物だった。

「だから、ウェールズ王太子の誕生会に今年は招かれているんだ。トリステインの代表としてピエール様が行くけど、当然ながら発起人の僕も呼ばれている。
でも、王族も行かないと失礼だよね？」

「それで押し通すと？」

「イグザクトリー」

ユーキは未だ来て一年。

オルニエールの政（まつりごと）など、識らない事も多々有るという事だ。

馬鈴薯を栽培し、アルビオンに輸出していたなんて、そんな情報はユーキも識らなかった事実。

ユートが識っていたのは、発案者であるが故だったのだが、少し悔しいと思ってしまっても仕方ない。

「ま、まあ……押し付ける準備は万端な訳か」

少し引き吊りながら、そう答えるユーキだった。

.

第２１話：デルフの性質とあーぱー姫対策（後書き）

・

馬鈴薯のアイディアは、某・小説から拝借しました。

アルビオンへの輸出なら、食料支援かなと思って……

第２２話：アルビオン王国へ（前書き）

一連のストーリーは出来てるけど、細かい部分で困ってしまう……

第２２話：アルビオン王国へ

・

馬車の中、ガタガタと揺られながら王都を目指す。

「やっぱりアスファルトで舗装された道路と違って、普通の路は揺れるな～」

ユートが錬成により、アスファルトを造って道路を舗装した結果、馬車の揺れは殆んど無くなった。

お陰で街に出るのがとても楽になったし、領民達にしても荷が揺れで傷まない事で受けが良い。

それに比べ、ド・オルニエールを一歩外へ出てしまうと砂利道や土砂道で凸凹な状態。

街も石畳の路は、経年劣化が激しくてやはりガタガタな状態だ。

せめてよく通る路くらい、整備して欲しいと嘆願書が王宮に寄せられるらしい。

マザリーニ枢機卿や国王は兎も角、少しでも予算を使わずにいて裏金を作って、着服したい法衣貴族の連中は、頑なに反対し続けているのだろう。

議会でも可成り揉めている様だ。

また、ド・オルニエールが独自ルートを使い、アルビオン王国と貿

易をしている事にも難色を示している。

元より、３０年前から徐々に税収を増やしている事にやっかんでいたが、最近になって更なる収入アップをした事で、憎しみにも近い視線をサリュートは感じていた。

そこへ来て、今度は国王の許可を得ているとはいえ、王宮を通さない独自ルートからのアルビオン王国との貿易だ。

自分達が裏金という汚い金を獲ている中、新興の子爵が国王を誑して、分不相応な稼ぎを堂々と獲ていると感じているのだろう。

下らない宮廷雀達は、故にこそ自分達の活動する領域で、サリュートの出す意見を容れようとは、決してしなかった。

だからこそ、ユートは王宮の膿を出す為に策略を練っているのだ。

失敗は破滅を意味するが、成功すれば危機察知能力の高い厄介な奴以外、殆んどの宮廷雀を処分出来る。

そうなれば、風通しも良くなるというものだ。

分の悪い賭けではあるが。

そんな企みも、実はユーキやシエスタは知らない。

この事を知っているのは、サリュートと国王とヴァリエール夫妻と勿論、発案者のユートもだ。

僅か数人だけが知る作戦。

その名も【プロジェクト・ニューウェーブ】
発動には後、2～3年くらい掛かるが……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

王宮に着いて、サリュートはユートとユーキを連れると、謁見の間へと向かう。

謁見の間に居るのは、国王と王妃とアンリエッタ姫。
それに、相談役のマザリーニ枢機卿。

サリュートは膝を着いて、頭(こうべ)を垂れる。

それに追従して、ユートとユーキも頭を垂れた。

「サリュート・シュヴァリエ・ド・オガタ・ド・オルニエール、参上しました」

「うむ、よく来たな」

いつもの挨拶。

この謁見で、同席出来るのは王妃とアンリエッタ王女以外では、マザリーニ枢機卿しか許されない。

だから、形だけの挨拶でしかなかった。

行うのは、他の貴族が決してやらない毎月の収支報告と、領内の活動とその結果の報告。

今回の報告は、温泉郷でのヴァリエール公爵家が泊まった際の感想などと、いつもの出版関係。

更に、アルビオン王国との貿易に関してだ。

アルビオン王国は浮遊大陸であり、それが故の限界がどうしても出てくる。

浮遊大陸である為、土の持つ栄養分が不足しており、飢餓者を出す程では無いにしても、対策を打ち立てなければ近い未来、拙い事になると識者は予想した。

今でさえ食糧の半分を輸入に頼っている現在、収穫量が年々減っていれば不安にもなる。

抜本的な対策が必要だと、ジェームズ一世は考えた。

それを取引先のトリステイン王国に相談してみたら、トリステイン王はその話をド・オルニエールへと持っていく。

その頃、食糧事情が大きく改善されたド・オルニエールなら、何らかの解決策も在るだろうと考えていたからだ。

サリュートは早速、新しい食物である馬鈴薯を輸出。

これの栽培に成功すれば、ある程度の食糧難を緩和出来ると説明した。

ジェームズ一世はそれを喜び、ド・オルニエール家を息子であるウェールズ・テューダーの誕生会に招く。

その話しは、当のド・オルニエール家だけではなく、トリステイン王家にも来ていた。

「という訳でして、ウチからは私と嫡男のユートが、それと新興の子爵家だけでは何ですので、ヴァリエール公爵にもご同道願っております」

「うむ、なればド・オルニエールを紹介した王家からも出すべきよな？」

「然り……」

サリュートは、我が意を得たりとばかりに頷く。

「とはいえ、余が行く事は叶うまい。なれば……ウェールズ王太子の従妹であるアンリエッタに行って貰おうか」

「わ、わたくしですか？」

「そうだ。未だ幼いとはいっても、お前も王族。立派に務めを果たして来い」

「はい、お父様」

戸惑いこそあったが、少しだけ嬉しいのか将来は一輪の花と形容される少女は、大輪の笑顔を浮かべた。

「（上手くいったな）」

ユートは内心ほくそ笑む。

ある程度の計画は国王にも話してある。

国王はそれに賛同し、計画遂行がし易いように話しを進めてくれていた。

婉曲なやり方だが、宮廷雀達に文句を付けられない様に立ち回るなら、必要不可欠な儀式。

ユートはこれでアルビオンへ、大手を振って行く事が出来る上に、アンリエッタとウェールズを早めに出逢わせる事が出来た訳だ。

その後は、前に来た時と同じで軽くお茶会となった。

具合の良い事に、ユーキにアンリエッタの興味が向いている。

「まあ、貴女はユートさんの妹なのね」

「は、はい。姫様」

「でも妹が居たなんて知らなかったわ。ジョゼットは幾つなのかしら？」

「四歳にございます」

「わたくしやユートさんの二歳下なのね」

ユーキは引き吊りながら、質問に答えている。

軽くユートを睨みながら。

ユートは何処吹く風と言わんばかりに、明後日の方向を向いて紅茶を飲む。

正に我関せずと……

アルビオンに行ったなら、約束通り一度はサウスゴータに行くべきだろう。

それから、先ずは風の精霊の居そうな場所へ行く。

その為にも、パーティーより早くアルビオンに向かわなければなるまい。

風の精霊主に会って、何とか風霊石を手に入れなければと、想いを固める。

水の精霊主ラクスの言葉が本当なら、ユートは四精霊の王と契約可能な筈。

既にユートは、次の一手に考えを巡らせていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

初めてかも知れない。

父親であるサリュートが居ない状態での旅行は。

サリュートは数日後、王宮へと立ち寄ってアンリエッタ王女をエスコートする予定となっている。

ユートはそれに先駆けて、ヴァリエール公爵と白の国へと飛んでいた。

ラ・ロシェールにある港から船に乗り、アルビオンへ向かうヴァリエール公爵とユート。

今は客席にて、ゆっくりと休んでいた。

「ユート君、君には礼を言わねばならんな」

「はい？　何ですか、藪から棒に……」

「ルイズの事だよ」

「ルイズ嬢……ああ、例の件ですか！」

ポン！　と左掌を右拳で打つと、思い出した様に顔を上げる。

例の件とは、虚無の担い手であるルイズにそれとなく虚無魔法を教え、魔法が使えないというコンプレックスが肥大化してしまって、

取り返しが付かなくなる前に矯正した事についてだ。

本来、原典に於いてルイズは周囲の諦観や蔑みや憐憫を受け、コンプレックスの塊になってしまった。

悪く云えば魔法偏重傾向が強い莫迦貴族の上塗りで、もっと悪く云えば魔法を使えない事を罪悪に思う愚者でしかなない。

そんな歪みが、魔法を使えない才人を召喚した時の、才人への態度として出た。

尤も、ハルケギニアの貴族として生まれたからには、大なり小なりそういう考えがあるから、普通の貴族だったとしても大して変わらなかった可能性もあるが。

其処はそれとして、ルイズが魔法を使えない【ゼロ】だった事が、彼女を歪めていたのは間違いない。

ユートがそれに対し、事前に干渉した結果だろうが、ヴァリエール公爵から見ても大分明るいらしい。

一ヶ月以上、碌に魔法を使えず爆発しか顕せなかったルイズは、日に日に表情がキツくなっていた。

母に叱られ、長姉に叱られて、教師に匙を投げられ、挙げ句の果てに使用人までその噂で持ちきりになる。

全てから隔絶された気分になっていたのか、優しくしてくれるもう1人の姉であるカトレアにだけ、心を開くようになっていった。

そんな折、ヴァリエール公爵が思い出したのが、僅か五歳でラインにまでなったユートの事。

藁にも縋る気持ちで文を認めたのだ。

そして、ユートは公爵の悩みを見事に解決しただけでなく、ルイズの持つ魔法の危険性まで考えて動いてくれた。

虚無……

確かに始祖ブリミルを崇めるなら、行き着かない考えだろう。

ルイズにしてみれば自分自身が、ヴァリエール公爵からすれば我が娘が、始祖の使った虚無を継承する担い手などと考えるのは、不敬としか言えないからだ。

そして知ってしまえば今度は、逆に困った事もある。

始祖の力の継承者。

それは普通の考えで云うならば、正当なる王家であるという事と同義。

他の貴族が知れば、ユートが以前に指摘した通りに、ルイズを次期トリステインの王として担ぎ上げる連中が出て来る可能性が高い。

そうなったら、現体制派とヴァリエール王朝派とで、トリステイン王国は真っ二つに割れてしまう。

果ては、ガリアやゲルマニアに併呑されての滅亡しか有り得まい。

確実に起きそうで怖い。

後は、戦争に利用されるという可能性。

それこそ兵器として、使い捨てられるだろう。

ヴァリエール公爵は知らないが、ユートはそんな未来をライトノベルで既に現実になる事を知っている。

虚無に目覚めて浮かれているルイズが、アンリエッタの復讐の為の対レコンキスタ戦で、虚無と呼ばれ軍上層部の出世の道具扱いをされる原典の未来を。

更には、ロマリアの聖地奪還作戦に於いて、ティファニアと共に巫女として奉られ、戦争の旗印にされてしまった。

ユートとしては、原典ではそれも已むを得ない事だと考えている。

原典では助言者が居らず、全てをひっくり返してしまえる【切り札】的な存在――【ジョーカー】が居ないのだから。

然し、この平行世界は原典とは違い、【ジョーカー】が存在している。

自分自身を【ジョーカー】等と思うのは、厨二病(まっしぐら)蔓地な考え方ではあるが、強(あなが)ち間違いでは無い。

兎に角、ヴァリエール公爵の想いとユートの考えは、利害的に見て一致した。

ルイズの事はその結果でしかないだけに、手放しで誉められるのは心苦しい。

「（まあ折角な訳だしな、アフターケアも確りやりたいし、ピエール様にも例の構想を話しておくか）」

どう隠蔽しようと、ルイズの虚無は何れバレる。

そうなれば、ユーキの事もティファニアの事も芋蔓式にバレる可能性があった。

だからこそ、ロマリア対策は今からでも必要なのだ。

「ピエール様、ルイズの事もですが、実は内密なお話しがあります」

「む？　判った」

ヴァリエール公爵はサイレントを使い、空気の振動が外に漏れるのを防ぐ。

原作でも、タバサが使って煩いキュルケの言葉を空気の層で隔絶していた。

これにより、扉の外に誰かが居ても中の声は聞こえる事が無い。

その逆もまた然りだが……

「さあ聞こうではないか。君の懸念を」

サイレントで聞く準備が出来たヴァリエール公爵は、ユートに話す様に促す。

ユートが何かしらの秘密を抱えている事は、公爵も気が付いている。

五歳の子供が持つには、余りに大き過ぎる知識。

虚無の知識など、普通は簡単に得られはしない。

それを呪文付きで識っていたとは、幾ら何でも出来すぎなのだ。

恐らくは自分は疎か、両親にすら話していないだろう“何か”を抱え、ルイズの為にその一端を解放してくれた。

だから敢えて何も聞かないと、妻と共に決める。

ユートがその“何か”を、自分達の不利益になる事には決して使わないという、そんな確信めいた予感があったし、寧ろ追及する事は金の卵を産む鶏を、絞める行為だと感じていたから。

「はい……」

促されて首肯しながら返事をする。

ユートは既に、サリュートや国王に話している計画について話した。

その内容に、ヴァリエール公爵は驚愕すると同時に、その危険性に気が付く。

だが、上手くいけばそれでロマリア皇国の権威は失墜……しなくと

も、可成り落ちてしまうだろう。

代償として、ユートは未だ幼い身の上で死の危険に晒されるし、その手を血で汚す事になる。

ロマリアにはヴァリエール公爵も辟易しており、どうにかしたいとは常々思ってはいた。

だが、教会の権威が余りに大きい為、どうする事も叶わなかったのだ。

ロマリアの腐れ坊主共は、ヴァリエール公爵から見てもただのニート集団。

積極的にしている事と云えば、精々が献金という名の賄賂の要求。

断れば、異端審問を盾にした脅迫をしてくるだけ。

貴族も平民から同じ事をしているのだから、ロマリアにだけ文句を言うのも筋違い甚だしいが……

然し、ユートはルイズの為に泥を被ると言っているに等しい。

「本気かね？」

「はい、その為にピエール様にもご協力を仰ぎたいのです！」

「……判った」

暫しの沈黙、表情を歪めて自身の無力に怒りを感じながらも、了承

した。

そうこうしている内にも、船がアルビオン側の港に到着する。

漸く着いた港。

取り敢えず、シティ・オブ・サウスゴータに行って、マチルダに会う事にした。

勿論、行き成り他国の貴族が押し掛けて良い道理など有りはしない。

港街で一泊して、先触れを送っておいた。

名義は【ユート・オガタ・ド・オルニエール】だが、入国の目的がウェールズ王太子の誕生会への出席で、その中継地としシティ・オブ・サウスゴータに入り、宿泊したいという内容。

しかも、ヴァリエール公爵を伴っている旨も、同時に認めておく。

テューダー王家に招待された貴賓の手紙に、当然ながらサウスゴータ家は受け入れ準備に大童だろう。

他国の貴族を相手に、自国アルビオン王国の恥は晒せないのだ。

一日待つと、サウスゴータ家から返事と共に、迎えの馬車を寄越してくれた。

馬車を走らせる事、数時間……

サウスゴータ家に着く。

サウスゴータ太守が、妻と娘であるマチルダを伴い、ユートとヴァリエール公爵を歓待してくれた。

ユートは子爵家の嫡男に過ぎないとはいえ、アルビオン王国の食糧難を解決してくれたド・オルニエールの人間。

家格が下である事など関係無いとばかりに、公爵共々上位歓待を受ける。

歓待から抜け出し、宛がわれた部屋に入ってゆっくりしていると、扉をノックする音が響いた。

「どうぞ？」

入室の許可を出すと、扉を開いてマチルダが部屋に入ってくる。

「お邪魔するわ」

相変わらず、深緑の様な髪の毛が綺麗な少女だ。

ユートはそう思った。

１１年後の原作では見られない、貴族令嬢なマチルダは存外と清楚だ。

原作時はフラッパーな感じな姐御肌なイメージだっただけに、貴重だと思った。

本人には、とても言えないのだが……

「何のご用件でしょう？　ミズ・マチルダ」

「いえ、ミスタ・オルニエール。少しご一緒にいかがかと思いまして」

どうやら、ユートと飲もうと思ってワインを持って来たらしい。

「ああ、良いですね～」

現代日本の感覚では、子供にワインを薦めるのはどうかと思うが、この世界では割りと普通の様だ。

だからユートも応じた。

グラスを満たす赤ワイン。

「じゃあ、乾杯」

「何に？」

「男なら気の利いた台詞を言ってみなさいな」

「いや、年齢一桁の子供に何を期待してるかな？」

大粒の汗を流し、ユートは苦笑する。

「クスクス、それもそうよね。何となく年下に思えなくてさ」

コロコロと笑い、ワインを軽く煽って喉を湿らせた。

アルコールの所為か、赤い頬が未だ幼い顔立ちを艶っぽく魅せる。

「あの時の子よね、貴方」

「はい、トリステインの宝石店で貴女とは一度お会いしました」

「アルビオンに来たら寄りなさいと言ったけど真逆、ヴァリエール公爵を伴って来るのは想定外よ」

「丁度、一緒にこっちに来る用事が出来まして」

「確か、馬鈴薯……だったかしら？　“貴方が”齎したあの食物は」

「ええ、そうです。東方から入ってきた食物でして、栽培し大きな成果を挙げてくれたモノで、アルビオンの食糧事情を改善出来るかと思いまたから」

「へえ？」

楽しそうにユートのする説明を聞くと、マチルダは更にワインを煽った。

暫く飲んでいると、眠ってしまうユート。

アルコールの回りが早かったらしい。

そんなユートを、マチルダは抱き上げるとベッドに寝かせて部屋を後にする。

「それじゃ、良い夢を視なさい」

子供を酔い潰してしまい、少し罪悪感があったのだろうか？　眠るユートにそう声を掛けた。

マチルダが部屋を出て少し経つと、ユートはガバリと起き上がる。

実はユートはまったく酔ってはいない。

1人で考えたい事が出来た為、酔い潰れた振りをしたのだ。

そもそも、水の精霊王との契約をした契約者（コントラクター）たるユートは、自分自身の水の流れを操作して、あらゆる毒を浄化してしまえる。

アルコールもまた、毒素であると定義すれば当然ながら、弾いてしまえた。

酔いたければ、弾かなければ良いだけなので便利と言えば便利な力だろう。

考えたのは少し未来の事。

国王ジェームズ一世の弟である、モード大公が現在囲っているだろうシャジヤルと、その娘のティファニアの事をどうしたものか……

正直、どうにも出来ない。

現時点で、モード大公とは知り合いでも何でも無い上に、マチルダ

とも知り合ったばかり。

それでエルフの妾について知っているのは、あからさまに不自然。

寧ろ、変に警戒されてしまうだけだ。

「やっぱり手出しは無理だろうな」

訳知り顔で、ティファニアの事を口走ればどうなるかなど、判り切っている。

トリステインの貴族である以上、ユートがアルビオンの御家騒動に関わる訳にもいかない。

そんな事を今やれば、一緒に来ているヴァリエール公爵の顔を潰してしまうし、どう転んでも良い事にならない予感がした。

「軟禁状態に等しいのに、他国の貴族の俺が知っているなんて、向こうからしたら不気味でしかないしな。仕方がないか……」

心苦しくはあるが、全てを救う道は無い。

況してや、モード大公とは直接的に話をする機会など無いだろう。

一番、拙いのはマチルダが今現在、ティファニアの事を知らなかった場合だ。

藪をつついて蛇を出すのは得策ではない。

妹の様に可愛がっているならば、幼い頃から知っている可能性が高

いが、それが何時かは判らないのだ。

「他国の事は、やっぱ対処療法ってところか」

そもそも、自分の国の事だって今は自領の事だけでも精一杯なのに、更に手を伸ばすのは危険でしかない。

取り敢えず、マチルダには困った事があったら相談に乗ると言っておくに留めるのだった。

.

第２２話：アルビオン王国へ（後書き）

・

ユートの手は、腕を拡げた分しか救えません。

マチルダやティファニアに関しては、やはり魔法学院に行ってからになります。

第２３話：風の精霊王（前書き）

色々と独自設定あり。

第２３話：風の精霊王

・

ユートは王宮へと向かい、主賓たるウェールズ・テューダーに会っておく。

「初めまして、殿下」

臣下の礼こそ採らないが、最大限の敬意を以て挨拶をする。

他国の王子である為、臣下の礼など採る必要は無いだろうが、身分が上であるからには相応の儀礼は必要。

「初めまして、ユート殿」

対して、当のウェールズは割りとフランクに、笑顔で話し掛けてきた。

王子としての態度としては些か軽いが、どうやら人間としての度量はそれなりに有るらしいと判断する。

これで無駄に頑固でなければ、レコンキスタに占領された後の旗印としては最適なのだが……

ガリアへの梃子入れが出来ない以上、レコンキスタの台頭は間違いない。

そうなれば、彼は原作通りにその生命を散らす事になってしまう。

「（あーぱー姫を押し付ける為にも、死んで貰う訳にはいかないけどな）」

もし将来ウェールズが死んだなら、その皺寄せは本来の主人公である平賀才人か自分に来る筈だ。

だったら梃子入れしてでも死なない様に、今から色々とやるべきでは？

普通ならそう思う処だが、恐らくは余り意味が無い。

仮に、レコンキスタが台頭しない様に策を巡らせるとするなら、どうするか？

案1：オリバー・クロムウェルの早期暗殺。

別の頭が据えられ、誰になるか判らなくなってしまうリスクがある。

案2：ラクスに言って、似非虚無に使われるマジックアイテム、アンドバリの指輪を隠してしまう。

向こうはマジックアイテムの専門家、隠しても無駄かも知れないし、別のアイテムを使われたら目も当てられない。

案3：今すぐにでもモード大公に、妾のシャジャルと娘のティファニアに関して対処して貰う。

他国の貴族であり、知らない筈の知識から案を出した処で黙殺されるか、最悪で秘密を知ったとして暗殺者を送られかねない。

案４：いっそ、ガリアに行って真実をぶちまける。

確かにシャルルの真実を知れば、ジョゼフの暴発は無いかも知れないが、此処で忘れてはならない存在が、彼の混沌の名を冠する者。

どの道、アレが動けば全ては意味を為さない。

正に敵側のジョーカー。

「（やっぱり自分の手の届く範囲でしか救えないか。なら、アルビオンは戦争が始まってからだな）」

ティファニアは、その前に移住させれば良い。

というより、よく考えてみれば今からティファニアを救えば、戦争が起きた場合に孤児達は救われない。

幾ら何でも、現時点で誰が孤児になるかなど判る筈も無いのだから。

どんなに妨害をしたとしても、恐らくは何らかの形で争いが引き起こされる。

“奴ら”はそれを望んでいるのだから。

それに世界の修正力も莫迦には出来ない。

世界は在るべき姿である事を望む。

本来の歴史から外れたら、別の何かで埋めようとするだろう。

なら、原作知識が使える内は使った方が良い。

対処療法ではあるが、少しずつ原作から切り離すのが得策だし、制御出来るリスクの方がやり易いのも確かなのだ。

差し当たり、ユートがするべきは風の精霊主と逢い、風の精霊王の存在する異界へと扉を開いて貰う事。

そして、上手く契約を交わして聖痕（スティグマ）を刻んで貰い、風霊石を下賜される。

何故なら、砂漠で最も強い精霊力は風と火。

場合によっては、エルフとの戦闘も視野に入れなければならない以上、砂漠で使える精霊との契約は必須だろう。

砂漠（サハラ）に行くなら、少なくとも風の精霊を味方に付けておきたい。

実際、砂漠で水の精霊力は極端に低い為、水の力で挑んでも勝ち目は無い。

別に喧嘩しに行く訳ではないが、エルフ側は喧嘩腰で来るのは目に見えている。

何しろ、連中から視たなら此方は蛮人だ。

原作でも、アリィの態度が全てを示しているし、評議会の才人やティファニアに対する態度は、喧嘩を売っているとしか思えない。

ルクシャナの様に、観察動物扱いもどうかと思うが、それでもマシではある。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ウェールズは、食糧事情の改善を行ってくれたユートに、感謝しているらしい。

実際、馬鈴薯は毒性を持つ部分にさえ気を付ければ、結構美味しい。

それに、小麦などに比べて同じ耕地面積で、約3倍の収穫量が見込める。

勿論、問題もあるのだが。

問題は麦より地の力が衰え易くなるという事。

年に三度の収穫が出来るのが強みだがその分、栄養素も奪われてしまう。

ド・オルニエールでは糞尿や生ゴミの類い、動物の死骸などを肥料に換えて、畑を維持している。

然し、どうも他の貴族や国では本当にそういう措置を採っていないらしく、場合によっては不作になる事も屡々あったと聞く。

馬鈴薯を作物として作るなら、正しい農法を伝えておく必要があるだろう。

ウェールズとの話しも終わって、次はジェームズ一世へと挨拶をし、農法を伝えてしまう。

ジェームズ一世にも挨拶を終えると、ユートは風の精霊主が居るかも知れない地である、アルビオン山脈を目指す。

山脈の頂上は、ハルケギニアでも稀で風の力が強い。

そんな所であれば、きっと風の精霊主も居る筈。

ユートは登山の装備を整えて、アルビオン山脈を踏破するべく登り始めた。

獣や鳥も居るが、オーク鬼などの凶暴な亜人も居る。

『永久を生まれし往き交う風よ、優しき流れ揺蕩う水……全てのモノに白い息吹を！　氷窟蔦（ヴァン・レイル）ッ！』

【氷窟蔦】

押し付けた手を起点とし、無数の氷の糸を這わせる。この糸に触れた対象は、足から全身へと氷の糸に覆われて、たちまち氷の彫像と化してしまう術。

ルーンを口にして、頭の中でスレイヤーズの詠唱を唱え、術式を構築する。

使うのは水水風のトライアングル・スペル。

氷窟蔦（ヴァン・レイル）はユートのイメージ通りに、大地を這いながら氷の糸がオーク鬼に絡み付く。

その侭、オーク鬼は完全に氷の彫像となった。

腰に佩いた刀を抜き、それで凍ったオーク鬼の首を刎ねてしまう。

多少、生命力が強いオーク鬼は氷が溶けた時、復活してしまうかも知れない。

然し、首を刎ねてしまえば復活はあり得ない。

こうやって、ユートは襲ってくるオーク鬼を倒しながら頂上を目指し、アルビオン山脈を登る。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「お久し振りでございますな、ジェームズ一世陛下」

「うむ、久しいな。ヴァリエール公爵。弟の結婚式以来かな？」

「は……」

王家に最も近しい家柄であるヴァリエール公爵家は、王族の結婚式に呼ばれる事も屡々ある。

現在のトリステインの国王は、アルビオン王のジェームズ一世の弟に当たった。

つまり、ユートがくっ付けようとしているウェールズとアンリエッタは従兄妹と云う事だ。

「この度は、我がアルビオンの要請を受けてくれた事を感謝する」

「いえ、全てはユート・オガタ・ド・オルニエールの手柄にございます」

「ふむ、馬鈴薯と言ったか……塩を付けて食べてみたが、中々に美味であった」

蒸かした馬鈴薯に、塩を調味料として食べたらしい。

「彼が言うには、馬鈴薯一つに様々な食べ方があるとか。城に戻って来たなら、色々と訊いてみるのも宜しいかと」

「そうしよう。栽培法の方も確りと訊かねばならん。然し、アルビオン山脈への立ち入りを認めて欲しいとはな。あそこは永きに渡り人の手が入っておらんし、亜人の住処となっておる。本当に大事ないのか？」

「あの子なら恐らくやるでしょうな」

自信満々に答える公爵の目には、信頼の色がハッキリと籠っていた。

「あの年齢でそれ程か」

驚くジェームズ一世。

何を驚くって、ヴァリエール公爵をして未だに小さな子供のユートを、完全に信じているという事実にだ。

「あの子が嫡男でさえなければ、我が後継者に欲しかったものですよ」

それが、ヴァリエール公爵のユートに対する評価。

あの親バカをして、娘の誰かを嫁にやってでも繋がりを保ちたいと思う位に。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

二日後には、トリステインの大使としてアンリエッタとマザリーニが来る。

ユートはそれ迄に頂上へと到り、風の精霊主と会わなければならない。

登山に一日、下山に一日。

ギリギリの日程だ。

『全ての力の源よ、輝き燃える熱き炎よ。我が手に集いて一条の矢となれ……』

火火のラインスペル。

ルーンを口ずさみ、頭の中でイメージを術式化。

イメージの内で唱えた呪文は、そこそこ強力な火炎系のスレイヤーズ魔法。

「爆炎矢(ヴァ・ル・フレア)ッ！」

【爆炎矢】

火の矢が目標へと命中した途端、炸裂し凶悪な殺傷力を発揮する呪文。火炎球よりも威力が高い。

オーク鬼に命中した火炎の矢が、一気に炸裂して焼き尽くしてしまう。

「頂上まで、あと少し」

段々と風の力が強くなっているのが、ユートにも判ってきた。

契約している訳でもない筈の精霊力を感じるならば、それは固有精霊力が上昇していると云う事。

それだけ濃厚な気配。

「間違いない。在(い)るな……この先に」

木々を掻き分け、ユートは先を急ぐ。

「こ、これは……」

アルビオン山脈の頂上に着いて、その圧倒的な台風の如き風に驚愕した。

然し、圧倒されてばかりも居られない。

「風の精霊主っ！　在るのだろう？　姿を顕してくれないかっ？」

風は偏く全てに在る。

何故なら惑星全土を覆い尽くしているモノこそが大気であり、それが流動している流れそのものを“風”と呼ぶのだから。

即ち、風の精霊とは惑星を覆う空気そのものへの干渉力の具現、具象体なのだ。

だから、何もこんな所まで来ずとも呼び掛ければ風の精霊には聴こえる。

然し、契約も何もしていない人間の呼び掛けに、風の精霊が応える義務は無い。

だからこそ、最も風の力が強いだろうこの地までやって来た。

後は風の精霊主へと呼び掛けて、応えて貰うだけ。

「風の精霊主よ！　頼む、応えて欲しい！」

さて、ユートが言う精霊主とは何か？

元より、精霊には呼び分けなど意味を為さない。

ユートは人間に解り易く、それを分けた。

ハルケギニアに於いての、人間社会に見立てたのだ。

自意識を持たず、単純意思を持つだけの小精霊。

小精霊を平民。

自意識を持った、精霊王の地上代行者たる精霊主。

精霊主を貴族。

そして、自然界の在り方を司る概念体を精霊王と呼んでいる。

精霊王が国王や皇帝。

属性、系統を各国と見立てていた。

詰まり、風の精霊主というのは【風の国の貴族】という意味合いになる。

ユートがやろうとしている事は、それだけ見ても大概無茶苦茶だと判るだろう。

何故なら、全ての国（系統）の貴族（地上代行者）に成るべく、各

国の王（精霊王）に謁見しようとしているのだから。

現実的に見て、人間の世界でも出来ない事を、非現実的な精霊の世界で果たして叶うかどうか？

普通なら不可能だ。

だが、ユートの場合はその為に必要となる“資格”を有している。

ユート的には、とても嫌な喩えになるのだが……

各国の王（精霊王）を越える権威が、その資格となっていた。

概念体の中でも最上位の、金色の巫女姫の祝福。

ハルケギニア風に言えば、ロマリア皇国の教皇の委任状を持ってる様なモノだ。

「うわ、何かスッゲー嫌な想像しちまったぜ！」

思わず前世での口調になるくらい嫌だったらしい。

「やっぱりラクスの時と同じで、肉声で幾ら叫んでも意味は無いかな」

水の精霊主ラクスに呼び掛けた時、ユートは自らの内に流れる水（血）を触媒に、精神力を通して思念でそれを行った。

「今にして思えば、血じゃなくても良かったのか？　確か、烈風の姫騎士の方でダルシニが、血の代わりに汗で腹を満たしてたよな」

汗の成分にプラスαして、血の成分の様な事を言っていたという事は……

「小〇でも良かった？」

汗の成分とアレは、然して変わらないモノの筈。

ユートは目を閉じ、頭（かぶり）を振った。

精霊を相手に、不届き過ぎる想像だったからだ。

第一、小〇に導かれてやって来る水の精霊……

「凄く嫌だな、それは」

本当に嫌な想像に、自己嫌悪に陥ってしまう。

「気を取り直して、と」

ユートは、先程のアホな想像を黒歴史に認定すると、真面目に【風の精霊主】を呼び出す為の方法を模索し始めた。

人間に限らず、生命体とは概念的に見た場合、全ての系統で創られていた。

精霊が、各々の属する系統一極で形作られているのに対して、肉の身体を持った存在は縛られていない。

人間の身体を構成しているのは物質系の元素で、主に蛋白質や鉄分、

カルシウムといったモノだ。

それを土系統とする。

また人間の成人体は、大体６０～７０％は水分で出来ていると云われ、赤ちゃんは約８０％を占めており、水分の割合が多い。

これを水系統。

人間は血中に酸素を持ち、空気を吸って二酸化炭素を吐き出している。

非物質系の元素も不可欠という事だ。

これが風系統。

そして、人間は熱を持たないと生きていけない。

少なくとも、地上の哺乳類に関しては間違いなく。

通常で平均３６℃、風邪の時は菌を殺す為に４０℃にも及ぶ熱を出す。

これを火系統としよう。

少々、無理矢理な感も有るだろうが、四系統の全てが人間の構成要素だ。

ならば、器の大きさにも依るのだろうが、人間全員にその素養は有るのだろう。

そう、問題は器。

普通の人間の器では土台、精霊との契約によって与えられる力に耐えられない。

【風の聖痕】という噺でも風に特化した契約者（コントラクター）、八神和麻ですら聖痕の発現に数分間しか保たなかった。

それ以上、発現を続けていれば完全に処理能力を越えてしまい、脳が焼き切れて廃人になっていただろう。

人間という種の、それは謂わば限界。

ユートは転生という形で、一度は八識に至っているという事もある上に、金色の巫女姫の祝福も手伝って、四精霊の王達全てとの契約が可能な器が既に出来上がっている。

許容量（キャパシティ）が、単純計算でも普通の契約者の数倍あるのだ。

後は、それを扱う知識。

ユートは本能のレベルで、その知識を持っていた。

それに、ライトノベルなどや雑学書の知識も有る。

器と知識が有るなら、残るは器を充たす力のみ。

ユートは精霊王から、力を与えて貰う為に現在は精力的に動いてい

る。

「本格的に始めるか」

そう言って、行き成り服を脱ぎ始めた。

誰かが見ていたら、明らかに変態行為だ。

だが、ユートは思う。

精霊王との交感には、肉体以外の物質を纏っていてはいけないと。

絶対では無いが、最も交感をし易いのは裸だと、そう考えている。

人間が持つ風の要素と言えば息吹。

裸となったユートは、呼吸法を使いながら息吹に精神力を乗せる。

そして思念で呼び掛けた。

『風の精霊よ、僕の呼び掛けが聴こえるなら応えて欲しいんだ……っ！』

目を閉じて、風の精霊主が呼び掛けに応じる迄、何時間だろうが動かない覚悟でそれを続ける。

『ふむ、漸く届いたか？』

突然、頭に響く声。

『風の精霊主なのか？』

『精霊主？　ああ、成る程な。そういう意味ならその通りだと答えよう』

目の前には何者をも映してはいないが、確かに感じる存在感。

『ラクスは不定形の水が形を採っていた。なら、風の精霊主は目に映らない風が形を採っているのか？』

『その通りだ、大いなる金色に守護されし単なる者』

『やっぱりラクスと同じ事を言うんだな』

『ふむ、ラクスか。それは貴様達、単なる者がラグドリアン湖と呼んでいる地に在る水の同胞の事だな？』

アッサリと看破してしまう風の精霊主。

ユートは吃驚した表情で、風の精霊主を見つめる。

『何を驚く、大いなる金色に守護されし単なる者よ。我は偏く全てに在る存在。それ故に、貴様が水の同胞に名を与えた事も当然ながら識っておるよ』

『な、成る程……ね』

言われてみれば至極当然。

大気の在る所、全てが風の精霊の領域なのだから。

『故に、貴様の目的も我は知っている』

『っ！』

『我らが王の試練を受けるのだな？』

『はい！』

『我が声を聴く貴様には、既に資格を有する。では扉を開こう』

『待って！』

『どうした？　試練を受けるのを止めるのか？』

『その前に聞きたいんだ。何故、直ぐに僕の呼び掛けに応えてくれなかった？』

気になっていた事を訊いてみると、風の精霊主は何処か呆れを含んだ気配を漂わせる。

『我はずっと応えていた。然れど、貴様には水の気配が強過ぎて我が声が届かなかったのだ』

『そうか、思念で話し掛けていたから……』

ユートは自分の失敗に気が付く。

つまりは、呼び掛ける事にばかり注視してしまって、相手の声を聴こうとしていなかった。

なんて愚か。

なんたる身勝手。

耳を塞ぎ、ただ大声を張り上げて叫ぶだけだった。

対話とは、相手の言葉に耳を傾ける事を前提としているのに。

恥ずべき事だ。

『……済まなかった』

『謝る必要は無い。その時は資質は有れど資格無しというだけの事よ』

裸になって呼び掛け始め、時間が経つにつれてユートの水の気配が薄れた。

風と一体化したかの如く、ユートの心は風に溶け込んでいき、一種のトランスファーへと至る。

それがクリア・マインドを導いたのだろう。

『ありがとう。何と無くだけど解った気がするよ』

『ふむ、ならば帰ってきたなら水の同胞と同様に名を付けて貰うか？　無事に帰って来れば貴様は我が同胞故にな』

『判ったよ。考えておく』

どうしてだろうか？

見えない筈の風の精霊主が何故か、微笑んだ気がしたユート。

扉が開いたのか、竜巻に浚われてしまう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

水の精霊王の概念空間は、水の色を示していた。

そして、今回は風の精霊王の概念空間。

それは晴れた大空の様な色を示す。

この概念空間こそが、風の精霊王の意志そのもの。

水の精霊王の時は溺れる様な感覚だったが、今回はやはり違ってまるで過呼吸の様な状態だ。

何でも過ぎれば毒となる。

水は必要不可欠だが、摂り過ぎれば体調を崩す。

トリカブトという植物は、強い毒性を持っている物だが、一定量なら逆に薬に成る様なものだ。

空気も同様。

「はっ、はっ、はっ……」

この侭、過呼吸が続いたらユートは何れ死に到る。

「（思い出せ、さっき風の精霊主と交感した感覚を。拒むな、受け止めて、受け容れるんだ……）」

精神をより高みに至らせ、精霊の力を、意志を自らの内に受け容れる事こそが、契約のたった一つの条件。

「かはっ！」

まるで肺の中の空気を全て吐き出したかの様に、一声噺き動かなくなった。

「……」

クリアになる思考。

受け容れる、それは意識的に行う事では無い。

自然体であって初めて可能な事。

それに気が付いた時、瞳には深い空の如く蒼い輝きを湛えていた。

地上に戻ったユートの右手には、白い石が……風霊石が握られている。

『戻ったか。我が新たなる同胞、ユートよ』

『ん、無事に戻って来たよリーベルタース』

『リーベルタース？　それが我が名か？』

『ああ、風を概念的に見たら相応しいかなと思って』

【Ｌｉｂｅｒｔａｓ】
ラテン語で自由の意。

『僕達の世界の言葉でね、自由って意味だよ』

『成る程、我には相応しい名だな』

どうやら満足してくれたらしい風の精霊主。

否、リーベルタース。

『行くのか？』

『うん』

『ならば忘れるな。風は、我は偏く全てに在る事を』

『忘れないよ、リーベルタース。君は常に共に在る』

ユートは服を着ると、空を飛翔する。

風の聖痕を刻まれ、ユートは風の精霊王の地上代行者となった。

だからこそ、風の精霊達はユートを運んでくれる。

ユートは登る時と比べて、僅かな時間で降りていく。

「大いなる意志に守護された者……」

未だ成り立てであるが故、木陰に隠れていた人影に気が付かない侭に。

・

第２３話：風の精霊王（後書き）

・

スレイヤーズの魔法で、詠唱が判らないか公式設定が無い場合は、オリジナルでそれっぽく書いています。

第２４話：白の国の王子（前書き）

今回、ご都合主義万歳的な噺が多々あります。

今更かな？

第２４話：白の国の王子

・

「では姫様。不肖ですが、このサリュート・シュヴアリエ・ド・オガタ・ド・オルニエールが、アルビオン王国までエスコートさせて頂きます」

臣下の礼を採り、サリュートはアンリエッタを含んだ家臣団の先頭に立つべく、挨拶をする。

「この度はよろしくお願いしますね、ド・オルニエール子爵」

「は、見に余る光栄です」

トリステイン国王とは個人的に親しくはしているが、公私は弁えて行動する必要がある。

今は公人として動く以上、サリュートは丁寧な物腰でアンリエッタ王女に接していた。

アンリエッタ王女自身は、普段がフランクな態度であるサリュートの公人としての顔を、今回の事で初めて見て少し戸惑う。

サリュートは、アンリエッタ王女にとっては、父親の友人の気さくなおっちゃんだったからだ。

それでも、一応は一国を預かるトリステイン王の娘。

この場合の応対の仕方くらいは、日々の勉強できちんと習っている。

スッと右手を差し出す。

サリュートは、右手の甲に軽く口付けると立ち上がって、全員を先導した。

サリュートとアンリエッタは馬車へと乗り込み、家臣団となる王国騎士達は馬に騎乗すると、アルビオンに向けて出発する。

馬車に乗り込んでいるのはアンリエッタとサリュートの他、マザリーニ枢機卿も一緒だった。

「（さて、漸く出発出来たな。ユートは彼方で上手くやっているか？）」

心配はしているが、信頼もしているサリュート。

胸中は少し複雑だ。

「サリュート殿、ユートさんは既にアルビオンに居るのですよね？」

「はい、姫様。そもそも、ユートがウェールズ様の誕生会に名指しにて招かれた理由が、陛下の要請を請けてユートが栽培法を確立して栽培していた馬鈴薯を、彼の国へ輸出した事にあります。ユートは誕生会に先んじて、栽培法を伝えたりと仕事が有りましたから」

「馬鈴薯……、確かに美味しかったです」

「ご賞味頂きましたか」

蒸かして熱々の馬鈴薯に切れ目を入れ、バターを乗せた蒸かし馬鈴薯のバター乗せを、アンリエッタは一種のオヤツで食べている。

他国へ輸出する以上、自分達が食べた事もない物など送れないからだ。

「ユートが言うには馬鈴薯を使った料理は、可成りの多岐に渡るとか。ウチでもジョゼットが研究しておりまして、ユートの専属メイドが調理をしております」

「まあ、わたくしも是非に食してみたいです」

「それでしたら、レシピが出来上がればお城にお持ち致しましょう」

「はい！」

アンリエッタ王女は朗らかな笑顔で、喜んだ。

因みに、マザリーニ枢機卿は一切会話に加わっていないが、目は閉じていても確りと聴いている。

一応は、アンリエッタ王女に政治的な事を教える為の教育係を、トリステイン王から仰せつかった身。

間違った知識や思想を植え付けられたり、変な言質を取られたりしては困るという事だ。

まあ、サリュートがそんな事をしないとは思う程度には信頼しているが……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃の、置いてきぼり組であるユーキとシエスタ。

サリュートの言う通りで、シエスタは厨房の一角を借りて、馬鈴薯の料理を作っている処だ。

ただ、ユーキが研究しているというのは間違い。

研究ではなく、レシピを書いてはシエスタに渡して、シエスタがそのレシピ通りに作っているだけだ。

「ユーキ様、やっぱりこのお料理には調味料が足りないみたいです」

「あ～、この辺（世界）には無かったか」

その料理に必要な調味料とは、味醂だった。

米は有るから、自作すればいいのだろうが今すぐには無理だろう。

「しょうがないな。味醂を造るまでは一先ず置いておくか。お兄様なら原料さえ用意すれば、錬成で造れるだろうし」

酒の様に、微妙な違いがあるモノは再現が難しいが、単純な量産品を造るならば割りと簡単に出来る。

「（日本酒の方は武雄さんが造ってたけど、種類も量も少ないしな～）」

日本では当たり前に食べれた味を、このハルケギニアで再現していくには足りない物が少な過ぎた。

武雄が造っていた日本酒を料理酒にするには、量的な意味でも難しい。

「これ、薄くスライスした馬鈴薯を、植物性油で揚げてお塩を塗したチップスですか～」

シエスタは、紙に書かれたレシピ表を見て次の料理に思いを馳せる。

結構、愉しくなってきたのかも知れない。

「これ、作ってみますね」

ユートが帰って来た時に、美味しい料理を食べて貰う為に、シエスタは研鑽を続けていた。

「えっと、用意するモノは馬鈴薯とお塩と油……」

馬鈴薯の皮を剥き、１ｍｍ厚さに薄切りにする。

切った馬鈴薯は、空気に触れると酵素のは働きで変色するので、薄い塩水に浸け３０分くらい置く。

仕上がりが濃くなってしまわないように、たっぷりの湯でさっと茹でる。

水で馬鈴薯の澱粉を二回に分けて洗い流す。

洗い流した澱粉は、後で濾してフードスターチにする為に残しておく。

大した量にはならないだろうが、家庭料理用ならいけるだろう。

水を切って、残っている水分をタオルでふき取る

１５０℃～１６０℃の低温の油で5分ほど加熱して、水分を飛ばす。

その際、水分が無くなってくると泡がだんだん小さくなってくる為、それを目安にする。

１８０℃～１９０℃の高温の油でカラッと揚げる

揚がった馬鈴薯が未だ温かい内に、塩を振り掛ける。

これが馬鈴薯のチップス揚げのレシピだ。

シエスタは表にあるレシピの通り、馬鈴薯をスライスして洗うと油で揚げ、塩を振り掛けていく。

因みに、塩はユートが海で海水から造った塩。

料理の調味料用に、錬成で造り上げたらしい。

「出～来たっ♪」

完成したチップスの一部を厨房の人達用に残し、他は曾祖父やメイド達にお裾分けしてしまう。

自分とユーキとユリアナ用にワインのツマミとして、庭先のテーブルに置く。

グラスにタルブワインを注ぐと、3人が席に揃って座ってワインを飲み、チップスを食べてみた。

「うん、上手く出来てる。美味しいよ、シエスタ」

「本当、美味しいのね」

「ありがとうございます」

ユーキとユリアナに褒められて、シエスタは嬉しそうに微笑んだ。

頬の赤みは、アルコールの所為か、それとも気恥ずかしさによるものか……

何れにせよ、その日のオルニエール家が平和そのものだったのは、間違いない。

下山したユートは王宮へと戻り、与えられていた客室に入るとベッドに腰掛け、疲れ果てた身体を直ぐにでも横たえた。

「しんどいな」

右腕で目を隠し、一切合切の視覚情報を遮断する。

肉体的には大した事もないのだが、精霊王の試練というのは精神的に疲労した。

然し、充実感が確かにあるのも事実だ。

昔、前世では無かった。

余りに中途半端な緒方優斗には、到底感じる事が出来なかった心地好い疲労感。

水の精霊王と風の精霊王から刻まれた聖痕（スティグマ）は、恐らく同時には使えまい。

否、それは不可能では無いだろうが、脳に掛かる負担は半端では無い筈。

実際、優斗が獲た力は個人が所有するには過ぎた力。

謂わば、今まで刀や銃器を使っていたのが、核兵器を持たされた様なものだ。

一発逆転なんて、生易しい話ではない。

下手をすれば護るべき存在すらをも、呆気なく滅ぼし兼ねない危険な力。

ユートはそれを自覚して、成る可く（なるべく）情報をオープンにしないよう心掛けている。

とはいえ、王家に隠し続けるのはバレた時のリスクを考えるならば、却って危険かも知れないと考えた。

特に、トリステイン王国は水の精霊主ラクスと盟約を結んで、交渉役なんて役職を置いている。

その交渉役を差し置いて、自分が契約をしているのだから、場合によっては叛意有りと見なされるだろう。

より正確には、ラクスではなく、その上の存在である水の精霊王との契約だが。

「一度、ピエール様に相談をしてみるべきか？」

相手はトリステイン王国の重鎮だし、ルイズの事も考えれば下手は打ちたくないと思うだろうし……

「あと、問題は火の精霊王と土の精霊王の居場所か。まあ、火の精霊王は恐らく火竜山脈だろうけど」

ハルケギニアでに於いて、最も火の精霊力が強い場所が有るとすれば、最大の火山だとされる火竜山脈だと予想される。

「土の精霊王か……」

厄介なのは土の精霊王。

ライトノベルでも、それっぽい場所が特定出来ない。

「一番、可能性が高いのは土のルビーが継承されてるガリアか？」

火のルビーはロマリアだから兎も角、水のルビーが継承されているトリステインにラクスが、風のルビーが継承されているアルビオン

にリーベルタースが在(い)たが、そもそもトリステインやアルビオンの様な象徴される場所、それがいまいち思い付かないのだ。

「ルビーの継承と精霊の場所は、偶然って処か？」

第一、火のルビーと火竜山脈では場所も違い過ぎる。

「土の精霊力が一番強いのは……やっぱり土の中？」

土中なら土の精霊力が強いのは当然だ。

が、それでイコール土の精霊が在(い)るというのは、如何にも短慮が過ぎる。

「ハァ……」

大きな溜息を吐き、徐々にだが微睡みに誘われた。

そして、ユートは完全に寝入ってしまう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

夢現(ゆめうつつ)、ユートは暗闇と白濁とした空間を歩いていた。

「何だか、今までにもあったシチュエーションだな」

荒涼とした広大な空間を歩きながら、キョロキョロと辺りを見回す。

「居るんだろ？　なのはさん！」

『はい、正解で～す♪』

其処に顕れたのは白を基調としたジャケットを身に纏う、栗色のサイドポニーに紫水晶を思わせる瞳を持つ女性。

純白の天魔王・高町なのはだった。

「なのはさん……」

『ちょ～っとお久し振りだね、ユート君』

「そうですね」

確かに久し振りだ。

「それで、何のご用でしょうか？」

『ムム、ユート君が冷たいよ？』

少しムッとなるなのは。

『まあ、良いけどね。土の精霊王の場所を教えに来たんだよ』

「偉大なるなのは様、僕は貴女の下僕です！」

『変わり身はやっ！？』

流石のなのはさんも吃驚の変わり身の早さは、ユートの煮詰まり具

合を如実に示していた。

「そういえば、なのはさんは【はるな】って名前に覚えはありますか？」

はるなの名前を出した途端に嫌な顔になる。

『会ったの？』

「義妹のユーキが……」

『ユーキ……君？　もしかしてジョゼット・エレーヌ・ユーキ？』

「は？」

『昔、私の旦那様がハルケギニアに行った時、トリステイン魔法学院で出逢った元・男の子だよ』

ユートは思い出す。

ユーキがはるな（神）から聴いた話では、確かにそんな内容だった気がする。

その時の名前までは聞かなかったらしいが……

此方では、ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールと名乗っているが、オガタ家が存在しなかった世界では恐らく、ジョゼット・エレーヌ・ユーキと名乗っていたのだろう。

「然し、何故にエレーヌなんて？」

エレーヌはタバサの名前。

何故、わざわざ姉の名前を名乗ったのか、ユートは首を傾げた。

『なんでも、シャルロットを挑発して気付かせる為だったとか』

「は？　なのはさんは何故それを？」

『旦那様が連れ帰って来たシャルロットから、直接聴いたからね』

「……もしや、同僚の神だったりしますか？」

『そうだよ？』

従属神契約で、殆んどの娘が下級神として傍に居る。

そんな状態らしい。

『ま、それは兎も角として……旦那様が知っていたのはネフテスって所にある筈の洞窟の奥だよ』

「ネフテス？　エルフの首都じゃん？」

『そうなんだ？　私は行ってないから知らないけど。ハルケギニア側にも在るかもだけど、旦那様は知らなかったから』

「いえ、ありがとうございます。お陰で光明が射してきましたよ」

『うん、アフターケアも万全だからね。それじゃあ、また何れ会お

うね』

辺りが光に満たされ、眩しさに目を押さえる。

それが、ユートの夢からの目覚めの予兆だった。

「ネフテス……か」

目を覚ましたユートはボソリと呟いて、なのはが教えてくれた土の精霊王の居場所について思いを馳せる。

これでどの道、エルフの国に行く必要が出来た。

此方にも接触が可能な場所も有りそうな事を言っていたが、流石に知らないのではどうしようも無い。

然し、タイミングが良すぎるというか、ご都合主義が過ぎるというか……

「真逆、覗かれてる？」

ブルリと、背筋を震わせてしまうユートだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ユートは一休みをすると、ヴァリエール公爵の部屋を訪れる。
ユートの来訪を、公爵は歓迎して招き入れてくれた。
「明日の夜は、ウェールズ殿下の誕生会の本番だな。ウチよりも盛大で、格式も高いパーティーだ。今夜は英気を養っておきなさい」
「はい、ピエール様」
「して、用事とは何かね？　改まって部屋まで来たのだし、大事な用だとは思うのだが……」
ユートと向かい合い、話すヴァリエール公爵の表情は真面目そのもの。
だからこそ、ユートも居住まいを正して話す。
「折り入ってご相談したい事があります」
「ふむ、それは例の計画絡みかね？」
「直接は関係ありません。ただ、トリステインにとっては結構な大事かと」
「……話してみなさい」
ヴァリエール公爵は顎髭を撫で、僅かな沈黙の後に先を促す。
「僕は最近になって、魔法とは違う力を獲ました」

「魔法とは違う？」

「はい。それは魔法と密接に関わりますが、力の質は別物です」

「魔法とは違う……よもや先住魔法か？」

「違います。先住魔法とはまた別物です。それは精霊の力」

「どう違うのだ？」

先住魔法――エルフや翼人など、亜人と呼ばれる者達の中でも言語を操る者が、精霊と契約を交わして操る魔法が先住魔法。

後から来た人間より先に、この世界に生きる先住民が操るから【先住魔法】と、人間は呼んでいる様だ。

場の精霊と契約して使っているアレは殊更、護りに向いた魔法。

そして、杖という発動媒体を必要とする人間と違い、素手でも使う事が出来た。

詠唱も口語で、基本的には人間の使う系統魔法よりも強力だとされている。

それ故か、人類は彼らの扱う【先住魔法】に嫌悪感を持っていた。

吸血鬼、韻竜、エルフ、翼人、他にはコボルトの司祭が使っているのを、ユートは知っている。

ハルケギニアでは、基本的に系統魔法以外の魔法は、ブリミル教が

異端だとして取り締まっていた。

余り下手な説明をすれば、ヴァリエール公爵といえどユートを庇えない。

ロマリア皇国の力は、貴族どころか王家にすら権威をちらつかせる事が可能な程に強いからだ。

「ラグドリアン湖に住まう水の精霊と、僕は契約を結びました。その結果、精霊の力を僕は行使出来ます。先住魔法より強力であるが故に、吹聴なんて出来ない力となっています」

「むぅ……」

「まあ、普段は封印をしていますからね、通常は系統魔法を使いますよ。でも、今の僕は水の精霊と同等の権威で、水の精霊に干渉する事が出来ます」

「っ！？」

驚愕する公爵。

「勿論、純粋な精霊とは違う人間では、上限も小さいので水の精霊より使える力は弱いですが」

「確かに、強力な力だな。それで、ユート君はそれをワシに伝えてどうしたいのだね？」

「王家に伝えて欲しいと思います。何しろ、王家どころか盟約を交わした交渉役の家にも未だ、何も言ってませんから、場合によって

は王家に隔意や叛意を疑われますしね？」

「そういう事か、判った。陛下にはワシから伝えておこう。時に、水の精霊の力でカトレアの治療などは出来ぬか？」

「カトレア嬢の治療……」

聞かれるとは思っていた。

然し、恐らくは不可能。

病によっては可能かも知れないが、予想の通りであれば出来ないだろう。

「診てはみますが、期待はしないで下さい」

「診てくれるか」

「はい」

頼み事をした手前、断るのはどうかとも思った。

だが、水の精霊の力では治せない病だとすれば、早く例の計画を完遂したい。

ユートはそれを切に願う。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

翌日になり、朝食を摂った後でユートは朝の訓練として木刀を振っていた。

そこへ、ウェールズ王子がやって来る。

「やあ、精が出るね」

「……殿下？」

ウェールズ王子は爽やかな笑顔を向け、ユートに声を掛けてきた。

「歩いていたら君を見掛けたのでね、話し掛けてしまったんだよ。訓練の邪魔をしたみたいだね？」

「いえ、別に……」

「でも、何故剣を？　貴族なら剣より杖を振る練習をするものではないかい？」

嫌味などではなく王候貴族として、メイジとして当然の疑問を投げ掛けているのだろう。

ウェールズ王子は首を傾げていた。

「そうですね、我がオガタ家はそもそもシュヴァリエを戴いて、それで貴族を名乗ってきた一族でした。
故に、戦功を立てていかねばならず、戦いの中で魔法を撃てない状況も多々あったらしいです」

「成る程、それはあるだろうね」

敵が人間が相手だとは限らず、オーク鬼などの接近戦を得意とする亜人と戦い、近付かれて危機に陥る事は珍しくもない。

「だから、武器は貴族が持つ物では無いとか云われてますが、本物の戦場だったら通用しない事を、きっちり教えられるんですよ」

尤も、嘘ではないが実際に剣を扱う事を決めたのは、ユート自身だったりする。

「そうか、ユート殿は私より小さいのに確りとしてるんだな。どうだろうか、私と友人になって貰えないかな？」

「唐突ですね……」

「君の考えは面白い。私の周囲には貴族社会の常識というモノを語る人間は当たり前に居るが、惰性の因習という感覚しなしなかったんだ。だけど君は違った。確りとした意見を持って、王族にさえ説いて見せた。私はそんな君と友人になりたいんだよ」

ウェールズの瞳にあったのは本気。

本気で年下の子供の言葉に感銘を受け、本気で友達になりたいと思っている。

「難しいですよ？　王族と貴族では明らかな隔たりが在るし、こんな噺があります。とあるお姫様が、貴族の“お友達”に頼み事をします。『戦地へお使いに言って欲しい』と。戦争の為に兵役を命じるのではなくて、お友達にお使いをお願いする。お姫様のお願いじ

や断れる訳もない」

「確かに、公私の線引きが難しいね」

ウェールズは理解出来たらしく、腕組みをして考え込んでしまう。

「それでも、僕と友人になりたいと思うなら、この手を取って下さい。その瞬間から“友達として”接しますから」

少しだけ俊巡したが、その手を確りと握る。

「宜しく頼むよ、ユート」

「ああ、ウェールズ」

友達の意味を理解し、手を取ったウェールズ。

この日より2人は、公的な場以外では遠慮をかなぐり捨てた間となるのだった。

.

第２４話：白の国の王子（後書き）

・

ちょっと強引な引きだったかも……

なのはさん再び。

因みに覗いているのではなくて、担当している転生者が本気で悩んだりした時に判る様な仕掛けが有って、その都度アドバイスをしています。

・

第２５話：カトレアの病（前書き）

・

今回、台詞が多いかも。

第２５話：カトレアの病

・

パーティーは、結論からすれば大成功だと言えた。

ウェールズ王子がアンリエッタ姫をエスコート。

成る程、美男（イケメン）と美少女で絵になる。

なるのだが……

「（イケメンなんてみんな消えればいいのに！）」

などと、魂からの慟哭を心の埋で吐き出すユート。

タイプこそ違え、ユートもそこら辺の男と比べれば、充分過ぎるくらい整っているのだが、余り自覚は無いらしい。

「（ま、取り敢えずは当初の目的は果たせたな）」

まだまだ、恋に恋するお年頃にも早い年齢であるが、アンリエッタ姫も満更ではない表情でウェールズ王子を見つめていた。

初雪の如く白い肌の少女の顔が、ウェールズ王子に見つめられて見る見る朱に染まっていく。

「（やっぱりな。ウェールズは充分な天然誑しの才能があるわ）」

他人事の様に言うが、実は自分も大して変わらないというのに、ユ

ートは余りにも身の程知らずな感想を抱いたものだった。

何しろ、シエスタに始まってカトレアに、完全では無いにしてもマチルダにすらも興味を懐かせている。

この先も増えるとしたら、ウェールズの事は決して言えない。

というか増えるだろう……それはもう、間違いなく。

寧ろ増やすだろう、ユーキが確実に。

ハーレムを作ろうなんて、冗談で言ってると思っているが、ユーキは可成り本気だったりする。

其処に早く気が付かないと外堀が埋まる。

確実に……だ。

「アンリエッタ姫、こちらなどいかがですか？」

「は、はい。ウェールズ様……」

真っ赤な表情なアンリエッタ姫を、離れた場所で観ているヴァリエール公爵は、ウェールズ王子に感心していた。

「ほう、我が国の姫を堕とすか？　中々にウェールズ殿下もやるものだな」

「そうですねぇ」

とってもいい笑顔で応えるユート。

「何故に笑顔なのだ？」

ヤり切った男の子の笑顔、それはとても爽やかだったという。

「ヴァリエール公爵様と、それにユート君」

「？　あ、ミズ・サウスゴータ」

「おお、サウスゴータ家のご令嬢か」

声を掛けられて、ユートとヴァリエール公爵が振り返ると、其処に居たのは新緑の様な長髪を靡かせている令嬢、マチルダ・オブ・サウスゴータだった。

「ミス・サウスゴータ、いつぞやの晩餐は楽しかったと、お父上に言っておいて頂けるかな？」

「いえ、父も公爵様とは愉しく飲めたと、喜んでおられましたよ」

「そうか。うむ、また飲みたいものだな」

お互いに社交辞令ではあるだろうが、其処には本音も多分に混じっている。

「やあ、ユート殿」

「これはウェールズ殿下」

「楽しんで貰えてるかな」

「はい、それはもう」

私的には兎も角、公的には礼節を弁えて話す。

立場というものは、斯くも面倒臭いモノだ。

朗らかに王太子と話をするアルビオンの恩人、対外的にはその様に見える。

それは、政治的にも充分に意味が有った。

パーティーも終了し、もう一泊してからヴァリエール公爵とユートは、トリステインへと帰る。

アルビオンに齎された新しい農法と馬鈴薯、それに加えて馬鈴薯のレシピ。

トリステインとド・オルニエールも、大きな利益を獲た双方に意味のある貿易となった。

更に、ヴァリエール公爵家も噛んでいた為、公爵本人がアルビオンに出向いただけの小さな労力で、少なからず利益を獲たのは余談でしかない。

後日、ユートはラ・ヴァリエール公爵領へと出向き、カトレアの診察を行った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【ヴァリエール邸】

公爵との約束を果たす為、ユートはカトレアの診察に屋敷まで出向く。

歓待を受けたユートだが、一応は念押ししておいた。

「ピエール様、アルビオンでも言いましたが余り期待はしないで下さい。確かに僕は水の精霊の加護を受けていますが、使うのは魔法に過ぎません。水の治療も通常より強力なだけです。つまり、僕で治療出来ない病なら水の治療魔法に効果は見込めないと云う事」

ヴァリエール公爵は驚愕に目を見開く。

それは即ち、ユートで駄目ならカトレアが治る事は、未来永劫無いと言われたに等しいのだ。

ユート自身は、そんな絶望的な意味合いで言った訳では無かったのだが、受け取り側が其処まで理解してくれない事を失念していた。

なので、ヴァリエール公爵が青褪めている理由が解らない。

ユートは、魔法が駄目なら別の手段に訴えるだけの事だったから。

魔法とは想像力（イマジネーション）である。

ならば、コモン・マジックの探知（ディテクトマジック）に現代医療機器を想像して使用し

たら？

そう考えて、初めての魔法訓練で探知を使い、成果を修めて既に久しい。

原作に於いては“カトレアが病気である”という情報しか開示されていない為、そもそも何の病気なのかが判らなかった。

即ちそれは派生世界では、完全に“箱の中の猫”状態であると云う事。

故に、あらゆる平行世界でカトレアが“水の魔法では癒せない病気”に掛かっている共通項はあるが、病は各々の世界で違う形で発現していた。

極端ではあるし、誤解覚悟で言えば十の平行世界が在れば、十の病状が在る。

そんな状態だ。

これは、原典世界の因果の流入に関わっていた。

要するに、カトレアの病が重たい因果情報として齎されていても、病の内容が明かされないという、因果の軽さの為に【生まれつきの病である】という以外は、流入していない事が理由。

端的に云えば、病であるという結果は在れど、原因は不明の状態であるが故に、全ての平行世界でカトレアは病であるという共通項はあっても、病自体はバラバラというちぐはぐな結果となっていた。

その為に、世界によっては簡単に治療されるなんて事もある。

問題は、ユートの関わったこの世界のカトレアの病、それが簡単に治る類いのモノであるか否か……

ユートはカトレアの眼前に立った。

ＭＲＩやＣＴ検査をイメージすれば探知も、より診断に特化された魔法として使えるのではないか？

そう考えて、領民が明らかに風邪などとは違う病状を表した際に試してみた。

その結果、水の系統とコモン・マジックを足した新しい魔法を開発出来たのだ。

攻撃魔法で、水のドット魔法の凝縮とコモン・マジックの念力を足し、水月輪（アクア・ディバイダー）を使えた事から、この方法を思い付いたのだが、以外と上手くいった。

因みに、水月輪（アクア・ディバイダー）は凝縮で出した水を、念力で高速回転させた魔法で、最初こそは大した威力も無かったが、慣れてくると秒間回転数を上げて、切れ味がいや増したのだから面白い。

大きさこそ掌の二回り大のものだったが、ちょっとした気円斬の気分だ。

念力で繋がっているから、ある程度は操れるし。

勿論、某・寒々しい名前の宇宙最強（笑）種族みたいな間抜けはし

ない。

その経験からか、ユートは系統魔法と汎用魔法を普通に足したオリジナル魔法を構築していた。

その一つが水月輪であり、診断用の探知（ディテクトマジック）がまんまな名前で【診断（メディカル・マジック）】だ。

この魔法のイメージ元となるＣＴ検査とは、即ち【Ｃｏｍｐｕｔｅｄ　Ｔｏｍｏｇｒａｐｈｙ】――コンピュータ断層診断装置の事。

Ｘ線を使って身体の断面を撮影する検査で、体内の様々な病巣を発見する事が可能であり、特に心臓、大動脈、気管支・肺などの胸部や肝臓、腎臓などの腹部の病変に関して優れている。

よって、体内の診断をするには丁度良い魔法だ。

「それじゃあ、始めるので脱いで下さい」

「え？」

カトレアが真っ赤になる。

その瞬間、凄い衝撃が頭に奔った。

「痛っっ！」

ふと見ると、ヴァリエール公爵が右拳をプルプルと震わせている。

「ユート君、何故に脱がねばならぬのだね？」

「？　魔法を掛けるのに、服が邪魔だからですが？」

何を当たり前な事をとも思ったが、説明無しで脱げでは納得もいかないと考え、魔法の説明を始めた。

「これから行うのは、僕のオリジナル・スペルです。その魔法は全身に水を掛けて、掛かった部分から内部をイメージとして読み込むモノですから、服を着ていると体内を読み込み難くなるんですよ」

一応、服を着た状態で試してみたのだが、フィルターを掛けたみたいでいまいち解り辛かったのだ。

ユートとて、男のシンボルなんぞ見たくも無いし、女性の裸を視るのは恥ずかしいのだが、診察をするには必要だとして行ってきた。

「ぜ、全部……脱ぐの？」

「全身を診察するなら全裸にならないと、ちゃんとした診察は出来ないんだ」

「そ、そう……」

益々、赤くなるカトレア。

年下の少年とはいえ、裸身を視られるなは恥ずかしいものなのだろう。

「それほど心配しなくても良いよ。僕は椅子に座って目を閉じておくから、服を脱いだらベッドに寝て合図をしてくれれば、診察を始

めるから。頭に直接、イメージとして体内の様子が浮かぶから、目を開けておく必要も無いからね」

「は、はい。判りました」

言った通り、ユートは椅子に座って目を閉じる。

その間に、カトレアは服を脱ぎ始めた。

衣擦れの音が妙に艶かしく感じて、顔が赤くなっているが気にしない。

股間がムズムズするが気に止めない。

カトレアの気配が、目の前のベッドに移ったのに気が付いて、居住まいを正す。

「そ、その……どうぞ」

合図だ。

ヴァリエール公爵は、夫人に取り抑えられていた。

「（さっさと終わらせてしまおう）」

精神衛生上、良くないし。

ユートは魔法を詠唱する。

最初は凝縮の詠唱。

次はオリジナルの口語。

「我が水は、内なる水すら見透す……【診断】（メディカル・マジック）」

本当のＣＴ検査みたいに、Ｘ線や陽電子（ポジトロン）は使わない。

使うのは、凝縮で出した水に魔力を与えたモノ。

カトレアの体内が、ユートの頭にイメージとして送られてくる。

「ひゃっ？」

水を掛けられて冷たかったのか、カトレアが艶っぽい悲鳴を上げた。

それに比例して、ユートの身体が熱くなる。

全身を診る以上、頭、腕、顔、胸、腹、腰、脚、足の全てに水を掛けていく。

それが終われば、今度は仰向けから俯せになって貰って、背中から尻へ、更には脹ら脛へと水を掛ける。

目を閉じている関係上、珠に手が肌に触れてしまう。

その度に『きゃん！』だの『あん！？』だの艶やかな悲鳴が上がった。

そしてその度、ヴァリエール公爵の怒気を感じるが、診察している最中の不可抗力くらいは勘弁して欲しいところだ。

診察も終わり、それを告げるとカトレアは起き上がって服を着る。
衣擦れの音がやはり艶かしかった。

「それで、どうなのだ？」

今までの怒気を払い、直ぐにも診察結果を聞いてくる公爵に、ユートは真面目な表情となる。

「３人共、落ち着いて聞いて下さい」

ヴァリエール公爵もそれを聞き、神妙な顔でユートの次の言葉を待った。

「結論から言えば、水魔法による治療は不可能です」

それを伝えた途端、絶望の表情となる。

カトレアも、覚悟は決めていたのだろうが、やっぱり青褪めていた。

当然と言えば当然か。

魔法至上主義のハルケギニアに於いて、魔法で治せない病とは即ち、不治の病に他ならないのだから。

「水系統の治療魔法とは、常態から見て異常となった部分を治すというモノで、生まれつきの病というのはそもそも、病の身体こそが常態です。故に、気分が悪くなったなどの異常は治せても、常態となっている病までは治らない。水系統の魔法はダメージという異常

を、常態にまで治す事は出来ますが、それ以上のコンディションには出来ないという訳です」

カトレアの病が生まれつきという事は、病に掛かっているコンディションこそが常態なのだ。

水系統の魔法とは後天的な異常を、常態にまで治療は出来ても、先天的な病まで治療する事は性質上の問題で不可能だった。

「では、カトレア……？」

「魔法での治療は諦めた方がいいでしょう。精霊の力も水系統の魔法の延長線上のモノ。力は強くても異常を常態にする事しか出来ません」

それは正に、絶望だった。

「な、何という事だ」

「どうして私達の娘がこんな目に……」

どうにも出来ない自分達の無力と、こんな酷い運命をカトレアに背負わせた神を恨む公爵とカリーヌ夫人。

「それでも恵まれていると思いますけどね」

「どういう意味だね？」

「同じ病を平民が患えば、カトレア嬢の年齢に到る事すらなく死んでいますよ」

「む、それは……」

ユートは辛辣な事を言う。

「平民なら、ほんの風邪の一つも引けば死ぬなんて事もザラです。それに比べればどれ程の事もありませんよ。それとも、平民の生命など塵芥ですか？」

「そうは言わんが……」

「まあ、我が子とは比べるべくもないでしょうが」

痛烈な皮肉を言われて、渋い表情になるヴァリエール公爵とカリーヌ夫人。

ユートが平民を……領民を大切にしている事を知っているだけに、よもや平民などどうでも良いとは言えないし、最近は貴族としては珍しく平民に心を砕いていたりする。

彼の……ユートの在り方を眩しく感じていたからだ。

ユートを後継者に出来ればと、そう思ったのが切っ掛けだった。

ヴァリエール公爵はユートを気に入っているが故に、ユートのやり方を参考にして領地経営をしているが、それでも未だ足りないと、そういう事なのだろう。

「ユート君、本当に無いのかね？　カトレアを救う術は……」

「魔法では無理ですね」

「待ちなさい」

ヴァリエール公爵の再確認を否定すると、カリーヌ夫人が待ったを掛ける。

「何ですか？」

「貴方は先程から“魔法では無理”だと言い続けていますが、それだと魔法以外なら手段が在る様に聞こえますよ？」

「流石カリーヌ様ですね、その通りですよ」

「貴方も人が悪いですね」

カリーヌ夫人が少し怒った様な顔で言ってくる。

「但し、それでも蜘蛛の糸程のか細い希望ですが」

「構いません、私達はどんな小さな希望であれ、縋りたいのですから」

絶望の中で見出だされた、ほんの僅かな希望。

正に溺れる者が藁にも縋る心境という訳だ。

「取り敢えず、僕に考え付く方法は二つ。一つは四系統精霊の力を結集し、肉体を健康体に作り替える事。二つ目は、ハルケギニアとは違う世界の医療技術を以て治療する方法です」

「精霊？」

「違う世界？」

カリーヌ夫人もヴァリエール公爵も、ユートの言葉に首を傾げてしまう。

それは余りにも突拍子も無くて、子供の妄言にしか聞こえない提案だ。

しかもそれは……

「この二つの案は、実際には実行力がありません」

「どういう事だね？」

ヴァリエール公爵には解らなかったが、カリーヌ夫人には理解出来たらしい。

瞳をキラリと輝かせた。

「どちらも異端……という訳ですね？」

「はい」

【異端】

ブリミルの教えに背く……或いは教えに無い事を行うと、ロマリア皇国によって【異端】だと認定されてしまって、異端審問に掛けられてしまう。

尤も、これはブリミル教にとって都合の悪い事を全て【異端】であるとするだけで、要は皇国の権威を嵩に着た宗教的弱者の弾圧に過ぎないのだ。

先住魔法とて、ロマリアから見れば【異端】でしかないのだ。

【ダングルテールの虐殺】すら、邪魔な新教徒達を殲滅する為にロマリアが関与していた。

あれには、トリステインの貴族とアカデミーも関わっていた訳だが……

始祖ブリミルが齎した魔法の地位を脅かすもの全て、彼らにとっては【異端】でしかない。

故に、ユートの提示している【希望】も、ロマリアに知れれば【異端】として、審問に掛けられる事。

唯でさえか細い希望だと云うのに、ロマリア皇国から見て【異端】とされてしまう手段。

成る程、これでは実行のしようも無かった。

「くっ、希望が【異端】だとは……」

悔しそうに唸る公爵。

「まあ、何れの方法にしても割りと危険を伴います。それならいっその事、悪くなったら魔法で治療をする対処療法で、身体が限界に

いくまで生きるのも、一つの手ですね。【異端】にも引っ掛かりませんし」

「危険が有るのか？」

「はい」

ヴァリエール公爵は驚いているが、ユートは当然だと言わんばかりに頷く。

「四系統精霊の力を借り、肉体を作り替える方法を採った場合は、術者が保たないでしょうし、途中で止めてしまうと被術者も死んでしまいます」

術者も被術者も死ぬ、双方に危険な手法。

「後者を採った場合、第一の問題が異世界への扉（ゲート）を開く方法の模索。向こうで治療をして貰う為の方法の模索。これは別の世界で治療出来る人を捜して、治療をして貰う事を考えています。然し、これはカトレア嬢の身体を切る事になりますが……」

「切る？」

「はい。手術という方法です。身体を切り開き、悪い部位の治療を行ってから、再び閉じる。この方法だと僕には難しいですが、それを主流とする世界が存在していますから」

「別の世界と言うが、そんな所にどうやって行く？」

ヴァリエール公爵が問う。

「虚無魔法の【世界扉（ワールド・ドア）】」

「な……に……？」

「虚無の中に、異世界へのゲートを開く世界扉（ワールド・ドア）という魔法が存在しています」

「ま、待て。何故そこまで知っているのだ？　書物から識ったというが、虚無の知識など簡単に判るモノではあるまい？」

「……それは言えません。確かな筋の情報です」

流石に転生だの、ライトノベルだの言えはしない。

不審に思われても仕方がないが、言える事と言えない事がある。

「なら聞くまい。それで、虚無ならルイズなら使えるのか？　その魔法を」

「使えません」

「……は？」

アッサリ否定され、肩透かしを喰う公爵。

「次元を越える魔法です。幾ら空間制御が主な虚無といえど、別の世界への扉を開くのは至難の業です。今のルイズ嬢では精神力が保たないでしょうね。僕なら恐らく精神力が保つでしょうが、虚無の資質は残念ながら有りません」

「ぬう……」

「まあ、将来的に世界扉（ワールド・ドア）を使えそうな虚無の担い手は知っていますが、少なくとも直ぐにという訳には……」

既に目覚めているユーキは世界扉（ワールド・ドア）の存在、詠唱も知っている。

だが、現在は子供の肉体の為に精神力不足。

もう1人はティファニア。

時期的に生まれているが、やっぱり精神力不足の上に未だに自分を虚無の担い手だという自覚すら無い。

成長すればエルフの精神力は高いから、ハーフエルフのティファニアも世界扉（ワールド・ドア）を使うに足るだろう。

「四系統精霊については、僕が将来的に何とか出来ます。虚無については、将来的に2人の虚無の担い手に一回ずつ、世界扉（ワールド・ドア）を使って貰い、地球という名前の世界へと行けば手術が可能です」

共通しているのは……

「どちらも直ぐには実行が不可能で、どちらも【異端】という訳か」

ヴァリエール公爵は溜息を吐きながら、表情を暗くしてしまう。

「その事もあって、例のプロジェクトを推進したいのですよ」

「プロジェクト・ニューウェーブ。ロマリア皇国の権威失墜計画……か」

ロマリアの権威を失墜させてしまい、新しい波を呼び寄せる計画をユートは打ち立てていた。

.

第２５話：カトレアの病（後書き）

・

色々と独自設定を詰め込んでいます。

系統魔法とコモン・マジックを組み合わせて、一つの魔法にする……

一応、魔皇霊斬（アストラル・ヴァイン）もそうなんだけど。

第２６話：翼を下さい（前書き）

・

新しいマジックアイテムを造り始めました。

第２６話：翼を下さい

.

【ユートの部屋】

ヴァリエール公爵家から帰って来たユートは、ユーキと部屋で話をしている。

「そっか、診てきたんだ」

フリッツを食べながら報告を聞くユーキ。

最近、馬鈴薯尽くしな来はするが、様々なレシピから再現した料理のお陰で飽きがこない。

「で？　“この世界”でのカトレア嬢の病は何だったの？」

「カトレア嬢の病は心臓病の一種だった」

「先天性心臓疾患か」

厄介な病だ。

即死性こそは無いものの、ほんの僅かな体調の変化で苦しむ事になる。

しかも場合によってはその侭、お亡くなりコースすら有り得るのだ。

「心臓腫瘍みだいだった。転移してもそれは水の魔法で治せるんだ

けど、腫瘍が在るのが常態になってるから、腫瘍そのものはどうにも出来ない」

「じゃあ、兄貴の見解の通りに？」

「精霊の力で健康な心臓を作り直すか、世界扉（ワールド・ドア）を開いて病院に連れていくか……だな」

ユーキの問いに、ユートは首肯して答えた。

幻想的（ファンタジック）に精霊の力を使うか、医学的に治療をするか。

「何れにしても【異端】な訳だし、ロマリア皇国にはなるべく早く権威を失墜して貰わないとな。でないと【聖戦】だの【聖地奪還】だの、ボクも休まらない」

ユーキは嘆息した。

虚無の担い手たるユーキとしては、ロマリア皇国とは癌でしかない。

早めに消えて欲しいと考えても、仕方ないだろう。

完全に消せないのが残念ではあるが、少なくとも権威を失墜させれば発言力が低くなり、【聖戦】なんて言えなくなる筈。

ユーキが自身の目指す未来（あした）の為に、ユートの計画は必要不可欠だった。

「ね、実は造って欲しい物があるんだけど」

突然、ユーキはユートを背後から抱きしめて、耳元で囁く。

「またか？　前に頼まれた物も未だ出来てないのに」

「ダ・メ？　お兄様……」

ゾクリ……

その侭、耳元に息を吹き掛けつつ囁きながらおねだりしてきた。

相手（ユーキ）は４歳、自分は６歳なのだと理解はしていても、お互いに精神年齢は高校生くらい。

その為、どうしても赤くなるのを抑えられずにいた。

それに、ユートは前世では妹の緒方白亜を大切にしていた事もあり、義妹のお願いにはちょっと弱い。

「わ、判ったよ。判ったから離れて……」

「ホント？」

「ああ、それで？　どんな物が欲しいんだ？」

「あのね……」

ユーキは離れない侭、耳元でソッと囁いて伝える。

「な！？　あれか？」

「うん。“例のモノ”を造る為の練習になるし、便利だと思うんだ。丁度良く、レプシロ機も有るしね」

確かに“例のモノ”とは、コンセプトが似ていた。

練習の為にも造ってみるのも一つの手だろう。

それに、風の系統魔法である浮遊（レビテーション）や飛翔（フライ）をユーキは使えないから、こういう補助アイテムが必要。

「虚無の担い手は仕方ないけど、これが流行ったりしたら魔法の習熟度が軒並み低くなりそうだな」

虚無の担い手を隠すなら、造ったマジックアイテムを量産して流行らせた方が良いが、便利な道具を使うのは両刃の剣。

「ま、全ては造ってからの話だけどね」

精神力さえ有れば誰でも扱える気安さ、造型はユーキの科学分野に手伝って貰って、風の精霊王の地上代行者としての権威で、風石を造り上げる。

量産を見越すなら、大陸を浮かび上がらせるくらいに有る風石を精霊の力で集めたいが、試作機を造るだけなら自分の力だけで充分。

マインド・トリガーシステムを搭載し、平民でも使える作りだからシエスタにも造る心算だ。

アニメの映像を知っている影響か、男が使う処なんて視たくもない。

「女の子にしか使えない様にリミッターを掛けるか？　あれ？　それだと最早、これＩＳだよね……」

とはいえ、余りにあからさまな“兵器”を造りだし、発表する気は無い。

そんな事しようものなら、後方で命令するしか能の無い宮廷勤めのアホな貴族共が、戦争をしたがるのは火を見るより明らかだろう。

「非武装とはいってもな、フライを使わず飛べる訳だから、戦争に使えば有利になるって気が付く奴も出てきそうだしな～」

実際、元ネタのアニメではそれを使って戦争をしていた訳だし、よっぽどの莫迦でもなければ気が付く。

造るのは良いが、造った後こそ大変だ。

「……ＩＳで篠ノ之　束が各国や組織に狙われたのも納得だな」

造っているのはＩＳではなくて、別の飛行ユニット。

然しそれが戦争をするのに有効だと判れば、ＩＳの様に戦争に使いたがるだろうと考えている。

寧ろ、非武装のこれに武装を付けろと命じる恥知らずが出てくる事が、容易に想像出来た。

「ルイズに贈って、いざという時はピエール様に防波堤になって貰うか……」

権力者になりたくないが、権力が無ければ権力を持つ者に踏み躙られる。

どうにも儘ならない。

「所詮、１人で出来る事には限界が有るし、頼れる処は誰かに頼ろう」

それがユートの出した結論だった。

造ったユニットは、亜空間ポケットの要領で別の空間に仕舞い込み、アクセサリーを基点に招喚する。

「これじゃ益々、ＩＳだ」

招喚と量子変換はまったく違うが、傍目には違いなど判らない。

似た形で造り、ＩＳの世界に行って招喚したら絶対にＩＳだと思われる。

「でもこれ、ＩＳじゃないんだよな。本当に飛ぶ事に特化された機体だし」

完成した試作機を見ながら呟く。

三機有るのは、普通のメイジと虚無の担い手と平民が使った場合、何処まで違いが出るかの実験をする為。

夜中に完成し、早朝を試験に選んだのは人通りが少なくて、明るい時間に試験をしたかったからだ。

「そろそろ、シエスタが起こしている筈だけど……」

唯の飛行試験は既に済んでいるから、後は使う人間の相違点を視るだけ。

「お兄様！」

「ユーキ」

ユーキが庭にやって来る。

傍にはシエスタも居た。

試験の事は伝えてある為、何時ものメイド服に武雄翁が使っていたゴーグルを頭に着けている。

「それじゃあ、始めるよ。メイジ、平民、ユーキの様なタイプ、三種類の人間による【ストライカー・ユニット】の飛行試験を」

「完成したんだね。【ストライカーユニット】が」

【ストライクウィッチーズ】というアニメが、ユート達の前世の世界に在る。

【受容世界】にアニメとして存在すると云う事はだ、実際に平行世界に扶桑やらロマーニャやらが在る地球に極めて近い、だがちょっと違う世界が有って、あの【ストライカーユニット】も存在しているのだろう。

だからこそ、同じでは無いにしても似た形の物は造れると確信していた。

そして、約一ヶ月。

漸く試作機が完成を見る。

元の形の侭だと立つ事も出来ない為、足の部分は普通の形にしてあり、飛ぶ時に変形する仕組みだ。

「じゃあ、これを」

「？　ご主人ｓ……ユート様、これは？」

ユーキに言われて、少しずつ呼び方を直しているが、やっぱり恥ずかしいのだろうか、頬に朱が差す。

ユートはユートで、名前を呼ばれて赤くなっていた。

「（ただ、名前で呼ぶだけで何だろうねぇ。この恋人になったばかりの中学生な初々しい反応は？）」

その様子を眺めて、ユーキはそう思ったものだったが真逆、自分自身が１１年後に同じ事をするとは、流石にこの時は判らなかった。

「お兄様、ボクの分を早くくれないかな？」

「へ？　あ、ああ……」

呼ばれて我に返ったユートは、もう一つをユーキへと渡してやる。

「これは待機状態の【ストライカーユニット】だよ。マインド・トリガーシステムを積んでるから、来いって念じて喚べば招喚出来る筈だから。キーワードは、【ストライク・ブルーム、招喚】だよ」

「そうなのですか？」

試しにシエスタが腕輪を填めて腕を前に挙げ、心の中で喚んでみた。

「（ストライク・ブルーム……招喚！）」

マインド・トリガーシステムは、特定のキーワードを唱える事で発動する。

シエスタの招喚に応えて、【ストライカーユニット】が招喚されると、シエスタの両脚へと装着された。

フィッティング・システムによって、年齢経過による成長をしても装着は可能となっている為、成長の度に造り直す必要もない。

「装着は出来たな」

「へぇ、プロトタイプより良いね。じゃ、ボクも」

ユーキも腕輪を填めると、【ストライカーユニット】を招喚する。

両脚に装着されたユニットを見て、楽しそうに跳ね回った。

「それじゃ、僕も。イメージ的に男が装着するのは、違和感があるけどね」

そう言って招喚する。

「ユート様、結構似合ってると思いますけど？」

「フォローの心算なんだろうけど、流石に嬉しくないよシエスタ…」

「すみません」

アニメでは明らかに下半身をパンツか、スクール水着（本人達はズボンと言っているが）の少女達が着けて飛び回る道具を、似合っているなんて言われても、男としては全く嬉しくないものだ。

「精神力を籠めれば、魔導炉が稼働して風石に魔力を送り込んで、足首の辺りにレプシロ機としての小さなプロペラが魔力で形成される。後は飛びたいと思うだけで浮揚して飛べる筈」

「判ったよ」

「判りました、ユート様」

ユートの指示に従い、２人は精神力を籠めてみる。

足首にプロペラが顕れて、回り始めるとゆっくり浮かび上がっていく。

完全に地から足が離れると足の部位が、飛ぶ為に軽く変形した。

因みに、耳や尻尾は生えていません。

あの世界では、何故か魔力を発現させると動物の耳と尻尾が生えるのだ。

「どうだ、２人共。何処かおかしな所は無いか？」

「う～ん、無いよ」

「有りません」

虚無の担い手で、フライの魔法が使えないユーキ。

メイドであっても、メイジではないシエスタ。

そして、普通にフライの使えるユート自身。

この３人で運用試験をする事で、誰でも使えるモノか否かを確かめる目論見だったが、どうやら浮かぶまでは大丈夫だったらしい。

「んじゃ、上昇してみようか？　何処まで上昇出来るかの試験をするから」

「了解～！」

「はい、ユート様！」

３人は少しずつ、空へ上昇を始めた。

「違和感や力の喪失なんかを感じたら、直ぐに言ってくれ。墜ちたら洒落にならないから」

プロトタイプはユートだけで試験をしていた為、他の人間が使った場合の臨床試験は初めてとなる。

理論上は大丈夫だが、机上での空論を重視出来ない。

「（確か、アニメでは一万メートルが限界だって言っていたよな）」

そんなに高く上昇する必要もないが、限界高度は知っておきたい。

「未だ往けるか？」

「あの、ユート様。限界みたいです」

確かに、シエスタのユニットのプロペラが消えかけている。

「三千メイルって処かな。判った、シエスタは一番降りてくれ」

「はい」

恐らくは精神力の差、若しくはメイジでは無いが故、魔力の制御的な限界か……

何れにせよ、他の非メイジのメイドにも試して貰って検証した方が良いだろう。

「ユーキの方は？」

「ボクは未だ大丈夫」

「よし、もう少し上昇をしてみようか？」

「オッケー！」

結果、２人はユーキが大体五千メイル、ユートが八千メイル程の上昇で限界を迎えた。

ユートが限界を迎えた時点で全員が下に降り、限界高度の差がどうしてついたのかを検証してみる。

「やっぱり制御の問題か」

「機体が同一規格だから、その差は無いよね」

ユートとユーキがああでも無い、こうでも無いと議論している中で、門外漢であるシエスタは黙って見ているしかない。

「一定の精神力を籠めて、それで後は機体の方で制御出来る様にしたら？」

「それがさ、いまいち上手くいかなかったんだよ」

だからこそ、常に使用者が制御している訳だが……

「循環器には何を使ってるのかな？」

「宝石を魔法で溶かし込んだ溶液だけど……」

その議論を聞いていたら、ふと昔……曾祖父にしか読めない字で書かれた書物を読んで貰った記憶を、思い出したシエスタ。

「水銀……」

「え？」

「あの、曾お祖父ちゃんに昔読んで貰った本に、水の様な銀……水銀は魔力の通りが良いと書かれてたらしいのですが……」

「「それだっ！」」

「ふぇ？」

ユートとユーキがハモりながら叫び、シエスタは吃驚してしまった。

シエスタのアドバイスに従って早速、ユートは改良に勤しむ。

そして何故か、シエスタはとってもご機嫌だった。

宝石の溶液から錬成で造り上げた水銀に変え、魔導炉にも改造して手を入れる。

土もトライアングルとなっている為、錬成で水銀を造る事も可能となっていた。

それを三機、既に造形と科学分野の枠を越えている為に、ユーキに手伝える事ももう無い。

だからユーキは、見ている事しか出来ずにいた。

「シエスタ、何だか判らないけどご機嫌だね？」

「はい♪」

「どして～？」

「私の一言でユート様が改良案を出せたと思うと、嬉しくてぇ♪」

いやん、いやんとクネクネしているシエスタ。

ユーキはそれを見つめて、ジト目になってしまう。

「（ホントに兄貴の事が好きなんだな。魔法さえ使えれば、せめて勲爵位（シュヴァリエ）に成れるのに。平民で、しかも女の子じゃトリステインだと立身出世も儘ならないし……）」

魔法の使い手、メイジであれば勲功を挙げれば所謂、シュヴァリエに任じられる事も有り得る。

男であれば……だが。

ハルケギニアは絵に描いた様な男尊女卑の世界。

故に仮令、メイジ……否、貴族であっても女だというだけで、シュヴァリエになるチャンスが減る。

決してチャンスがゼロではないが、やはり良い顔はされないものなのだ。

況してや、魔法の使えない平民ではチャンスなどゼロだと言える。

原典に於いて、平賀才人がシュヴァリエに任じられ、ド・オルニエ

ールに領地を与えられたのは、偏に戦功とアンリエッタ女王というコネクションのお陰だ。

才人が女であったならば、それを理由に突っぱねられていたのは間違いない。

「（ん～、何とかならないもんかね～）」

平民でさえなければ、というよりもせめて魔法が使えれば、幾らでもやり様はあるのだが……

「（トリステインじゃ難しいかな。ゲルマニアなら、お金次第なんだけど）」

驕り（プライド）に凝り固まった人間ばかりのこの国、トリステイン王国では土台無理な話だ。

ユーキはシエスタを気に入っているし、ユートとの幸せを願ってもいる。

元より、前世では科学オタクのアニメ好きでしかない一般人。

科学オタクの部分が有益であったから、随分と優遇されていたし彼女も居た。

それでも、華族が廃止されていた国の一般人であった事に変わりない。

しかも、ガリア王族に生まれながらもセント・マルガリタ修道院に棄てられてしまい、権力になど縁の無い生活をしていたのだ。

平民に対して隔意など持ち様がなかった。

退屈な生活から、早々と解放してくれたユートに感謝している。

一応は貴族として、ユートの義妹に収まった自分と、まるで友人の様に接してくれた最初の1人のシエスタにも、好意を抱いている。

「（ボクの望みは……）」

ユーキの望みは……

「（大切な人達と笑っていられる、せめて周囲だけにでも優しい世界を）」

ユーキには解っている。

自分に出来る事など大してなく、護れるものは両手を広げた程度でしかないと。

嘗て、彼女の心すら護れなかったちっぽけな自分。

「ユーキ様、どうしましたか？」

「何でもないよシエスタ」

笑顔を浮かべると、ギュッとシエスタの手を握って、引っ張る。

「さ、お兄様は未だ作業をしてるし、みんなと一緒にお茶でも飲もうか？」

「あ、はい！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【数日後】

早朝、再びユートは2人を呼んでいた。

「と、言う訳で。【ストライカーユニット】の改良が終了しました！」

「「おお！」」

パチパチと拍手するユーキとシエスタ。

「風石への魔力供給率の向上に伴い、制御系の改良も同時に行った結果、メイジと平民の別無く理論上は、八千メイルまで上昇が可能になった筈。特殊な風の結界で護られるから、空気の供給も前回と同様に為されるから、高山病に陥る事も無いだろうし、凍える事も無い」

「あ、道理で前回あれだけの高度まで上昇していて、体調がおかしくならなかつた訳だ……」

富士山の高さは３７７６ｍだとされているが、そんな高度でも登れば高山病に陥ってしまう。

それを越える五千メイルを昇れば、どうなるかなんて火を見るより明らかだ。

然し、ユートはユニットを装着して、精神力を供給したら特殊な風の結界を展開出来る様に造っている。

この結界は、酸素の供給をしてくれるし、温度変化による身体の変調から護ってくれるのだ。

ユーキ用に建造しようとしている“例のもの”の為にも、宇宙にも上がれる様にしなければならない。

それを考えれば、まだまだだったりする。

「さて、始めようか」

「りょ～か～い！」

「はい！」

3人は【ストライカーユニット】を招喚して、両脚に装着する。

「うあ、やっぱり男の僕が着けても死ぬほどそぐわないな」

【ストライクウィッチーズ】はウィッチ（魔女）と云われるだけあって、主人公から仲間に到るまで少女。

どこぞのＩＳの様に、男が【ストライカーユニット】を使うなんて噺は無い。

原典から派生した平行世界の何処かなら、或いは在るのかも知れないが……

シエスタも、流石に一度は失敗しているフォローは入れれず、大粒の汗を流して苦笑いしている。

さて、ユートの理論通りに約八千メイルまでの上昇は可能だった。

「ふむ、次は速度か」

零戦の最高速度は約５３３．４ｍ／ｈ。

残念ながら６００ｍ／ｈは出ない。

このユニットも、現状では３００ｍ／ｈ程度だった。

「速度に関しては要改良って処かな？」

時間が経ち、技術力が向上すれば何れは解決する事だろう。

取り敢えずは成功だと言えるのかも知れない。

外装も丈夫な物を使っているから、強度的にも大丈夫だった。

とはいえ、“例のもの”を造るにはまるで足りない。

「オリハルコンが欲しいかな～」

鋼より軽いし硬い、それに魔力を遮断出来る。

有れば本当に便利なのだろうが、造るにはどれだけの時が掛かるか……

否、造れないかも。

「本当にどうするかな」

ユートの呟きは、未だに完成を見ない“例のもの”を思ってのもの。

「ま、取り敢えずは【ストライカーユニット】が完成した事を喜ぶかな」

【ストライカーユニット】で庭を飛び回って、愉しそうにしているユーキ達の元へ、自分も似合いもしない【ストライカーユニットを動かし、飛んで行くユートだった。

.

第２６話：翼を下さい（後書き）

今回の【ストライカーユニット】は、ユーキにとってガンダムマークＩＩみたいな扱いです。

つまり、何れはＺガンダムの如く機体が登場するという事ですね。

別にガンダムが出てくる訳ではありませんが……

第２７話：永劫の銘を持つ偽神（前書き）

・

少しだけ時間が進みます。

第２７話：永劫の銘を持つ偽神

・

【ストライカーユニット】を開発して、スピードの方も零戦と同じくらい出せる様になる。

ユートとシエスタは七歳、ユーキも五歳となった。

原作開始まで、後１０年。

魔法学院への入学までなら9年だ。

取り敢えず、３人で【ストライカーユニット】を持っておく事にする。

プロトタイプも、試作機と機能を合わせて保管しておく事にした。

ユーキの五歳の誕生日――正確にはオガタ家にユーキが引き取られた日に、頼まれていた物を渡す。

即ち、既に渡してある銀色の六連式リボルバー【アンブロシウス】の相棒。

【機神咆哮デモンベイン】に於いて、炎神【クトゥグア】の術式を撃ち出していた拳銃と同型のモノ。

劇中では、銃の名前自体を【クトゥグア】と呼んでいたが、完成した銃には別の銘を付けた。

【イタクァ】を【アンブロシウス】とした様に、【クトゥグア】は【アイオーン】と名付けたのだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「遂に完成したんだ」

「ストライカーユニットのノウハウを上手く転用出来たのが大きいよ」

「で？　オーダーの通りに護りも出来るの？」

ユーキのオーダー、それは自分の身を護れるマジックアイテム。

今の侭では、攻撃力は兎も角としても防御力の方には難があった。

「そっちも解決済みだよ。精神力を媒介に、魔力そのものを服へと変換する事が可能でね、バリアジャケットとして使えるから」

「ああ、なのはさんがどうの……とか言ってたのは、そういう事ね」

幸い、ユートとユーキにはリンカーコアが活性状態で備わっている。

神(なのは)が最初に言っていた通り、転生に際して与えてくれていたモノ。

今までは、魔力タンクとしての役割くらいしか無かったのだが、明確に魔力自体を形にするのに役立った。

原理的にはリリカルなのはのバリアジャケットと同じモノで、この技術を確立するのにストレージレベルのＡＩに代わるモノを捜す事を余儀なくされる。

其処で、人工幽霊を造って憑依させる事を思い付く。

この技術確立に、デルフリンガーと【アダマス】の力を借りた。

元より、デルフリンガーにはエルフの技術で人工霊を使っている事が判明していたし、自然発生の九十九神とも言える宝石に宿る精霊【アダマス】も、管制人格を造る上で善きアドバイザーとなってくれたのだ。

【アイオーン】には簡易人工霊を憑依定着させている為、複雑な術式を動かすのは全てやってくれる。

インテリジェンスと呼ぶ程では無いものの、充分過ぎるくらい役割を果たしてくれる筈だ。

「登録してあるジャケットだけど、形は覇道瑠璃が着ていたマギウス・スタイルだから」

「そ、それはまた……」

マギウス・スタイルは黒が基調で、ユーキの趣味から外れているのだが……

「で、例のものもプロトタイプと呼べるだけの代物が完成したから、その拳銃を基点に招喚出来るように仕組んである」

「マジ？」

“例のもの”が完成するとは思っていなかった。

プロトタイプという事は、未だ改善の余地が多いのだろうが、取り敢えず形には成ったと云う事だ。

【ストライカーユニット】は飽く迄も、例のものを造る雛型（プロトタイプ）で、今回完成したモノですらも本当に造るべきモノの雛型（プロトタイプ）に過ぎないかったりする。

「マインド・トリガーシステムで、喚ぶ際には機神招喚の呪文をキーワードに設定してある。それと、招喚の時はマギウス・スタイルになっておくように」

「判ったよ！」

ユーキは早速、ペンダントを首に掛ける。

このペンダントが【アイオーン】の待機形態。

「アイオーン、起動！」

《セットアップ》

音声と共に、ユーキの右手に【アイオーン】が姿を顕して握られた。

それと同時に、ユーキの幼い肢体がほんの刹那の刻、裸体となってマギウス・スタイルへと変換される。

「……お・に・い・さ・ま～？　今のは何なのかご説明願えますか？」

額に青筋を浮かべ、笑顔でユートに詰め寄った。

その目は全然、笑ってはいなかったが。

「いや、だってさ。ごてごてした服にマギウス・スタイルの様なピッチリ感のある服の上に着たら、格好が悪くなるだろ？」

「だからって、こんなあからさまに裸になるなんて、凄く恥ずかしいよ！」

「瞬き程の一瞬だけだし、誰も気付かないよ……多分ね」

「デリカシーを学べぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

「ユーは、ショック！？」

変な叫びと共に、ユートはアッパーを喰らってブッ飛ばされてしまった。

Ｙｏｕより寧ろ、ユートがショックを受けている気がするが……

その後、折衷案として変換の時に魔力を少し漏らす事によって、裸体を隠す事で合意する。

「んじゃ、次は機神招喚を試してくれ。具合が悪ければ改修するから」

「判った。機神招喚！」

ユーキは【アイオーン】を掲げると、呪文を詠唱し始めた。

それは当然、あの詠唱。

“例のもの”のプロトタイプ故に、それは……

「永劫（アイオーン）！　時の歯車、断罪の刃。久遠の果てより来たる虚無……永劫（アイオーン）！　汝より逃れ得るものは無く、汝が触れしものは死すらも死せん！」

ユーキを基点に上空と地面に魔方陣が浮かび、魔力の奔流が包み込む。

「来よ、永劫の銘を持った鬼械神（デウス・マキナ）、アイオーンッ！」

ルーンが瞬時に浮かび上がり、ユーキの手脚、身体に纏っていく。

闇色の炎に包まれて、次の瞬間にはユーキの姿は人の形をした鬼械の神を象っていた。

漆黒の鬼械神（デウス・マキナ）アイオーン。

全長は約１０メイル。

本物の鬼械神（デウス・マキナ）アイオーンと比べて五分の一スケール。

それでもその威容は凄まじいものがある。

「これが、アイオーン」

「ユーキ、鬼械神モードは物凄い勢いで精神力を消耗する。今のエネルギー変換効率だと、ユーキの精神力の量から換算して、恐らく五分が限界だ」

「光の巨人よりはマシ……なのかな？」

アルハザード・ランプなんて動力は、流石に造れなかった。

つまり、ユーキは鬼械神（デウス・マキナ）アイオーンの意思にして、動力機関と云う訳だ。

「武装は今の処、拳銃の方の【アイオーン】と【アンブロシウス】だけで、空を翔ぶ術も無い。完全に地上での活動しか出来ない」

スケールもアイオーンに合わせて、巨大化している。

正確に云うなら、本来の大きさの銃をコアにそれぞれの銃を形成しているのだ。

小さい侭では使えないし。

「飛行術式シャンタクとかは無いの？」

「“今は”無い」

「今は……ね」

ユーキはアイオーンを解除すると、精神的にバテたのかフラリと倒

れる。

ユートは、そんなユーキを優しく抱き止めた。

アイオーンの開発に成功を収めたものの、本物に比べればハッキリ言ってお粗末にも程がある造りだ。

ユートはそれを自覚して、本当にユーキに与える為の鬼械神（デウス・マキナ）を造るべく様々な文献を読み漁っている。

部屋に戻り、アイオーンについて訊ねるユーキ。

「それで、本物との相違点は？」

「全てに於いて劣っているかな。装甲は本物がオリハルコン、此方はミスリル。駆動炉は本物がアルハザード・ランプ、此方はユーキ自身。大きさも五分の一がやっとだったし、本物が持っている術式も再現出来ていない。一応、シエスタのお陰で魔力伝達率の高い、水銀（アゾート）を使っているのが辛うじて本物っぽいけど、粗悪品の鬼械神って処だな」

実際、鬼械神（デウス・マキナ）は水銀（アゾート）を伝達系に使用している。

「まあ、本物は魔導書の記述その物が術式になって、招喚されてる訳だしね」

とはいえ、ユートが目指している“例のもの”とて、人間が造り上げた唯一つの【人間の為の鬼械神】と云われているのだ。

ユートがスレイヤーズ系の魔法習得、ユーキが機神咆哮系の力を獲

る。

それを以て【魔を滅する者（デモンスレイヤー）】と【魔を断つ剣（デモンベイン）】成る事が2人の将来的な目標だった。

「取り敢えず、今後は雛型（プロトタイプ）のアイオーンを改良する方向性でやるしかないだろうな」

「頑張ってね、兄貴♪」

「何を言ってる？　ユーキにも頑張って貰うぞ」

「う〝……」

「そんで、早速だけどな。今度は火竜山脈かサハラを目指す。ユーキのアイオーンのテストも兼ねて、連れて行く予定だから」

「り、了解～」

どうやら、今後はユートに丸投げとはいかないらしい事に、苦笑いをしながらも了承するユーキ。

然し、その内心では悦んでいたりする。

やっと兄貴（ユート）の役に立てるのだから。

尤も、数分間しか動けないアイオーンでは、やれる事など大して無いのだが……

「どっちを先にするかな。そういえば、ユーキも魔法を習い始めた

んだよなぁ。バインド系のアレも教えたし、う～ん？」

五歳になり、ユーキも杖を与えられて魔法の練習を始めていた。

だが、虚無の担い手であるユーキでは系統魔法の上達など絶対に望めはしない。

それが解っているからこそユートは、将来必要となるだろう魔法を教えていた。

基本的な汎用魔法（コモン・マジック）は既に修めている為、その応用編としてユートのオリジナルスペルを習っているのだ。

その一つが、念力（フォース）の変形応用魔法。

「アイオーンの実戦試験を兼ねて、火竜山脈にでも行こうか？」

「少なくとも、ピクニック気分で行く場所じゃ無いと思うよ？　兄貴……」

ユーキは、唐突なユートの言葉に突っ込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

火の精霊主に会いに行くという名目で火竜山脈に出掛けるのだが、トリステイン国内に存在している場所ではない。

ガリアの国境を越える必要がある。

つまり、ゾロゾロと手勢を連れては行けない。

「父上に相談するか」

ユートはサリュートの執務室へと向かった。

ノックをして執務室に入ると、相も変わらず書類の山に埋もれたサリュートの姿が在る。

基本的にサリュートの午前の時間は、書類仕事に終始して消えてしまう。

「父上、ちょっと火竜山脈に行きたいのですが……」

「う～ん？　そうかぁ……って、なにぃいいっ？」

何気無く言ったからか？　反応がタップリと十秒くらい遅れてしまう。

ガリアとロマリアの国境に位置し、東西に伸びている山脈であり付近にアクイレイアなどの都市がある。

どちらから入るにしても、トリステイン国境を越境しないと行く事が出来ない。

未だ七歳の子供でしかないユートでは、簡単に行ける場所ではなかった。

とはいえ、越境は兎も角として行き先が火竜の住まう火竜山脈では、サリュートも『はい、そうですか』と言う訳にもいかない。

「火竜と戦闘になったらどうする？　そもそも、何の為に火竜山脈に行くんだ？　危険を犯してまで行く必要があるのか？」

サリュートには理解が出来なかった。

息子が何処か普通ではないとは思っていたが、幾ら何でも突飛に過ぎる。

例えば、ユートが何か欲しいと望むなら、買い与えるくらいするが、何時も斜め上を強請（ねだ）った。

ガリア王との会談も然り、ジョゼット達を連れ帰って来た時も然り。

息子（ユート）は何処を向いて、何処へ行こうとしているのかが、どうしても理解出来ないのだ。

「父上、僕は火竜山脈に行って火の精霊に会いたい」

「火の精霊……だと？」

「はい」

ユートが水の精霊と会う為に、ラグドリアン湖に行ったのは五歳の時。

去年は風の精霊と会う為、アルビオンに合法的に行っている。

何の為に会っているのか、それは知らない。

「ユートよ、それはお前がしなければならぬ事か？」

「そうです。四系統精霊を受け容れる器足り得るのがこのハルケギニアに僕だけなら、僕が行かねばなりません！」

無事に、生きて会いに行くのも精霊の試練の内。

なればこそ、ユート自身が行かなければ意味を為さないのだ。

「父上には許可だけを戴ければ、後はピエール様に頼みます」

「ヴァリエール公爵に？」

反対はしないだろう。

ユートは既に楔を打っているのだから。

カトレアの治療法は二つ。

その一つが四系統精霊の力を使う事だ。

ユートが四系統精霊と契約しなければ、必然的にもう一つの方法しか残らない。

カトレア快癒の可能性は、少しでも上げたい処だ。

勿論、ユートが死んでしまっては意味が無いが……

「今回からはユーキも連れて行きます」

「何？」

「ユーキに与えた力を試す為にも」

「莫迦を言え！　ジョゼットは未だ五歳だぞ？」

「僕も五歳で動いていましたよ？」

「それは……、そうだが。力とはマジックアイテムの事か？　空を飛ぶだけでは戦えんぞ」

サリュートが言っているのは【ストライカーユニット】の事だろうが、その情報は古い。

「ユーキに与えた力、それは鬼械神（デウス・マキナ）です」

神の贋作の、そのまた贋作という無様な代物だが。

それでも実戦をしてみなければ、改良も儘ならない。

「鬼械神？　何だそれは」

「ガーゴイルとゴーレムの技術を用い、身を護る鎧として組み上げた巨神兵器。それが鬼械神（デウス・マキナ）です」

起動して数分間しか動けないのでは、決戦兵器というより欠陥兵器。

それでも、将来の安全を買う為に今の危険を選ぶ。

ユートとユーキの真の敵は火竜如き、話にもならないくらい強大なのだから。

「それに、今回の護衛としてカリーヌ様に付いて来て戴きますから」

サリュートは、平然と言う我が子の言葉に開いた口が塞がらなかったという。

火竜山脈に訪れた一行。

当然、越境に際しての許可を貰っている。

ただ、何がどう間違ったのだろうか？

「此処が火竜山脈……」

鳶色の瞳の桃色ブロンドの幼女……ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールが同行していた。

「ルイズ嬢、ピクニックじゃないんだけどな？」

「判ってるわよ」

何処と無く嬉しそうに、弾んだ声で応えてくる。

明らかにピクニック気分。

「（本当に、どうしてこんな事に？）」

思い出されるのは、数日前にヴァリエール邸を訪れた日の晩餐の事。

その中で、ユートは訪れた理由を話した。

勿論、カトレアの病の事もあるからヴァリエール公爵は頷いてくれたし、傍らで聴いていたカリーヌ夫人も同行すると約束をしてくれたのだ。

其処までは順調だった。

『わたしも行くわ！』

桃髪幼女がそんな事を言い出さなければ。

当然ながら公爵は反対したし、夫人も許さなかった。

カトレアなど、思わず意識が遠退いたくらいだ。

ユートも説得したのだが、年齢や性別を理由には出来ない為、説得は難航。

五歳のユーキが同行しているのに、自分が同行出来ないのはおかしいとまで言われてしまう。

ユートはユーキに関して、心配はしても信頼していた事もあるし、いつかは戦わねばならぬ身なら、早い内に実戦を経験させたい事もあり、アイオーンの試験もしたかったから連れてきたのだ。

初めからルイズとは全てに於いて違う。

それに、いざとなれば完全な虚無を使えるユーキは、寧ろ味方として頼もしい。

公爵からの報告でコモン・マジックは普通に使える様になったと聞いたが、それと不完全な虚無を二つでは話にもならないのだ。

結局説得し切れずに、実戦の怖さを教える為に後方で身を護っている事を条件にして、已むを得ず連れて来ていた。

ユートはせめて火竜の攻撃から護れる様に、自分用に造ってあったマジックアイテム――【火精の護符】を渡しておく。

売られていた火竜の鱗に、術式を転写した紅玉を埋め込み、加工した護符（アミュレット）だ。

万が一にもルイズに死なれては、ユートも困る。

自分自身の防御が疎かになってしまうが、精霊の加護もあるから何とかなると、自らに言い聞かせていた。

「ハァー」

盛大な溜息を吐く。

「ごめんなさいね、あの子がとんだ我が侭を言って」

流石に悪いと思ったのか、カリーヌも謝ってきた。

本来ならカリーヌが強く言うべきだったのだが、よもや理路整然と言い負かしに来るとは、ユートですらも予想外。

結局、折れた。

「仕方がありません。こうなればルイズ嬢は死ぬ気で護りますよ」

「ええ、お願いしますね。私もあの子を護りますから余り前には出れません」

「はい」

こうなればやるしか無い。

因みに……結局カトレアは意識を取り戻さなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

戦うのが目的ではない。

だから、徹底的に交戦を避ける方向性で動いた。

ルイズも暑い中、静かに付いて来ている。

然し、もうすぐ頂上という所で火竜に襲われた。

「チィッ！　あと少しの処でぇ！」

ユートは舌打ちしながら、腰に佩いた刀を抜く。

「カリーヌ様はルイズ嬢の護りを固めて、後方からの援護をお願いします！」

「任せなさい！」

「ユーキはいざという時にはアレを、通常は【アンブロシウス】で援護！」

「了解、お兄様！」

「僕は直接攻撃をする！」

作戦とシフトが決まって、戦闘を開始する。

「光よっ！」

ユートの刀が、マインド・トリガーシステムのキーワードにより、光を放つ。

流石に、彼の烈光の剣（ゴルンノヴァ）とは比べるべくも無いが、威力は可成り上がる。

本物と同様、光を飛ばして攻撃も可能だ。

「ユビキタス・デル・ウインデ！」

カリーヌ夫人が分身する。

「風の偏在！？」

ユーキは驚く。

そう言えば、この技が有ったかと納得した。

本体はルイズを監視＋守護を似ない、偏在が攻撃するという事だろう。

ただ、偏在を一体だけしか出さなかったのは、ユートの実力を見たいが故に援護に徹する心算か。

ユートが斬り付ける中で、ユーキは【アンブロシウス】にカートリッジを入れ、火竜に狙いを定めて撃つ。

予めユートが火竜用に造ってあった弾丸で、氷系トライアングル・スペルが入っている。

援護の為、余り強いモノでは無いが威力はそれなり。

ユートはライン相当の術で先制する。

『全ての力の源よ、優しき流れ揺蕩う水よ、我が手に集いて力となれ……』

口ではルーンを唱えつつ、頭で術式となる詠唱をイメージして、力在る言葉を紡いだ。

「氷結弾（フリーズ・ブリッド）ッ！」

【氷結弾】
火炎球の氷バージョンで、撃ち出した蒼く輝く光球が着弾した所を中心として、周囲を凍結させる術。

「この程度じゃ駄目か」

凍結はしたが、熱で直ぐに溶けてしまう。

刀を使って斬るが、やはり鱗が硬い。

竜の瞳はマジックアイテムの材料になるから、出来れば傷付けたく無いユート。

援護のエアハンマーが火竜の頭を打ち抜く。

その隙を突き、鱗と鱗の間を狙って突いた。

『ギィアアアアッ！』

痛みがあったのか、火竜が叫ぶ。

鎌首をもたげ、ユートに向けて息を吸う。

「ブレス？」

咄嗟に後ろに下がった瞬間に、莫大な炎がその場を焼いた。

『永久を生まれし往き交う風よ、優しき流れ揺蕩う水よ、全てのものに白い息吹を……』

手を地面に付いて、力在る言葉を唱える。

「氷窟蔦（ヴァン・レイル）ッ！」

氷の糸が地面を這い、火竜へと絡み付いて凍結する。

一応はトライアングルスペルではあるが、効くかどうか……

氷は湯気を上げて溶けてしまった。

「アトラック・ナチャ！」

動き出す前に、ユーキの声が響いて光が火竜を拘束してしまう。

これが念力を応用した魔法で、可視光線にまで念力で収束した光を編み上げて、高い拘束力を持つ網を作り出す魔法。

「ユーキ、生身でアトラック・ナチャは危険だ！」

標的が小さかったり非力なら兎も角、火竜が相手では力負けしてしまう。

ブチィッ！

案の定、拘束網は火竜の力に負けて破れた。

火竜は怒りと共に、強力な火竜の吐息（ファイヤ・ブレス）を吐き出す。

「拙っ！？」

射線上にはルイズとカリーヌが居る。

アイオーンの招喚は間に合わない。

火竜のブレスは、無慈悲にユーキ達へと襲い掛かるのだった。

・

第２７話：永劫の銘を持つ偽神（後書き）

・

ルイズの同行が少し強引過ぎたかも……

火竜との戦闘、油断し過ぎてピンチに？

第２８話：ユートの爪弾く精霊の旋律（前書き）

ある意味、ユーキの初実戦が鬼械神での戦闘。

第２８話：ユートの爪弾く精霊の旋律

・

――ダメだ……死んだ！

ユーキは迫り来る炎の塊を目にしながら、頭の中が妙にクリアになっていた。

その炎に炙られれば、人間の身体などあっという間に燃え尽きる。

時間にして僅か数秒の筈の出来事が、今のユーキの目には揺ったりと感じられていた。

「（熱そうだな。今の内にアイオーンを喚べない……よねぇ）」

思考は音より速く動いている癖に、身体はそれに付いて来れていない。

口を開こうとしても、接着剤でくっ付いているんじゃないかと思うくらい、重たくて動かせなかった。

だが、だからこそはっきりと視て取れたのだ。

ユートが炎とユーキの間に入り込み、蒼と空……二つの輝きを身に纏って壁になった場面をハッキリと。

振り返ったユートの瞳が、まるで穏やかで……

優しく慈しむ様に微笑んでいたのを、ユーキは確かにその目に焼き

付けていた。

「……っ！？　兄貴っ！」

我に返ったその時、火竜の吐息（ファイヤ・ブレス）はユーキと、その後ろに居るカリーヌ夫人とルイズには届かず、ユートの身体一つで遮っている。

否、否否否！

断じて否！

身体一つなどではない。

ユートの身体を覆う蒼と空の煌めきが、ユートの身体に届けば確実に骨まで残さず焼き尽くす筈のブレスを防いでいた。

その煌めきとは？

「せ、精霊光……？」

水の精霊王と風の精霊王、二つの加護がユートの身を護っていたのだ。

「（そうだ、さっき振り返った兄貴の瞳……蒼色と空色の虹彩異色だったよね。確か、風の聖痕で八神和麻が風の精霊王の力を発した時は、彼の両目がまるで空の様な色に変わった筈）」

両目が空色――

「（待って、さっきの兄貴の瞳は……真逆っ！？）」

息が尽きたのか、ブレスが漸く止まる。

「今っ、エアハンマー！」

偏在のカリーヌがその隙に風の魔法で攻撃し、火竜の意識を自分へと向けた。

位置的にカッタートルネードの様な、大きな魔法は使えない。

兎に角、本体が何とかするのを待つしか無かった。

一方のユートは、炎が止んだと同時に倒れてしまう。

「兄貴っ！」

普段は、誰かが居る所では呼ばない呼び方でユーキは叫んで倒れるユートの身体を支える。

その瞳に涙を浮かべて。

「莫迦、バカ兄貴！　同時に水と風の精霊王の力を解放したんだね？　そんな事をしたら、脳が焼き切れて廃人に……最悪、死んでたかも知れないんだよ？」

ユートの瞳がオッドアイになっていた理由、それは即ち二つの精霊世界への扉を同時に開いた事にある。

異能の力を揮う為に、主に使われる肉体器官は何処になるのか？

それは脳。

人間の脳の使用率は３０％にも充たない。

他の部分は全て眠っている状態だ。

そんな未使用域の一部を覚醒させ、それにより異能の力――魔法や超能力などを使う事が可能となる。

許容量を越えた力を揮おうとすれば、脳がリミッターを掛けてしまって、普通は使えない。

それをユートは無理矢理にリミッターを外し、精霊王から与えられた代行者としての力を使った。

脳にはとんでもない負担が掛かった筈だ。

壊れる直前に、精霊界の扉を閉じて事なきを得たが、強い負担を強いた為に倒れてしまった。

「な、何があったのですか？」

「カリーヌ様、兄貴をお願いします……」

「ジョゼット、貴女はどうするのですか？」

「あの火竜を殺します」

顔を上げたユーキの瞳からハイライトが消え、表情も無くなっている。

ゾクリッ！

烈風と呼ばれ、軍を率いたカリーヌをして背筋に怖気が奔る程の静かな怒り。

今のユーキは殊更、激昂こそしていない。

然し、それが却ってユーキの怒りの激しさを物語っている様に感じられた。

「アレに対抗する手段が有るのですか？」

「勿論。僅かな時間しか使えないから、使い所が難しいけど兄貴の無茶に比べれば、どうという事もない」

手にした赤黒い自動拳銃。

「【アイオーン】、征こうか？」

《セットアップ》

一瞬の輝き。

その刹那の時で、ユーキの服装が漆黒を基調とした物へと変化した。

「機神招喚……」

マギウス・スタイルとなったユーキは、拳銃を高々と掲げながら口訣を紡ぐ。

「永劫（アイオーン）！　時の歯車、断罪の刃。久遠の果てより来たる虚無……」
それは契約。

それは誓約。

力への畏敬にして、暴力を揮う事への悦び。

「永劫（アイオーン）！　汝より逃れ得るものは無く、汝が触れしものは死すらも死せん！」

ユーキを基点として、上空と地上に浮かぶ魔方陣。

それが顕れるという事は、敵たる火竜に最早逃れる得る事は無い。

それが触れると云う事は、もう火竜の死は確定したという事だ。

「来よ、永劫の銘を与えれし鬼械神（デウス・マキナ）……アイオーンッ！」

招喚に応え、ユーキの身体を闇色が覆う。

全長、約１０メイル。

闇の機神は、ユーキという意思を得る。

ユーキという心臓を得る。

今こそ、アイオーンの腕はユーキの腕に、アイオーンの脚はユーキの脚に。

アイオーンが睥睨する視線はユーキの視線となる。

ざっと見て、アイオーンの全長の１０メイルに対する火竜は、成体故に数十メイルと単純なスケールに於いては不利に思えた。

だが、鬼械神とは神の模造品であり、このアイオーンはそんな模造品の贋作とはいえ、それでも神を名乗る機械なのだ。

況してや、ユーキにとって最高の兄貴（ユート）が造り上げた雛型（プロトタイプ）とはいえ鬼械神。

火竜如きに敗ける道理など有りはしない。

確りと握られた【アイオーン】と【アンブロシウス】の二挺、それを構えながらユーキは呟く。

「実際、君の住処（テリトリー）に入ったボクらにも問題はあったよね、野生の領域は人間の法なんて関係無いんだから」

それは理解出来る。

ユーキ達のした事は、人間の社会に例えれば勝手に庭先に入り込み、家主が文句を言ってきたから逆ギレして攻撃を仕掛けたという事に他ならない。

「それでもね、ボクにとって優先されるのは兄貴なんだよ。だからね……」

理解はしていても、優しくするには限度もある。

それは飽く迄も身勝手で、他者を踏み躙る行為。

只管傲慢(ひたすら)に……

「死んでね？」

ユーキはその暴力(アイオーン)を揮った。

拳銃から放たれる魔法。

カリーヌ夫人もルイズも、銃という武器は知識としてある。

然し銃とは弾を詰めて火薬を容れて、その火薬に火を灯して初めて鉛の弾を発射するという面倒極まりないものだった。

それがどうだろう？

ユーキが――鬼械神アイオーンが撃っている拳銃は、どちらも放つ速度も弾を籠める速度も半端ではない。

しかもだ、放っているのは鉛弾ではなく魔法。

どうすればあんな巫山戯た武器が造れるのか、それにあの鋼の巨人……

「アレってゴーレムなの？　それともガーゴイル？」

ルイズの疑問は、魔法のみを偏重するトリステインの貴族からすれば、当然出てくるものだろう。

あんな代物、見た事は疎か聞いた事すら無い。

体格差をモノともしない力を揮い、あの火竜の巨体を格闘戦で揺るがせている。

装甲には傷も付かないし、ブレスすら防ぐ。

重々しい外見に似合わず、割りと素早く動いているのも見逃せない。

ユーキの言っていた鬼械神とは、如何なるモノなのかルイズは気になっていた。

それはカリーヌ夫人も一緒で、偏在が火竜と戦っているのを見ながら、ユートの看病をしつつも鬼械神なる存在に関して考えている。

あの様な存在、カリーヌの４０年を越える人生の中でも見た事が無い。

しかも造ったのはユートだと云う。

魔導人形（ゴーレム）ではない。

魔法生物（ガーゴイル）でもない。

まるで巨大な漆黒の鎧兜が動いているかの如く、異様な姿をしている。

自分とて、その気になれば火竜の一頭や二頭、完勝出来るだけの自信も実力もあるが、それでもアレは異質だと感じた。

「っ！　拙い……、頭に血が上ってる」

「気が付きましたか？」

目を覚ましたユート。

何やら柔らかい感触が頭に感じられる。

ハッと気が付くと、夫人の顔が目線の真上に有った。

これは所謂、膝枕らしい。

「カ、カリーヌ様！？」

「著しく消耗しています。動いてはいけません！」

「は、はい……。僕はどの程度寝ていましたか？」

「寝ていたという程の時間は経っていませんよ」

確かに、数分間しか動けないアイオーンが未だ動いているなら、一分かそこらしか経っていないのだろう。

「あの莫迦、闇雲に戦ってどうする。ユー……ッ！」

叫ぼうとして、激しい脱力感を感じた。

動くには、如何なるモノであってもエネルギーが必要となる。

生物、魔法、精霊、それどころか森羅万象。

エネルギーという代価を支払い、何らかの形で動いているのだ。

声を出す――それだけでもエネルギーを消費する。

ならば、大声を張り上げる行為は更に大きなエネルギーが消費されると云う事。

歩くより、走った方がより消耗するし、疲労もする。

なら、ただ話すより叫ぶ方がより消耗するのは正しく自明の理。

ユートは叫ぼうとしたが、エネルギーの消耗を鑑みた肉体が、ユートの行為に待った（リミッター）を掛けたのだ。

その事を理解したのだろうか、カリーヌ夫人はユートに話し掛ける。

「アレが何なのか、それは解りませんが、もしあの子にアドバイスが有るなら、偏在を通じてわたくしが伝えましょう」

「……判りました」

カリーヌ夫人の持ち掛けた話は理解出来たし、御言葉に甘えてアドバイスの内容を教えた。

カリーヌ夫人は首肯して、偏在にそれを伝える。

それは、圧倒的というのも莫迦らしい力を、ユーキが知る瞬間でもあった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「くっ！」

ユーキは呻き声を上げながらおかしいと思った。

幾ら雛型（プロトタイプ）が貧弱とはいえ、火竜一頭を相手に梃摺り過ぎる。

圧勝とはいかないまでも、勝てるだけの力を感じた。

それなのに、ダメージこそ与えているが未だに斃せていない。

「（ボクが……使いこ熟せていない？」

当たり前の事に気付く。

戦闘訓練は一応とはいえ、ユーキも受けている。

が、受けて間もないユーキの戦闘力など、押して知るべし。

使っている鬼械神が仮令、窮極の存在だったとしてもだ、実戦経験も碌に無い様な小娘が果たしてどれだけ戦えるか？

ユートは実戦経験は兎も角として、前世での剣術修行の経験と今生での訓練で、ある程度は戦闘の心得などが培われている。

然しユーキの前世は、機械弄りが好きで漫画やライトノベル、後はアニメを観ていて幸せな引き篭り。

発明が認められて、彼女も出来た頃になって引き篭りを卒業したくらいだ。

戦闘など出来る訳もない。

精々が拳銃の引き金を引いて、狙った場所に撃つくらいだった。

最早、それは使い熟す熟さない以前の問題だ。

「ジョゼット！」

「っ！　カリーヌ様？」

「安心なさい。ユート君は無事ですよ」

カリーヌの言葉を聞いて、ホッと胸を撫で下ろす。

「あの子からの伝言です。白いリボルカートリッジを装填し、全ロードして口訣を紡げ。口訣は……」

カリーヌ夫人から伝言を聞いて、ユーキは顔を上げると胸の支えが取れた気がして晴れ晴れとした表情を浮かべた。

カリーヌには判らないが。

「さっすが、兄貴！」

“こんな事も有ろうかと”用意されていた逆転の一手というヤツだ。

科学者ならば、一度は言ってみたい台詞だろう。

「それともう一つ」

「へ？」

「勝手にキレて、何を無様晒してるのかな？　ちょっと甘やかし過ぎたかもね。無事に帰れたらＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだ。レッツ、少し……頭、冷やそうか？　だそうですよ」

「ＮＯＯＯ

セラエノの、絶対零度にも近しい魔風を噴出する純白が絶叫を響かせ、翼を拡げた凍れる竜が火竜を襲う。

それは本物ではない。

イブン・カズイの粉末だって用意出来なかったのに、本物のイタクァ足り得ないだろう。

術式を組み合わせ、それらしく偽装したモノだ。

贋作の鬼械神に贋作の術。

今は未だ、無様な事この上ない代物……

それでも、今のユーキには充分なものだった。

突撃するイタクァに火竜が炎のブレスを吐き出すが、イタクァが吹雪のブレスを吐き出して防ぐ。

そしてその侭、火竜に体当たりをしてしまう。

ビキビキビキッ！

火竜はあっという間に凍結されて、心の臓は麻痺してしまい鼓動を停めた。

「や、やった……」

フッと力が抜け、膝を付くとアイオーンが解除され、ユーキの姿に戻る。

限界（リミット）まで使い、自動で消えたのだ。

それは万一に備え、ユートが付けた安全装置だった。

「っ！　ハァ、ハァ……」

精神力が殆んど残っていない為、疲労感から肩で息を吐く。

「ジョゼット、よく頑張りましたね」

崩れるユーキを支えたのは偏在のカリーヌ夫人。

その顔には、普段は余り見せない安堵と慈しみを混ぜた微笑みが浮かんでいた。

それにしても……と思う。

「（あのゴーレムだか、ガーゴイルだかは一体？）」

ユートがマジックアイテムを造り、それを売り出しているのは知っていた。

だが、アレを単なるマジックアイテムと呼んでも良いものかどうか？

確かに、明らかにマジックアイテム然とした物を使って、あのアイオーンを出していたが、普通のソレとはその存在感からして違っていた。

「（あの子は、ユート君は一体何を目指しているというの？）」

カリーヌ夫人は冷や汗を流しながら、アイオーンと呼ばれたあの機神の威容を思い出す。

不完全で未完成、中途半端な鬼械神（デウス・マキナ）でしかないが、烈風の字で呼ばれたカリーヌ・デジレ・ド・マイヤール・ラ・ヴァリエールの心を掴んで、放さなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

取り敢えず可成り暴れ回った事もあり、他の火竜達が集まってきてしまう前に、一行は火の精霊が在るだろう火口を目指す。

ユートもユーキも疲労していたし、余り動かしたくはなかったのだが、無駄な争いは余計な疲労を促すだけという事で、急ぐ事にしたのだ。

因みに、ユーキは精神力が枯渇とまではいかないが、可成り減ってしまった為にルイズが肩を貸している。

ユートは、カリーヌ夫人の背におんぶされていた。

「ユート君、元気ねぇ？　これは生存本能かしら？　それとも……」

「生存本能ですっ！」

硬くなっていた“自身”をカリーヌ夫人の背に押し付けながら、ユートは顔を真っ赤にしながら叫んだものだった。

貧乳のおばさんに欲情なんてしない……なんて、命知らずな事は言わない。

「今、何か思いましたか？　ユート君……」

「滅相もない！」

全力でユートは否定した。

頂上から火口へと降りて、火の精霊が住ます地へと立つ一行。

ユートを降ろすと、一晩は休もうという事になる。

疲れ果て、正常な判断力を失っている今の状態では、精霊との話など満足に出来ないという理由だ。

ユートが熱を遮断する結界を張り、食事を摂って寝る事になる。

結界はマジックアイテムで張った為、ユートに負担は掛かっていない。

一つでも誤てば、脳が焼き切れてもおかしくなかったのに、同時に二つの精霊力を行使したのだから、眠って脳を休めなければならなかった。

一晩が経ち、ユートは火口の目前で立っている。

「これから、精霊との交感の為に裸になるので、出来れば彼方を向いていて欲しいかな～とか思ったり」

「わたくしには見定める義務があります！」

「さいですか……」

已むを得ず、ユートは服を脱いで裸になった。

ユーキとルイズは離れた所に避難している。

「それは？」

「竪琴（ハープ）ですよ」

「そうではなくて。何故、竪琴などを持っているのですか？」

裸になったユートは、持っていた包みを開き竪琴を取り出したのだ。

「気が付いたんですよ」

「何に？」

「精霊にも嗜好はあって、好きな音というモノが存在していると！」

人間には意思があり、感性を以て嗜好を嗜む。

なれば、同じく意思が在る精霊にも系統によって違う嗜好があり、

それは音楽も同様だと考えた。

音に韻を践んで、術式とする魔法も存在するくらいならば、火の精

霊を喚び出す音も紡げる筈。

ユートはラクスにも手伝って貰い、今日という日の為に練習をしてきた。

ユートが竪琴の弦に指を掛けて、爪弾き始める。

それは、激しくも雄々しい力の概念。

時に激しく時に優しい火を表す。

火は何物をも焼き尽くしてしまう反面、暖を与えてくれる。

そんな韻を音に託し、火の精霊へと呼び掛けた。

精神力を媒介として、音に呼び掛けの概念を乗せる。

ただ、無造作に呼び掛けるのではなく、何かを触媒とするのは魔術ではポピュラーな手法だった。

要は、小さな声を張り上げても聞こえないていうならば、拡声器を使って届かせようという事だ。

呼び掛けが届いたのか？

火口の中の溶岩が、ボコリと沸き立ち人型を採った。

『我を呼びしは貴様か？』

火の精霊主だろうと思われる人型が、ユートに話し掛けてくる。

「その通りです。火の精霊主……」

『精霊主？　成る程、そういう意味では貴様の考えた通りだ』

「アッサリと心を読まれたっ？」

『不思議がる事もなかろうに、大いなる金色に守護されし単なる者よ』

「あ、やっぱりそういう風に呼ばれるんだ」

意味は知っている。

ならば、その名前を敢えて受け容れるまで。

『貴様の奏でし旋律、我らにはとても心地の好いモノであった』

「練習もそこそこだったけどね、気に入って貰えたのなら何よりだよ」

『風のから報せは受けている。我らが根源へと至り、試練を受けるのだな？』

「良いのかい？」

『根源へと至るならば邪魔はすまい。然れど、戻って来たなら今一度あの旋律を奏でよ』

「御安い御用だね」

扉（ゲート）は開き、ユートはその中へと消える。

「ユート君っ！？」

端から視れば、焔に包まれたユートが焼けて消えた様に見えていた。

それ故に、カリーヌ夫人は慌ててしまう。

「大丈夫ですよ。お兄様は直ぐに戻って来ますから」

ユーキが後ろから声を掛けてくる。

カリーヌ夫人は深呼吸をすると、笑顔で振り向く。

「そう言えば、戦っている最中は“兄貴”と呼んでいたのに、今は“お兄様”と呼ぶのですね？」

「い、ぃ！？」

あの時はキレてて取り繕う余裕が無く、つい素で話してしまっていた。

ユーキは恥ずかしそうに、顔を俯かせてしまう。

「あ、あの時は……ちょっと。２人だけの時はそう呼んでいるから」

「色々と訊きたい事もありますね」

「それは、お兄様が戻ってトリステインに帰ってから……」

アイオーンを見せてしまった以上、もう誤魔化す訳にもいくまい。

それから暫くして、再び炎が巻き上がり人型を成すとユートが立っていた。

その手には赤い石を持ち、呆然と佇んでいる。

ユーキにはその石が、火の精霊王との契約にはよって与えられた火霊石であると直ぐに理解した。

.

第２８話：ユートの爪弾く精霊の旋律（後書き）

・

本文にもありますが、今のイタクァはそれっぽく造られただけの贋作です。

因みに、斃した火竜の死体は亜空間ポケットに仕舞っています。

竜に無駄なしというくらいお宝の山なので。

第２９話：十二宮騎士団（ゾディアック）（前書き）

・

ちょっとグダグタです。

第２９話：十二宮騎士団（ゾディアック）

・

「十二宮騎士団（ゾディアック）ぅぅ！？」

「うん、そう！」

呆れた表情で訊いたユートにニコニコと、何時に無く大輪の花を咲かせたみたいな笑顔で応えるユーキ。

僅かに上気して、白い肌の頬が朱に染まっている。

どれだけ興奮し、昂って、気持ちが逸っているのかがよーく解った。

若干、ユートは引き気味だったりするが……

義妹（いもうと）の意外……とも言えないが、それでも厨二病な趣味に思わず天井を仰いでしまう。

そして思うのだった。

「（どうしてこうなった）」

……と。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

事の起こりは、火竜山脈でユートが無事に火の精霊王との契約に成功して下山した後、ラ・ヴァリエール領に戻ってから公爵も含めて事情の一部を開示した時の事だ。

【火竜山脈】

「終わったのですか？」

「はい」

カリーヌ夫人から服を受け取って、ユートはいそいそとそれを着込む。

何だか、下を向いた夫人が頬を染めながら『七歳にしては立派ですね、これなら将来は多くの娘を啼かせそうですね』……とか呟いていたが、気にはしまい。

「火の精霊主、契約は成った。これで僕は貴方の後輩という事かな？」

『ふむ、人間の言い方ではそうなるな。名を教えて貰えるか？』

マグマで出来た身体を揺蕩わせながら、火の精霊主がユートに名を訊ねた。

カリーヌも、空気に等しかったルイズも驚愕する。

ラグドリアン湖へと住まう水の精霊を知っていれば、大体判る事ではあるが基本的に精霊は人間に尊大だ。

故に、固有名詞に拘りを持たず【貴様】か【単なる者】と呼ぶ。
直接は会わずとも、その話は割りと知る者が多い程に有名だ。
精霊自身、在るが侭である為に固有名詞を持たない事も理由の一つ。
その精霊が、ユートに名前を訊いてきたのだから正に青天の霹靂だろう。
だが、もうユートも慣れてしまったもので……
「僕は、ユート・オガタ・ド・オルニエール。ユートと呼んで欲しい」
『うむ、ではユートよ』
満足そうに緋色の人型は、鷹揚に頷いて更に言葉を紡ぎ出す。
『風のより聴いておるぞ。風のと水のに名を与えたそうだな？』
「まあ、お約束だよね？　勿論考えて来てるよ」
『お約束……？　とは何だか判らぬが、なれば早よう伝えい』
不変、普遍、不偏の精霊にとっては又と無い娯楽なのか、それとも本当に嬉しいのかは本人？　ならぬ身には解らなかったが、それでも期待されている事は理解出来た。
「貴方の名は【カルブンクルス】。旧き言葉でルビーを意味するん

だ」

血の如く、火の如く赤い、紅い、赫い……その鮮烈な色に準えた名前。

『うむ、なればユートよ。主は此れより我を【カルブンクルス】と呼ぶがよい。我が盟友にして兄弟よ』

「判った。これからも宜しく、カルブンクルス」

ユートが手を差し出す。

その意図に気付いたのか、火の精霊主カルブンクルスがユートの手を握る。

既に火の精霊王との契約により、加護を受けている身のユートは、その熱でダメージを負う事は無かった。

そしてその後、約束の通り竪琴を弾き鳴らす。

雄々しくも優しい炎の祝福の旋律を……

その間、ユートの爪弾く旋律に誘われて、周囲を緋色の灯火が何処か愉しそうに揺らめいていた。

一曲弾いた後、火竜山脈を下りる事になる。

此処に来る前に斃した火竜は、ユートが解体してから亜空間ポケットに仕舞い、持ち帰った。

下山の際、怪我をしていた火蜥蜴を治療してやったがそれは完全なる余談だ。

火竜山脈の麓まで下りて、一行は直ぐに発ち虎街道を真っ直ぐ国境まで進んで、ガリアからトリステインへ入り、ラ・ヴァリエール領のヴァリエール邸まで帰って来た。

正直、その間はルイズは疎か夫人までがずっと呆けてしまっていた。

ルイズはその侭、カトレアと風呂に入って一緒に眠ってしまう。

いち早く気が付いた夫人はユートに問い詰める。

説明を求められるのは判っていた為、ユートは幾つか言えない事には触れずに、開示出来る情報を伝えた。

「先ず、誤解がある様なので言っておきます」

最初に教えたのは、ユートが契約をしているのは所謂処の精霊主等（スピリチュアル・ロード）ではなく、精霊王と呼ばれる精霊達の根源的な存在である事だ。

ハルケギニアの人間社会に準えると、自我を持たない精霊が平民、自我を持ったラグドリアン湖の水の精霊の様な存在が貴族、根源的精霊王が国王となる。

そして、各系統が国に準えられるのだ……と。

「更に、ラグドリアン湖の水精霊主ラクス、アルビオンの風の精霊主リーベルタース、火竜山脈の火の精霊主カルブンクルス、未だに会っていない土の精霊主は精霊王の地上代行者です。そして、精霊

王との契約者をコントラクターと呼び、契約者（コントラクター）とは精霊主と同等の存在。
立場的には、大公みたいなモノですか？　王弟の方が寧ろ適切かな？　そういう存在ですね」

公爵も夫人も、もう言葉も無かった。

こんな、規格外な力を獲たユートだったが勿論、欠点も有る。

それは人間である事だ。

その聖痕（スティグマ）が、精霊界の扉を開く鍵として機能していた。
契約者（コントラクター）には、精霊王から聖痕（スティグマ）を刻まれる。

聖痕（スティグマ）を使い、精霊界への扉を開いたならその時こそ、精霊王の地上代行者としての権威を十全に行使出来る訳だが、人間が扱うには過ぎたる力故、限界を超えてしまうと脳が負担に耐え切れず、焼き切れてしまう。

そうなれば、果ては良くて廃人、悪ければ死ぬ。

聖痕は瞳に顕れ、発現させれば各系統の色に染まる。

水なら蒼色、風なら空色、試していないが火であれば緋色に染まる筈だ。

「火竜との戦闘で、ユーキとルイズとカリーヌ様が、危機に陥った際にそれを助けて倒れた理由……」

ユーキは理解していた為、辛そうな表情だ。

「それは、水と風の聖痕（スティグマ）を同時に解放して、氷の力で壁を構築してしまったからです」

何しろ時間が無い。

水だけでは蒸発する処か、爆発してしまう。

風だけでは、却って火竜の吐息（ファイヤ・ブレス）を煽ってしまう。

時間を掛けて術を構成していれば、物理法則すら越えて起き得ない現象の筈が、未だ慣れていないのと、練る時間が足りないWパンチで単体使用は危険だった。

だからこそ、足りない分を補う為に二つの力を同時に発現させたのだ。

精霊術師の真髄は、物理法則を越える事にある。

例えば、水の中で火を灯したり出来るし、焼くべきを選ぶ事も可能だ。

ユートは契約者（コントラクター）とはいえ、訓練が不足している未熟者。

あの八神和麻とて、仙術を学んで漸く精霊王の力を制御出来る様になったのだ。

つまる処が、ユートは未々制御するには修業が足りないという事だった。

そこまで話し、ユートは次の話題に移る事にする。

「それで、あの鬼械神（デウス・マキナ）とか言ったかしら？　ゴーレムだったかガーゴイルだか判らないけれど、アレは何？」

カリーヌ夫人が言っているのはアイオーンの事だ。

確かにユーキが使い熟せなかった為、強いというイメージは湧かない。

それでも夫人は、アレから不可思議な威容を感じた。

故にこそ知りたい。

それは純粋なる興味。

それは威容への危機感。

そしてそれは、造り出した者への畏怖だった。

カリーヌ夫人も昔は強さを求める求道者。

【烈風のカリン】などと呼ばれ、恐怖されて畏怖されていたそれ以前は、騎士を目指す１人の見習い。

強さを求める道筋こそ違えど、自分が……【烈風】が畏怖したのだ。

アレが只のゴーレムかガーゴイルであれば、カリーヌ夫人とてそんな思いは懐かない。

直感が教えてくれたのだ。

アレは、鬼械神（デウス・マキナ）とは、よく識っているゴーレムやガーゴイルなんかでは有り得ないと。

カリーヌ夫人は……

否、烈風のカリンは思う。

「（ああ、やっぱりわたくしは……、年を経た今でも尚、力の求道者であり続けていたのですね）」

流石に安穏とした公爵夫人としての生活が、彼女から往年の力を奪っている。

然し、あの頃の気持ちだけは捨て切れていなかったのだ……と。

或いは、若々しいユートの“男の子”を感じてしまって、少し気持ちが若返っているのかも知れないが。

そう考えると、少し肢体が熱く疼いてしまった。

「（ふふ、今夜は久し振りにピエールと熱い夜を過ごしましょうか？）」

話しをしながら、カリーヌ夫人はチラリと夫の凛々しい姿を見つめる。

ゾクリ……

ヴァリエール公爵は、背筋に熱いのか寒いのか判らない疼きが奔り、震えた。

閑話休題

ユートは鬼械神（デウス・マキナ）について、説明を始める。

「このハルケギニアに於いて、神とは何なのか制定はされていません」

「うむ？　それは異端ではないかね？　我々は始祖を奉り、崇めておるのだぞ」

ユートの余りに危険な物言いに、ヴァリエール公爵は反論する。

「まあ、僕達の様な魔法を使う者にとっては魔法という力を広めた始祖として、崇め奉る人物でしょうね。魔法を使えない者には本来どうでもいい存在ですが」

「……」

「……」

「……」

ヴァリエール公爵は内心、頭を抱えてしまう。

魔法で身を立てたカリーヌ夫人は絶句。

ユーキは苦笑するしかなかった。

「だって、そうでしょう？　魔法を使えない人間が、魔法を広めて始祖と呼ばれるブリミルを実質、何を以て崇めろと？」

「ハルケギニアの地を拓いただろう？」

「それは元々、魔法を使えない人間達の地を力付くで奪い、支配しただけではないですか？」

「なっ！？」

これには流石に絶句してしまう公爵。

「魔法が血筋に依るなら、魔法を使えない人間というのは、使える人間とは別の種族だった筈ですよね？」

「あ……！」

確かにその通りだ。

今でこそ、平民メイジなんて存在が居るとは云えど、６０００年前の雑じり気の無い始祖の時代はどうだっただろうか？

魔法を始祖が広めたなら、それが血筋に依るなら魔法を使えない人間が、果たして同じ種族だったのか？

血筋に依るなら、使える者と使えない者が存在するのは何故か？

そもそも、始祖ブリミルがハルケギニアを拓いたならば、それ以前

は何処に？

考えてみれば、おかしな事ばかりだった。

「話しが逸れましたね」

「う、うむ……」

「始祖ブリミルは人間で、神ではありません。強いて言うなら英霊として祀られている当時の現人神です」

英霊と聞いてユート達の様な転生組が思い出すのは、ブリテンの王やアイルランドの光の御子達であって、始祖ブリミルなどでは決してないが……

「なので、こんな噺が在ります。人は神がその姿を自らに似せて創り出したと。そして鬼械神（デウス・マキナ）とは、人間が神に似せて造り出した存在です」

「それは……」

「また、随分と不遜な」

やはり、宗教観念的に受け付けないのか、公爵も夫人も苦い表情となる。

所詮、この世界は神の戯曲の真っ只中。

なれば、その神のシナリオをぶち壊す存在も又、神と云う訳だ。

即ち、機械仕掛けより出てくる神様(デウス・エクス・マキナ)だ。

状況が人の手では解決困難な局面に陥った際降臨し、周囲を取り巻くその全ての問題を解決してくれる有難い神様の事であるが、転じて強大なる力がご都合主義全開で無理矢理に纏めて、シナリオをある意味破綻させる様を云う。

その力＝鬼械神(デウス・マキナ)と云う事だ。

そして、そんな中に在ってユートが造ろうとしている“例のもの”とは唯一、人間の為に造られた鬼械神(デウス・マキナ)。

今在るアイオーンは、その雛型(プロトタイプ)に過ぎない神の偽物の贋作。

現在のユートの目標とは、贋作の部分が取れた“本物の”偽物たる鬼械神(デウス・マキナ)だった。

「まあ、色々と言いましたが……別に始祖ブリミルを神だと認めていない訳ではありませんよ。神にも定義が在りますから」

神とは大きく分けて三種。

初めから神として産み出された【天威】

人間が根源に触れて神化を果たした【神域】

自然への畏敬や歳月を経る事で物が変化した【顕象】

人間が死した後、奉られた時に神として括られた場合は【顕象】に位置する。

始祖ブリミルとは顕象体の神と云う訳だ。

「だけど僕がハルケギニアに於いて、本当意味で神と呼ぶのは精霊王です」

精霊王は概念的な存在で、分類するなら【天威】だ。

「後は……」

純白の天魔王・高町なのはも又、神だと言える。

人間から神化した【神域】なのだから。

流石に言う心算もないが、彼女は始祖ブリミルの様に死んで奉られた神では無いのだと思うし。

「ま、それは良いとして……僕が鬼械神（デウス・マキナ）なんて破格のマジックアイテムを造った理由ですが、目には目を、歯には歯を、神には神をぶつけるのが一番な為なのです」

「どういう意味だ？」

「僕の、そしてユーキの敵となるのは神、それも邪悪なる神……【邪神】です」

「邪神？」

常識的なハルケギニア人からすれば、ユートを狂人だと断じるしか

ない。

だが、ユートは今まで嘘など一度も吐かなかったし、その所業を鑑みればハルケギニアの常識を遥か彼方へ投げ飛ばす事ばかり。

だから公爵は思うのだ。

「（それに、ロマリア皇国の権威失墜を狙うプロジェクト・ニューウェーブを推進するならば今更、常識に縛られて何とする？）」

くつくつと笑みを洩らし、ユートの説明を聞く公爵。

「ピエール様？」

「いや、何でも無いから続けてくれ」

「は、ハァ。判りました」

ユートは首を傾げて、説明を続けた。

「邪神はこの世を侵略し、今の生命に仇成す存在」

「生命に仇成すか……」

尤も、この世界に入り込んでいるのは今の処、無貌の神だけの様だが……

「だが、何故そんな存在の事を知り、他者には碌に報せず自分達でのみ動く？」

「それは……」

ヴァリエール公爵の言葉には一理ある。

だが、相手が問題でもある上に力を……魔法を持っている貴族は基本的に頼りにはならない。

かと言って、力の無い平民が何千人居てもどうなるものでも無いのも事実。

結局の処は少しずつ、信頼出来て力在る人間を探し出すしかない。

それに……

「邪神の中に謀略を得意とする者が居ます。その邪神は無貌であるが故に、逆説的に千の貌を持つとされ、人の中に混じって世界に介入し、徐々に破滅させようと企んでいます。それも、愉快犯的でまるで世界で遊んでいる様な奴です」

「……何と最悪な。だが、それがユート君なのは何故かね？」

「偶然、そう……偶然、知ったんですよ」

ユートは、一冊の古い本を机に乗せヴァリエール公爵に見せた。

「これは？」

「古文書……です。ウチの邸が古い物件だとは知っていますね？其処から見つけ出した書物ですよ」

「むう……」

公爵が中を閲覧してみて、それが邪神に関する記述である事が判る。

其処には、無貌の神に関する預言の様な記述も有ったし、文字がハルケギニアでは見られないモノだった。

故に、ヴァリエール公爵は翻訳（リード・ランゲージ）という、コモン・マジックを使って読まねばならなかったのだ。

パタン……

本を閉じて、天井を仰いで目を閉じた公爵は、ユートに再び向き合うと何処か疲れた表情になり、溜息と共に口を開いた。

「ワシに出来る事は無いのかね？」

それは余りに不甲斐ない、そんな自分への憤り。

未だ七歳の少年がよもや。

嗚呼、そうだ。

憤っている。

よもや七歳の少年が……

「（何という事だ）」

「後ろ楯にさえなって頂ければ、それで……」

本当に不甲斐ない。

「だったら、騎士団を創りたいかな～？」

「「は？」」

「その名も十二宮騎士団（ゾディアック）！」

「十二宮騎士団（ゾディアック）ぅぅ！？」

「うん、そう！」

呆れた表情で訊いたユートにニコニコと、何時に無く大輪の花を咲かせたみたいな笑顔で応えるユーキ。

僅かに上気して、白い肌の頬が朱に染まっている。

どれだけ興奮し、昂って、気持ちが逸っているのかがよーく解った。

若干、ユートは引き気味だったりするが……

義妹（いもうと）の意外……とも言えないが、それでも厨二病な趣味に思わず天井を仰いでしまう。

そして思うのだった。

「（どうしてこうなった）」

これが冒頭の始まり。

「良くない？」

キラキラとした瞳に邪気は全く無い。

「何処から十二宮騎士団（ゾディアック）なんて名前が出た？」

「黄金聖闘士！」

ユートはユーキの答えに、思わずずっこけた。

真逆、此処まで厨二まっしぐらな名前を出すとは。

「あ、お兄様は射手座（サジタリアス）ね？」

「ゴッコ遊びかぁっ！？　そして何故に射手座（サジタリアス）か？」

「お兄様だから♪」

可愛らしく小首を傾げながら言ってくれる。

「じゃあ、ユーキは獅子座（レオ）なのか？」

一応、義妹（いもうと）な訳だし。

「え？　ボクは天秤座（ライブラ）かな」

「何でだよ！？」

「ほら、ボクは魔を断つ剣になる予定だから」

正義の裁定者たる天秤座（ライブラ）という訳だ。

何だか、水精霊騎士隊（オンディーヌ）みたいになりそうでユートはとても怖いと思った。

「お兄様、あんなお遊びな騎士隊と一緒にしないで欲しいかな？」

「考えを読まれた？」

ユートとヴァリエール公爵と夫人は、ユーキの考えを聴いてみる。

その案が、意外にもまともな提案だったのに驚く。

「先ずは精霊術師を４人、ルイズ嬢と他の虚無の担い手を3人で合計7人だね。後の５人はボクの使い魔とルイズ嬢の使い魔」

ユート本人を加えたなら、これで１０人が揃う。

因みに、ティファニアには使い魔の召喚をさせない。

間違いなくリーヴスラシルが召喚されるから。

「待て、真逆……ルイズを戦わせる気かね？」

「と言いますか、ルイズの使い魔が混じっているのは何故です？」

ヴァリエール公爵は慌て、カリーヌ夫人は冷静に訊ねてきた。

「虚無の担い手の使い魔は１００％、確実に人間になりますから」

「な？」

「始祖ブリミルが連れたと云われる伝説の使い魔……ガンダールヴ、ヴィンダールヴ、ミョズニトニルン、リーヴスラシル。ルイズは将来的に、その誰か1人を召喚するでしょう。そうなれば最早、隠し通せはしないでしょうね」

驚く公爵に、ユートが真実を伝える。

「そうなる前にヴァリエール公爵が後ろ楯の騎士団に入れてしまえば、莫迦貴族への牽制になるし、彼女の虚無は“ボクのと同じ”で邪神相手にも割りと戦える筈なんだ」

ユーキは言う。

空間そのものに干渉出来るというのは、神に対してのアンチ能力に成り得た。

「どの道、ルイズは無為に巻き込まれるのか……」

ならば、自分の懐に入れて戦わせた方が良いのかも知れないと思う公爵。

「判った。ルイズの件は兎も角、その騎士団の後ろ楯の方は了解しよう」

ヴァリエール公爵が覚悟を決めた瞬間だった。

「それにしてもジョゼットさんも、ルイズと同じという事は……」

「ああ、聞き流してくれないか～」

バラす気満々だった癖に、白々しく舌を出しながら頭を掻く。

「成る程、書物で読んだと言ってましたが、ジョゼットさんの知識でしたか」

カリーヌ夫人がユーキを見て言うが、実際に書物（ライトノベル）の知識だったりする。

「ま、ルイズ嬢の為のマジックアイテムを、お兄様が造ってくれますから」

「僕に丸投げっ！？」

ユートが、十二宮騎士団（ゾディアック）用にマジックアイテムを製作する羽目になってしまう。

「それに、仲間が居たなら彼女も少しは気が楽だろうしね？」

それはそれは、イタズラっぽくウィンクをしたものだった。

その後、十二宮騎士団（ゾディアック）についてある程度の事を決め、今回の事はお開きとなる。

ユートとユーキは、宛がわれた部屋で休む事に。

「そういや、なんで英語だったんだ？　トリステインは確かフランス圏じゃ？」

「ボクにはそっちが判り易いし、何なら射手座（サジテール）のがよかった？」

「どうあっても僕は射手座なんだな……」

諦めにも似た思いが去来して、溜息を吐いた。

その侭、食堂に残った公爵と夫人は未だに話し合う。

「ハァ……」

「大丈夫ですか、アナタ」

「うむ」

注がれたワインに口を付けて煽る。

一気に色々と聞いてしまった所為か、精神的に疲労してしまったのだろう。

「ルイズの事、良かったのですか？」

「他に手はあるまいよ」

「そう……ですね」

「それに、これを見なさいカリーヌ」

それはユートが残していた古文書。

「これは？」

「確かに経年劣化をしている様に見えるが、この本は恐らく最近執筆された物。本自体は兎も角、インクが新しいからな」

「最近？　それではこの本はユート君が？」

実はこれは、魔導書を執筆する練習にユートが書いたモノで、文字は日本語だったりする。

本番では然るべきインクを使い、最低でもラテン語で書く予定だ。

「字は翻訳（リード・ランゲージ）でなければ読めぬが、意訳の通りならば他にソースが在るという事だ。この字といい、あの子には色々とある様だな。だが、あの子は未だ七歳の子供。子供を護るのは本来、我々大人の役目なのだからな」

「そうですね」

カリーヌ夫人も決意に満ちた瞳となり、確りと公爵の言葉に頷く。

「それにジョゼット君だ。虚無の担い手だという事は何処かの王族、しかも以前聴いた通りならトリステイン以外の王族という事か」

「アルビオンかガリア？　ロマリアの可能性は有りませんね。確か、ユート君が行った事のある国はガリアとアルビオンだけの筈ですし……」

「まあ、ジョゼット君を見る限り少なくとも、あの子は納得して此処に居るのだろうがな」

他国の王族を囲うなどと、とんでもない話だ。

ヴァリエール公爵もだが、カリーヌ夫人は護る決意を更に固める。

この決意が、この世界を護る一手となるか否か、それは未だ判らない。

然し、それは確実に一つの手となるのだろう。

オマケ……

カトレアの部屋にて。

「ちい姉様。わたし、今回はずっと空気だった気がするの」

「ごめんなさい、私の小さなルイズ。貴女が何を言っているのか解らないわ？」

「うん、良いの。ちい姉様はその侭のちい姉様で居て欲しいから」

「そう？」

「うん」

「ところで今日のご飯は美味しかったけど……？」

「火竜のむね肉だって」

「へぇ」

その夜ルイズは、１４歳にしては大きなカトレアの胸に抱かれて眠るのだった。

・

第２９話：十二宮騎士団（ゾディアック）（後書き）

・

公爵と夫人に少しだけ情報を開示しました。

十二宮騎士団（ゾディアック）のメンバーで、最後の２人はオリキャラです。

精霊術師の４人は誰にしようかな？

第３０話：プロジェクト・ニューウェーブ発動！（前書き）

.

申し訳ありませんが誤って手直し中に投稿したので、一時的に削除しました。

第３０話：プロジェクト・ニューウェーブ発動！

・

火竜の一部はカリーヌ夫人の“レンタル料”として、ヴァリエール公爵家に支払われる。

食品部分として肉、片側の足と手の爪、骨の一部に鱗を全体の三割。

マジックアイテムを造れる技能を、ヴァリエール公爵もカリーヌ夫人も持っていないが、少なくとも素材として高値で取引出来る。

ユートは火竜の鱗とルビーを使った【火精の護符】を幾つか造り、マジックアイテムとして売り出して荒稼ぎをしてみた。

一つ辺り、５００エキューで買い取って貰えた為に、造った三十個で１５０００エキューという大金を臨時に得る。

量産が利く割りに高値が付いたのは、今後も造ったら卸して欲しいという専属契約料も込みなのと、品質の良さ、似たり寄ったりのマジックアイテムは多々有れど、【火精の護符】は独自の技術で造られている為、真似出来ない事などが挙げられた。

火竜の鱗は兎も角、ルビーの大体の値段が１００エキュー前後だから、実際にはもう少し利益は少ない。

爪と牙と骨は魔法によって加工し、特殊な製法で剣と杖を造り出した。

剣は平民の傭兵が買って、杖は貴族が買う。

剣は竜の鱗さえ傷付けるという謳い文句、杖はパスを繋げ易いなどの効果がある為、可成りの高値だ。

また、火竜の血でルーンを刻んで効果を上げてある。

他にも様々なマジックアイテムを売り、純利益だけで１００００００エキュー以上を稼いだ。

子供の小遣いとしては大き過ぎる額だが、次の研究資金に結構使ってしまう。

そんな景気の良い話しは、黙っていてもいつの間にか広まるものなのか、あちこちで噂が絶えない。

それが、何処ぞのド腐れ坊主や莫迦貴族の耳に入るのも又、自然の流れだったのだろう。

きっと……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ユートが八歳に、ユーキが六歳になった頃、事態が大きく動く。

ユートはいつもの通りに、マジックアイテムを造っては売っていた。

それだけではなく、亜空間ポケットに神(なのは)が入れていた雑学に関する本の内容を基に、生活に便利な物も造って売っている。

この辺は二次創作ではもう鉄板だろうなと、メタな事をユートは思う。

水の精霊主ラクスの分体を連れて来て、庭に造っておいた池に放って以降、このド・オルニエールの水脈は豊富な水で溢れている。

その水と火の精霊主カルブンクルスの分体が創る地熱を利用し、銭湯を地域毎に建てて領民達の清潔意識を向上させた。

その為、石鹸やシャンプー等といったアイテムも結構需要が出てきたのだ。

領民の生活レベルの向上が更にド・オルニエール領の税収を引き上げ、子爵という爵位に合わないくらいにオガタ家の懐は潤った。

ハッキリ言ってしまえば、それなりに良い生活をしているド・オルニエールの民なら、そこら辺の貴族より潤いのある暮らしをしているくらいだ。

ユートとユーキも、欲を言えばもう少し領地が大きいと色々な事が出来るのになと、思っているくらい余裕のある生活をしている。

ほんの小さな事が生活レベルを向上させる例として、アスファルトでの舗装が意外な副次作用を齎した。

馬車への負担が減り、修理や買い替えが減ってくれたお陰で、別の事にお金を使える商人達がよく訪れるようになったのだ。

上がった収益の分、彼らは余所の領地より安値で商品を卸してくれ

る。

潤った領民がそれを買い、商人の落とす税金も差し引いてさえ増え、税収も更に上がってくれた。

こうなってくると、他の領を預かる貴族達が黙っていられなくなったらしい。

３０年前にそれなりの年齢で後継ぎの居なかった領主から、ド・オルニエールを受け継ぐ形で下賜されてから堅実で現実的な統治で、自領を栄えさせてきた敏腕領主のサリュート。

それが此処にきて更に辣腕を揮い、数年前から懐の潤いを見せるド・オルニエール領に、領地経営が上手くいってない所為で、贅沢な事が出来ない他所の貴族達がサリュートに対して嫉妬していた。

とはいえ、だから何をする訳でもなく、大して口出しも出来なかったが……

然し、此処で困った事態が起きていた。

隣の領地の民がいつの間にやら夜逃げして、居なくなってしまう事件が多発。

彼らがド・オルニエール領に逃げ込んでいた事が明らかになる。

夜逃げの理由なぞ、言わずもがな。

重たい税金を毟り取られ、毎日毎日の暮らしが大変なその領地。

しかもちょっとした事でも無礼討ちされたり、少女が拐われたり、それは典型的なトリステインでの出来事だった。

それだけなら夜逃げなど、簡単には起きない。

だが、隣のド・オルニエール領では、平民でも愉しく豊かに暮らしているという噂が上っていた。

彼らは今の生活を棄てる事に、何ら抵抗も忌避感も懐く事は無く、豊かな生活を求めて夜逃げをしたのだ。

領民が減れば税収も減り、生活レベルを落としたくはないから、更なる重税を掛ける事で夜逃げする領民が増える。

そんな困ったスパイラルが出来ていた。

そんな中で、サリュートが王宮へと召喚される。

召喚状の内容は……

『サリュートが隣の領地の領民を騙し、不当に取り上げた為に、税収が落ちてしまい困っている貴族が訴訟を起こした。査問会を開くから召喚する』

要約すると、そんな感じの内容の召喚状だった。

高等法院長の名前で出された召喚状だった為、無視を決め込む訳にもいかない。

サリュートは已むを得ず、王都トリスタニアに向かったのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【王宮】

「では、ド・オルニエール領主……サリュート・オガタ・ド・シュヴァリエ・ド・オルニエール子爵に対する査問会を始める！」

玉座にはトリステイン国王が座り、傍らには国政補佐の摂政官マザリーニ枢機卿が控えている。

そして、査問会を取り仕切るのは国王でも摂政官でもなく、高等法院を預かる長たるリッシュモンだ。

リッシュモンは醜い顔を、ニヤニヤと更に醜く表情を歪めて査問会の開始を滔々と宣言した。

恐らくは、この査問会にてサリュートを罪科で固め、領地と財産等を没収した際のどさくさで、自分がポケットに入れられる大金を夢想して、獲らぬ狸の皮算用でもしているのだろうと、サリュートは見て取る。

それは、この場に喚ばれて来ているヴァリエール公爵も同じ考えで、リッシュモンを苦々しい表情で睨み付けていた。

とはいえ、サリュートとしては折角の晴れ舞台を用意して貰ったのだ。

精々、踊って貰おうと考えている。

それは、事のあらましを知らされているヴァリエール公爵と国王も同じ思い。

サリュートの失墜を夢想している連中は、思いもよらないだろう。

自分達が仕掛けた出来レースの心算が、よもや早くからサリュート……

否、ユートが既に出来レースを仕掛けていたなど。

この流れは最初の一手。

「（さあて、始めるとするかな？　狸な息子が仕掛けた【プロジェクト・ニューウェーブ】を！）」

だからこそ、皮算用をしている貴族は気がつかない。

目の前のサリュートが浮かべる獰猛な笑みに。

「では、ド・オルニエール子爵……貴公に問いたい。貴公は隣の領地より平民共に噂をバラ撒き、誘導した上で自領に取り込んだとの疑いが掛かっている。これは真ですかな？」

「覚えが御座いませぬな」

リッシュモンの質問を聴いて、即座に答える。

「う、嘘を吐くな！　貴様が平民共に変な噂をバラ撒いたのだろう

が！」

「ほう？　変な噂とは？」

「自分の領地に来れば良い暮らしが出来るとか、そういう噂だっ！」

「フム、仮にそうだったとしても嘘を並べ立てた訳では無い事になりますな」

「な、なにぃ？」

「ド・フォート伯爵領での暮らしがどうかは問いますまい。ですが、我がド・オルニエール領の領民は笑顔で暮らしています。職に溢れる事も無く、食い詰める者は居ない。少なくとも、そんな暮らしを我が領民には保証をしていますよ」

ド・フォート伯爵の糾弾を受けても、サリュートは全く動じる事も無く、坦々と答えを紡ぐ。

どんな言い掛かりを付けて来るかは、事前に把握出来ているのだから当然だ。

しかも、武力で貴族の地位を世襲してきたオガタ家の当主、高が地方領主に過ぎないド・フォート伯爵などでは役者からして違う。

あのレベルでは恫喝にすらならない。

「伯爵がもう少し彼らに対し、心を砕いていれば逃げはしなかったのではないですかな？　尤も私はそんな噂などバラ撒いてはいませんがな」

「心を砕くぅ？　平民など家畜ではないか！　我々、貴族の為に馬車馬の如く働いて、供物を捧げておれば良いのだ！」

この台詞には、ヴァリエール公爵も国王も眉根を顰めている。

サリュートやユートの影響だろうか、公爵にせよ国王にせよだいぶ心境に変化が有ったようだ。

「領民は我々、貴族の生活を支えてくれております。なれば、我々は領民の生活を護る義務が有ります」

民無き国は国に非ず。

王しか存在しなければ、王は日々を暮らす事も侭ならない。

「護るだと？　家畜などは放っておけば勝手に増えるものだ！　わざわざ貴族たるワシらが何故そんな事をせねばならぬのだ！」

「成る程、ド・フォート領では領民の生活を保証しませぬか」

「奴らはワシに奉仕しておれば良いのだ！」

「領民達とて、自身を護る権利が有りましょう。我が領内に逃げ込んで来たは、ド・オルニエール領が住み易いからに他ならない……逃げられたくないのなら、もう少し考えるべきではありませんかな？」

「だ、黙れ！　家畜に考える頭など要らぬわ！」

査問会を開いて僅か１０分程度であるが、リッシュモンは既にド・フォート伯爵を見限っていた。

最初こそは、この訴訟からド・オルニエールを切り崩して甘い汁を吸えるかとも思ったが、自分をすっかり無視してド・フォート伯爵はサリュートの挑発に乗ってしまい、要らない事を話し過ぎている。

先程から、ド・フォート伯爵が平民を悪く言う度に、国王の顔が歪みまくっているのだ。

明らかに不快感を感じていると判る。

この辺でお開きにした方が良さそうだと、リッシュモンは判断した。

「ド・オルニエール子爵、貴公は噂を流した覚えなど無いと仰るか？」

「勿論」

「では何故、ド・フォート領の平民が貴公の領地へと夜逃げしたのかな？」

事の起こりは、領民の夜逃げに偶然気が付いたとある兵士が、ド・オルニエール領に逃げ込んだのを目撃した事にある。

それ故の査問会だった。

「とはいえ、人の口に戸は建てられませぬ。我が領内を知る商人辺りから話が拡がったとしても、止めようがありませんな」

わざわざ、査問会などと言い出すからどんな切り札が有るのかと思えば、何の事は無い。

只の嫌がらせだったという訳だ。

ド・フォート伯爵が取り分け無能だった。

今回は、それが露呈しただけの集会となってしまう。

もうこれ以上、話しを聞く価値も無いとリッシュモンは思い、閉会を宣言して終わらせようと考える。

「では、ド・オルニエール子爵に意図的な民間への噂バラ撒きは無かったとし、此処に閉会を宣言する」

「そ、そんな！」

「異議申し立てがあるならば、書面にて高等法院へと申し出る様に！」

こうして貴族達は解散してしまった。

ド・フォート伯爵は、睨み付ける様にサリュートを見ると、ドスドスと肩を怒らせながら出て行く。

正しく茶番劇でしかなかった査問会だったが、貴族達の反応を観る事が出来て、実に有意義たとサリュートは思った。

ユートの入れ知恵も多分に有ったが……

「これで大体判ったな」

「御意」

国王の言葉に、サリュートが応える。

査問会の中、ド・フォート伯爵の意見に賛同を示した貴族と、サリュートの意見に賛同を見せた貴族。

それがハッキリと分かれたのだ。

残念ながら、サリュートと同じ意見は極端に少ない。

それがトリステイン王国の現実。

まあ、然し……

「種は蒔きました。後の事は息子が動いて何とかするでしょう」

「そうだな。やはり羨ましいぞサリュートよ」

ヴァリエール公爵は、自身の後継者が順調に育っているサリュートを、羨望の眼差しで見ていた。

娘達に何の不満も無いが、後継者を育てる事を急務とする貴族としては、やはり羨ましいのだ。

男の子も欲しかったというのが、ヴァリエール公爵の偽らざる本心だった。

「そういう意味では余もだな。アンリエッタを後継者とするは、不安が尽きぬ」

「そ、そうですか」

ヤバい。

ユートは狙われている。

主に後継者的な意味で……

マザリーニ枢機卿は、一度しか会ってはいないが利発そうな彼の少年に、嘆息と共に同情した。

「アンリエッタの王配という訳にはいかぬか？」

「嫡男ですぞ？　それなら我が娘の何れかと結婚させれば……」

「いやいや、然し！」

好き勝手に議論を始めてしまった父親達に、どうしたものかとキリキリ痛む胃を押さえながら、マザリーニ枢機卿は再び溜息を吐く。

「何にしても、種は確かに蒔かれましたな」

今回のプロジェクトは王宮にも損は無く、マザリーニ枢機卿も乗るべきだとそう考えた。

自分自身が、ブリミル教の教えを伝える枢機卿でありながら、トリステイン王国の為、あのプロジェクトに賛同したのだ。

今更、後には引けない。

「ハァー」

マザリーニ枢機卿は三度、溜息を吐いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

サリュートが王宮で査問会に出ていた頃、ユートはと云えば……

カン、カン、カン、カン！

何かを叩く甲高い音が工房に響いている。

ユートが槌や鑿などの大工道具らしき物で、白い塊を叩いて伸ばして形を整えていた。

魔力を通したり、様々な技法を使っているのは判るのだが、マジックアイテムは門外漢であるユーキには、よく判らない。

今回、ユートが造っているマジックアイテムは、科学の介在する余地が全くと言ってもいいくらい無い為、ユーキには観ている事しか出来なかった。

まあ、これもユーキが我が儘を言った所為で、少し悪い気がする。

ユートもユーキと同じで、研究や開発にのめり込むと周りが見えな

くなる傾向があった。

これを造る前、魔法の本や漫画を読んで勉強したら、今度は工房に篭りこうして造り始めてしまったのだ。

もうだいぶ形も出来ているから、完成まであと少しといった処か……

「兄貴、根を詰め過ぎじゃないかな？」

「大丈夫」

「（う～ん。自分で言った手前、止めろとは言い辛いよね）」

ユーキは思い出す。

流石にアホな事を言ってしまったと、今は後悔しているあの時の事を。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

それは一週間前。

十二宮騎士団（ゾディアック）を設立しようという話しを進めていたら、ユーキがふと思い付いた事を言ってみた事に始まる。

「ねぇ、兄貴。折角公爵様が後ろ楯になってくれるって言ってくれたし、騎士団のメンバーをどうするのか本格的に決めない？」

「ああ、まあね」

乗り気とは言えない、曖昧な返事。

「ひょっとして兄貴はさ、騎士団を設立するのは嫌なのかな？　関係の無い人を捲き込みたく無いって？」

「邪神との戦いは、ハルケギニア全体の問題なんだ。究極的には無関係な人間は居ないさ。たださ、流石に十二宮騎士団（ゾディアック）って、ゴッコ遊びっぽいのは……」

「別に原作のお遊び騎士隊よりはマシだろ？」

原作のお遊び騎士隊とは、ギーシュを隊長としたアレの事だ。

特に虎街道での茶番劇は、他人事ながらも間抜けとしか思えなかった。

とはいえ、アレと一緒にされたくはない。

一応、真面目に考えているのだ……半分は。

前世で、橋本祐希は身体が弱かった。

引き篭りに近い生活だったのは、別に人間嫌いだったり社交性が欠如していたりする訳では無い。

幼い頃は、肉体的に脆弱で普通の子供の様に外で遊べなかったのだ。

長じるに従って、段々と丈夫になっていたが、子供の頃にやりたく

てもやれなかった事があった。

それが所謂、ゴッコ遊び。

誰しも、一度はやった事があるのではなかろうか？

カメハメ破の真似、ペガサス流星拳の真似、戦隊だったり仮面ライダーだったりの真似を。

それには限らず、スポーツなら有名スポーツ選手の、或いはアイドルや声優などの真似……

例えば、成り切りグッズの変身ベルトを腰に着けて、叫んだだろう……『変身』……と。

どんな事も模倣から始まるなら、必ず何かしら真似をしていた筈だ。

橋本祐希は本人の意思とは裏腹に、そんなゴッコ遊びが出来なかった。

まあ、それでも好きな本を読んだり、アニメに嵌まったり、発明をしたり、彼女とイチャイチャしたりと、割かし充実した人生でもあったのだが……

あの莫迦な実験で死んだのだって、肉体的に弱かった事も無関係ではなかった。

そんなユーキだから、少しはハメを外したいと思い、あんな提案をしたのだ。

それに考え無しで言った訳でもない。

「兄貴は全部を1人でやれると思ってる？　仲間なんて要らない？」

「そうは言わないよ」

「だったら、契約者（コントラクター）の兄貴を通じて、精霊王の力を誰かに与えて最低限4人、精霊術師を選んでおこうよ」

総合して全ての精霊の力を使えるユートだが、一度に使える力など高が知れているだろう。

ならば、他にも精霊術師を置けば負担は減るし、使いたい力が二つ以上有っても役に立つ。

「そうだな。で、候補は？　ユーキの事だから目星は付けてるんだろ？」

最近、ユーキのポジションが【我が儘を言ってお兄ちゃんを困らせる義妹】に＋して、何故か【お兄ちゃんのお嫁さんは義妹が選ぶんだからね】的なモノが加わり、更に【お兄ちゃんは考えなくていいの、只感じていてね】なモノが増えていたりする。

そんな訳で、ユーキは参謀ポジションにもいつの間にか収まっていた。

「鉄板だと水はモンモン、土は薔薇、風はお姉ちゃんで火が淫乱露出狂かな」

「待て、激しく待てっ！　最後の火だけ悪意に満ちてなかったか？」

「ん？　何の事？」

義妹様のハイライトが消えている。

直に会った事もないのに、ライトノベルの知識だけでアレなんて、何かしら気に入らないキャラだったのだろうか？　なんて、ユートは大粒の汗を額に流しつつ“火の彼女”を思い出す。

少し癖のあるロングな赤毛であり、現在の血縁的には双子の姉と親友の立場で、数人の彼氏持ちだった筈が才人に鞍替え、ルイズとは家系的な意味でライバル、スタイルは良い。

「（後は、肌の色が褐色。露出狂とはいかないまでも薄着の傾向アリ……と）」

悪意を持つ意味がやっぱり解らなかった。

「うん、やっぱ名前と系統だけはハッキリしてるモブっ娘でいこうか。主にボクの幸せの為に」

「欲望が駄々漏れ！？」

彼女が気に入らない理由は其処に有るらしい。

「他にも候補が居ればね、捜してみないと……」

ユーキは邪気の無い笑顔で言ったものだった。

それから少し時間が経ち、漸く完成するマジックアイテム。

「色も【錬成】で着けた。各部のマインド・トリガーシステムも正常、上手くいったとは思うけどな」

それは、女性を模したメタリックピンク色の、美しい女性が二本の鎖で束縛された様なオブジェ。

「ところで、誰が使うんだ？　コレを」

元のネタは、女神を護りし心優しく地上で最も純粋な少年を鎧い、世界を守護した聖なる衣……

「ボクか、シエスタかな」

「へ？　わ、わたしですかぁぁ？」

シエスタは吃驚する。

完成したと聞き見に来ていたのだが真逆、自分がソレを使う候補だとは思いもよらなかった。

シエスタは只、完成を心待ちにして静かに控えていただけなのに。

「シエスタが使いたいならボクは遠慮するよ。一応、ボクには別に造って貰った武器が有るしね？」

「マインド・トリガーシステムを応用して、登録した人間の精神力に感応して、自動的にオブジェ形態から分離するよ。登録方法は、最初に血液を付ける事」

ユートの説明を受け、チラリとシエスタがユーキを見ると、にこやかに笑顔を浮かべている。

躊躇いはあるが、シエスタはソッと親指をユートに差し出す。

「？」

「ユート様の歯で、わたしに傷を付けて下さい……」

真っ赤な顔で言うシエスタを見て、ユートまで思わず真っ赤になった。

「はいはい、御馳走様」

パンパンと手を打って2人を促すユーキ。

更に赤くなったシエスタとユートだったが、ユートはソッと手を取ると親指に口を近付けて歯を立てた。

「ん……、痛っ！」

痛みに顔を顰め、然し何処か陶酔とした表情となる。

ツツーッ……と、赤い血が親指を伝い流れた。

シエスタがその血をオブジェへと着けると、光を放ってオブジェが分離。

分離されたパーツが、ニーレッグに、フットに、アームに、ボディが装着され、最後にヘッドギアが……

それは……アンドロメダの最終青銅聖衣を象るモノ。

マジックアイテム【聖衣】だった。

.

第３０話：プロジェクト・ニューウェーブ発動！（後書き）

・

シエスタにも何かしら力を……と思ったら、やってしまいました。

【聖衣】

形は様々。シエスタ用にはアンドロメダ星座の最終青銅聖衣の形。

主な材質は火竜の骨。

一部に風石などの石を仕込んである。

硬度維持の為に固定化を確り掛けてある。

魔法を応用し、聖衣の特殊能力を可成り再現。

例え……鎖の部分を登録者以外が触れた場合、ライトニング・クラウド級の電撃が流れる。

普段は目立つ為、別の物に亜空間ポケットを応用して収納している。

魔法が使えなくても使用は可能。

一応、聖衣櫃も存在するが使われない。

聖闘士の技もある程度なら魔法で再現可能。

決闘フラグが折れました。

第３１話：異端審問（前書き）

・

プロジェクト・ニューウェーブの〆です。

第３１話：異端審問

・

サリュートが査問会を潜り抜け、ユートが【聖衣】を造り出して暫くが経つ。

それは突然の事だった。

羨望と嫉妬と欲望が入り交じり、世界の醜悪さを体現した事件の始まりと終息。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「星雲鎖ッ（ネビュラチェーン）！」

シエスタは聖衣を装着した状態で、ユートがクリエイト・ゴーレムで造り出した土人形（アース・ゴーレム）へと鎖を投げ付ける。

角鎖（スクエアチェーン）がゴーレムを襲い、上空から楕円を描いてゴーレムの肩を砕いた。

然し、狙いが背中だった事を考えれば外れだろう。

「また外れか～」

「あう……ユート様、申し訳ありません」

シュンとなるシエスタ。

そんなシエスタの頭に手を置き、ユートは微笑む。

「星雲鎖は幾つかの魔法を秘めている。登録者以外が不用意に触れたら発動するライトニングクラウドに、自在に動かす念力、自動的に登録者を護るパッシブ・ディフェンス。今までに魔法に触れていなかったんだし、少しずつ頑張っていけば良いよ」

「は、はい！」

表情が感極まったシエスタを見て、ユーキはボソリと呟く。

「誑し……」

「何か言ったか？」

「べ～つに～、お兄様♪　こっちもテレポートを応用した魔法を籠めてるしさ、早く使い熟してよね」

「はい、ユーキ様！」

実際、ほぼ完璧に星雲鎖（ネビュラチェーン）を再現するのが、一番難しかったのだ。

名前こそ無いが、鎖の自己修復も出来る。

新しくコモン・マジックの受動防御（パッシブディフェンス）を開発してまで、ユートは完成度を上げた。

更に、次元すら越えて狙った相手を捜し出す機能の為に、ユーキの虚無魔法であるテレポートまで籠めているくらいだ。

ド・オルニエールの地下とあーぱー姫の部屋を繋いだあの姿見が、空間を渡れる虚無のマジックアイテムだというなら、可能であると思っていた。

問題は複数の魔法を、対衝突（コンフリクト）する事無く籠める方法。

これが一番の難物だった。

「じゃ、次は氷の矢辺り（フリーズ・アロー）を防ぐ実験だね」

ユーキの言うカリキュラムに従い、ユートとシエスタは実戦証明試験を続ける。

「あのさ、聖衣の部分に当たればダメージも無い筈だから……」

「大丈夫ですよ。わたしはユート様を信じてます」

ドクン！　ユーキの心臓が早鐘を打つ。

「（シエスタ、兄貴を信頼してるんだな。ボクは……前世で翔子の信頼を裏切ってしまった）」

シエスタの、あの眩しいばかりの信頼感は前世の恋人だった高倉翔子と重なる。

「ユーキ、どうした？」

「ん！　あ、別に何でもないよ。じゃあ始めて」

ユートの呼び掛けで我に返り、試験の開始を告げた。

「ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ」

唱えるのはジャベリンに近いが若干、弱めの魔法。

『空と大地を渡りし存在（モノ）よ、優しき流れ揺蕩う水よ……』

スレイヤーズ系の詠唱を、ユートは頭の中で紡ぐ。

「氷の矢（フリーズ・アロー）ッ！」

力在る言葉に従い、氷で出来た矢がシエスタに向かって飛ぶ。

シエスタは聖衣が無ければ只の平民。

自身にむかってくる魔法は恐怖の対象でしかない。

それでも！

「（ユート様を信じてますから！）　円鎖（サークルチェーン）、ローリング・ディフェンスッ！」

左腕の円鎖（サークルチェーン）が瞬……元い、シエスタの全身を覆うよう高速で回転し、防御した。

ガキンッ！

氷の矢（フリーズ・アロー）は鎖に当たった途端、弾かれて砕け散る。

「はい、そこでサンダーウェーブ！」

「はいっ！　って、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

ユーキの言葉に従い、本来の予定に無い攻撃を放ってしまう。

右腕の角鎖（スクエアチェーン）が雷の軌跡の如く、ユートへと襲い掛かった。

「っ！　世界の四源の縁に従い、流れ行く存在の力を与えよ、ラグース・ハガラーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウインデッ！」

マントの留め金にしている呪符（タリスマン）に填め込まれた石、水霊石が蒼く輝きを放つとユートに力を与えたと同時に、ユートは急いでルーンを唱える。

水水水風風の、オリジナルのペンタゴンスペル……

「凍結領域（フリーズ・テリトリー）ッ！」

アイスウォールと呼ばれる魔法が在るが、それの強化版とも云える魔法だ。

「っぶな～！」

何しろ土人形とはいえど、人間より遥かに丈夫に出来ているモノを砕ける鎖だ。

生身で喰らえば、ユートといえど致命的なダメージを受けるだろう。

「うわあ、精霊涙の呪符（エレメンタル・テタリスマン）の効果は凄いものだね」

しれっと、そんな事を言うユーキ。

今は未だ、一つ一つの増幅しか出来ない呪符（タリスマン）だが、あと一つを手に入れたなら全体的に魔法のランクを上げる増幅装置（ブースター）となる。

ユートは水石などで、既に増幅の呪符（タリスマン）を造っているがあれは精々、各系統の威力を倍加するだけのマジックアイテムでしかなった。

然し、ユートが使う精霊涙の呪符（エレメンタル・テタリスマン）は、系統のランクを一つ丸々引き上げてくれる。

つまり、水のスクウェアであれば水のペンタゴンに擬似的ではあるが、成ったのも同然という事だ。

水と土はよく使っていた為か、既にスクウェアにまで押し上げられているユートだからこそ、可能となった技だった。

本当なら、水のラインと風のラインでスクウェアスペルにしかならない処、精霊涙（エレメンタル・ティア）で水を一つ足して水のトライアングルと風のラインを使い、ペンタゴンスペルを発動した訳だ。

ただ、弊害もある。

元々、ユートはスクウェアまでしか使えないのに無理矢理ランクを上げていたのだ、当然ながら反動で精神力が余計に減るのだ。

「ハァ、ハァ、ハァ……、つ、疲れた～」

慣れるまでは大変そうだ。

「お兄様、次のネタ武器は何にする？」

「まだ造らせる気か！？」

「今度は適度に休憩を入れてぇ、ゆっくりで良いからさ。エクスカリバーとか」

ユーキの目がキラキラと輝いている。

「ええ加減にせんか！」

「おぶらっ！？」

ユートのハリセンがユーキのド頭を打ったという。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

平和にユート達が魔法の練習や、マジックアイテムの試験をしていた頃、破滅の足音が近付いていた。

それが誰にとっての破滅かはこの時、誰にも判らなかった。

誰にも……

そしてその時は、唐突に訪れた。

未だに、そうとは知らないユートはユーキとシエスタと共に、和気藹々な雰囲気を醸し出している。

「お兄様、精神的な疲れは取れた？」

「元々、スクウェア並でしかないのに増幅（ブースト）して、ペンタゴンスペルを使ったからね。反動は覚悟してたよ。ま、少し休んだから大丈夫」

「そっか。でもこれじゃあ魔血玉（デモン・ブラッド）に比べて使えない？」

スレイヤーズに於いては、魔血玉（デモン・ブラッド）とは魔王の欠片とすら呼ばれており、それら一つ一つに魔王の御名を冠する。

その実態は、魔王の言によれば【完全なる賢者の石】であり、即ちそれは強力無比な魔力増幅器。

その代用としたのが精霊王から与えられた精霊王石、現在は火霊石、水霊石、風霊石の三つを呪符（タリスマン）として加工し、マントの留め金とベルトのバックル、右手首のリストバンドとしていた。

「残った土霊石を手に入れれば、全部が揃って本来の詠唱を唱える事でリスク無しの増幅が可能になる」

「効果は魔法のランク上昇……か。確かに、夢の様なアイテムだね」

ユートの説明を聴き、感心するユーキ。

「でも、ペンタゴンスペルが可能ならアレも出来るんだよね？」

「多分ね」

「丁度良いし、やって見せてよ♪」

ユートは頷くと、未だ残っていたゴーレムに向かって呪を唱えた。

「世界の四源の縁に従い、流れ行く存在（もの）の力を与えよ……」

マントの留め金になっている水霊石が蒼く輝き、水の力を増幅する。

ルーンを用いない、簡単な呪文。

更にルーンを口語で刻み、頭の内でスレイヤーズ系の詠唱を浮かべていく。

『蒼穹よりも蒼き存在、海の深きに眠る王。汝の昏き凍れる刃で、我が前に在る敵を撃て……』

これは水水水水風で放てるペンタゴンスペル。

力在る言葉を紡ぐ。

「偽・海王滅殺斬（ダルフ・ストラッシュ）ッ！」

【海王滅殺斬】

海王＝ダルフィンの力を借りて繰り出す術。達人の繰り出す槍の一撃の如く、超高速の衝撃波が対象を粉々に粉砕する。

高水圧に凝縮された水が、風のエネルギーで加速を促され、凄まじ

い水の衝撃となってゴーレムに着弾し、粉々に吹き飛ばした。

文字通り粉々で、欠片すら残らない。

流石はペンタゴン、威力が半端なかった。

いわんや、人間が相手なら数人は纏めて粉々だろう。

この世界に、海王ダルフィン（ディープシー）は存在しないが故に、その力を借りた術など使えない。

そこでユートは、純粋なる精神体への対効果を度外視して、系統魔法でそれっぽく調節した魔法を開発。

練習してみた。

飽く迄も、それっぽい魔法でしかないから【偽】と付いている訳だ。

「火竜でも案外、一撃で潰せそうだな」

あの時は余裕も無かった上に、少し欲を掻いて死体をマジックアイテムの素材として手に入れたかった為、使う事も無かったが使えば一撃だっただろう。

尤も、万が一にも外したり斃し損ねたら、返り討ちに遭いマミられていたかも知れない、ガブリと頭から。

やはり疲れる為、座り込んでしまったユート。

シエスタから水の入っているグラスを受け取り、一気に煽った。

「お身体は大丈夫ですか、ユート様？」

「ああ、ありがとう」

割りと良い雰囲気な処へ、メイド服を着た同い年くらいの少女が駆けて来る。

「ユート様ッ！」

「どうした、イリス？」

少女の名前はイリス。

セント・マルガリタ修道院に住んでいた訳ありな少女の１人で、現在はユートに仕えるメイド。

肩まで伸びて、フワフワとしたハニーブロンドの髪、碧い瞳の少女は息を切らせながら傍まで来た。

「ブリミル教の司教らしき男が、この邸に向かっていると報告がっ！」

「っ！　遂に来たか……」

イリスの報告に、瞳を細めるユート。

「どうしましょう？」

「父上は？」

「サリュート様は、未だお帰りにはなっていません」

「判った。僕が対応するからみんなは出て来ないようにしてくれ！」

「は、はい！」

ユートは急ぎ部屋に戻り、服を貴族としてのモノへと着替える。

そして、階下に降りて司教が来るのをを待った。

やはり緊張はする。

失敗は許されない。

手に汗を握り、ユートは扉の前に陣取っている。

２０分は経っただろうか？　件の司教が取り巻きだと思われる神官兵を連れて、邸に現れた。

マザリーニ枢機卿と比べ、恰幅がよくて顔も嫌らしいまでに歪んでいる。

大抵、建前では清貧を尊ぶ宗教団体だが、この男は見るからに破戒坊主で、金糸をタップリと使った豪奢な服を着ていた。

一応、司教ならそれなりの身分な訳だから、多少の見栄は必要だと思うが、明らかに見栄を逸脱している。

ブリミル教の戒律は知らないが、恐らくは大貴族並の豪華な食事を

貪り、酒を浴びる程に呑み、何人もの女を抱いているのだろう。

少なくとも、まともな坊主には見えなかった。

何しろ、乗ってきた馬車がそこら辺の貴族のモノより豪華絢爛なのだから。

「これはロマリア教皇庁の司教様ですか？」

「そうだ。ド・オルニエール子爵は居るか？」

中級に届かぬ新興の子爵家とはいえ、随分な態度を採る司教だ。

確かにロマリア皇国は独立した国として認められているし、そこの司教は謂わばトリステインでいう処の、貴族みたいなものだろう。

だが、この司教の態度はあり得ない。

仮にこの司教がサリュートより上級者だとしてもだ、其処にはやはり礼というものが在るだろう。

彼の司教にはそれが無い。

正に『俺は偉い、お辞儀をしろ！』と云わんばかりの態度だ。

「父上は現在、王宮に上がっています。母上も仕事で手が放せません。なので、息子である僕がお話しを聴かせて頂きます」

「ふん。ならば……」

聴くにも耐えないノイズ。

要約すれば『最近稼いでいるじゃないか、ちょっと献金（賄賂）を貰おうか』という、恥知らずな要求。

しかも、十万エキューという法外な献金（賄賂）を要求してきたのだ。

払えない額ではない。

だが此処で献金（賄賂）を払うという事は、これからも払い続けると言うのと変わらない。

元々、ド・オルニエールは寄付の額が少なく、三年前に修道院を建てたのが一番の献金だった。

然し、幾らブリミル教認可の修道院とはいえ、其処への献金を奪う事は修道院の者を餓死させる行為。

故にそれが出来なかった。

だからこそ、この司教は直接集り……否、集金に来たという訳だ。

そして、本国に挙げる何割かをポケットに入れる心算なのだろう。

ユートの答えは……

「お断りします。既に我が領内では修道院に寄付を寄せており、ある程度は皇国にも同様にしている筈……これ以上の寄付をする義務など当家には有りません」

「な、貴様！　私に逆らう事はロマリア皇国に弓引くも同然だぞ？」

「お断りします！」

「貴様ぁ、餓鬼だと思えば付け上がるか？　貴様ら、こいつを異端だと認定だ。引っ立てろ！」

「「はっ！」」

ユートは特に抵抗する事もなく、引き立てられた。

身柄を拘束され、ロマリア本国に移送される。

司教も神官兵も気が付いていなかった。

引き立てられているユートの口角が、何故か吊り上がっていた事に。

この事は直ぐ様、トリステインの王宮に居たサリュートへと報告された。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ユートがロマリアへ連行されてから、凡そ二週間。

その間に、今回の事は各国に伝えられて王族さえ観ている中、大々的に異端審問を行う心算だった。

ロマリア皇国の威信を、改めて知らしめる為に。

ロマリア皇国内の広場に、各国の王族や貴族が詰め寄せている。

ただ、流石に子供に見せるものではないと、小さな子供は留守番していた。

クルデンフォルフ大公国ではベアトリス、トリステインではアンリエッタという感じだ。

広場では大きな釜に水が張られ、下から火を掛けられてグツグツと煮えていた。

昔から異端審問で一番多く用いられてきた手法、釜茹での為の物だ。

ユートが広場に引き立てられて、異端審問が始まる。

現在のロマリア教皇が現れて、一段高い所でユートへの罪状を言い渡す。

その内容は殆んど言い掛かりでしかない。

弁護士も検察官も居ない。

お前はこういう罪を犯したのだとそれを言い放って、異端である証明として煮え滾る湯に落とす。

この湯は聖別された水を、聖火で煮ている。

異端審問とは、この湯の中に審問された者を落とし、死ねば異端者、

生き残れば敬虔なブリミル教信者だとしていた。
勿論、こんなインチキ聖別ではどんな敬虔な信徒であろうが、入れば死ぬ。
これは事実上の処刑でしかない。
罪状を言い渡され、最後に教皇が訊ねる。
「さて、何か言いたい事はあるか？」
「それでは貴方に訊ねる」
「ふむ、何かな？」
ユートはわざわざ風の精霊に頼んで、これからの会話をこのロマリア皇国全体に届けて貰う。
「僕を異端だと言いますが教皇、なら貴方は間違いなく敬虔なるブリミル教信者なのですか？」
辺りがざわめく。
よりによって、ロマリアの最高権力者たる教皇に向かって言う言葉ではない。
「勿論ですよ」
「そうですか。実は僕も、ブリミルを偉人であると考えています」

「ほう？」

嘘ではない。

魔法という技術を確立した技術者としてだが。

「だから、もしも僕がそれを証明出来たなら、貴方にも身の証しを立てて頂きたい。勿論、他の高位聖職者達もです」

周囲が更にざわめく。

要は、自分が釜茹でにされて生き残ったら、教皇達も審問されるべきだと言っているのだから。

「い、良いでしょう」

教皇は多少引き吊ったが、了承した。

何しろ、聖別など真っ赤な嘘でしかない。

本当にユートが敬虔な信徒だとしても、生き残るなど有り得ないのだから。

そんな事も判らず、愚かな餓鬼だと思いながら審問を開始した。

煮え滾る湯の上にロープで吊るされて、そのロープを異端審問官が切る。

ボチャンッ！

呆気なく……

実に呆気なく、ユートは釜の中の湯へと落ちた。

教皇自らが審問した異例の異端審問。

誰しも思う、終わったと。

沸き立つ貴族達も居る。

それは、ド・オルニエールに嫉妬していた貴族。

サリュートに煮え湯を飲まされたド・フォート伯爵も居た。

その貴族達は心中を吐露している。

ざまあみろ……と。

異端認定をされれば、家族も同罪とされるからだ。

だが、期待は裏切られた。

「ふう……」

全員、沸き立つ貴族だけでなく教皇達も固まる。

「ば、莫迦な!?」

湯の中のユートが、まるで良い湯加減風呂にでも入っているかの如く、溜息を吐いていたのだから、それも当然だろう。

アニメの第二期やライトノベルの12巻、ティファニアに対してベアトリスが行った異端審問ゴッコ。

異端審問の多くが、その際に採られた釜茹でが主流だという事は、異端審問に関する本を読み漁り、知っていた。

飽く迄も体裁は審問。

故に、死ねば異端者という乱暴な出来レース裁判だ。

殺し方は有罪か無罪か判る手法でなくてはならない。

教皇達にとっての不幸は、ユートが既に異端審問には対処済みだった事だ。

水と火の精霊王との契約に成功した契約者（コントラクター）たるユートには、水と火の領分の湯でダメージは受けない。

水と火の精霊の加護を受けているが故に。

元より、献金（賄賂）を断られるのは判っていた。

だから直ぐに異端審問が出来るよう、準備をしていたのだ。

審問後、家族に浄財を求めればポケットが潤う。

その程度の認識で。

異端者の家族が助かるには浄財を支払うしかない。

尤も、生き残っても異端者の家族として、一生後ろ指を指され続けるだろうが。

そう……

そう思っていたのだ。

つい先程までは。

「さてと、これで証明された訳だよね？　僕の罪状が濡れ衣だって……さ」

笑っている。

子供とは思えない程、冷酷な笑みを浮かべている。

この時になって漸く教皇も気が付いた。

嵌められたのは自分だと。

餓鬼であるが故の言葉ではなく、明確に生き残れると理解の上でのあの言葉だったのだと、今更ながら気付かされた。

各国の王族の前で、あんな言質を取ったのだと。

ユートは釜から悠々と出ると、教皇に顔を向ける。

「教皇、僕は敬虔なる信徒だと証明された。ならば、逆説的に審問

した人間こそが異端だという事だ」

異端として審問を受けた者が生き残り無罪となったならば、審問した方が間違っていた事になる。

「さあ、釜に入って頂こうか？　な～に、真にブリミル教の信徒であれば死にはしないと、僕が証明しているんだ。貴方はハッキリと言ったじゃないイカ、自分は敬虔なるブリミル教の信者だと」

「ヒッ！」

息を呑んで逃げ出そうと動く教皇。

「ユーキ！」

「アトラック＝ナチャ！」

光の網が教皇を捕らえて、広場へと引き摺り降ろす。

「な、貴様は？」

「僕はユーキ。ユート・オガタ・ド・オルニエールの義妹（いもうと）だよ」

「さて、教皇？」

ユートは念力（フォース）で教皇を浮かべた。

「な、何をする？　わ、私はロマリア皇国の教皇なのだぞ？　私にこの様な事をして、只で済むと……」

「ほ～ら、逝っけ～っ！」

「や、止めてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

ユートは情け容赦なく教皇を釜の中へ放り投げた。

ボチャンッ！

「ギャアアア

ちに逮捕。

更に、呼応してアルビオンとガリアとゲルマニアは、異端審問官や司教、枢機卿の何人かを捕らえる。

その後、煮え滾る釜に入れられて果てた。

トリステインでは、ユートの無罪を証明するべきだという、ヴァリエール公爵を中心とする一派と、有罪だとする一派で議会が分かれていたのだ。

逮捕されたのは、嬉々としてユートを異端だと言っていた貴族だった。

こうして、ロマリア皇国の粛清劇は終わりを告げる。

トリステインの空いた領地の内、ド・フォート領に関しては隣接するド・オルニエールに併合された。

これは一部の貴族により、誤ってユートが異端審問に掛けられた事への賠償代わりとして、トリステイン王の名の下にユート個人へと下賜されたものだ。

【プロジェクト・ニューウェーブ】

それは、ユートが提唱したトリステインの膿を出してしまい、同時にロマリアの権威を失墜させる計画。

この事件以降、ロマリアの発言力は極端に低下した。

そして、新しい教皇となったのは次期教皇として名が挙がっていたマザリーニ枢機卿が就く。

これもマザリーニ枢機卿と話し合い、決め手いた事の一つ。

マザリーニ枢機卿の後釜には、ヴァリエール公爵が就く事になっている。

トリステインをヴァリエール公爵が、ロマリア皇国をマザリーニ枢機卿が抑えて新たな波を作り出す。

これにより、ユートの計画は成功を納めるのだった。

.

第３１話：異端審問（後書き）

・

そんな簡単にいくものでもないけど、ユートが湯の中に落ちて生きていた事に関してはスルーされてます。

ゲルマニア以外は、計画を事前に知ってたり……

第３２話：砂漠（サハラ）に（前書き）

・

ユートは九歳に……

一年間は新領地の平定に動いていました。

第３２話：砂漠（サハラ）に

・

隣接するド・フォート領を国王より下賜されたユートは早速、領内の改革に乗り出す……筈だった。

然し、それは少し先の話しになる。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「ユート様っ！」

夜中、叫び声を上げて起き上がったユートを、ギュッと抱き締めた。

ずっと部屋で待機していたのだ。

ここ数日というもの、毎夜毎夜がこの調子。

悪夢に魘され、悲鳴と共に目を覚まして震える。

ガタガタと震えながら胸に飛び込むユートが、不謹慎だと思いつつも可愛いと感じてしまうシエスタ。

これというのも数日前の事だが、ロマリア皇国の粛清劇でユートが初めて人間を殺したのが原因だ。

ロマリア教皇（シエスタは名前を知らない。憐れ）から異端審問を直接受けて、ユートは掟破りの逆異端審問で釜茹でにしてしまう。

何しろ、１００℃に届く様な温度の湯に落ちたのだ。

人間の身体は、そんな温度に耐えられるようには出来ていない。

数分も煮られれば死ぬ。

煮ても焼いても食えはしないだろうが。

ユートにも、確かに人殺しの業を背負う覚悟は充分にあった。

だが、前世を含めて人間を殺した事など無かったし、死体など早めに亡くなった祖母の御遺体くらい。

自分で〆たのは魚や鳥などの食料品だけだ。

この世界に転生してからも精々、オーク鬼やオーガー程度。

それにしても、初めてオーク鬼を殺した時にも数日は同じ症状に陥った。

覚悟と心は別物という事なのだろう。

ユートは教皇を殺した。

それは最早、決して変えられぬ事実。

二次創作のアンチ転生系の主人公達が、大量虐殺をしているのがユートには信じられなかった。

あんなに気持ち悪い感触、ユートは慣れない。

それでも亜人に対してであれば、何とか折り合いを付ける事も出来た。

だが、人間は未だ折り合いが付かない。

それが故に、ユートは別に寝込んでいる訳ではないのだが、毎夜の悪夢に魘され続けていた。

亜人の時にはユーキが鎮めたが、今回はシエスタが鎮めていたのだ。

殆んど毎夜……赤ちゃんの夜泣きの如く。

シエスタはユートの側仕えだから、ユートの面倒さえ看ていれば良いから何とかなっているが、そうでなければ倒れているだろう。

「大丈夫です、ユート様。わたしが付いていますよ」

優しく、宥める様に、慈しむ様に抱き締めた。

ユーキの話を信じるなら、一週間もあれば心的な折り合いを付けると云う事だ。

やはり不謹慎ではあるが、少し役得だなと思っているシエスタは、残念だな～と考えてしまっていたが。

そんな渦中のユートは……

「スースー……」

シエスタの胸の柔らかさと温もりに包まれて、漸く安らかな眠りに就いていた。

翌朝、ユートが目を覚ますとシエスタが眠っている。

「ありがとう、シエスタ」

眠るシエスタの寝顔を見て少し頬を朱に染め、布団を掛けてやると食堂に行く。

勿論、イタズラなんてしませんよ？

食堂で食事をした後、新しい領地のド・フォートの事を話し合う。

「ド・フォートは、お前が下賜された領地も同然だ。爵位は持たぬが、ユートの好きな様にしなさい」

「父上、良いんですか？」

「構わぬよ」

「なら、研究所を造っても宜しいでしょうか？　民間には迷惑は掛けられませんから、僻地に……ですが」

「ん？　それは、此処では駄目なのか？」

「う～ん、そろそろマジックアイテムの作製には手狭になってきましたから」

隣接している新しい土地に研究所が欲しかった。

ド・オルニエールは開発も既に佳境故に、研究所を建てるには土地的に困る。

だが、ド・フォートは今は亡き伯爵が碌な統治をしていなかった為、村や街以外には開発が成されていなかった。

因みに伯爵の家族は一応、後継ぎとも云える息子が居たには居たが、御家断絶となっている。

何しろ、伯爵が異端審問に掛けられたのだから。

勿論怨まれはしたが、父親の悪行を詳らかされてしまい、ガクリと項垂れてしまった。

悪行に関してではなくて、自分がド・フォートを継げなくなっての悲嘆だが……

要するに、伯爵の息子が継いでもド・フォート領が変わる可能性は皆無だったという訳だ。

ユートは取り敢えず村や街の改革に取り組み、その間にサリュートから家臣団を借りて研究所を建てて貰う事にした。

調査書を読む限り、税率がとんでもない事になっていたし、識字率も全体の数%でしかない。

病気にも罹っている人間が大勢居た。

オマケに害意のある亜人、オーク鬼やオーガーなどが放ったらかし。

本当に、ド・フォート伯爵はマトモな統治をしていなかった様だ。

「それでは父上、母上。
取り敢えずはド・フォート領を視察に行ってきます」

「判った」

「行ってらっしゃい」

ユーキを伴い、ド・フォートに向かう。

シエスタは未だ寝ていた。

そこで、イリスとシプレを連れて行く。

イリスもそうだが、シプレもセント・マルガリタ修道院から引っ張ってきた少女の1人だ。

昔の名前は修道院で付けられたモノの為、とっくの昔に棄ててしまっている。

今の名前は、ユートが皆に付けてあげたものだ。

彼女らの名前は、植物から採用していて全員が気に入っているらしい。

イリスは菖蒲、シプレは糸杉の事だ。

ユーキだけはジョゼットをミドルネームとし、前世の祐希からユー

キと名乗っているのだが。

馬車の中でユーキと話し合う中で、イリスとシプレもその話しに参加していた。

一応はこの2人もメイジである為に、場合によっては街や村などで仕事をする事もある。

別の人間の意見は必要だ。

シエスタの場合、タルブ村での生活を思い出し、忌憚無い意見を貰っている。

「やっぱり道路を舗装した方が良いね。ウチの大通りや街みたいにアスファルトを使おうよ」

「そうですね、ユーキ様の言う通りかと」

ユーキの言葉に、イリスが賛成する。

「そうね、アスファルトで舗装すれば、こんなにガタガタと揺れないから」

シプレもやはり賛成した。

「う～ん、道の揺れは無い方が良いかな？」

「だね。街に出た時は馬車だと揺れが気になるくらいだし、街と大通りだけというのも……ね」

「ああ、フレーズやフィギエやオリヴィエも言っているよね」

ユートの言葉に、ユーキもシプレも同意する。

「だとすると、こっちにもあっちにも主だった道にはアスファルトで舗装をした方が良いな」

話し合っていると、最初の街に馬車が入っていった。

約一年間はド・フォート領の梃入れに忙しく動いて、外へは出れずにいた。

それでもマジックアイテムの作製には余念がない。

ユートが九歳となり、領内も落ち着き始める。

最初はド・フォート領の民もユートに対して懐疑的であったが、献身的な領地の建て直しを行うユートに、少しずつだが心を開いていったものだ。

子供ではあるが、元伯爵に比べればよっぽど確りとした仕事をしている為、笑顔が増えていった。

税率の見直し、これは可成り深刻だ。

最早、死活問題なくらい。

取り敢えず、二年間は税を徴収しない事になった。

寧ろ食糧の配給が必要だったし、仕事の振り分けもしなければなら

ない。

小説を教科書代わりにした識字率の上昇、町医者の設置による罹患者の治療。

町医者はド・オルニエールで数年掛けて育て上げて、各村や街に配置していたのだが、ド・フォート領にも廻していた。

やはり医者の人数が足りないのは、ユートにも如何ともし難い。

技術職というのは育てるのが難しいものだ。

手術など望める筈もなく、大概は専門の水の秘薬を調合して常備薬としている。

殆んどは、針治療や整体、秘薬による治療だ。

街の整備を最優先で行う事により、銭湯や公衆便所を設置して清潔感を高めて、病気の罹患を減らした。

大半はサリュートの受け売りであったが、街や村は前に比べてみれば充分に発展したと云える。

そこまでやれば、後は領民達だけでも街の運営も可能となる訳で、信頼出来る者を代官に置いた。

残りの問題は、亜人による荒廃だろう。

復興した街を荒らされない様に、ユートは部下を引き連れて退治を行っている。

シエスタはタフで、敵を斃す事も平気な様だ。

ユーキにしても、既に折り合いが付いている。

その事実を知り、ユートは自分のヘタレっぷりに少し落ち込んだ。

「兄貴ぃ、早く早く！」

「ユート様！」

寧ろ、積極的に討伐任務を熟している。

所謂、３人パーティで亜人――オーク鬼が住まう森に入った。

オーク鬼とはいえ、普通の平民では太刀打ち出来ない為、メイジであるユートが戦うのだ。

民が貴族の生活を支えて、貴族はその対価を以て民を守護する。

それが貴族と領民の健全な関係だ。

故にユート達一行は、現在森を彷徨っている。

ガサリッ！

『グォォォォッ！』

オーク鬼とエンカウント。

「チッ！　水円斬（アクア・ディバイダー）ッ！」

凝縮を使って水を集めて、念力を用いての高速回転。

それは鋼鉄すら切り裂く水の刃となる。

斬っ！

『ギャアアアアッ！』

棍棒を手にした右腕を切り裂いた。

「星雲鎖（ネビュラチェーン）ッ！　サンダーウェェェェーブッ！」

『グォォォォッ？』

角鎖（スクエアチェーン）が雷の如く軌跡を描き、その巨体を砕く。

「トドメッ！」

銀色の六連装リボルバーのトリガーを引き、ロックスピアーの魔法を解放した。

心臓、肺、胃、脳を貫いてオーク鬼にトドメを刺す。

生命力があるとはいえど、流石に死んでしまった。

「ふう、連携バッチリだったな」

「そうだね。訓練の通り」

「はい！」

大喜びの一行。

現在のユート達の装備は。

【ユート】
無銘の魔法刀

【ユーキ】
アンブロシウス
アイオーン

【シエスタ】
聖衣

勿論、ユーキはマギウス・スタイルだ。

ユートの場合、それなりに丈夫だが普通の服。

シエスタは聖衣自体が武器であり、防具でもある。

無銘の魔法刀は、例の村正に比べて大した代物だが、一応は切れ味を上げる事が可能だし、光の刃を飛ばす事も出来る。

先程は水の魔法を使っていたが……

因みに、マインド・トリガーのキーワードは『光よ』だったりする。

尤も、本物の光の剣を知っているユートから見れば、お粗末なモノでしかない。

「シエスタの聖衣も収納出来た方が便利だよね？」

「うん？　収納か……」

確かにその方が便利だ。

「（キーワードはクロスアップでその侭、聖衣を装着する……か）」

「お兄様、どうかな？」

「検討の余地アリだな」

それに、例の形態にも成れるように改良もしたい。

そちらは流石に時間が掛かりそうだ。

「ユーキ、爆発（エクスプロージョン）を唱えろ！　シエスタはユーキの魔法が炸裂後に、グレート・キャプチュアーを！」

「了解！」

「判りました！」

気配を感じ、刀の柄に手を掛ける。

『ガァァァァッ！』

「光よっ！」

奥から現れたオーク鬼に、ユートは直ぐに斬撃を飛ばしてダメージを与えた。

「今だ！」

「爆発（エクスプロージョン）ッ！」

ドカァァァンッ！

ダメージを受けて一瞬、動きが止まったオーク鬼に対して、詠唱を終えたユーキが爆発（エクスプロージョン）を解放した。

ルイズに教えた程度の長さの詠唱から放たれた爆発（エクスプロージョン）は、オーク鬼に充分なダメージを与える。

「星雲鎖（ネビュラチェーン）、グレートキャプチュアーッ！」

更にシエスタの角鎖（スクエアチェーン）が、大熊すら捕縛出来そうな感じに巻き付いて縛り付ける。

メキメキッ！　と、肉や骨が軋む音が森の中を響き渡った。

メキョッ！

全身の骨を砕き、オーク鬼は死亡してしまう。

「よし、斃したオーク鬼は土に埋めて次に行こうか」

後は木々の肥料にでもなるだろう。

一通り森を廻ったら街に戻り、報告書を作成する。

これぱかりはユートにしか出来ない仕事だ。

「ユート様、お茶を御持ちしました」

「ありがとう、シエスタ」

休憩にして、シエスタが淹れてくれた紅茶を飲むと、一息を吐く。

「そろそろ、ド・フォートでの仕事も佳境かな」

「そうなのですか？」

「ああ。オーク鬼やオーガーの目撃も減ったしね」

街や村にまで降りてくる様な事は無くなって、討伐を積極的にする必要もなくなった。

「それに、来年はヴァリエール家に逝かなければならないだろうし、ネフテスに行かないと」

「今、いくってニュアンスがおかしかった様な？」

シエスタは首を傾げた。

翌朝、早くに起きたユート達はド・オルニエール領に戻ると、サリュートに一年分の書類を渡し、次の行動の為の準備を始める。

砂漠（サハラ）へと行って、エルフの国の首都ネフテスに向かう。
そして土の精霊主に会い、精霊王と契約をするのだ。
そうすれば全ての精霊王石が揃うし、取り敢えずの準備も整うだろう。

「さ～て、初めてのエルフとのご対面だな」

果たしてどうなるのか？

それはユートにも判らない事だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

砂漠（サハラ）へ行くとなると、流石に独断で動く訳にはいかない。

トリステイン国王を始め、ヴァリエール夫妻、それにサリュートとユリアナ。

後は、ロマリア皇国の教皇に就任したマザリーニ。

何気に、ヴィットーリオの教皇就任フラグが折れていたりする。

手紙を読んだマザリーニは溜息を吐く。

事前に話しは聞いていたとはいえ、本気でエルフの国の首都ネフテ

スへ向かうと言ってきたユートの行動力は、感嘆に価する。

「ユート殿、トリステインの未来を私は君に賭けたのだ。御武運を……」

国王を交えた話し合いで、嘗てマザリーニはユートにトリステインの命運を賭ける事にした。

未だ小さな子供ながらも、理性のある瞳で自分や国王と対峙し、水の精霊に認められるだけの力を示して、その上で現実的な政務によって自領の発展に寄与。

それ故に、マザリーニは疎か国王ですらユートの事を認めている。

「賽は投げられた……か」

マザリーニ教皇は、手紙の末文に従って火を掛けると燃やしてしまう。

ロマリアの教皇とトリステイン貴族が直接、手紙のやり取りをした証拠を隠滅してしまう為に。

ユートと、ユートが暴れた結果、教皇になった男が裏で手紙をやり取りなんてしていたら、それだけで痛くもない腹すら探られかねないのだから。

マザリーニ教皇は火を掛けて燃える手紙を視ながら、もう一度心の埋にてユートの武運を祷った。

生まれて初めて、始祖とは違う存在に……

同時に、罪深い自らを懺悔するかの如く始祖ブリミルに祷りを捧げたが。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

マザリーニ教皇が皇国の方で祷っていた頃、ユートはラ・ヴァリエール領を訪ねて来ていた。

今のヴァリエール公爵は、マザリーニ教皇に代わってトリステインの摂政官を務めている。

本来なら、そろそろ王宮勤めは引退して若い者に席を譲り、領地の内政に力を入れようかと考えていた。

然し、ユートから聞かされていた【プロジェクト・ニューウェーブ】が成った今は、王宮も可成り混乱を来している。

マザリーニ教皇が枢機卿だった時代、彼がどれだけの心労と共に国王の側に居たのかよく解った。

否、それは烏滸がましい。

平民の血が流れているなどと蔑まれていた彼は正真正銘、名家の生まれでトリステイン有数の公爵たる自分と比べれば、その苦労は推し量る事すら出来ない。

本当なら教皇になどならずに、トリステイン王国の為に生きる気で

居た彼を説得してまで教皇に押し上げたのは、ユートだった。

ロマリア教皇となり、内側から抑えて欲しいと言い、その方が最終的にトリステインの為だと諭して。

『本当にトリステイン王国を愛しているなら』

この様に言われては、考えざるを得なかったらしい。

苦笑いを浮かべ、ユートに協力する事を承諾した。

ヴァリエール公爵は最近、思う事がある。

もしかしたら、マザリーニこそが真なるトリステイン王国の忠臣だったのではなかろうか……と。

それを思えば、トリステイン貴族としては慚愧の念に耐えない。

身勝手に王宮を離れようとしていた我が身を思えば、よっぽどトリステイン忠臣を名乗れる漢だった。

今ではそう思う。

だからこそ、マザリーニがトリステイン王国を託した少年に、ヴァリエール公爵も最大限の援助を約束しようと考えている。

「（ワシは再び、灰被り（サンドリヨン）となろう）」

ユート・オガタ・ド・オルニエール

未だ九歳でしかない少年。

一番下の娘と一歳しか変わらない彼に、ヴァリエール公爵は期待を寄せていた。

「ド・フォートの平定は終わった様だな？」

「はい。取り敢えずは……ですが」

「報告書は読んでいるよ。彼処までやれば、あとの事はサリュートが如何様にもしてくれよう」

「はい」

ユートは父親だけでなく、ヴァリエール公爵にも報告書を提出している。

公爵がトリステイン摂政官という地位に在り、国内の貴族を取り纏める立場にあるからだ。

「それで、砂漠（サハラ）に行くそうだな？」

「はい。エルフの国の首都ネフテスに、目指す土の精霊が在ると判ったので」

「そうか……」

エルフと接触する為にも、例のプロジェクトを成功させたのだ。

異端、異端と煩わしい皇国を抑える布石として。

「どうやって行くのだ？」

「陸路で行くと、ゲルマニアかガリアを通りますし、マジックアイテムで飛んで行こうかと」

【ストライカーユニット】で飛んだ方が正直、馬車で行くよりずっと速い。

「なら、食糧などは此方で用意しよう」

「ありがとうございます」

それから数日が経ち、いよいよ出発の日。

ユートはユーキを伴って、ネフテスを目指す。

危険だが、虚無を自分達が押さえている事を喧伝する心算だ。

彼らは知らない。

虚無より厄介な存在を……

精霊術師の存在を。

ユートとユーキはサリュート、ユリアナ、シエスタの3人に加えて佐々木武雄翁や、シプレ達に見送られて大空を飛んだ。

一度、ガリアの宿屋で一泊して砂漠に入る。

砂漠に入ったら、こまめに水分を補給しながらオアシスを捜す。

一気に砂漠を越えるのは、流石に無理があるのだ。

砂漠は風と火の精霊力が強い為、滅多に水の精霊の力は借りられない。

【ストライカーユニット】の調整機能は、高空に於ける冷気をと地熱は遮断出来るが、日差しからくる温度の上昇までは防げない。

ユートは火の精霊王、風の精霊王の加護で割りと平気だが、ユーキはそうもいかない以上は、日差しの熱にやられないよう気を付ける必要があった。

「一度降りるよ」

「う、うん……」

砂漠に降りると、休憩する事にした。

水筒をユーキに渡す。

「一気に飲むなよ？　少しずつ喉を湿らせる様に」

「判った。んく、んく」

言われた通りに、ユーキは水を飲んだ。

「思った以上に広いな」

意識を集中し、水の気配を探る。
ほんの微かだが、変わった気配が感じられた。
「（精霊の結界か？）」
一休みした後、ユート達は精霊の結界の気配を辿って飛んでみる。
「オアシスだね」
「入ってみるか……」
「不法侵入だよ？　オマケに此処ってルクシャナの家だよね？」
「どの道、エルフと接触をする必要性がある。それにルクシャナは蛮人（にんげん）に興味があるみたいだったしね」
「結界はどういうタイプのモノ？」
「登録者に害意を持って接したら、攻撃なんかをしてくる受動型。入るのを拒むタイプじゃないな」
精霊には詳しいユート。
直ぐに精霊結界の種類を知る事が出来た。
2人がオアシスに足を踏み入れると、ある一定の範囲から砂漠の熱気が遮断されているのに気が付く。
オアシスが側に有るなら、水の精霊も使える。

油断なく気配を探っていると、ヒトの気配を感じた。

「貴様ら、蛮人か？　何故蛮人が此処に居る！」

それは男の声。

「（此処に居て、居高気に蛮人呼ばわりするって事はアリィとかいうエルフ）」

少しイラッとする。

「さあ、何故かな？　亜人の耳長族！」

「き、きっさまぁ！　我らエルフを侮辱するか！？」

ユートとエルフ……それは可成り険悪なファースト・コンタクトとなった。

・

第３２話：砂漠（サハラ）に（後書き）

・

ネフテス編に突入。

ユートは、目には目を的な思考だったりします。

第３３話：蛮人と耳長族（前書き）

・

今回は、後書きにユートのステータスをＦａｔｅ風に書いてみました。

二つ名と使い魔は未登場の為、記載していません。

第３３話：蛮人と耳長族

・

出会ったエルフは、行き成り居高気に蛮人呼ばわりしてくれる。

ユーキは知っていた。

今のユートは確実に苛立っている事を。

数年を共に暮らしていただけに、ユーキは顔色を見れば大体の感情の推移が判る様になっているからだ。

普段は決して口が悪くないユートだが、前世の気分を思い出した時や怒った時には一人称が“俺”になるのもその証左となる。

「何？　騒がしいわね」

其処へ、呑気な声で家から出てきたのは独特な若草色の服を着た耳の長い女性。

恐らくルクシャナだろう。

「ルクシャナ！　何故この地に蛮人が居るっ！？」

アリィーらしき男のエルフが、ルクシャナらしき女性に対して怒鳴る。

「え？　蛮人って……」

アリィーが指差した方を向いた先に、人間の子供の男女を見付けると、何だか瞳が爛々と輝き始めた。

「うわっ、本当に蛮人が居るじゃない！　何々、何で此処に蛮人が？」

「聞いてるのは僕だ！」

「あ～、ルクシャナ嬢」

「あら、君は私を知っているのかしら？」

「さっき其処のボンクラが名前を言っていたからね」

「無視して話を進めるな！　そして誰がボンクラだ」

何故か怒るアリィー。

ユートとしては本当の事を言った心算だったが。

「ねぇねぇ、何でアリィーがボンクラなのかな？」

「己の言動を弁えないし、俺は礼には礼を、無礼には無礼を返すんだよ」

「んー？　アリィーは蛮人が嫌いだからねぇ。それは他の連中も一緒だけどね」

「まぁ、俺も礼儀を弁えない亜人の耳長族を好きにはなれないけどな」

「あ、そういう意味か」

どうやら、彼女はボンクラの意味を理解したらしい。

「何がどうしたんだよ？　ルクシャナ、いったい何を納得している！？」

「そもそも、アリィーが悪いんでしょ？」

「だから何がだ！」

「其処の蛮人の子に蛮人って呼んで、自分が亜人の耳長族とか呼ばれてキレたってトコでしょ？」

呆れたと言わんばかりに、大仰な手振りで盛大な溜息を吐く。

「な、蛮人を蛮人と呼んで何が悪い！」

「なら、俺から見たらお前らが人間の亜種の亜人で、耳の長い一族なのも事実。だったら、亜人の耳長族と呼んで何が悪い？」

「貴様！　まだ侮辱をする心算か？　最早、赦してはおけん、表に出ろ！」

アリィーの物言いに、周囲はいっそ白けた雰囲気となってしまう。

ルクシャナすらも、呆れてモノも言えなかった。

「な、何だ？　ルクシャナまで！」

流石に白けた雰囲気に気が付いたのか、アリィーも動きを止める。
だが何故、白けているのかがさっぱり理解出来ていない様子。

「ハァー」

ユートはもう怒りを通り越して只、溜息を吐いた。
そして面倒臭くなってしまったのか、オアシスを出ようと歩き出す。

「何処へ行く、蛮人！」

「痴呆か？」

「何だと？」

「てめえがさっき言ったんだろうが、表に出ろってよ！　潰してやるよ、その慢心を！」

前世でも、キレた時にしか使わない口調で、ユートは砂漠を右親指で指し示す。

オアシスを出て、ユートとアリィーが対峙する。

「おい、先程からの無礼を地に頭を付けて謝るなら、半殺しで赦してやらんでもないぞ！」

「知るか！」

ユートは腰に佩いた刀を抜き放ち、アリィーに向けて正眼で構えた。

本来の緒方逸真流に構えは無く、自然体から動いて技を繰り出すのだが、敢えて構えている。

判り易く、真っ直ぐに斬り付けるだけだからだ。

一方のアリィーは、不測の事態に備えてオアシス周辺の精霊と契約をしている。

即ち、十全に戦えるのだ。

「はっ！」

気合いの咆哮を上げ、高速で移動をしてアリィーへと斬り付けた。

アリィーは腕組みと共に、余裕の表情を浮かべて佇んでいる。

振り降ろされる刃。

然し、その刃金の太刀が肉を斬り裂く事は無く、途中で刃が止まりユートは弾かれてしまった。

「ハハハハハッ！　これが我らエルフの誇る反射（カウンター）だ！」

大威張りのアリィー。

観戦しているユーキは水を飲みながら、口角を吊り上げて呟く。

「バカだね～、アイツ」

それは確信。

単純に信じているだとか、そんな話ではない。

そう、ユーキは“知っている”のだ。

だからこその言葉。

ユーキの余裕の表情を見てルクシャナは、首を傾げて訝しむ。

「その魔法の術式、確かに“覚えた”」

「な、何だとっ！？」

「どうやって反射（カウンター）を使わせるか、それを考えてたけど、行き成り当たったよ」

刀をアリィーに向け、堂々と宣言した。

「覚えた？　真逆、反射（カウンター）を使える様になったとでも？」

「違うよ。お兄様が覚えたのは“術式の在り方”」

「え？」

「ボクも驚いてるんだよ。お兄様のアレにはさ」

未だ経験不足な部分こそ有るが、アリィーの反射（カウンター）なら充分だ。

ユートは指先に魔力を収束していき、口語で呪文詠唱を行う。

そして、力在る言葉を紡ぐと指を鳴らす。

パチン！　という音と共にユートがルーンを紡ぐ。

最後に唱えるは当然、力在る言葉。

「エア・ハンマー！」

「ハッ！　莫迦め、反射（カウンター）があるｋ……ぷべらッ！」

殆んどギャグ漫画の如く、綺麗な放物線を描きながら吹き飛んでしまう。

変な断末魔を上げて……

ドシャリと砂漠の砂の上に頭から突っ込み、そこはかとなく笑いの神が降臨していたアリィーだった。

ユートは喜ぶでも、誇るでもなく只、詰まらなそうな目をアリィーに一瞬だけ向けて、オアシスに戻る。

勿論、アリィーは放ったらかしにして。

「あははははははははっ！　ぷべらっ！　だって～、アリィーってばおっかしいの～！」

ルクシャナは薄情にも救出する処か、ケラケラと指差して笑っていた。

が、直ぐに真面目な表情に戻るとユーキに訊ねる。

「で、アレって何かな？」

「お兄様の切り札（ジョーカー）の一つ……かな」

それに対し、ユーキは不敵な笑みを浮かべて答えたものだった。

ユートは鞘へと刀を納刀すると、納涼感が溢れているオアシス内に入る。

「ね、わたしはルクシャナっていうの。蛮人、いえ……貴方達の名前は？」

ルクシャナの名乗りを聞いて、ユートはニヤリと笑うと名を名乗る。

「僕はトリステイン王国、ド・オルニエール子爵領の嫡子。ユート・オガタ・ド・オルニエール。ユートと呼んでくれると嬉しいね」

「ユートね。それで、隣の子は？」

「兄貴に同じくで、長女のユーキ・ジョゼット・ド・オルニエール」

ルクシャナの問いにユーキが答える。

「うん、ユーキね」

人間に強い興味を懐いて、人間の研究をしているという学者、ルクシャナ。

ルクシャナは知ったのだ。

蛮人と呼んでいた者が持つ未知の可能性を。

そして、正論だとはいっても嫌だった。

あの面白そうな蛮人（にんげん）から、亜人だと蔑視されるのも耳長族と呼ばれるのも。

彼が自分を個体ではなく、亜人の耳長族という群体の一つとしてしか認識されないのが堪らなかった。

どうすれば彼が【ルクシャナ】として認識してくれるのか、それは彼自身が教えてくれている。

礼には礼を、無礼には無礼を以て返す。

自分達（エルフ）が彼を蛮人と呼び、個体認識をしていない以上は彼がルクシャナという個人を認識する事は有り得ない。

そういえば、友人から教えて貰った事がある。

人間はどうしようもないくらいに愚かな者が跋扈しているが、玉石混合はエルフと変わらず自らを犠牲にしても、同族を救わんとする者だっていると。

自然と、ルクシャナは自己紹介をしていた。

自己紹介を終えると、ドカドカと先程からギャグ漫画も斯くやのリ

アクションをしていたアリィーが、肩を怒らせて戻って来る。

「ルクシャナ！　僕を置いていくなんて、酷いじゃないか！」

開口一番、これだ。

何だか、アリィーと婚約者だというのが恥ずかしくなってきた。

「（今の内に調ｋｙ……改善した方が良いかな？）」

何やら不穏当な事を思いつつも、婚約者を未だに見捨てられないのは、少しお人好し過ぎるかも知れない。

「おい、聞いているのか？　ルクシャナッ！」

「聞いてるわよ。それよりアリィー、貴方も自己紹介くらいしたら？」

「ハッ。何故、僕が蛮人如きに名乗らねばならない」

「アリィー！」

正直、知ってしまった後で視ると余りに醜い。

ルクシャナは原作と違い、事前に人間に対する認識を多少だが変えられていた。

本来の人間への興味も手伝って、ルクシャナは親友の言葉を受けて、更に現在はユートとアリィーのやり取りを見てから漸く、親友の言葉を理解出来たのだ。

気付いてしまえば、ユート達を……延いては人間達を“蛮人”と呼ぶ事に抵抗があった。

そう、ルクシャナには人間贔屓な親友が居る。

元々、人間に興味を持って研究をしていた変わり者、そして何故か人間に詳しい変わり者。

同じ変わり者同士という事もあり、出逢ってから直ぐに気が合って友宜を結んだのだ。

直ぐには理解出来なかったが、親友からの諫言もあり今になってそれを理解出来るようになった。

だから、ルクシャナはもう人間を蛮人とは呼ばない。

何しろ所詮は蛮人と侮った結果、アリィーは人間の子供にアッサリと敗れた上、手加減までされている。

ただ、判らないのはユートがどうやって反射（カウンター）を破ったのか？

反射（カウンター）はエルフであれば、よっぽど弱いか子供でもなければ大抵は使えるが、翼人や吸血鬼では使えないくらいには高位の精霊魔法。

物理、魔法の何れであっても跳ね返す力がある。

観ていた感じでは、指を弾いて鳴らした時に何か口を動かしていた事から、あの時に反射（カウンター）を何とかしたのだろう。

然し、いったい何をしたのかは解らなかった。

「（本当に興味深い）」

それに比べてアリィーは、人の振り見て我が身を振り返る事も出来ない狭量。

「ハァー」

溜息を吐くしかなかった。

「兎に角、エルフの誇りとか何とか言うなら、せめてエルフの品位を貶める真似はやめて。それとも何？　わたし達エルフは他種族に対して、名前も名乗れない無礼者だと思われたいの？　ユート達はわたし達以外のエルフを知らないから、アリィーの態度がエルフ全体の品位だと思われてしまうのよ？」

「ルクシャナ、もう良い。あの亜人の耳長族のモブＡには、もう何も期待していないから」

「くっ、蛮人！　これ以上我らエルフを貶すなら容赦しないぞ！」

「種族ってより、モブＡを貶したんだがな」

「貴様！」

「やめなさいアリィー！」

「止めるな、ルクシャナ！　こいつは赦さん！」

「貴方、さっき戦って敗けたばっかりでしょう！」

「ぐっ！　今度は油断しないさ！」

所詮は蛮人と、侮っている時点で油断している事には気が付いていないらしい。

否、そもそも反射（カウンター）が効かないならば、ユートの使える魔法次第で充分な脅威足り得る。

何故、アリィーはそこに気が付かない？

それこそが、油断している証左ではなかろうか。

自分達（エルフ）が、いったいどれ程の高尚な生物だと云うのか……

「それにしても、モブAを視ているとトリステインの一般的な貴族と、全く変わらないな」

「どうして？」

ユートの言が気になって、ルクシャナが問い掛ける。

「傲慢（プライド）だけは一丁前で、上から目線を遥かに越えている。驕りが過ぎて下に視ている相手をとことん貶す。自分を選ばれた上位者だと思い込んでいるみたいだし」

「あはは……」

苦笑するしかない。

まあ、今のユートもある意味で上から目線だが……

「取り敢えずモブAは放って置いて、ネフテスに行きたいんだけどルクシャナ、道案内して貰えないか？」

「ネフテス……ね。行ってどうする気か聞いても良いかしら？」

「ネフテスそのものには、興味が無いんだよ。観光しに来た訳でもないしね」

「ネフテスに用がない？」

「ネフテスの何処かに有るって云う、土の精霊と会える洞窟に行きたいんだ」

「土の精霊？　精霊の祭壇の事かしら」

「知っているのか！」

「知っているけど、其処に行くなら評議会（カウンシル）の許可が要るわよ？」

てっきりシャイターンの門を捜しているのかと思っていたら、想像の斜め上の答えに吃驚してしまう。

昔の人間で云う聖戦に於いて、彼らは須く聖地（シャイターンの門）を目指していたと聞く。

どの道、シャイターンの門へは行かせられない。

だが、精霊の祭壇であれば評議会（カウンシル）の許可さえ得たら問題は無い。

「……判ったわ、取り敢えずは評議会（カウンシル）のおじいちゃん達に渡りだけは付けて上げる」

「な？　ルクシャナ、君は蛮人（にんげん）をネフテスに連れて行く心算か！」

「そうだけど？」

「ふ、巫山戯ないでくれ。自分が何を言っているのか解っているのか？」

「勿論よ」

「何故だ！　何故、君はそんなに蛮人に心を砕く？」

「人間の研究家としては、彼の行動に興味が湧いたからよ」

「っ！　勝手にしろっ！　だが、この事は評議会（カウンシル）に報告をさせて貰うからな？」

アリィーはオアシスを出て行ってしまう。

「良かったの？」

「構わないわよ」

ユーキの問いに、ルクシャナは平然と答えた。

「さ、行きましょうか」

ルクシャナを先頭に、3人も砂漠を進んだ。

砂漠を往くのに、駱駝に似た動物に乗って揺ったりと進んだ。

もっと早く行く方法も有るには有るが、恐らくアリィーが評議会（カウンシル）に告げ口をしていて待ち構えているだろうから、わざとゆっくりしている。

ルクシャナの嫌がらせだ。

その間、色々と情報交換を兼ねて話をしていた。

「へー、やっぱり人間ってどうしようもない奴は居るものね」

「それはそっちも変わらないと思うけど？」

「あ～、そうね」

すっかり話し込んでいる。

「ルクシャナは、どうしてお兄様の話を理解出来たのかな？　研究対象とはいえ蛮人と考えてたみたいだったのに……」

ユーキの質問に、苦笑いをするルクシャナ。

「確かにね。けど、わたしには親友が居てね、その子が色々と教えてくれたし、人間が単なる蛮人じゃないって言っていたのよ」

「親友？　その人（エルフ）って人間に詳しいの？」

「ネフテスでもわたし以上の変わり者かな？　人間は蛮人ばっかりじゃないし、下手に侮れば確実に足元を掬われるって、言い続けているわ」

「それは、また……」

ネフテスを出た事があるのだろうか？

「お陰で何人かの同胞が、人間の土地に行っちゃったからね。余り冗談じゃ済まない事になってるわ」

「（それって、ティファニアのお母さんも？）」

口にこそ出さなかったが、シャジャルもその1人だとすれば、後押しした形にはなるのだろう。

どの道、出て行ったなんて判らないから、その親友は肩身の狭い思いをしているかも知れないなと、ユーキは考えた。

「ねえ、ユート」

「何かな？」

「どうやってアリィーを斃したのか、気になるんだけど？」

「エア・ハンマーでガツンと一発、頭にぶつけてやったんだけど……」

ルクシャナの聞きたい事の本質に気付きながら、惚けてみた。

「その前に、どうやって彼の反射（カウンター）を消したのかを訊いてるのよ？もしかして、悪魔（シャイターン）の魔法なの？」

ルクシャナとて、普通の系統魔法では反射（カウンター）を消せないと思っているが、ひょっとしたら悪魔――虚無の魔法ならとは考えている。

そして、瞳がユートを見据えていた。

只の興味ではあるまい。

ルクシャナはエルフ。

エルフの為にならない事まではしない。

エルフにとって、悪魔（シャイターン）の復活は決して容認出来ない事だ。

ユートが悪魔魔法の使い手なら、それこそ生命を懸けて斃さんとするだろう。

「あれは人間の世界のメイジなら、誰でも使える汎用魔法……コモン・マジックのオリジナルスペルだよ」

「コモン・マジック？」

「そう。オリジナルだから使い手は僕だけしか居ないけどね」

ユートにとって、あれは切り札（ジョーカー）の一つ。

易々と教えられない。

「虚無じゃないよ」

「そう……」

信じてくれたかは微妙だったが、一応は鉾を納めてくれた様だ。

「あれでもアリィーは、国からファーリスの称号を与えられた騎士なんだけど、それをアッサリ斃した魔法が誰でも使える……か」

それでもやはり、思う処はあるらしい。

「だけど、アリィーだって未だ切り札を持っていた。それを使えば判らなかったわよ？」

「使えば……ね。所詮は蛮人と侮った結果、それを使う前にやられた訳だ。相手が僕じゃなければ殺されて終わっていたね」

「そうね……」

どれ程の力を隠していたとしても、戦闘で使えなければ意味を為さない。

驕り、侮り、斃された時点で本来は終わりなのだ。

「そうだ、ネフテスの中央に着く前に言っておくよ。僕は虚無……君らでいうと悪魔魔法の担い手じゃないけど、別の意味でエルフにとって最悪の敵になりかねない存在だ。モブAが報告しているなら、敵意に満ちた歓迎をしてくれるだろうけど、下手に攻撃はしないように言っておいてくれないか？　思わず殺してしまったら面倒だし」

「別の意味で最悪？」

精霊、神、魔族。

物理的な肉体より、精神に重きを置く存在にとって、契約は遵守すべきモノ。

ならば、契約の力が強い方がより優先される。

エルフの契約と精霊術師の契約では、後者の方が力関係が強い。

今の処、殆んど精霊術を使っていないが、使えば物理法則すらをも越える。

一般のモブ・エルフでは、ユートに決して敵わない。

唯一、土の精霊の魔法ならダメージを与えられるが、それだけだろう。

「……判ったわ」

ルクシャナは何かを感じたのか、ユートの出した提案を了承した。

ルクシャナの家を出てから三日が経ち、漸く評議会（カウンシル）の有る中央に着く。

思っていた通り、アリィーを始めとして大勢のエルフが敵意に満ちた視線を向けてきた。

約束通りに、ルクシャナはエルフ語で説得を試みる。

然し、エルフの1人が契約した石を魔法でユートに飛ばしてきた。

「アッ！」

石がユートの頬を掠って、通り過ぎる。

少し鋭利だった事もあり、頬が切れて血がユートの頬を伝う。

その瞬間、石をぶつけてきたエルフを炎が包む。

「ギャァァァァァァァァァァァッ！」

一瞬で煌々と燃え上がり、藻掻き苦しむモブB。

ユートは直ぐに炎の精霊に指示を出し、燃える火を消し止める。

精霊を散らす際、礼を言うのを忘れない。

精霊術の真髄は、共存であって支配ではないのだ。

故に、精霊への感謝の気持ちを忘れてはいけない。

エルフ達の敵意の視線が、恐怖に変わっている。

「ごめんなさい、ユート。説得はしたんだけど……」

「報いは受けたんだから、気にはしてないよ」

謝るルクシャナに、大して気にした風もなく言う。

アリィーも少し青褪めている様だ。

恐らく、ユートの力の本質に気が付いたのだろう。

「我らの同胞が失礼をした様だな蛮人(にんげん)よ」

「貴方も大概、失礼だと思うけどな。ビダーシャル」

「お、叔父様とシーナ？」

人垣を割って、歩いて来るエルフが2人。

1人は原作にも登場しているビダーシャル。

もう1人は、シーナと呼ばれたエルフ。

ユートはビダーシャルより寧ろ、シーナに目を奪われてしまった。

.

第３３話：蛮人と耳長族（後書き）

・

Ｆａｔｅ的なステータス表

【名前】
ユート・オガタ・ド・オルニエール

【クラス】
契約者（コントラクター）

【二つ名】
？

【属性】
混沌・中庸

【資質】
四系統全ての適正。
精霊との親和性。
新魔法や秘薬の開発。
マジックアイテム製作。

【使い魔】
？

【能力値】
筋力：Ｃ＋
耐久：Ｃ

俊敏：Ａ
魔力：Ａ＋
幸運：Ａ
宝具：ＥＸ

【クラス別能力】
対魔力：Ｅ
魔法への耐性が高い。

騎乗：Ａ＋＋
幻獣・神獣、竜種すらをも乗り熟す。

魔導具作成：Ａ
様々なマジックアイテムを造り出せる。但し、オリジナルと同等の物は素材などを揃えなければ造れない。
神造兵器は完全には造り出せない。

金色の加護：Ａ
金色の女王の権能を地上で使用可能。

【保有スキル】
精霊の加護：ＥＸ
四系統精霊の加護を受けており、契約者となった場合はその系統を無効化出来る上、上位命令権を持てる。

カリスマ：Ｂ
国を纏められるだけの能力を備えている。

黄金律：Ｃ
考えて動けば、それで充分に稼ぐ事が可能。

魔力放出：Ａ＋
白い魔王みたいな魔法だって使えます。

教導官：Ｂ
自身の魔法や技術を伝え、導くのが上手い。やる気の無い人間は導けない。

神性：？
一切が不明

恋愛原子核：Ｃ＋
好かれた相手との縁が強くなって、相思相愛になった相手が喩え何人居てもヤンデレなエンドを迎えない。

【宝具】
妙法村正（真打ち）
ランク：Ａ＋＋
種別：対人宝具
レンジ：１～２
最大捕捉：１人
彼の初代村正が、最後期に打ったとされる最高傑作。徳川家を呪ったとされながら、徳川家に秘匿され続けた矛盾と神の祝福により、騎士王の聖剣並の力を内に秘める様になった。その力は神や魔にもダメージを与える事が出来る程。

神滅斬（ラグナブレード）
ランク：ＥＸ
種別：対人宝具
レンジ：１～１０

最大捕捉：１人
金色の女王の力を借りている呪文。魔族、神族すらも斬り裂き、空間さえ断つ。

【亜空間ポケット】
ランク：Ｂ
種別：結界宝具
レンジ：
最大捕捉：
某・気象精霊が使っている倉庫的な空間。常に持ち主の傍に存在し、中の時間は基本的に停止している。
広さは因島の面積くらい。中には前世の娯楽コレクションと、現世で造った物が所“広し”と入っている。時間停止空間を利用して、食糧なども入れている。

残りは不明

恐らくこんな感じです。

次回はユーキのステータスを掲載します。

多少のネタバレ注意。

第３４話：那由多椎名（前書き）

・

今回はユーキのステータスを載せてみました。

多少のネタバレ有り。

第３４話：那由多椎名

・

「然し、こうもあからさまに攻撃されるのは、気分の良いものではないな」

「こっちの台詞だね。突然攻撃してきたんだ、宣戦布告と受け取るが？」

一触即発の雰囲気が漂う。

ユートは駱駝……の様なモノから降りると、殺気を放ちながら睨んだ。

ビダーシャルはその殺気を受け流すと、ユートの前に立つ。

「蛮人の君がこのネフテスの地に来たのは何故かね？　アリィーも詳しくは聞いていなかった様でね」

「精霊の祭壇」

「む！　彼の地にいったい何の用があるかは知らないが、あそこへ蛮人を連れて行く訳にはいかない」

「亜人の耳長族の聖地って訳かな？」

ザワリ……

辺りが騒然となる。

アウェイで此処までエルフを虚仮にするなど、彼らも思わなかったのだろう。

アリィー以外は。

既にアリィーは同じ事を言われていた為、ビダーシャルへの返しは判っていた。

「貴様っ！」

「我らを莫迦にするか！」

「許せん！」

「蛮人風情がっ！」

殺気立つエルフ達。

だが、そんな温い殺気などユートは吹き飛ばす。

ビダーシャルへぶつけていた殺気を、何倍もの濃度にした濃厚な殺気……

実際に殺しをした事がある者が……覚悟を以て殺せる者だけが放てる本物の殺気だった。

『『『『ヒィッ！』』』』

それに圧され、思わず仰け反るエルフ達。

相変わらず涼しい顔をしてはいるが、ビダーシャルも多少の冷や汗を掻いている様だ。

アリィーは震えているが、何とか平静を保っている。

流石は腐っても騎士か。

「ふむ、子供ながら修羅の如く……か」

アリィーからの報告により反射（カウンター）が無効化された事は知っていた。

これ程の殺気を放てる修羅が相手では、反射（カウンター）無しで戦うのは危険であるし、況してや子供の身でネフテスに単身来るだけの胆力は瞠目に値する。

「精霊の祭壇に行きたいという理由は何だ？」

「教える義理は無い……と言いたいが、土の精霊に会いに来たんだ」

「土の精霊？」

「そうだ、精霊の祭壇にはラグドリアン湖と同じく、自我意思を持った土の精霊が存在している。その精霊に会いたいんだ」

ユートは、ビダーシャルにその目的を話す。

「莫迦な！　巫山戯るなよ蛮人如きがっ！」

応えたのはビダーシャルではなく、アリィーだった。

「何だよモブA？」

「誰がモブAだっ！」

「自己紹介も出来ない奴の名前なんぞ、知っていても呼んでやる義理は無いな。画面上、目元が隠れているモブで充分だろ？」

「なっ！？」

最早、挑発する価値すらも無いとばかりに言う。

「よさないか、アリィー」

「然し、ビダーシャル様」

「よせと言ったぞ？」

「は、はい……」

ビダーシャルに睨まれて、アリィーは引き下がった。

「シーナ、彼らなのか？　お前が言っていた【金色と混沌の現子】とは」

「確認します」

エルフの少女。

それはとても目を引く。

美しいとかではない。

否、美しさは充分なのだ。

確かにその美しさにも惹かれるものがある。

だが、取り敢えず目を惹かれたのは顔やスタイルでは決してなく“服装”だ。

明らかにおかしい。

白無垢に緋袴。

エルフの民族衣装などでは決してないのだ。

それは、地球は日本の旧き神への御遣いが禊と共に着ていた服装。

所謂、そう巫女服だった。

はっきり言うと、可成りのアンバランス。

ゲームなんかでは見掛ける姿だが、長い金髪に碧眼、尖った耳に初雪の様な肌の少女が、日本人が着る服装を着ているのはどうしても違和感が拭えない。

とはいえ、似合っていないかと聞かれれば、バッチリ似合っているのだ。

「初めまして……で良いのかな？　私の名前はシーナって云うんだ。

君の名前を訊いても良い？」

「え？　あ、僕はユート。ユート・オガタ・ド・オルニエール」

「そっか～、ユートだね。まるで日本人みたいな名前なんだ？」

「っ！？」

目を見開いて驚愕する。

ハルケギニア……それも、エルフ族の少女が日本を知っている事に、ユートは驚くしかなかった。

「君が此処に居るのはぁ、白い魔王の差し金って事でファイナルアンサー？」

ソッと耳元で、囁く様に呟いた台詞はユートに更なる驚きを与える。

「……どうして？」

「クスクス……だって私も転生者なんだから」

「「……っ！」」

もう驚愕し過ぎて、どうにもならない。

シーナも転生者だと言う事に、ユートもユーキも驚く以外に無かった。

「シーナ、君はいったい」

それには答えず、クルリと踵を返すとビダーシャルの元へ戻り、シーナは報告をする。

「確認しました。彼が私の捜していた人です」

「そうか……」

報告を受け、目を閉じると天を仰いで思案した。

その間の沈黙が耳に痛い。

「良かろう、シーナ。君に彼らの身柄は任せよう」

「はい、ありがとうございます。ビダーシャル様」

一礼をすると、再びユートの元へ行き右手を差し出して微笑む。

「ようこそ、ネフテスへ」

ユートは我知らず、右手を差し出すと柔らかいシーナの手を握っていた。

その後、ユートとユーキはルクシャナと別れ、シーナに連れられて行く。

白い壁、オレンジの屋根、窓枠は淡い青。

ド・オルニエールを除いたなら、ハルケギニアの何処にも無い統一感のある町並みは成る程、美しい。

三階建の家の一戸に足を停めると、シーナは徐(おもむろ)に扉を開いた。

「此処が私の家だよ」

「は、はぁ……」

「さ、2人共入ってよ」

促され、顔を見合わせるが首肯して家に入る。

「いらっしゃい我が家に」

思わずドキリとなる様な、太陽みたいな笑顔を魅せてくれるシーナを見て、紅潮してしまった。

「お、お兄様……」

どうにも気が多い義兄に、ユーキは苦笑いする。

まあ、ユーキの“計画”には都合が良いのだが……

「はい、お水だよ」

トレイに載せたコップには並々と水が注がれている。

「改めて自己紹介をさせて貰うね」

椅子に座り、シーナは口を開く。

「私はシーナ。前世の名前は那由多椎名(なゆたしいな)。宜しくね」

ユートとユーキは喉が渇いていた事もあり、水に口を付ける。

仮に罠で、心神喪失薬辺りを盛られていたとしても、ユートには全く効かない。

ユーキも即死レベルの毒でもなければ、ユートが簡単に治療してしまえる。

詰まり、飲んでしまっても問題は無いのだ。

念の為、ユートが先に口を付けて安全性を確かめる。

コクリと口に含んだ水を、喉を鳴らせて嚥下した。

冷たくてミネラルも豊富な美味しい水、それがユートの感想だった為、ユーキに視線で合図を送る。

『飲んで良し』

『オッケー』

アイコンタクトを交わし、水を飲み干した。

「どう？　美味しかったでしょ？」

「ああ、喉が渇いてたから助かったよ」

「そういえば、まだボクの名前を言って無かったね。ボクはユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールと言うんだ。前世での名前は橋本祐

希。宜しく」

「僕もあの場では仕方が無かったとはいえ、前世の名前はいっていなかったな。前世では緒方優斗だ」

ユーキもユートも、シーナに倣って、前世での自分の名前を明かす。

今更ながら、名前だけなら前世と同じ名前を名乗っている事にお互い気が付く。

尤も、ユーキはジョゼットという名前以外は持っていなかった為、ユートが付けたという事になっていたりするのだが。

「先ずは私から、ユートにお礼を言わせて貰うね」

「お礼って、僕は君に何かしたっけ？」

「うん。結果的には意味を為さなかった上に、ユートを“道連れ”にしちゃったからね。ありがとうとね、ご免なさい」

そう言って頭を下げてくるシーナ。

「道連れ……？　真逆！」

「その真逆。ユートが救けようとして、一緒に車に撥ねられた女の子……それが私だったんだよ」

「……マジ？」

流石に信じられない気分で訊いてしまう。

「思い出してみて、ユートが救けようとした女の子の特徴を」

言われて、ユートは脳裏に思い浮かべる。

もう可成り曖昧になってしまった記憶を。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

大勢の人間、横断歩道。

バス通りなだけあり、車もビュンビュンと風を切る勢いで奔っていた。

そんな中、信号が赤であるにも拘わらず少女が道路へと飛び出している。

別段、死にたくて自殺しようとしていた訳では無い。

本人も訳が解らない表情をしていたのだから、それは間違い無かった。

それは恐らく、只の事故。

人が大勢で、不意に押し出されてしまっただけの不幸な事故でしかなかった。

放って置けば、那由多椎名という少女が車に撥ねられて終わるだけ

の筈の、割と有り触れた情景。

交通事故など、日本全国を見てみればそれこそ年間に数百件は在るのだから。

この日の、この時間、この場所では那由多椎名が犠牲者だった。

そるだけの事だ。

処が、それを良しとはしないバカも居る。

偽善？　下心？　正義感？

何れにせよ、少女を救ける為に自らを死地とも言える車道に飛び出した青年……緒方優斗が居た。

誤算だったのは、既に停まれない位置にトラックが来てしまっていた事。

約時速５０ｋ／ｈで突っ込んでくる鉄の塊。

優斗と椎名は、トラックに撥ねれて２人共が死亡してしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「だけど同じ世界に転生していたなんて」

あの時の事を思い出す。

『俺が救けようとした子はどうなりましたか？』

『因果は連鎖する。彼方の優斗君は救けられなかったの。だから優斗君も救ける事は出来なかったの』

『そう……ですか』

『その子には事情を説明して、先に輪廻の輪に載せたから』

『もう転生した訳ですか』

一連のやり取りは、ユートが転生する前に神（なのは）と交わした会話だったが、一緒にしんでしまった少女に関して、既に転生したという以外に情報が無い。

最早、出逢う事もあるまいと思ってスルーしていた。

よもや、その少女の転生先がこの地だったとは思いもよらない事だ。

「神様（なのはさん）が言うには、私の同位体もユートの同位体と死んでいてね、やっぱり同じ世界に転生をしてるんだって」

「しまったな。因果の重さとか色々と聴かされていたのに、少女がどうなったかを何で訊かなかったんだろうか？」

同じ運命だというならば、星神アーシァの世界の少女がどうなったか、それを訊けば判った筈。

自分が救けようとした少女もまた、この世界に転生をしている事を。

尤も、ネフテスに居たのでは結局、今の時期まで捜しようもなかったが。

「私も動きようがなくって困ってたんだよ。ちょっと前に夢で神様（なのはさん）が教えてくれなかったら、どうしようもなかったし」

「どういう意味だ？」

「転生前に使命とかは教えて貰ってたけど、ユートと合流する方法が判らなかったんだ。エルフと人間って敵対してるから、下手に動くのは危険だったしねぇ。そもそも、私はこの世界の原作を知らないから」

「は？」

「だから、私は【ゼロの使い魔】ってライトノベルを読んだ事が無いの！」

困った事に、シーナは原作知識を持っていなかった。

その為、この先で何が起きるのか全く判らず闇の中を歩く様な、そんな五里霧中な感覚だったらしい。

唯一の指標が、なのは……【純白の天魔王】が夢で教えてくれた情報のみ。

故に、ビダーシャルを説得してユートの来訪に備える事にした。

未来、世界に危機が訪れると【大いなる意思】かどうかは兎も角、

自分に教えてくれた事を話し、エルフが蛮人と蔑む人間と協力する必要がある事も説く。

「その上で【金色と混沌の現子】の事も話したんだ」

「【金色と混沌の現子】ってのは、僕の事？」

「そうだよ。私には意味が判らなかったけど、ユートには【金色と混沌の現子】って言葉に心当たりが有るんだよね？」

「……まあね」

金色の女王の祝福を受けたユートを指すのは、シーナの説明や自分の立ち位置から推測は出来る。

然し、夢を視たのがユートと同じ頃なら、一年間も待ち続けたと云う事だ。

「よくやるな。処でさ？」

「何かな？」

「その巫女装束はエルフの民族衣装……なんて訳無いよね？」

「未だ思い出し切れてないみたいだね。ほら、私を救けようとした時を確りと思い出してみて」

「へ？　え～と……」

検索中。

そう、あの時の少女の服装も緋袴だった。

「思い出したみたいだね。そう、私は元々が巫女さんだったんだよ。生まれ付きの巫女さんだったからね、記憶付きで転生してこっちの服装の方がシックリくるんだよ。だから仕立てた」

「は、はぁ……」

何ともまあ、凄い理由だ。

「言っておくけど、似非やバイトじゃなく、ちゃんと霊術が使える神道系の退魔巫女だったんだよ」

霊力を持ち、それを制御する術を持つ霊術師であり、妖物などを封じたり送ったりする退魔巫女。

それが、那由多椎名という少女だった。

死んだ当時、未だ六歳かそこらの幼さだった椎名は、朱翼の天陽神の衛星神たる純白の天魔王と出逢って、この世界へと転生する。

それはユートも同様だが、ユートの年齢は二十歳。

普通であれば、恋愛が成立するような年齢差ではなかったりする。

椎名は転生の際に、優斗の性癖？　を聴かされていたのだが、何と合法ロリなのだという。

飽く迄も興味があるだけであり、現在のユートが気にしている相手

を見る限り、それでなければ勃たない訳ではあるまい。

六歳の椎名では、いまいち理解が及ばなかったが、懇切丁寧に教えられた。

なのはは子供に何を教えているのやら。

とはいえ……

二十歳が六歳に手を出したなら、それは決して間違いようがないロリコンだ。

ユートは【魔法先生ネギま!】に出てくるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルみたいな、傍目からは十歳でも実質的に六百歳の割りと合法なロリなら兎も角、真性なロリコンでは無いので六歳は無理だ。

故に仮令、2人が生き残っていたとしても吊り橋効果でさえ、恋愛関係を構築しなかっただろう。

だから、ある意味で死んだ事に感謝している。

死にたかった訳では無いにしても……だ。

エルフなら若い時間も永いから、優斗が年下でも待っていられると囁かれ、種族を決めてしまったし。

「退魔巫女か～」

ユートは感心する。

というか、アニメや何かでしか有り得ないと思っていたのに【受容世界】でマジものの霊能が在る事に吃驚してしまう。

「そういえば、シーナさんは神(なのは)からどんな力を貰ったの？」

「能力？　あの頃はそういうのがよく判らなかったからね、お任せで適当に」

「六歳の女の子じゃ無理も無いか……」

ユーキは苦笑した。

「一応は聞いてるよ」

「そうなんだ」

「え……っと、確かね……元々の霊術の能力アップ、魔力と氣力の能力の使用と融合。霊力の物質化だね」

「霊力の物質化？　どっかで聞いた様な……」

「氣力と魔力の融合って、咸卦法か？」

ユーキとユートはその能力を検証してみて、本人が知らなかったとはいえ、割ととんでもない能力を獲ている事に気が付く。

「霊力の物質化をちょっとやってみて貰える？」

「ん？　はい」

ユーキの言葉に、アッサリと体内のエネルギーを弓矢へと変換し、それを番いて見せた。

簡素な弓矢だったが、何となくゼロスが颶風弓（ガルヴェイラ）を引いている様な感じだ。

それをシーナは、射つ事もなく直ぐに消してしまう。

「じゃ、次は魔力と氣力を融合してみて？」

「え～と。左手に魔力を、右手に氣を……」

それぞれのエネルギーを集めて、両手を胸元の中央で一つに融合した。

それにより、シーナの身体を包み込む形で融合された咸卦の氣が発せられる。

「うわ、あれってお兄様も出来る？」

「氣が使えれば、或いは」

咸卦法は究極技法（アルテマ・アート）と呼ばれて、【魔法先生ネギま！】に於いて使用されている能力。

発動したなら、肉体強化、加速、鼓舞、物理防御、魔法防御、耐熱、耐寒、対毒などのオマケが付く。

使えば他のエルフでは恐らくは敵うまい。

「結構、修練してるみたいだね」

能力を貰い、それに胡座を掻いているだけの愚者とは違う。

ユーキはその錬度の高さに驚く。

瞬時に霊力を物質化して、簡単に咸卦法を行使しているのは力を貰って獲られるモノではなく、長年に渡って修業をした者だけが使えるモノだった。

「ユート、君はこれからどうするのかな？」

「これから？」

「ネフテスに来た目的は、精霊の祭壇に行く事なんだよね？」

「ああ。土の精霊と会い、土の精霊王との契約をする為にね」

「？　土の精霊と土の精霊王って何か違う訳？」

シーナは首を傾げる。

どうやらエルフとはいえ、そういった概念は知らないらしい。

ユートは精霊王という概念を教えた。

自我を持つ精霊を精霊主と呼び、その上に概念存在の精霊王が在る事を。

精霊主とは精霊王の端末であり、地上代行者。

謂わば、この地全ての各系統精霊を統括する権能を持った存在。

「そして僕は、現在は人間の中で唯一の精霊王の地上代行者たる契約者（コントラクター）なんだ。土系統を除いてね」

「あれ？　それじゃあ……エルフは誰もユートに敵わないって事？」

「そうだね。その気になったら僕はネフテスの水源を枯らせて、風を澱ませて、熱を奪ったり過熱する事も可能だからな」

「エルフはもう、詰んでいるっ！？」

ユートが本気でネフテスを潰そうと思えば、簡単に潰せてしまう。

実質、交渉の余地も何も無い状態だ。

それこそ無条件降伏をさせて、不平等条約を結ばせる事すら可能な程に。

「わ、私も一応はエルフだからね、余り無体はして欲しくはないかも……」

冷や汗を掻きながらシーナは言う。

「人間の為に、無体なんてする心算はないけど、僕が精霊の祭壇に行く為なら、やるかもね？」

「やっぱり詰んでる！？」

ユートの言葉はある意味、絶望しかなかった。

「ハァ、まあ明日は評議会（カウンシル）で話しがあるから、ネフテスを壊さないでね」

ちょっとした締感の表情で言ったものだった。

その夜はシーナの家に泊まって、翌日には評議会（カウンシル）に向かう事に。

ユートとユーキは、客間を使って眠る事になった。

真夜中……

シーナは1人で歩く。

「シーナ！」

「ルクシャナ」

友人のルクシャナとの待ち合わせの様だ。

「ね、ね、ユート達から何か聞いたんだよね？」

「うん」

「人間の国の事とかって、色々と聞けた？」

「あ～、ごめんね。個人的な話しはしたんだけどね、そっち関係は出来なかったんだよ」

「そっか、残念だな」

それ程残念そうに見えない表情で、ルクシャナは手をパタパタと動かしながら、苦笑いした。

「ま、直接ユート達に訊けば良いんだしね」

ルクシャナは、もうスッカリと蛮人呼ばわりが無くなっている。

大した話しも無い侭、別れるとシーナは家に帰って、直ぐにベッドへとダイブしてしまった。

.

第３４話：那由多椎名（後書き）

.

【名前】
ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエール

【クラス】
転生者

【二つ名】
魔弾

【属性】
中立・善

【資質】
虚無の担い手。
科学アイテム製作。

【使い魔】
？

【能力値】
筋力：Ｄ
耐久：Ｅ＋
俊敏：Ｃ
魔力：Ａ＋
幸運：Ｂ
宝具：ＥＸ

【クラス別能力】
対魔力：Ｅ
魔法への耐性が高い。

騎乗：Ｂ
普通の騎獣を乗り熟す。

科学道具作成：Ａ
科学的な部品を造り上げ、組み立てが可能。錬金の使い手と組めば、量産ラインを造る事も可能。

【保有スキル】
直感：Ｃ
ある程度、自分にとっての不都合を回避出来る。

魔力圧縮：Ｂ
魔法を形成し、それを圧縮して力を底上げ出来る。

【宝具】
闇を貫く六連装（クリスタル・ティアーズ）
ランク：Ａ
種別：対人宝具
レンジ：２～５０
最大捕捉：６人
嘗てアンブロシウスと呼ばれていた拳銃。魔法を籠めた弾丸を放つ事が可能。

赫く煌めく焼滅光（ディアブロ・ブレイカー）
ランク：Ａ

種別：対軍宝具
レンジ：３～６０
最大捕捉：１～１０人
嘗てアイオーンと呼ばれていた自動拳銃。機能的には元々のモノと変わらない。所謂、招喚器。

魔を断つ者（デモンベイン）
ランク：ＥＸ
種別：対人宝具
レンジ：１～９９
最大捕捉：１人
本物に窮めて精巧に造られた鬼械神の贋作。飽く迄も使える能力は、此方の技術で再現した物でしかない。第一近接昇華呪法や近接粉砕呪法なども使用可能。

外伝噺：シーナの転生物語（前書き）

・

今回はシーナの外伝です。

後書きにシーナのＦａｔｅ風ステータスを載せます。

やはり、多少のネタバレは注意です。

・

此処は何処だろう？

それが巫女装束を身に纏う少女……那由多椎名の感想だった。

真っ暗な空間は、先が全く見通せない。

それが四方八方、３６０。を取り囲んでいるのだ。

恐怖を感じ始めた椎名。

其処へ光が灯る。

誘われる様に光の方へ振り向くと、栗色の髪の毛をサイドポニーに結った紫水晶の様な瞳を持つ女性が浮かんでいた。

手には桜色のフレームに、金色の音叉の様な突起の間に赤い宝玉が付いた杖。

白を基調とした、ロングスカートの服を着ている。

それは椎名もよく知っている女性。

「高町なのは……さん？」

何故か、管理局の白い悪魔と異名を取る高町なのはが居たのだ。

椎名も【魔法少女リリカルなのは】は知っている。

「ほ、本物……なの？」

「勿論、本物だよ」

なのははニコリと微笑み、椎名の傍に寄って来た。

「私は【純白の天魔王】の神号を持つ高町なのは。
初めましてだね？　那由多椎名ちゃん」

「し、神号？」

「私が神に神化した際に、旦那様から貰った称号……それが神号だね」

【朱翼の天陽神】又は、【鳳凰源将】の神号を持った神の衛星神となる前には、従属神として【純白の天魔王】の神号を与えられていたなのは。

従属神とは、主神に従属する事を義務付けられた神。

従属神契約を行う事により、通過儀礼（イニシエーション）を以て、神の肉体を得て転化した存在だ。

そこから更に自らを昇華する事で、衛星神となる。

従属神としての義務が軽くなったのが、衛星神だと考えて問題は無い。

「それで、神様……が居るって事は私は死んだんだ」

「うん、君はどういう風に自分が死んだか判る？」

「え……と……？」

右人差し指を顎に添えて、小首を傾げる仕草をしながら思い出す。

「横断歩道で青信号を待ってたら、行き成り押し出されて吃驚して、トラックが来て……」

ブルリ……

背筋に冷たいモノが奔り、肩を震わせる。

「だけどその時、何だかね暖かかったんだ」

「それはきっとね、椎名ちゃんを助けてくれた人の温もりだよ？」

「助けて……くれた」

更に思い出す。

トラックに撥ねられる直前の事、確かに誰かが抱き締めてくれていた。

力強さと、逞しさを感じたあれは明らかに男。

椎名の頬に朱が差す。

未だ六歳の子供とはいえ、男に抱き締められたのだから気恥ずかしい。

「あの人はどうなったのかな？」

「椎名ちゃんと一緒に轢かれて死んじゃったからね、椎名ちゃんの次に相手をする事になってるよ」

少し沈んだ表情から、真実だと理解した椎名は哀しげな顔になる。

「それでね、君への用事から済ましてしまおうか」

「私への用事？」

「椎名ちゃんは転生って知ってる？」

「輪廻転生の事？」

「うん、正解」

意外な事に神道系の服装の椎名が、仏教系の概念を理解していた。

「（神道系にも、輪廻転生って有ったっけ？）」

それは兎も角……

「椎名ちゃんを助けようとしてくれた人にはね、使命が有るんだよ」

「使命って？」

「詳しい事は省くけどね、悪い神様が別の世界で悪い事をしているの。椎名ちゃんを助けようとしてくれた人は、その悪い神様をやっつける為にその世界に転生して貰う心算なんだ」

「へぇ……」

「で、椎名ちゃんに此処に来て貰ったのはね、君にも同じ世界に行って欲しいんだよ」

「行く！」

「即答っ！？」

アッサリと答えた椎名に、なのはは驚いた。

正直、どう説得するか悩んでいたのだが。

「その世界には私を助けて……助けようとしてくれた人が行くんだよね？」

「え？　うん、そうだね」

「だったら行く！」

「じゃあ、合流の手筈は整えるから椎名ちゃんは人間じゃなく、エルフに転生してね？」

「うん！」

素直な良い子の様だ。

「それで、一応はルールだし何か欲しい能力は有るのかな？」

記憶持ち転生のお約束だ。

「よく判らないから適当で良いよ」

「……そう」

心中は複雑だが、難しい力を欲しがらなくて良かったと思う事にした。

なのはは下級神であるが故に、強力過ぎる能力を与える事が難しい。

不老不死だの、無限の剣製だの、王の財宝だのと欲張る者が多かった。

無茶振りチートを与えるには少し力が弱い。

「それじゃあ、椎名ちゃんが初めから持ってる能力を底上げするね。後は霊力を物質化出来る技能と、氣力と魔力を使えて融合も出来る技能を上げる♪」

何とか、この程度であれば技能を詰め込める。

「あの、私を助けようとしてくれた人は何処で逢えますか？」

「椎名ちゃんは【ゼロの使い魔】って小説、知っているかな？」

「知らない。【魔法少女リリカルなのは】なら知ってるけど……無

印とA-sはあんまり覚えてないけど」

まあ、二歳かそこらの頃の噺だし……

「お父さんが観てたのを、一緒に観てたんだよ。で、Strikers の時の噺を観て、ティアナ・ランスター撃墜事件の議論を……って、どうしたの？」

「じ、事件とまで……」

何だかなのはが落ち込んでしまった。

実は、原典（アニメ）と同じ事をやらかした挙げ句に、旦那様にどやされた事もあって、割とトラウマになっていた。

しかも、目の前の椎名から事件呼ばわりされたのが、結構キツイ。

「と、兎に角ね。知らないのならあっちで彼と出逢ったら、見せて貰えばいいと思うよ？　彼にはライトノベルやDVDを軒並み持たせて送る予定だから」

「うん！」

「それじゃ、またその内に会おうか」

「あ、その人の名前は？」

「優斗君だよ」

「ゆうと」

こうして、那由多椎名という少女は転生した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

金髪に碧眼、頭の後ろには赤いリボンを着けた耳の尖った雪肌の少女。

転生した椎名は、大いなる意思の天啓でシーナと命名される。

それから暫くして、シーナはビダーシャルの姪であるルクシャナと出逢い、友人となった。

人間に興味を持つ変わり者のルクシャナと、何故かは誰も判らないが人間に詳しいシーナ。

出逢えば、気が合って友達になるのも時間の問題だったのだろう。

前世では六歳までしか生きられなかったシーナだが、今生では生を充分に堪能出来ていた。

「ね、ね、また蛮人の事を教えてよ」

「ルクシャナ、蛮人じゃなくて人間だよ？」

「でも、みんなそう呼んでるし」

「あのね、ルクシャナだって亜人とか人間に呼ばれたら嫌だよね？」

「それは……」

よもや、亜人どころか耳長族とまで呼ばれるとはこの時は未だ、知らなかった。

「人間からすれば、人と似て非なる者……人間の亜種って事で、オーク鬼とかと同列に亜人呼ばわりだよ」

「そ、それは嫌ね」

六歳までのとはいえ、前世の記憶を持ち合わせている椎名は、人間を“蛮人”と呼ぶ気にはなれない。

幾らこの世界の人間が肥沃な大地のサハラを、砂漠に変えた原因だとは云えど、前世で人間のシーナとしては、やっぱり蛮人と切って捨てられなかった。

それに未だ見ぬ“彼”は、人間として転生する筈なのだから、蛮人呼ばわりして嫌われたくもない。

「そう言えば、シーナの着てる服は何なの？　ずっと不思議に思ってたんだ」

白無垢に緋袴は所謂、巫女さんルック。

しかも前世での話ではあるとはいえ、本物の巫女だったシーナはこれを完全に着熟していた。

巫女さん故なのか、それともエルフだからか弓矢の扱いにも長けて

いるシーナ。

部族内でも最高の弓術師として、勇名を馳せている。

宛ら、それは地球の神話に在る存在、月と狩猟の女神アルテミスの如く。

これで人間贔屓でさえなければ、若くしてビダーシャルを抜いて評議会に抜擢されていただろう。

故になのはから貰った霊力を物質化する能力で弓矢を形成して、それを射る練習を欠かしていない。

勿論、咸卦法の練習もだ。

只、明らかにエルフの持つ力ではないと理解していたシーナは、誰にも知られない様にしていたが。

知っているのは、親友であるルクシャナと偶々見付けたビダーシャルのみ。

そんなエルフ生（人生に非ず）を満喫している中でのとある夜中の事だった。

家で眠るシーナは夢を視ている。

その夢の中で、久しぶりに会った人物？　が居る。

「椎名ちゃんにとっては、何年振りかな？」

「魔ｏ……なのはさん！」

「魔ｏ何かな？」

ブンブンブンと首を横に振るシーナ。

ニッコリと笑顔だが、あからさまに目が笑っていなくて怖い。

「まったく、どいつもこいつも魔■、■王って！」

そしてブツブツと呟いて、黒いオーラを背後に揺らめかせていた。

「あの、話しはどうなったんですか？」

「ああ、そうだね」

言われて我に返る。

「ユート君、椎名ちゃんを助けようとしてくれた男の子をね、【金色と混沌の現子】というんだけど、彼をネフテスに誘っておいたから椎名ちゃん、ユート君の事を宜しくね？」

「【金色と混沌の現子】って？」

「それは彼の、ユート君の魂を言霊にしたモノだよ」

「ふーん、そっか～」

だけど漸く逢える。

シーナはそれがとても嬉しかった。

前世の感覚で、六歳の頃の可愛らしい憧れは、エルフとしての生を送る打ちに、未だ見ぬユートに恋い焦がれる様になっていた。

自分はエルフ、ユートは人間では結ばれるのも難しいかも知れないが……

「頑張ってね、椎名ちゃん……ううん、シーナ」

そんな声を聞きながら、意識が闇に堕ちていく。

朝日に目が焼かれ、眩しさから目覚めたシーナ。

早速、ビダーシャルに会いに行った。

評議会の議員の中で、比較的だが話し易いからだ。

そして、なのはからの天啓を受けてから一年。

砂漠（サハラ）を越えて人間の子供が2人、ルクシャナに連れられて訪れる。

その日から、シーナの本当の物語は始まった。

・

外伝噺：シーナの転生物語（後書き）

・

シーナのＦａｔｅ風ステータス。

↓の後ろは咸卦法を使った時のモノです。

【名前】
シーナ・ナユタ

【クラス】
霊術師

【二つ名】
無し

【属性】
秩序・善

【資質】
氣力と魔力の親和性。
精霊使い。
霊術。
霊力の物質化。

【使い魔】
無し

【能力値】

筋力：B→B＋
耐久：C→C＋
俊敏：A＋→A＋＋
魔力：A＋
幸運：C
宝具：EX

【クラス別能力】
霊感：A
精神体への感応力が高く、純魔族や精霊に対してダメージを与え易い。

対魔力：D→D＋
ドットまでの魔法なら無効化出来る。ライン以上でもある程度は緩和可能。

【保有スキル】
直感：A
トラックに轢かれた前世の経験からか、高い危険察知能力を獲た。

咸卦法：B
魔力と氣力を融合し、自身の能力を現状はランクが＋分だけ上がる。B以下の精度だとステータス上に表れない。咸卦法の精度（ランク）が上がれば更にステータスは引き上がる。

霊力物質化：C
霊力を簡単な武器や防具として使える。但し、現在は一度に一つしか物質化出来ない。弓矢はそれで一組。

【宝具】

牡牛座（タウラス）
ランク：ＥＸ
種別：空間宝具
レンジ：
最大捕捉：
牡牛座の紋様を宝珠に埋め込んだ一種のデバイス。
字祷子変換で様々なアイテムを仕舞って置ける。
これは招喚器でもある。

大図書館の司書長（アンブロシウス）
ランク：ＥＸ
種別：対人宝具
レンジ：１～９９
最大捕捉：１人
本来はセラエノ断章に記載される鬼械神。これはその贋作だが、窮めて真作に近い出来となっている。
普段は牡牛座の中の虚数展開カタパルトで待機する。

偽・颶風弓（ガルヴェイラ）
ランク：Ａ
種別：対軍宝具
レンジ：１～９９
最大捕捉：５０人
闇を撒くもの（ダークスター）の五つの武器の一つ、颶風弓（ガルヴェイラ）を模して造られた弓。精神力を矢に変換して射てる。
普段は牡牛座の中で待機。

アンブロシウスの訳語は、セラエノ大図書館を元ネタにしています。

牡牛座（タウラス）は、ハスターの住処、ヒアデス星団を元ネタにしています。

第３５話：評議会と鉄血団結党（前書き）

・

思ってた以上にネフテス編が長くなってしまった。

第３５話：評議会と鉄血団結党

・

砂漠の民（エルフ）の国であるネフテスの首都アディールは、朝っぱらから騒然となっている。

特に評議会（カウンシル）の集まる建物カスバにでは、ネフテス統領テュリュークという老エルフを中心に据えて、議員一同が話し合いを続けていた。

蛮人がこのエルフ世界（サハラ）に、たったの２人でやって来たのだ。

ただの自殺志願者だとしか思えない。

それとも、蛮人の子供風情に舐められているのか？

どの様に議論を繰り返していても、決して辿り着けない結論が在る。

即ち【自信が有るから乗り込んで来た】という結論。

エルフは西戒を侮り、見下していた。

況してや子供だ。

同じ人間でさえも初見では見縊る年齢なのだ、エルフが侮るのも無理からぬ事。

「アリィーと戦い、油断をしていたとはいえ降した事を鑑みれば、自信が有っての事だろう。反射（カウンター）を無力化したらしいしな」

ビダーシャルが自分の意見を言うと、またもや周囲の議員達が騒然となった。

反射（カウンター）は魔力が強く、精霊との親和性が高いエルフならではの魔法。

それなりに高位の術者なら大概は行使出来るし、当然ながら騎士たるアリィーも使える訳だ。

だが、ユートは切り札で反射（ジョーカカウンター）を無力化している。

エルフにしてみれば、反射（カウンター）は切り札（ジョーカー）と呼べる術だけあり、それの無力化は衝撃を与えた。

反射（カウンター）しか能が無い訳でもないが、やはり脅威に思わざるを得ない。

「アリィー、他に何か情報は無いのか？」

「それは……」

本気を出す前に砂漠に埋められてしまい、結局のところ反射（カウンター）を無力化した方法も解らないし、後は『エア・ハンマー』という風の魔法を使ったのみだった為、情報らしい情報は得られていなかった。

「少年の方は兎も角、少女の情報は無いのか？」

「申し訳ありません」

再びビダーシャルに問われたアリィーは、項垂れながら謝るしかない。

「詰まり、君はあの蛮人を子供と侮った挙げ句、情報を得る機会（チャンス）すら棒に振ったと？」

わざわざ戦闘までしておきながら、殆んど何の情報を得られなかった上に、相手はどうも事前にある程度の情報を持っていた様子。

しかも……

「蛮人の少年はアリィー、君の反射（カウンター）を視て術式を覚えたと言っていたのだな？」

「は、はい」

「と言う事は、彼は君との戦いで反射（カウンター）を見極めたのだろうな」

「ま、真逆？　では僕は無駄に蛮人に情報を与えてしまったと！？」

「そういう事だろうな」

驚くアリィーを横目に見ながら、ビダーシャルは冷静に分析をしていた。

何事に於いても情報は重要な位置を占める。

情報を軽んじる者は何事も成せないし、戦争では真っ先に生命を落とす。

故に、ビダーシャルは情報を重要視している。

アリィーは短慮で情報を得る機会を逸した。

それが後にどんな悪影響を及ぼすか、ビダーシャルにも判らない。

「それでテュリューク殿、どうするべきですかな？」

議員の1人が、老エルフに裁決を求めてきた。

今も首都アディールに居るユートとユーキ。

その2人をどうすべきか、子供とはいえアリィーを降せる実力は無視出来ない。

「私の擁する【鉄血団結党】を使い、蛮人共を抹殺致しますかな？」

「エスマーイル殿、それは余りに危険ではありませんかな？」

下手を打てば切り札（ジョーカー）どころか、それを上回る鬼札（ワイルドカード）が出てくる。

ビダーシャルはアリィーの反射（カウンター）を無力化したユートの魔法も気になるが、石礫を精霊魔法で飛ばした一般エルフを燃やした“力”も気にしていた。

蛮人（にんげん）の使う魔法とは、明らかに一線を画していた。

寧ろアレは……

「（精霊の力に似ていた）」

系統魔法と精霊魔法は、同じ精霊に干渉する術でありながら、その気配は微妙に異なる。

ユートが使ったのは精霊の力を直接行使する精霊術である為、エルフの精霊魔法と気配が似ていたのだ。

違いは、王の権能で命令を出しているか、その事象毎に契約でお願いしているかであり、どちらが強力かと言われれば精霊術に軍配が上がるだろう。

「私は、彼らと話し合いの席を設ける事を提案する」

エスマーイルの徹底抗戦の構えを、真っ向から叩き切るビダーシャル。

議員達は、碌な意見も出さずにざわつくだけだ。

彼らは所詮、自分の議員の任期を無難に終えたいだけの日和見主義者。

積極的に意見など言って、それで不利益を被りたくはないのだろう。

此処に並ぶ部族の代表として座る議員達は、何かしら失点があればそれが部族全体の不利益となる。

故に、自分の行動で責任を取らされる事を最も嫌う。

惰性的なエルフの体質は、シーナや姪（ルクシャナ）の影響か、唾棄すべきだという考えがあった。

「ふむ、ビダーシャル殿とエスマーイル殿は正反対の意見か。誰か他に意見は無いかな？」

全く意見は出ない。

ビダーシャルは頭を抱えたくなる。

閉鎖的で排他的なエルフ。

変革を知らない体質など、蛮人とまるで変わらない。

「（フッ、これが人間を蛮人と蔑む我らの正体か）」

自嘲気味に笑う。

どうやら、ビダーシャルもシーナに毒され過ぎているらしい。

「そもそも、奴ら蛮人共は自らの欲望を満たすべく、幾度となく戦争を仕掛けてきている。何処に話し合いの余地が有るのか？」

「だが、彼ら自身が戦争をしていた張本人ではあるまい！　ならば話くらい聴いても問題は無いと考える」

「やれやれ、流石は蛮人気触れのルクシャナ殿の叔父だけあって、蛮人を庇い立てですかな？」

「それは関係あるまいよ。私はあの少年の力が未知数故に、行き成り敵に回す様な真似は避けたいだけだ」

本当に敵に回したら、確実に敗けるのだとビダーシャル達は知らない。

「何故、エスマーイル殿は徹底抗戦を謳う？」

「蛮人など死んでも誰も困るまい。それに、我が『鉄血団結党』のファーティマ・ハッダード少校は手柄を欲しているのでね」

「ファーティマ……か」

ファーティマ・ハッダード少校は、水軍に所属している『鉄血団結党』の党員であり、このエルフ世界（ネフテス）を出て行ってしまった、真珠（シャジャル）の一族だった。

裏切者シャジャルの一族、それ故に肩身の狭い思いをしている事は、ビダーシャルとて知っている。

だが、そんな個人の私怨を優先させる様な事を言うなどと、エスマーイルらしからぬと思う。

ビダーシャルがエスマーイルを見ると、何故か額には赤い瞳の様なモノが浮かんでいるみたいに感じた。

「（な、何だ？　目の錯覚だとでもいうのか？）」

エスマーイルの額にはもう何も映らない。

「それで、テュリューク殿の裁決は？」

多数決ではないが、現状はビダーシャルとエスマーイルが各々、話し合いと交戦を唱えている。

他の議員は意見無し。

後は統領のテュリュークがどちらの意見を容れるか、それで本件の答えが決まると言っても過言ではない。

シン、と静まる評議会本部（カスパ）の最上階、評議会議会室内で老エルフに視線が集まる。

テュリュークは目を閉じ、椅子の背凭れに凭れ掛かって思案した。

「（これも大いなる意志の試練なのか……）」

エスマーイルの言い分も解らないではないが、懇意としている若くも思慮深さを持ち合わせたビダーシャルからの報告は、テュリュークとしても見過ごせない。

曰く、彼の蛮人の少年が使ったのは、蛮人が一般的に使う魔法と異なっており、寧ろ自分達エルフが行使する精霊魔法に近かった。

そして、少年の目的はどうやら精霊の祭壇に向かう事らしい。

ではその意味する処は？

「（蛮人にありながら、我らと同じく精霊魔法を使えるのか？　違うな、よもや精霊と契約を……？）」

テュリュークの考えが正しければ、下手に敵に回してしまうと一族全体が不利益を被ってしまうだろう。

それは避けたい。

それに少年は精霊の祭壇に行く為、話し合いを望んでいるらしい事もビダーシャルから聞いていた。

「（初めから喧嘩腰になるより、話し合いで解決出来るならそうするべきか）」

考えを纏め、テュリュークは閉じていた目を開いて、議員達に裁決を下す。

「先ずはその蛮人の少年達と話し合ってみよう」

「よ、宜しいのですか？」

テュリュークの裁決を聴いて、議員の１人が訊ねた。

「（反対なら反対と、最初からそう言えば良かろう。裁決が降ってからわざわざ聞くのは、責任の在処を明確にしたいからか）」

ビダーシャルは呆れてモノも言えない。

「交戦してみて敗けましたという訳にはいくまいよ。ならば、取り敢えず話くらい聞こうではないか」

「テュリューク殿がそう仰るならば」

議員はそれで口を閉ざす。

「テュリューク殿、それなら一つ意見があります」

「ほう、ビダーシャル殿。それは？」

ビダーシャルからの意見、テュリュークは面白そうに訊ねる。

「我らは彼らを蛮人と呼んで憚りません。然しそれは彼らから我らが同様に呼ばれても、それは仕方がないと自ら言うに等しい」

「……っ！」

それを聴いて、アリィーが苦虫を噛み潰したかの様な表情になった。

それは先だってのアリィー自身、それを指摘されていたからだ。

蛮人と蔑む人間から。

「ビダーシャル殿、蛮人は所詮蛮人でしょう」

笑いながら言う議員。

「彼らは、蛮人と呼ぶには礼儀正しい。名前すら名乗らぬアリィーと、名を交わした彼らとルクシャナ……果たして蛮行に奔っていたのはどちらでしょうな？」

「む、う……」

笑っていた議員の眉根に皺が寄る。

「況してや、アリィーは自ら喧嘩を売ったに等しい。少年に燃やされた同胞も、それは同じだった。これでは、我らこそ蛮人だと言ったのと変わりますまい」

「ビダーシャル殿の言う通りだ。我らは言葉を用いて話し合える生き物よ。
彼ら自身が関わらぬ過去の遺恨を、彼らにぶつけるなどそれこそ蛮人の所行だ」

テュリュークが纏める。

「エスマーイル殿も、それで良いな？」

「……判りました」

無表情に、目を閉じて席に着く。

「では、ビダーシャル殿。君には彼らを連れて来て頂きたい」

「了解です」

ビダーシャルは席を立ち、帽子を手にすると被りながら階下に向かうと、評議会（カスバ）本部を出てシーナの家へと向かった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【シーナの家】

シーナに起こされ、朝餉を楽しむユートとユーキ。

「ごめんね、こんなモノしか出来なくて」

「いや、結構懐かしいし」

朝餉を作ってくれたシーナだったが、内容はコーンを挽いた粉で作ったパンと、コーンポタージュ。

ユートとしても、コーンポタージュは彼方の世界でしか食べていないから、通算でもう１０年は口にしていい事になる。

小麦やライスのパンは兎も角、コーンのパンは流石に食べた事が無いが……

「あのさ、シーナ」

「ん、何？」

「このコーンをさ、種用に貰えたりはしないかな？」

「え？」

「ハルケギニアには捜したけど、行商から馬鈴薯を手に入れるのがやっとでね、玉蜀黍は手に入らなかったんだよ」

馬鈴薯は出来る限りの数を行商から買い入れ、ド・オルニエールで確りと畑で育てたのだ。

何十年もの技術から作られた高水準の肥料のお陰で、馬鈴薯は僅か一年足らずで豊作となり、アルビオンに出荷されている。

ユートが水の精霊王と契約してからは、水で困る事はなくなった事もあり、ド・オルニエールは凶作と無縁でいられたのも大きい。

仮令、雨が降らずに他領が困っていても、ユート自身の精霊の加護で水が豊富に得られるからだ。

馬鈴薯で可成り潤沢な資金を獲た事もあり、他にも幾つか良さそうな植物を捜していた。

玉蜀黍もその候補だ。

ハルケギニアでは手に入らなかったが、よもやネフテスに有ろうとは思いもよらなかった。

だが、玉蜀黍は全く手に入れる事は出来ず、この世界には無いと諦め掛けていたのだ。

「そうか、玉蜀黍は育成に水が余り要らないし、発芽温度は約３０℃が必須だ。此処は元々、水が少なかったし気温も調整出来る」

ユーキは気が付く。

ハルケギニアに玉蜀黍が存在しないかの如く、見当たらなかった理由に。

「だから、エルフが独占していたんだね」

ネフテスで無理なく栽培が可能な植物、それが玉蜀黍だという訳だ。

「丁度、元ド・フォート領に大量の空き地が有るし、此処の玉蜀黍が欲しい」

「私の一存で決められないんだけど、そこら辺の事は評議会（カウンシル）と交渉して欲しいな」

シーナは別にお偉いさんではない為、輸出入に関して決定権など有りはしない。

「やっぱり精霊をネフテスで大暴れ……」

「そういう事は慎んで欲しいのだがね？」

「うおっ！？」

声を掛けられ、ユートも驚いてしまう。

「って、ビダーシャル様、ノックもしないで入らないで下さい！」

「済まないなシーナ」

悪びれもせず、ビダーシャルが家に入って来る。

「ユート……だったかな。評議会（カウンシル）で一応の結論が出た。３人共、来て貰えるか」

もう、ユートの事は蛮人と呼ばないらしい。

喧嘩を売るのが目的では無い以上、余計な波風は立てたくないのだろう。

「３人？　ユーキは兎も角として、私もですか？」

「そうだ。曲がりなりにも一夜を人間と共に過ごしたシーナの意見、貴重な情報として扱えるからな」

「わ、判りました」

シーナは首肯した。

「それと、玉蜀黍が欲しいという話だったな。私の方でも口添えはしよう」

「それは助かるけど……」

「相応の対価は支払わねばなるまいが、それは要交渉という事になるがな」

どうやら交渉の余地は有るらしい。

3人は直ぐに出発の準備を整え、評議会本部（カスバ）へと向かった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

評議会本部（カスバ）にやって来た3人は、グルリと席に着く評議会議員達の視線に晒されている。

「ワシが、このネフテスを取り纏めておる統領テュリューク じゃ」

「初めまして。トリステイン王国貴族、ド・オルニエール領の領主

サリュートが嫡男ユート・オガタ・ド・オルニエールと云います。エルフの挨拶は疎い故に、此方の挨拶の仕方で失礼を致します」

「同じく、ユートの義妹でユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールです」

フェイス・チェンジの首飾りを外し、数年振りに素顔を曝したユーキ。

その素顔は、長い青髪にアクアマリンの如く瞳、要するに幼いタバサから眼鏡を外して、髪を伸ばした感じだった。

流石のユートも相手が礼儀を守って、正しく挨拶をしてきたのに喧嘩を売る様な真似はしない。

無礼には無礼で返す分、礼には礼で返すのだ。

「して、この度のユート殿達のネフテス来訪の目的は精霊の祭壇と聞くが、其処へ行きたい理由を教えて頂いても宜しいか？　彼処は我らエルフでさえ意味を成さぬ場所。人間のユート殿にはそれ以上に価値の無き場所なのだが……」

「目的は土の精霊に会う事ですよ」

「ぬ？」

「僕はトリステイン王国に所属するメイジだけれど、現在は唯一の精霊術師でもあるのですよ」

「精霊術師とは？」

精霊魔法の使い手なら理解も出来るが、精霊術師というのは初耳だ。

精霊魔法は蛮人（にんげん）が先住魔法と呼び、怖れて蔑むエルフや翼人、吸血鬼や韻竜などの知恵を持った人間と呼ばれる種族以外の種が扱う、精霊との契約で行使出来る魔法の事。

場の精霊と契約する事によって、強力な力をも行使が可能で反射（カウンター）は護りの術としては、最高の魔法だろう。

只、数を契約出来なければ力を発揮出来ないという、割と致命的な弱点も在る。

ユートがテュリュークからの問いに答えるべく、ゆっくりと口を開く。

「先ず、貴方がたの精霊魔法は場の精霊と契約して、その精霊に祈願する言霊を口訣にて紡ぎ、力場を発生させる魔法ですね？」

「うむ、正しく」

テュリューク……否、彼だけではない。

ビダーシャルやルクシャナは云うに及ばず、アリィーや議員達も正確な精霊魔法の仕組みを答えられ、驚愕してしまう。

テュリュークとて、統領としての威厳を保つ為に平静を装うのがやっとで、声が若干だが掠れていた。

蛮人（にんげん）は先住魔法と呼び、恐れるだけで詳しいシステムは識らないと、

高を括っていたのだ。

「僕の使う精霊術も、精霊と契約しているという点では同じですが、契約している相手が違うのですよ」

「そ、それは……？」

「此処で少し、精霊の在り方について話します」

「？」

エルフ達は思う。

この蛮人（にんげん）の少年は、蛮人（にんげん）でありながら精霊の何を識るというのか？

「精霊には大きく分けて、三種・四組が存在します。四組とは火、水、風、土の四系統。三種とは自我を持たない精霊、自我を持った精霊主、更に各系統を統括している最上位にして概念存在……精霊王です」

「精霊、精霊主、精霊王」

エルフでさえ識らない。

彼ら程、精霊と密接に関わる種族も居ないが、そんな概念は持っていなかった。

「精霊……或いは小精霊とも僕は呼びますが、彼らが精霊魔法で貴方がたや他の知恵在る種族が契約している精霊です」

エルフや韻竜達が契約し、その力を行使している相手が小精霊で、場の精霊だ。

因みに、樹の精霊というのも存在するとされてはいるが、あれは樹という生命と事象の狭間に在る為、精霊魔法で契約して行使出来るのだが、正確には少し違った存在だ。

木々の自我無き意思を契約で括り、ブランチの魔法をエルフや翼人が使ったりしているが、樹の自我であるドライアードやトレントは括れない。

樹の自我は一種の集合意識……付喪神なのだから。

「精霊主とは、我が国に有るラグドリアン湖に住まう水の精霊や、アルビオンの風の精霊、火竜山脈の火の精霊の様な自我を持っている精霊です。彼らは精霊王の欠片であり、精霊王の意を伝う地上代行者です」

故に、彼らは各系統が形を採た姿で顕れる。

例えば、水の精霊ラクスは水が依代となって形を採る事で、ラクスの意識を顕現する訳だ。

精霊とは精神生命体。

スレイヤーズの純魔族と、実質的に同様の存在。

水や火は仮初めの依代に過ぎなかった。

「精霊王とは全ての精霊を統括する概念。火が熾るのは火の精霊王

が在るから、大気が吹き荒ぶは風の精霊王が在るからですよ」

エルフ達は言葉も無い。

彼らとて、詳しいシステムを識らなかったのに、蛮人と蔑んでいた人間に精霊の詳細を説明されたのだ。

無理はないだろう。

世界に満ちる原子を、精霊王という概念が四系統を組み上げている。

精霊を操る力、親和性とは血脈に宿る。

マギ族の血脈が代々メイジなのも、マギ族の血を引かない原住民だった人間が、平民として魔法を扱えないのも実際はその為だ。

「僕は貴方がたと違って、精霊王と直接契約をしている契約者（コントラクター）という存在です。それ故、場の精霊と契約しなくても精霊の力を使えるし、強制力も強い。精霊王の加護で契約した三系統でダメージを受ける事も無い」

「な、何と!?」

「例えば、この評議会本部（カスバ）の精霊とテュリューク殿が契約していても、貴方が精霊魔法を使って僕に攻撃出来ない。少なくとも土以外では。これが僕の貴方がたへの鬼札（ワイルドカード）です」

テュリュークは青褪める。

もしも、ユートが聖戦に於いて尖兵を務めたならば、自分達は精霊

魔法を発動も出来ずに殺られてしまう。

「そんな莫迦な！　蛮人が流言で我らを惑わすか？　風よ、刃と成りて刻め！」

議員の1人が堪らず叫び、風刃でユートを攻撃しようと口訣を紡ぐ。

「無駄な事を……」

ユートは慌てず騒がず風の精霊の支配権を奪い取り、風刃の発動自体をキャンセルさせた。

風刃を使おうとした議員は驚愕に目を見開く。

「あ、あ……？」

ガクリと項垂れ、椅子に凭れ掛かって放心した。

「精霊術師と戦うリスク、ご理解頂けましたか？」

「……ユート殿は我らを滅ぼすのか？　悪魔と組んで大災厄を再び起こそうとしているのか？」

「悪魔……虚無の担い手。僕はそんな心算はありませんよ。嘗て、始祖ブリミルが何を思ってサハラを砂漠に変える様な魔法を使ったのか、それは窺い知れません。アルビオンの様に風石の暴走で浮かび上がるのを阻止したかったのか、或いは元の世界に帰りたかったのか……だけど僕には関係無いですね。虚無の担い手の居場所は把握してます。その気になれば直ぐにでも集められるけど、そうしていない事が僕の言葉を肯定していると考えて下さい」

一気に捲し立てる様に喋ると、テュリュークを見る。

「悪魔（シャイターン）の居場所を知っているのか？」

「勿論。ガリア、トリステイン、アルビオン、ロマリアの四つの国にそれぞれが1人ずつと、本来は予備でありながら目覚めたイレギュラーたる5人目まで」

「ぬぅ……」

唸るテュリューク。

精霊の力を持ち、エルフの精霊魔法をキャンセル出来るユートと、悪魔（シャイターン）の末裔。

下手な行動はエルフ全体を危機に陥れる。

「此処までですな」

「エスマーイル殿？」

不意に立ち上がり、パチンと指を鳴らす。

その途端、バラバラと足音を立てて独特な服装を着たエルフ達が評議会（カスバ）本部議会室に雪崩れ込んで来た。

白をを基調としたアンダースーツの上に、首筋は青い宝石であしらった留め金で留め、胸元から腹に掛けて開いた青いオーバースーツを着て白いマントを羽織っている。

ピッタリとフィットして、身体のラインがクッキリと表れる水軍の士官服。

腰にはサーベルを佩いて、先頭に居る少女は拳銃すら手にしている。

その拳銃は、風石を利用して弾を撃ち出す風銃。

士官服の腕章は『鉄血団結党』のモノだ。

原作開始までに八年。

目の前の少女がファーティマだとすれば、最近になって少校になったばかりなのだろう。

見た目は原作より僅かに幼いが、エルフの年齢は人間と異なる故に八年は誤差の範囲内という事か。

「何の真似か、エスマーイル議員！」

「勿論、我らエルフの敵たる蛮人の排除だよ。ビダーシャル殿。我が擁する『鉄血団結党』で奴らを始末してしまえば良い」

「ば、莫迦な事はよせ！」

突然な蛮行焦るビダーシャルを余所に、エスマーイルが右腕を挙げると、風銃を『鉄血団結党』の党員が、ユートとユーキに向けて構える。

「撃て！」

その一言と共に降ろされる右腕。

その瞬間、『鉄血団結党』党員達が風銃の引き金を引くと、バシュッと空気が破裂する様な音と共に、弾丸は一斉に2人に向かって撃ち放たれるのだった。

.

第３５話：評議会と鉄血団結党（後書き）

玉蜀黍は、馬鈴薯と同じで某・小説を出典元としています。

一応、引き替えに仏掌薯で作った山酒を渡す予定。

シーナがいずれ、偽・颶風弓（ガルヴェイラ）を手にする予定ですが、偽・瞬撃槍（ラグドメゼギス）等も登場予定です。

どれもユートが造るマジックアイテムで、本物（オリジナル）ではありません。

第３６話：現れた混沌　放て未完の奥義！（前書き）

・

何時もながら、独自設定の嵐です。

本編に出てくるデモンベインの設定は、飽く迄も独自解釈から出たものです。

第３６話：現れた混沌　放て未完の奥義！

・

『鉄血団結党』の党員が撃ち放った風銃の弾丸。

ユートは風の精霊を集め、竜巻の如く風を逆巻く事で弾丸を弾く。

「なっ！？」

タレ目気味なエルフ少女、ファーティマ？　が驚愕して目を見開いた。

今のは精霊そのものに干渉して動かす精霊魔法、蛮人の使う魔法とは明らかに異なるからだ。

然し、自分達が使う魔法とも違う。

「き、貴様っ！　いったい何をした？」

風銃の再装填は愚策。

エルフが使う風銃も、機構的には人間のマスケット銃と変わりなく、一度撃ってしまえば再び装填しなければならない。

そして、それを見逃してやるユートでもなかった。

「ユーキッッ！」

「了解！」

竜巻で弾丸を防いでいる間にセットアップした自動拳銃と、銀色の回転式拳銃。

ユーキはフルショットで撃ち放ち、正確に『鉄血団結党』党員のサーベルを撃ち抜いてしまう。

リボルバーの弾丸は風系統を詰めた物で、自動拳銃は普通に弾丸を放つタイプ。

「ば、莫迦な？　連射しただと！？」

一発放てば再装填の風銃と違い、一度の装填で六連発が可能な銃を見て、エルフ達は驚く。

更に驚愕すべきは再装填。

ユーキは自動拳銃のマガジンを抜き、ホルスター内のマガジンを装填。

リボルバーのカートリッジもあっという間に装填してしまう。

合計で約六秒。

抜き出しに一秒、取り出しに一秒、装填に一秒。

一挺につき三秒、二挺で六秒の計算だ。

これがユーキの全速全開。

再び『鉄血団結党』に向けて銃を構え直す。

これにより、武器を喪った党員は動けなくなった。

「さて、テュリューク殿。これはどういう事かな？」

「む、うう……」

老エルフは呻く。

エスマーイルが、この様な愚挙に出るなど思いもよらず何も出来なかったのだ。

「チッ！」

ファーティマが弾丸を取り出して、風銃に再装填しようとする。

「やめた方がいいな」

「何？」

「今度、風銃を使おうとしたら風石を暴発させるぞ」

「莫迦な、出来る訳が！」

「さっきはデモンストレーションとして利用する為、態と撃たせてやったんだ。でも、次は無い！」

ゾクリ……

睨まれ、背筋に冷たいモノが奔るのをファーティマは感じた。

実戦を何度も繰り返しているユートと、実戦を知らないファーティマでは役者が違う。

「エスマーイル殿！　何故こんな暴挙を？」

「勿論、蛮人を殺す為だ」

憤慨するビダーシャルを、まるで嘲笑うかの様に睨め付けて、軽口を叩く。

「巫山戯ないで貰おうか。ユートとの話し合いは今後の指標にすらなる大事！　それを台無しにする心算なのか？」

「指標？　クックック……戦えば良いではないか？　元はと云えば、奴ら蛮人共がこの地を砂漠に変えたのだからな。そうだろう？」

「……貴様、本当にエスマーイル殿か？　確かに彼は徹底抗戦派ではあったが、其処まで極端では無かった筈だ！」

鼻に付く様な嫌味な言動、人間との徹底抗戦主義など確かに有った。

然しそれはビダーシャルが政敵であり、人間が攻めて来るなら迎え討ち、殲滅してやろうという感覚だった筈だ。

今のエスマーイルの言動を鑑みると、自分達から討って出るくらいの過激さが滲み出ている。

“まるで別人の様な”

そんな雰囲気すらあった。

「ビダーシャル、貴方から見たあの男はそんなに違うのか？」

「ああ、以前から過激な物言いは有ったが、これでは別人だな」

ユートの問いに答えた。

「……態とか？　何れにしてもこれが前哨戦か」

「どういう意味だ？」

「もし、アイツが偽者だとしたらどうだろうね」

「……？　偽者だと？」

いつの間にかユートからは剣呑な雰囲気が出ている。

「アイツについて、何か変わった所は無い？」

「……そう言えば会議中、彼の額に燃える様な眼が見えたような……」

「額に燃える様な……第三の眼。どういう心算だ？　バラす様な真似をするなんて。此方の手札を見る為の捨て札って事か？」

「何か知っているのか？」

ユートは迷う。

どちらにせよ、相手にどんな思惑が有るにせよ、見付けた以上は戦うしかない。

未だに万全の態勢には程遠いが、向こうが様子見なら無様に敗けはしない筈だ。

「（ならば、敢えて乗ってやるか）」

伸るか反るかの博打だが、それでも向こうの捨て札を視ておきたい。

「アイツは、エスマーイルというエルフじゃない。
外なる神々（アウターゴッズ）であり、旧支配者（グレート・オールドワン）の一柱。その中で唯一、封印を免れた存在」

それ故、他の旧神（エルダー・ゴッド）に封印された旧支配者（グレート・オールドワン）と違い、比較的自由に活動をしている。

「神？　人間でいう始祖の事か？　それとも我々の教義の大いなる意志？」

「少なくとも始祖（ブリミル）は違う。大いなる意志とも違うと思うけどね」

尤も、エルフや韻竜や翼人が言う大いなる意志という定義が曖昧で、ハッキリと違うとも言い難いが。

「クックッ、やはりお前だったのだな？　朱翼の天陽神の衛生神、純白の天魔王に選ばれた使徒は！」

「それを知っているなら、やっぱりお前は……」

「どういう事なんだ？」

「アイツは、やっぱり偽者だ。奴は旧支配者の一柱（グレート・オールドワン）……無貌であるが故に逆説的に千の貌（けしん）を持つ存在。這い寄る混沌……、ナイアルラトホテップ」

「な……に……？」

ビダーシャルはエスマーイルを見つめ、その話に衝撃を受けた。

嫌味な政敵。

ビダーシャルにとっては、エスマーイルとはそれだけの存在。

それでも、他の同胞と違って真正面から言い合える者でもある。

「いつから……いつから成り代わっていたっ！？」

エスマーイル――ナイアルラトホテップに思わず怒鳴り付けた。

「一年程前かな？　本物は今頃、地下牢で餓死しているんじゃないかい？」

「っ！」

然も可笑しそうに、心底愉快そうに嘲笑（わら）う。

「黙れ、這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）！」

ユートは口訣を紡ぐ。

普段、頭の内でのみ紡いでいる呪文を直接だ。

「永久と無限を揺蕩いし全ての心の源よ、我が手に集いて閃光となり、深淵なる闇を撃ち払え……」

ユートの手に、心の埋より溢れ出る精神力を具現化したエナジーが収束される。

「螺光衝霊弾（フェルザレード）ッ！」

力在る言葉と共に魔法が解放され、真白の螺旋を描く精神波動がエスマーイルを貫く。

【螺光衝霊弾】

白蛇のナーガやミリーナがよく使う呪文。螺旋を描くエネルギーで攻撃する。

レッサーデーモン程度なら一撃で消滅する。

「ふっふっふ、君の現在の力を魅せて貰うよ」

先程の攻撃が、全く堪えていない口調で嘲笑（わら）うナイアルラトホテップは、パチン！　と指を鳴らすと外で大きな轟音が鳴って、地震の如き衝撃が襲う。

その衝撃から我に返ると、エスマーイル＝ナイアルラトホテップは既にその場から消えていた。

「此処から全員、、離脱した方が良さそうだ」

「どういう事だ、ユート」

「外からの震動からして、何か巨大な質量が顕れたと考えられる。なら、それが評議会本部（カスバ）を破壊しかねないだろう？」

ビダーシャルに訊ねられ、ユートは己の考えを言う。

この侭、此処に留まっていると塔ごと全滅させられてしまう。

「全員、評議会本部（カスバ）から即刻退避しろ！」

ビダーシャルが叫ぶと、我先にと評議会議員達が挙って逃げ出した。

慌てていないのは、ユートとユーキとビダーシャル、それにテュリューク。

一応、騎士（ファーリス）のアリィーも冷や汗を掻いてはいたものの、恐怖を押し殺している。

ルクシャナとシーナは出来る事も無いので、呆けている『鉄血団結党』の党員を連れて離脱していった。

「おい、君も早く離脱をするんだ！」

「そんな、エスマーイル同志議員殿が……偽者？」

未だに呆けているエルフの少女、ファーティマはブツブツと呟いて

いる。

余程のショックだったという事か。

無理もない。

これまで『鉄血団結党』の長として、皆を纏め上げていた上官が偽者で、一年間も気付かずにいたのだ。

自らの信念を、根底から崩された様なものだった。

已むを得ず、ファーティマに浮遊（レビテーション）を掛けたユートは、彼女を連れて脱出する。

外に出て、先ず驚いたのは海に巨大生物が居た事。

次が、巨大生物の隣に浮いている這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）の存在だった。

「お兄様、アレは？」

「ゾイガーだ」

「は？」

「ウルトラマンティガに登場した【超古代尖兵怪獣ゾイガー】」

超古代尖兵怪獣ゾイガー
全長５５ｍ
体重４８０００ｔ

口から光弾を吐き、超音速で飛び回る。邪神ガタノゾーア復活の兆しとされる。

「地を焼き払う悪しき翼と呼ばれ、ティガを苦しめた怪獣。いや、確かにアレの出典はクトゥルー神話で、双子の卑猥なるものの片割れ【ロイガー】の別読みだけど、それは無いだろう」

「ねえ、お兄様？　ボクはウルトラマンでも何でもないんだけど……」

「それは僕もだな。雛型のアイオーンじゃ大きさ的に不利だな」

ゾイガーは５５メイル。

アイオーンは１０メイル。

本当のアイオーンならば、５０メイルはあるのだが。

「仕方がないな、ユーキはアイオーンでゾイガーを、僕は魔法で這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）と戦う！」

「了解！」

ユートとユーキは現実逃避を止めて、這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）とゾイガーに立ち向かう為に動く。

「待て！」

「何かな、ビダーシャル」

「我々も戦うぞ！」

「無理、アレにはエルフでも敵わないから。取り敢えず下がっていてくれる？」

「だが！」

「巻き添えを喰うから！」

「う……」

已むを得ずビダーシャルは引き下がる。

「ユーキ、アイオーンを招喚したら招喚器のアイオーンを貸してくれ」

「？　判ったよ」

ユーキはよく判らなかったものの、意味は有るのだろうと了解した。

「征くよアイオーン！」

《セットアップ》

自動拳銃が顕現し、其処から更に銀色の回転式拳銃を喚び出す。

更に口訣を紡ぐ。

「永劫（アイオーン）！　時の歯車、断罪の刃。久遠の果てより来たる虚無……」

雛型（プロトタイプ）の間に合わせとはいえど、それは人では辿り着けぬ境地。

「永劫（アイオーン）！　汝より逃れ得るものは無く、汝が触れしものは死すらも死せん！」

その原典（オリジナル）は、自らを最強の魔導書と謳う獣の咆哮（アル・アジフ）に記載されし、最強の機神。

「来よ、永劫の銘を与えれし鬼械神（デウス・マキナ）……アイオーンッ！」

ユーキを挟む様に、上空と足下に顕れる魔方陣。

それが交叉し、闇色の機神は招喚される。

ユーキはアイオーンの内部に納まって、今こそ心臓であり魂となった。

１０メイルの機神は敵であるゾイガーを睨む。

そんなユーキを見て、浮いていた這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）は驚きながら、それでいて嘲笑（わら）う。

「これはこれは！　彼の天敵、最も新しき旧神が最初に駆った鬼械神（デウス・マキナ）！　ハハハハハ、　愉しい。愉しいな！」

それは一番最初の出逢い。

大十字九郎と死霊秘法の原典（はは）、アル・アジフの最も初めの戦いで駆った鬼械神（デウス・マキナ）。

その戦いでは墜とされこそしたが、アイオーンは破壊される事もなく大十字九郎は戦った。

マスターテリオンとの最初の戦いに敗れ、破壊されたアイオーンは回収されて、科学と魔術を組み合わせたハイブリッドとなる。

それから先の戦いは、そのハイブリッドを使わせる為にアイオーンは破壊され、墜とされる事となった。

幾度とない無限螺旋の戦いに於いて、ハイブリッドは少しずつ改良されていく。

クトゥグアとイタクァも、最初は制御の為のデバイスが手に入らず碌に使用出来なかったし、第一近接昇華呪法も完成せず実装されてはいなかった。

最終的な勝利まで正しく、無限一1の時間を掛ける事になる。

閑話休題

「お兄様！」

招喚器たる【アイオーン】をユートへと渡す。

そして戦いは始まる。

ユーキはゾイガーに向かって駆け出し、ユートも這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）に自動拳銃の銃口を向けて構えた。

「喰・ら・えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

ユートが自動拳銃のトリガーを引くと、マズルフラッシュと共に銃口から弾丸が放たれる。

空になったマガジンを抜き取り、予備マガジンを装填して再びトリガーを引く。

這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）は大して効いた風でもなく、避ける素振りすらない。

「ハハハハハハ、この程度では避けるまでもないよ」

「チィッ！　それでも！」

ユーキがゾイガーと格闘をしている傍で、ユートは次々と弾丸を放つ。

その弾丸の弾頭には【Ｆｌａｇｒａｎｔｉａ】と描かれており、防がれたモノはある一定の軌道を取って浮いていた。

「ん？　これは……」

それに今更ながら気が付いた這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）。

ユートは“特別製の弾丸”を一発だけを、拳銃の中に装填すると這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）に向ける。

「チッ、少し遊びが過ぎたか……む？　動きが……」

「特殊な火角結界だ。斃せなくても嫌がらせにはなるだろうって事

で……」

「あ、兄貴？」

戦いながら、ユーキは嫌な予感に打ち震える。

ユートはスレイヤーズ魔法でもなければ、系統魔法でもない口訣を紡いだ。

「ふんぐるい　むぐるうなふ　くとぅぐあ　ふぉまるはうと　んがあ・ぐあ　なふるたぐん　いあ！　くとぅぐあ！　ふんぐるい　むぐるうなふ　くとぅぐあ　ふぉまるはうと　んがあ・ぐあ　なふるたぐん　いあ！　くとぅぐあ！　ふんぐるい　むぐるうなふ　くとぅぐあ　ふぉまるはうと　んがあ・ぐあ　なふるたぐん……」

「な……に？　それは……その呪文はっ！？」

その目が言っている。

『てめえは人間を、いつも舐め過ぎだ』

「は、ハハハハハハハハハハ……、ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ、ははははははっ！」

エスマーイルの顔が、罅割れた様な嘲笑（わら）いで歪んでいる。

「いあ！　クトゥグアッ！　神・獣・形・態っ！」

ドカンッ！

放った瞬間、自動拳銃【アイオーン】のバレルが破裂してユートの

“左腕”を傷付ける。

だが、放たれた弾丸は呪文に従って金色のプラズマと化した炎が獣の姿を採り、火角結界のエネルギーさえ吸収して這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）へと襲い掛かった。

「素晴らしい、素晴らしいよ……緒方優斗君っ！　嗚呼、本当に僕は評価してるよ！　彼の大十字九郎君や朱翼の天陽神や周防達也君達と同じで、君は本当に愉しませてくれるよっ！」

クトゥグアの焔に焼かれながら、這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）はその邪悪な顔で哄笑している。

「嗤ってろよっ！」

「な……に？」

【ストライカーユニット】で飛翔し、ユートが死角に回り込んでいる。

左腕をダラリと落として、右手には何も無い。

然し、何故か右腕を真っ直ぐに振り上げている。

「ハハハハハハ、ああ……嗚呼、本当に君は……っ！　愉しませてくれるよ」

「天空（そら）の戒め解き放たれし、凍れる黒き虚無（うつろ）の刃よ。我が力、我が身となりて共に滅びの道を歩まん。神々の魂すらも打ち砕き……」

混沌言語（カオス・ワーズ）と呼ばれる、スレイヤーズに於いては魔族の力を借りた黒魔法を発動させるのに使われる言語。

「神滅斬（ラグナ・ブレード）ッ！」

斬っ！

金色の混じる漆黒の刃が、エスマーイル＝這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）を真っ二つに斬り裂いた。

『嗚呼、嗚呼、嗚呼！　君は本当に愛しいなぁ。僕の計画、エルフと人間をぶつけ合って滅ぼす計画が台無しだよぉぉ♪』

「い、言ってろ。僕の存在に気が付いて態とバラしたクセに……」

『ハハハハハハ！』

どちらも満身創痍の様にも見えるが、人間で見た目のダメージが実際のダメージと比例するユートと違い、這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）は余裕綽々の口調で話す。

這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）は、天敵であるクトゥグアの力に曝されながら、未だに不完全版とはいえど金色の女王の力の顕現たる神滅斬（ラグナ・ブレード）を受けても尚、平然としている。

『まあ、だけど少しは君に意趣返しをさせて貰おう』

這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）は右腕を掲げると、漆黒のエネルギーを“アイオーン”に向けて放った。

「なっ！？　ユーキィ！」

「え？」

余りに不意の一撃だったが故に、回避も侭ならない。

況してや、ゾイガーを抑えている真っ最中だ。

受ければ未完の機神など、あっという間に破壊されてしまうだろう。

ズガァァァァーーンッ！

大きな轟音が響くと共に、大爆発が起きる。

『ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡッ！』

哄笑、哄笑、哄笑、哄笑。

這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）は、基盤がエルフとは思えない気持ちの悪い、闇の瘴気を孕んだ嘲笑（わら）いが木霊した。

「何を嘲笑（わら）って勝ち誇ってるんだ？」

「ＨＡ？」

「爆煙に見えなくなった敵を相手に、『やったか？』は殺ってないフラグだし、勝ち誇るのはやッぱり敵が無事なフラグだよ」

巻き上げられた粉塵と煙が晴れ、視界が開けると其処にはユートとアイオーンが無事に居た。

アイオーンの前には、ズタボロになったユートが浮いている。

『へぇ？　真逆、盾になって救うとは……。しかも、その程度のダメージで済むとはねぇ』

感心したのか、ネットリと粘つく声で言う。

「ギリギリでシーナが相殺してくれてね」

ふと見れば、非物質・霊基体で構成された弓をシーナが引いていた。

『成る程、成る程！　これは少し見縊っていたかな』

あの一瞬、ユートは虚空瞬動も斯くやという速度で、アイオーンの前に移動して風の精霊を高速召喚した。

それでエネルギーを逸らす心算だったが、最も召喚の速い風の精霊と云えども、精霊の数が圧倒的に足りなかった為、逸らし切れそうにない。

其処へ、弓矢を物質化したシーナが霊矢である程度の威力を殺いでくれたのだ。

それが無ければ、五体満足では済まなかった。

「ゴフッ！」

「兄貴っ！？」

それなりにダメージは受けていたが。

『くっくっく、これは本当に……君達が真に強者となって、再び舞台に上がって来るのが楽しみだよ』

「そうかい、ならこっちも少し意趣返ししようか」

『ほう？』

ユートは口角を吊り上げ、口訣を紡ぐ。

「在りし日の姿を夢も現に望み視る、永久なる母よ、其は、夢が故に望みは叶い……顕現するは【輝く多面体】っ！」

『な、んだと？』

それは宝具。

それは夢の機構。

それは嘲笑する混沌を喚び出す器。

輝く（シャイニング・）多面体（トラペゾヘドロン）を模した魔法。

ユートが祈願した相手とは……

全ての存在（もの）の母。

在りし日の姿に還る日を夢見続けるもの。

闇よりもなお昏きもの。

夜よりも深きもの。

混沌の海。

揺蕩いし金色。

全き虚ろ。

全ての混沌を生み出せし存在（もの）

悪夢を統べる存在（もの）。

即ち、金色の女王（ロード・オブ・ナイトメア）

世界とは彼女の視る夢。

故にこそ祈願は夢の如く、世界に顕現して成就する。

召喚器なれば、それは逆も有り得る。

そう、それは送還器。

魔法という泡沫の夢としてそれは顕れたのだ。

『真逆、其処まで至るとはね……。今回は君に勝ちを譲ろう』

ユートは【力在る言葉】を紡ぐ。

「夢幻獄ッ！（ナイトメア・シンドローム）」

金色の女王の力を借りた、ユートのオリジナル魔法。

不完全版とはいえ、神滅斬（ラグナ・ブレード）を行使したユートは、その知識から新魔法を構築も出来た。

とはいえ、完全に精神力が枯渇に近い為、【ストライカーユニット】の魔力プロペラが消えて墜ちる。

慌てて、シーナがユートをキャッチした。

這い寄る混沌が送還され、残されたゾイガーを斃すべくユーキは切り札（ジョーカー）を使う決心をする。

「先ずは此処から離れないと拙いよね」

下手をすれば、ユート達を巻き込んでしまう。

手にしたのは白いカートリッジ。

それをリボルバーに入れ換えると、トリガーを引いてフルロードする。

「風に乗りて歩む存在……イタクァ、神獣形態っ！」

口訣と共に放たれるのは、極寒の体躯をした真白の竜だった。

名状し難きモノ（ハスター）の眷族、イタクァを術式化した魔法。

ユートが放ったクトゥグアとは違い、飽く迄も偽装しただけの紛い物だが……

凍れる一角竜は、ゾイガーを吹き飛ばした挙げ句に、凍結させてしまう。

それは時間稼ぎ。

これから行うのは、本来はアイオーンに実装されていない筈の力。

然れど“例のモノ”の雛型（プロトタイプ）故に、簡易版が実装されていた。

“ルーン”を紡ぎ始める。

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ・オス・スーヌ・ウリュ・ル・ラド・ベオーズス・ユル・スヴュエル・カノ・オシェラ・ジェラ・イサ・ウンジュー・ハガル・ベオークン・イル……爆発（エクスプロージョン）」

長ったらしい詠唱を紡ぎ切ると、ユーキは力在る言葉で魔法を発現させた。

「掌握（あっしゅく）っ！」

一旦、発現させた魔法を握り潰すかの如く、右手を確りと握り締める。

“例のモノ”が完成すればあの長ったらしい呪文を、詠唱せずともよくなるらしいが今は仕方がない。

「ヒラニプラ・システム、接続（アクセス）ッ！」

ユーキは右腕に組み込まれている機構を、瞬時に起動させた。

“例のモノ”では、詠唱をナァカル・コードとして、システムそのものに組み込む予定でいる。

ユーキは最後の口訣と共に駆けた。

「光射す世界に汝ら暗黒、住まう場所無し！　渇かず餓えず無に還れぇぇっ！」

掌中にボールの様に圧縮された爆発（エクスプロージョン）を、未だ動けずに居るゾイガーに叩き込む。

「レムリアァァァァァァ・インッパクトォォォッ！」

それは第一近接昇華呪法。

「昇華っ！」

最後の台詞により、解放される暴力。

アイオーンはジャンプ一番で離脱する。

圧縮され、逃げ場を失っていた爆発（エクスプロージョン）が一気に解放され、本来以上のエネルギーを荒れ狂わせた。

ゾイガーはその爆心地で、無限熱量に耐え切れる筈もなく焼滅。

砂漠にクレーターが出来ており、破壊の波はネフテスにも及んだ。

当のアイオーンは、評議会本部（カスバ）の上で悠々と立っている。

だが、レムリア・インパクトを放った右腕が、吹き飛んだのか喪われていた。

所詮は間に合わせ。

耐えられなかったらしい。

戦いが終わり、ネフテスの首都アデュールは騒然としていた。

先の戦いを観ていたなら、当然かも知れないが……

そんな中に在って、ユーキの放った魔法が悪魔魔法だと気が付いたのは、テュリュークとビダーシャルだけだった。

.

第３６話：現れた混沌　放て未完の奥義！（後書き）

.

タバサのＦａｔｅ的なステータス。ネタバレ必至。

【名前】
タバサ（偽名）

【クラス】
魔術師（メイジ）

【二つ名】
雪風

【属性】
中立・善

【資質】
風の系統

【使い魔】
風韻竜シルフィード

【能力値】
筋力：Ｄ
耐久：Ｅ
俊敏：Ｂ
魔力：Ｂ
幸運：Ｄ

宝具：Ａ＋

【クラス別能力】

単独行動：Ｃ
基本的に単独での行動を好む傾向にあり、ある程度はそれで結果を出せる。

騎乗：Ｅ
馬くらいなら乗れる。
シルフィードへの騎乗は、使い魔故の特殊事例であって、タバサに竜を乗り熟す能力は無い。

【保有スキル】

心眼（真）：Ｃ
学生としては数少ない実戦の経験者。それによって獲られた戦闘理論はタバサの窮地を救ってくれる。

直感：Ｃ
ある程度の危険は察知可能となっている。

気配遮断：Ｄ
汚れ仕事を、北花壇騎士団としてやってきた経験上、気配の遮断を覚えた。

風の系統：Ｂ
トライアングルまでの魔法を使用可能。

【宝具】
水瓶座（アクエリアス）
ランク：Ａ＋

種別：対人宝具
レンジ：１～２０
最大捕捉：１～５人
金の籠手の形をした宝具。使用者の氷結魔法の威力を倍加する。また、某・氷の聖闘士の技を使用可能。
普段は宝瓶宮の紋様の入ったペンダントの形で待機。

偽・瞬撃槍（ラグドメゼギス）
ランク：Ａ
種別：対人宝具
レンジ：１～５０
最大捕捉：２０人
闇を撒くもの（ダークスター）の五つの武器の一つ、瞬撃槍（ラグドメゼギス）を模して造られた槍。精神力を刃に変換して刺せる。
普段は刃を出さず、父親の形見の杖の代わりに杖契約して持ち歩いている。

精霊の力は獲ていないが、宝具だけ持たせたタバサをコンセプトにステータスを書いてみました。

十二宮星座の名前の宝具を持っている者は、十二宮騎士団（ゾディアック）の幹部として所属しています。

魔力はＡでスクウェアとして設定しています。Ａを越えている者は何らかの事情持ちです。

第３７話：そして事件は終結する（前書き）

今回は特筆する事が有りません。

第37話：そして事件は終結する

・

戦いが終わり、数日後……

ユートはあれからずっと、眠り続けていた。

だが、遂に目覚めの兆候が顕れる。

「う……」

「あ、目が覚めた？」

ユートが目を開くと、直ぐにユーキの顔が見えた。

「知ってる顔だ」

「何を訳の判らない事を言ってるのさ？」

若干、呆れを含む表情と声で応える。

「何だか酷い顔してるぞ。目の下は隈が出来てるし、眼は血走ってて真っ赤になってる」

ユートは頬に触れて表情を顰めた。

「ば、莫迦！　兄貴が中々起きないから、眠れないし涙ぐんじゃったんだよ」

「そっか、心配掛けてゴメンな」

真っ赤になって怒鳴ってくるユーキ、頬を触れていた手でユートはソッと頭を撫でてやる。

そんな優しい手が温かく、ユーキはまた泣き始めてしまった。

その後自分の状態を聞く。

ユートは肉体的にボロボロになっていたし、精神力も枯渇して数日の間眠り続けていたのだ。

クトゥグアを撃ち、暴発に巻き込まれた左腕も痛々しかったし、ユーキを庇って受けた傷も決して浅いモノではなかったが、幸い暴発した自動拳銃の破片が持っていた熱は、火の精霊王の加護でダメージにはなっていなかったが、食い込んだ破片を摘出しなければならなかったくらい酷い状況であった。

お陰でほぼ全身を、包帯でグルグル巻きにされてしまって動き難い。

「あれからどうなった？」

「這い寄る混沌は送還されたし、ゾイガーは撃破したから安心して。尤も、あれで終わりじゃないだろうけどね」

「だな。エルフの反応は？　アディールはどんな感じになってる？」

「今は評議会で話し合いをしているよ。僕らの処遇をどうするべきか悩んでるんだろうね。街は可成り酷い状態だよ。修繕には時間が掛かると思う」

「そっか。シーナは？」

「買い物に出掛けたよ」

問答無用で拘束されていないのは、無駄な上に下手に刺激したくないという事だろうと、ユートは考えた。

「にしても、兄貴はいつの間に本物のクトゥグアを使える様に？」

「ああ、イブン・ガズイの粉薬を造る事も出来たし、一発分だけ造ったんだよ。それと魔導書の記述の代わりには、クトゥグア召喚の詠唱を使ったしね」

ユートがクトゥグア神獣形態を放つ前、詠唱していた口訣がクトゥグア召喚の為の呪文だ。

死霊秘法（ネクロノミコン）などの、クトゥグア召喚の記述が載った魔導書は無かったが、その代わりに充分使えた。

というか、恐らく魔導書に記載されているのが召喚の呪文なのだろうが。

「よく造れたね、イブン・ガズイの紛薬なんて」

【イブン・ガズイの紛薬】

アラビアの魔術師、イブン・ガズイが発明したモノ。掛ける事で使用者の心臓が十回鼓動する間、不可視の存在を視認出来るようになると云われている。また、死霊秘法（ネクロノミコン）の断章によれば、霊などを物質化させるという。

その製法は、二百年以上遺体が埋葬されている墳墓の塵を三、微塵にした不凋花（アマランス）を二、木蔦の葉の砕いた物一、細粒の塩一を土星の日、土星の刻限に乳鉢で混ぜ合わせる。調合した粉薬の上でヴーアの印を結び、コスの記号を刻み込んだ鉛の小箱に封入する。

「墳墓の塵なんて、よくよく考えると罰当たりな話だよね」

「そういう知識を、平然と記載してるから外道の知識なんて呼ばれるんだろ？」

「魔導書なんてモノ、所詮は外道の知識の集大成か」

デモンベイン本編で、瑠璃からの依頼で魔導書を捜して欲しいと言われた際に、大十字九郎が言った言葉である。

「ハァー、やっぱり今の侭じゃあ限界だな。魔導書が在れば、今までは使えなかった術式や、紛い物で済ませてきた術が使えるのに」

「流石に無い物ねだりが過ぎるんじゃない？」

「そうかな～」

ユートとしては、鬼械神の招喚が可能な特Ａ級やＡ級とは言わないまでも、せめてＢ級の魔導書が欲しいと思った。

「在れば良いんだが」

特Ａ級の原典（オリジナル）が在れば良し、少なくとも原典からの直接写本であるＡ級から訳した出来の良いＢ級でいいから、手元に有ったらその術

式を組み込むか、或いは自身が魔導書を参考に執筆するか出来るのだが……

「まてよ、ひょっとしたら手に入るかも？」

「は？」

何かを思い付いたかの如く閃いたユート。

「ただいま～」

そのタイミングでシーナが買い物から帰って来た。

「あ、ユート。目が覚めたんだね」

「シーナ。あの戦いの時は援護ありがとうな」

「別に良いよ。私がしたくてやったんだしね」

霊力を物質化した弓矢で、シーナが援護した事は覚えている。

意外と高い威力で、アレを見て新しいマジックアイテムを思い付いた。

「なあ、シーナは弓術が得意なのか？」

「？　まあ、前世では二歳の頃から弓矢を玩具代わりに遊んでたし、死ぬ前からそれなりの腕前だったよ」

六歳で死ぬ前、正鵠を射る事は出来ていたのだ。

そして、今でも弓矢の訓練をしている。
腕は落ちるどころか上がっている筈。

「お兄様、何か思い付いたんだ？」

相変わらず、ＯＮとＯＦＦの切り替えが確りとしているユーキは、シーナが帰って来た瞬間に“兄貴”から“お兄様に”に呼び方を変えていた。

「シーナの霊力の物質化を見てて、上手い事エネルギーの具現化にアイデアが出たんだよ。シーナ、悪いんだけど弓矢、槍、剣、斧、長柄の熊手型の爪を霊力で物質化してくれないか？」

「へ？　良いけど」

シーナは首を傾げながら、言われた通りの形に物質化していく。

「フムフム、これを覚えておけば……」

其処に在るのは研究者としての目。

マジックアイテムを研究していく内に、何故かマッドな方向性で研究者と成りつつあった。

ユートが造らんとしているモノは、闇を撒くもの（ダークスター）デュグラディグドゥの五つの武器。

烈光の剣（ゴルンノヴァ）

瞬撃槍（ラグドメゼギス）
颶風弓（ガルヴェイラ）
破神槌（ボーディガー）
毒牙爪（ネザード）

とはいえ、使い手が居ないのは痛い。

ユートの将来の主兵装は、妙法村正である為に使う事は有り得ない。

だからこそ、造るのが難しい以上に二の足を踏んでいた訳だ。

然しだ、これで少なくとも颶風弓（ガルヴェイラ）を使えそうな人間（エルフ）を見付ける事が出来た。

シーナならば、紛い物ではあるが颶風弓（ガルヴェイラ）を使い熟せる筈。

「シーナ、君に仲間になって貰いたいんだ！」

「はえ？」

「僕とユーキが戦った奴、アレは未だ斃していない。それどころか、もっと力を蓄えないと世界が滅ぶ」

「そうか、アイツを斃す事が私の使命……」

シーナは元々が、ユートの補佐として転生したのだ。

柵（しがらみ）さえ無ければ否は無い。

現在、ユートの補佐役をしているユーキがイレギュラーなのだから。

「その話、我らも聴かせて欲しいな」

突然、第三者の声が響いて振り返れば、ビダーシャルが部屋の扉の傍に立っていた。

「ビダーシャル様、だから勝手に入って来ないで下さいってば！」

シーナは胡乱な瞳で見詰めていたという。

冷たい目に堪えかねたか、ばつの悪い表情だ。

「済まないな。ところで、いい加減ビダーシャル様はやめて、ルクシャナの様にせめて叔父と呼んで欲しいのだかな」

その瞬間、ユートとユーキがピシリと凍り付く。

「シーナ、ひょっとしたらビダーシャルって……」

「一応、私の母の兄になるから叔父と姪の関係だよ。ルクシャナとは従姉妹」

「あ～、成る程ね。道理で仲が良いと思った。

シーナとルクシャナの仲が余りに良かった為、ユートは少しだけ訝しんでいたのだが、これで合点もいく。

よもや、血縁だったとは思わなかったのだ。

確かに血縁であり、お互い人間に興味を示していれば同じ話題で盛り上り、仲良くもなれるだろう。

「まあ、ウチの一族にとってのお偉いさんなんだし、ビダーシャル様で良いんじゃないかな？」

「……ハァー。まあこの話はまた今度だ。ユート達は私と一緒に評議会本部議会室まで来てくれないか」

「よく僕が目覚めたのが判ったな」

「いや、単に私は様子を見に来ただけだったが、丁度目を覚ましてたのでね」

「そういう事か。ユーキ、行こうか」

「あ、うん」

さて、エルフ達が果たしてどう出るのか？

それを考えながら、シーナの家を発つ。

外に出て周囲を見渡せば、戦いの跡が痛々しい。

シーナの家は比較的、戦地から離れていたからダメージも特に無かった。

然し戦地に場所が近ければ近い程、被害は弥増していき被災地は酷くなる。

家は住める状態には無く、アディールの果ての砂漠は地面にクレーターが穿たれていた。

「（クレーターはレムリア・インパクトの影響か）」

レムリア・インパクトは、原作物語たる【機神咆哮デモンベイン】でも、街の一角を破壊して大きな被害を与えており、ヒロインの１人の覇道瑠璃の頭を悩ませていたのだ。

虚無魔法の爆発（エクスプロージョン）を、それっぽく調整した紛い物とはいっても、相当な被害を出した事は想像に難くない。

実際に目にして、その被害の大きさに目を見張る。

多くのエルフ被災者が家を喪って、路地生活を余儀なくされていた。

「不幸中の幸いか、死者は出ていない。君に言われた通り、全員を直ぐに離脱させた事が功を奏したよ」

「そっか……」

「尤も、これからが大変なのだがね」

戦後復興は何処の世界でも大変な事だ。

「一つ、聞いてよいか？」

「ユーキの事かな？」

「やはり……か」

ユートは判っていた。

レムリア・インパクトが、虚無魔法の爆発（エクプロージョン）を元にしている以上、誰かが気が付くだろうと思っていたのだ。

「お前達は悪魔の門（シャイターン）を目指すのか？　悪魔魔法の使い手を連れて来たのは何故だ？」

「……絶賛、警戒してくれてるみたいだけどね、僕もユーキも【竜の巣】には興味は無いんだよ」

「っ！　その名を何処で知った？」

驚愕するビダーシャル。

【シャイターンの門】を、エルフは隠語で【竜の巣】と呼んでいる。

より正確に言えば、エルフは【竜の巣】の事は誰でも識っているが、その正体が【シャイターンの門】である事を識るのは実質的に、ネフテス評議会（カウンシル）議員の一部のみ。

そしてその秘密は、十分に管理されて決して表に出る事は無いのだ。

シーナもルクシャナもその真実は識らない。

故に、あの2人が教えたというのは有り得なかった。

人間が【シャイターンの門】＝【竜の巣】という真実に至るなど、本来なら有ってはならない事だ。

「ま、名前はどうでも良いだろ？　さっきも言ったけど、別に興味は無いし」

「む……う……」

何と言われようが、警戒はしてしまう。

６０００年前の【大災厄】を再び起こしてはならないのだから。

「その辺も含めて話すんだろう？　そういえば、奴が言っていた事、調査は済んだのかな？」

「エスマーイル殿の遺体が地下牢で見付かったよ」

「這い寄る（ナイアル）混沌（ラトホテップ）の言っていた通りか」

「彼は、人間全てを皆殺しにすれば良いと言う所謂、強弁派の筆頭だった」

「無理だね。昔なら未だしも、今はもう……ね」

イレギュラーたるユート、悪魔（シャイターン）の末裔のユーキ。

不確定要素が有り、それが切り札や鬼札（ジョーカワイルドカード）すら越えて、奥の手となり得る存在だからだ。

「今は……か。確かに凄いモノだったな、あの巨人も銃も」

アイオーンと自動拳銃と回転式拳銃の事だ。

「さっきも言ったけどね、僕は聖戦とか言って此処に攻め込む心算なんて無い。聖地奪還なんて興味が無いし、その根拠は潰す予定な訳だしね」

「根拠？」

「将来、聖地奪還の話が出るのは大陸浮遊説に基づく移住計画だろう。エルフは知ってるだろ？　地下に風の精霊力が吹き溜まって、風石を精製してる事を」

「ああ、近い将来に浮遊大陸と同じく浮き上がって、大惨事となるだろうな」

その兆候は、火竜山脈の方で少しずつだが顕れ始めている。

「それの回避は難しいし、聖地を奪還すれば何とかなると思ってるらしい」

「そんな事をすれば、また大災厄が起きるぞっ！」

「だからこそ、その根拠の芽を摘み取る為に土の精霊に会いたいんだよ」

「成る程な。だが、ならば何故“悪魔魔法”を使う者を連れて来たんだ？」

「ユーキは僕の相棒だよ。当然、大災厄を起こす気なんて全く無い。連れて来たのは、人柄を知って貰う為なんだよ」

「人柄を？」

ビダーシャルは鸚鵡返しに問い掛けた。

「ビダーシャルは僕の力を危険だと思うかい？」

「そうだな」

「じゃあ、そんな力を持つ僕を危険だと思う？」

「む？　それは……」

少しだがユートと会話をしていて、人の成りは解ったからか警戒はしているが、危険視まではしていない。

「因みに、シーナとルクシャナはもう警戒すらしていないってさ」

「……そうか」

「識らないってのは情報が無いって事、だから恐怖するんだ。でもちゃんと向き合えばどうかな？　人柄を知ってみれば、話し合えるくらいには理解出来るんじゃないか？」

「そういうものか？」

「因みにさ人間の国では、エルフってオーク鬼みたいな感覚で恐れられている」

「なっ！？」

流石に聞き捨てならないのか、驚愕から二の句を継げないビダーシャル。

「見た目は兎も角、問答無用で先住魔法（せいれい）を放つ化物（エルフ）ってのが通説だね」

「識らないが故か……」

何とも微妙な表情だ。

平民からも恐れられる等、相当ではなかろうか？

魔法を使うという意味でならば、そこら辺は貴族も同じ筈だが、明らかに貴族よりも恐れられている。

仲良くすれば、ブリミル教が黙っていないとはいえ、碌に見た事もないエルフを怖がり過ぎだろう。

現在の人間の価値観では、数百年前の聖戦での敗北の歴史から成っている為に、真実より伝承が克っているらしい。

そしてそれはエルフも同様であり、相互理解が成されていないから誤解が誤解を生んで拗れているのだ。

勿論、お互いに敵対し合う教育を平然と施しているのだから、正しく自業自得とお互い様だった。

「虚無の担い手だからといって、ブリミル教を盲信してる訳じゃないんだ」

「そう……か」

チラリとユーキを視ると、確かに悪魔のイメージから程遠いと思えた。

話している内に、評議会（カウンシル）の議員が集う評議会本部（カスバ）に辿り着く。

呼び出されたユート達は、評議会（カウンシル）議員達の前に立っている。

それ自体前回と同じだが、今回はシーナが同道してはいない。

虚無の担い手に関しての話にはなっておらず、エルフ側に邪悪な存在が隠れていた事に焦点が置かれた。

その際に、顕れた怪物を斃して貰った事への礼。

そして、ユートやユーキが使っていた“あの”武装への質問だ。

「あの巨人や銃は何なのかね？」

「（やはり気になるか）」

テュリュークの質問は予測されていた。

まあ、当然だろう。

自分達の技術は、蛮人と蔑む人間を凌駕しているのだと思っていた

筈。

それが、明らかに子供に過ぎないユート達が持っているマジックアイテム、その技術力は驚嘆に値した。

炎の怪物を造り出す拳銃。

魔法を放ち、連射が可能な銀色の拳銃。

１０メイルはあり、砂漠にクレーターを穿つ兵装を持った闇色の機神。

エルフの技術では、現状で先ず造る事が不可能だ。

「詳しくは言いませんが、僕の造ったマジックアイテムですよ」

「な、なんと！？」

テュリュークの驚愕が伝播したか、議員達も隣の議員と話し合い騒然となる。

子供が平然と手にしているのも驚きだが、エルフ達は子供が造ったという事に、やはり驚くしかない。

巨人に関しては、原典に於ける数年後の未来にガリアで、ビダーシャルが技術的な協力をして、シェフィールドとヨルムンガンドというモノを完成させている。

だが今は影も形も無い。

事実上、この世界では初めての巨人という事だ。

「技術開示を求めても？」

「駄目に決まっているよ。逆に訊くけど、同じ立場で人間が技術開示を求めたらどうしますか？」

「む……」

テュリュークは押し黙る。

「それにあれは未だ未完成な代物で、どうしても今は一品物（ワンオフ）になってしまいます。自分達専用に数機は要るのに、量産なんて暇はありませんし、況してや別の誰かの為に造る事は出来ません。技術開示は機密上不可ですね」

言いたい事を先回りして、テュリュークを更に黙らせてしまう。

「第一、国交すら結んでいない国に技術提供など有り得ませんよ」

「うむ……」

正論。

それは容赦なく正論だ。

現在のユートの立場とは、謂わば旅行先で事件に捲き込まれ、当局に任意同行して事情聴取を受けた旅人。

事件解決に使っていたモノの技術を、当局やその国に開示する義務

など有り得はしない。

法律的なものが無いからと奪おうとすれば、暴れてやるだけだ。

「一つ訊きたい」

「何ですか？」

「君はアレで何をしたいのかね？」

「這い寄る混沌、エスマーイル議員に化けていた奴ですが、何れは世界を滅ぼすべく動きます。というか、既に動いています」

「アレか」

テュリュークは、苦虫でも噛み潰した様な表情になって呟く。

「這い寄る混沌は基本的に化けてしまえば、化けた者と一切変わりませんから、潜り込まれると判らなくなります。そして奴は実際に見た通り、怪物を喚ぶ事も出来ます。その為の備えがあの鬼械神（デウス・マキナ）ですよ」

それは決してヒト同士が潰し合う為のモノでは無い。

「奴との戦いの為に、既に水、火、風の精霊とは話が着いています。残りは土の精霊のみ。此処に来たのも土の精霊と接触する為」

再び騒然となる議員一堂。

何しろ、精霊とは親しんできたエルフではなく、選りに選って蛮人（にんげん）

に話を持っていったというのだから。

「それを証明出来るか？」

「今、此処で魔法を使わせて貰えれば」

「……議員諸君、彼はこう言っているがどうする？」

やはり隣と話し合い、ガヤガヤと騒ぐ。

そして、満場一致で可決された。

ユートは唱える。

それは呼び掛け。

ユートは唱える。

それは喚び掛け。

「其は流れ揺蕩う存在（もの）にして、久遠を変わらぬ誓約の主……我は盟約者にして兄弟、降り来るは我が与えし名を持つ者」

大気中の水分が集まって、小さな水となりそれが人型を採った。

「汝が名はラクス！」

精霊は精神生命体。

それを喚び、依り代たる形を与えて宿らせれば召喚出来る。

「喚んだか、ユートよ」

「済まない。ちょっと此処の連中を説得するから手伝ってくれないかな」

「ふむ、この単なる者達をか？　まあ、良かろう」

其処からは大変だった。

水の精霊を蛮人（にんげん）が喚び出したのだから。

ユートは契約済みの精霊主を、直接的に召喚する事も出来る。

因みに、ユートが使っていた言語は口語ではなくて、混沌言語（カオス・ワーズ）だ。

水の精霊との話で、エルフ達も現状を正しく認識したらしく、精霊の祭壇に行く許可をくれた。

その後、ビダーシャルからの取り直しもあり、玉蜀黍を仏掌薯から作った山酒と交換する。

人間よりも寿命のスパンが永いエルフは、アチラの方が淡泊らしくてエルフ女性陣が夜、男に使う事になったそうな。

翌日は男がフラフラして、女性は艶々していたとか。

また、解散を余儀なくされた『鉄血団結党』の党員を数名と、シーナとルクシャナとアリィーをトリステイン王国、ド・オルニエール領へ戦力として送り込む事となった。

流石に世界の危機は、旧き一族（エルダー）として見過ごせないらしい。

尚、アリィー以外は全員が女の子だったりする。

新しい地で、古い価値観を拭える様にとの配慮だと、ビダーシャルは言っていたが、きっと半分は嘘だ。

更に、他の旧き一族が協力し易い環境を作るのも同行の理由だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【精霊の祭壇】

ユート達は精霊の祭壇へとやって来ている。

特筆する事は何も無くて、ビダーシャルに案内されてアッサリと最奥だ。

亜空間ポケットから竪琴（ハープ）を取り出し、旋律を奏でる。

爪弾くそれは優しく大らかな大地の旋律、時に強く、怒りは地を揺らす。

『我を喚んだは貴様か？　単なる者よ……否、大いなる金色に守護されし単なる者よ』

土が盛り上がって、美しい女性の造形で顕れたのは、土の精霊主。

耳が長く尖っているのは、永年エルフと接触をしていた故だろう。
ユートは土の精霊王の試練に挑み、既に三度の試練を突破している精神力を以てクリアした。
本当に特筆するべき事は無かった。
『突破したか。改めて挨拶をしようか、我が兄弟たるユートよ』
「ああ。宜しく、フォディーナ」
『ほう？　フォディーナ。それがユートが我に贈ってくれる名か？』
「旧き言葉で、鉱山という意味だよ」
『その名、我が意志に刻み込もうぞ』

【Ｆｏｄｉｎａ】
ラテン語で鉱山の意。

こうして、ユートは全ての精霊王と契約した。
アディールに戻ったユートは、ド・オルニエールへ帰る前にはネフテスの修繕を【錬成】によって行う。
「世界の四源を統べる王。汝の欠片の縁を以て、汝ら全員（すべて）の力持て……我に更なる魔力を与えよ」

魔血玉（デモン・ブラッド）での増幅（ブースト）とは、少しだけ違う呪文。

【錬成】はペンタゴンスペルで発動し、ネフテスは元の都市へと戻るのだった。

.

第３７話：そして事件は終結する（後書き）

・

少しラストが急ぎ足過ぎたかも知れません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0487v/

ゼロの使い魔【魔を滅する転生者】

2011年11月17日12時48分発行